亀井北

（その1）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

亀井北

（その１）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

C地区弥生時代後期落ち込み1101　朱塗壺

ＳＫ8059、ＳＤ8455、ＳＤ8456全景

古墳時代前期Ⅰ　Ｂ地区、ＳＥ5002　奈良時代井戸全景

序　　文

河内平野のごとく、砂と粘土の互層となった厚い大和川水系の堆積土層で覆われたところでは、通常、遺跡の確認は非常に困難である。

亀井北遺跡は、そのようなことから当初遺跡として周知されていなかったが、南北に隣接する亀井、久宝寺遺跡の調査の所見を基に試掘調査を実施した結果、新たに発見された近畿自動車道の天理～吹田線（大阪線）では15番目の遺跡である。

そして、弥生時代以来の河内の"クニ"の歩みと河内平野の生成を刻みこんだ亀井、久宝寺、加美の大遺跡にすっぽり囲まれた位置にあたることから、これら三遺跡の最近の調査大成果を更に補完する遺跡として大いに注目されることところであった。

今回の調査によって、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世の各時期の遺構、遺物を確認したが、特に、弥生、古墳時代においては、亀井、久宝寺、加美の三大遺跡の影響を如実に物語ると共に当該地域の消長発展と古代史解明に大いに寄与するところとなった。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年３月31日

大阪府教育委員会
文化財保護課長　吉　房　康　幸

序　文

河内平野に包括される古代史は、我国の歴史を知る上で、欠くことの出来ない重要な部分を占めている。

大和川と淀川が形成した三角州は、時々の住民や権力者の力量を反影しながら、刻々と変化して今に至っている。

自然と人間の果てしないかかわりが、河内平野ほど単的に把握され、複雑な変化の中に人間の努力、限界、妥協、克服が見て取れる地域も少ないのではなかろうか。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に発掘調査を依頼され、既に長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、大堀城遺跡、亀井遺跡、久宝寺遺跡、佐堂遺跡、城山遺跡の14遺跡の調査が完了し、多大の成果を挙げてきた。

本書は、近畿自動車天理～吹田線内最後の調査対象遺跡となった大阪市平野区加美福井戸町、同加美新家町、同加美松山町並びに八尾市北亀井町一帯に所在する亀井北遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

河内平野の内部に所在する各種の遺跡の調査は、低湿地における発掘技術の進歩とあいまって、近年急速に実態が明らかとなってきたが、本冊子に記載の諸事実も、これらに付加される時、その及ぼす影響大であると確信するものである。

最後に、限られた調査期間の中で、およそ２ケ年間連続で発掘調査を担当した調査関係者各位の努力に深謝するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な推進に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚く御礼申し上げ、今後とも当センターにより一層の御理解、御支援を願ってやまない。

昭和 61 年 3 月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加藤三之雄

例　　言

1．本書は、日本道路公団が、建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区加美南二丁目から八尾市北亀井三丁目に所在する亀井北遺跡の（その1）調査区の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。

3．本調査に要した費用345,268,000円は、すべて日本道路公団が負担した。

4．本調査は、昭和59年3月1日から昭和61年3月31日までの間実施した。

5．出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も発掘調査と並行して実施した。また遺構図面や写真資料等の、本書の作成にかかる概括的な整理業務は、昭和61年3月31日で終了した。

6．本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並び本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜（昭和60年1月まで、以後理事専任）
	専務理事	住羽地米治（昭和60年3月まで）
	事務局長	畔　謙造（昭和60年3月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（昭和60年4月から）
	事務局次長兼総務課長	尾田勝之（昭和60年4月まで以後10月まで事務局次長専任）
	事務局次長	金丸義和（昭60和年11月から）
	総務課長兼庶務係長	阪上允子（昭和60年4月まで主幹兼庶務係長）
		主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	泉本知秀（昭和60年4月まで）
		中西靖人（昭和60年4月まで主幹兼業務第1係長、昭和61年1月から業務課長専任）主幹　吉村信男
長吉分室	業務第2係長	赤木克視、技師　平井貞子、小野久隆、服部文章（昭和60年11月より泉北分室勤務）
泉北分室	業務第3係長	山本　彰、技師　立花正治、森屋美佐子

本調査は当初第2係を担当として現地調査を実施したものであるが、昭和60年11月より組織上の変更により、第4係に編入され基本整理作業を実施したものである。なお、第4係は、昭和61年1月より第3係に変更された。

また、調査に際して日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署、平野警察署、大阪市教育委員会等に格別の配慮を受けたと共に、以下の学生諸君の協力を得た。伊藤健司、今村公彦、井本里美、入野博司、大島尚人、大橋早苗、岡崎英雄、岡崎康乃、桂川一彦、北村志津子、木下かおる、久保ひろみ、雑賀重則、崎谷忠弘、櫻井健史、佐々木美和、山藤見、島田幹士、高橋伸嘉、竹永利明、竹之内伸夫、立川恵子、田中晴美、永井克実、中瀬真由美、中村清美、中村哲士、羽田恭子、羽田純子、英雅人、福盛栄子、藤戸智代、藤本隆子、松井洋一郎、丸尾悦子、森茂治、山内仁美、山内真喜子、山崎恵美子、山田裕子、（五十音順）

7．本調査では自然遺物を中心に以下の諸氏の御指導、御協力を受けるとともに、鑑定を依頼した。（敬称略）

土器の胎土分析……井上　巌（第四紀地質研究所）、土壌分析……川村三郎（近畿大学）

花粉・珪藻分析……パリノ・サーヴェイ株式会社、木製品の樹種鑑定……松田隆嗣（元興寺文化財研究所）

8．調査及び遺物整理、概要報告書作業においては、以下の方々から御指導、御教授を受けた。井藤暁子（大阪府埋蔵文化財協会）、尾谷雅彦（河内長野市教育委員会）、小山田宏一（大阪府埋蔵文化財協会）、三宮昌弘（同志社大学学生）、渋谷高秀（大阪府埋蔵文化財協会）、白神典之（堺市立埋蔵文化財センター）、田中清美（大阪市文化財協会）、永島暉臣慎（大阪市文化財協会）、成海佳子（八尾市文化財調査研究会）、野藤和也（松原市教育委員会）、原田昌則（八尾市文化財調査研究会）、増田達彦（堺市立埋蔵文化財センター）、松尾信裕（大阪市文化財協会）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、築瀬和孝　　（敬称略、五十音順）

9．本書の執筆は、遺構、遺物に関して小野久隆、服部文章が、遺物の一部（第Ⅴ章）は森屋美佐子が行った。また遺跡分布図は村上年男（業務第１係）が作成した図を使用した。

10．本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成したが、すべてを本書に掲載することは不可能である。本書記述以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く各方面で利用されることを希望したい。

凡　　例

1．本調査に於ける座標は、総て国土座標を用いた。これに基づき、各遺構図には、X軸、Y軸の座標を表記した。単位はmである。各遺構図の方位は、国土座標の北を示す。

2．本書で使用した基準の高さは、T．P．（東京湾標準潮位）である。

3．遺構は、アルファベット記号で表し、4桁の数列の組み合わせで表記した。二字のアルファベット記号は遺構の種類の略号である。

ＳＤ：溝、ＳＡ：堤、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＰ：ピット（掘立柱建物、竪穴式住居の各柱穴についてはＳを省き、各遺構にＰ１、Ｐ２……で表記する。但しＳＰとしたものの中には、柱穴以外のピットも含まれる。）

落ち込み、自然河川、自然流路、土器群、墓、主体部、木樋はアルファベットで表さず、そのまま漢字を使用した。

遺構番号は北から順に通し番号を与えた。最初の数字（4桁目）は遺構面の番号で、その下の数字（3桁～1桁）は遺構の番号である。

例：ＳＤ8022（古墳時代前期、第８面の溝跡、22番目）

4．本書に記載した各遺物は、記載した順に一連の番号を与え、遺物実測図と、写真図版の遺物番号は一致させ、対照できるようにした。また遺物出土状況実測図中の遺物番号も、遺物実測図の番号と共通する。土器は数字のみで表したが、木製品、石製品、土製品には頭に各々、W．S．Tを付して表示した。

5．遺構実測図、遺物出土状況実測図、遺構変遷図の縮尺率は、1/1、1/10、1/20、1/40、1/50、1/200、1/300、1/500、1/1000を基本とした。

6．遺物実測図の縮尺率は、土器が総て1/4、石製品1/2、土製品1/1、1/2、木製品1/1、1/2、1/4とした。

7．遺跡位置図は国土地理院発行の５万分の１を、周辺地形図は明治18年の陸地測量部の仮整地図４万分の１を使用した。

8．航空写真は、1961年発行のものを使用した。図版五ーは『加美村誌』1962・6、を複写した。

9．本書に記載した遺物は、遺構の一括資料を中心に示したが、一括資料の場合も一部掲載出来なかったものがある。

10．本文中の用語、記載方法等に於て、執筆者の考えを尊重して、一部統一していないところもある。

亀　井　北　(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査に至る経過…… 1

第Ⅱ章　調査の方法…… 2

第Ⅲ章　位置と環境…… 4

第Ⅳ章　調査の成果…… 7

第１節　基本層序…… 7

第２節　弥生時代中期以前の遺構と遺物…… 15

１．縄文時代…… 15

２．弥生時代前期…… 15

３．弥生時代中期…… 19

第３節　弥生時代後期の遺構と遺物…… 22

１．弥生時代後期Ⅰ…… 22

２．弥生時代後期Ⅱ…… 24

３．弥生時代後期Ⅲ…… 28

第４節　古墳時代前期の遺構と遺物…… 30

１．古墳時代前期Ⅰ…… 31

（１）　Ａ地区…… 31

（２）　Ｂ地区…… 46

（３）　Ｃ地区…… 58

２．古墳時代前期Ⅱ…… 78

（１）　Ａ地区…… 78

（２）　Ｂ地区…… 80

（３）　Ｃ地区…… 82

3．古墳時代前期Ⅲ…… 85
（1） A地区…… 85
（2） B地区…… 91
（3） C地区…… 97
4．古墳時代前期Ⅳ…… 98
（1） A地区…… 98
（2） B地区…… 107
（3） C地区…… 119
5．古墳時代前期Ⅴ…… 155
（1） A地区…… 155
（2） B地区…… 155
6．その他の第Ⅹ層中出土遺物…… 161
7．古墳時代前期Ⅵ…… 169
8．亀井北遺跡（その1）出土古墳時代前期土器の検討…… 173
第5節 古墳時代中期の遺構と遺物…… 183
第6節 古墳時代後期の遺構と遺物…… 185
（1） A地区…… 185
（2） B地区…… 185
（3） C地区…… 189
第7節 古代の遺構と遺物…… 190
1．飛鳥時代…… 190
2．奈良・平安時代…… 190
第8節 中世の遺構と遺物…… 203
1．中世Ⅰ…… 203
（1） A地区…… 203
（2） B地区…… 204
（3） C地区…… 205
2．中世Ⅱ…… 205
（1） A地区…… 205
（2） C地区…… 205
第9節 近世以降の遺構と遺物…… 206
（1） A地区…… 206
（2） B地区…… 207
（3） C地区…… 207

第Ⅴ章　まとめ…… 209
付章　化学分析調査結果…… 211
Ⅰ．亀井北遺跡（その１）出土土器胎土分析結果報告…… 212
Ⅰ　実験…… 212
Ⅰ－１　試料…… 212
Ⅰ－２　Ｘ線回析分析…… 212
Ⅰ－３　電子顕微鏡観察…… 212
Ⅱ　実験結果の取り扱い…… 212
Ⅱ－１　組成分類…… 213
ⅰ）　Mo－Mi－Hb三角ダイヤグラム…… 213
ⅱ）　Mo－Ch、Mi－Hb菱形ダイヤグラム…… 216
Ⅱ－２　焼成ランク…… 216
Ⅱ－３　タイプ分類…… 218
Ⅲ　実験結果…… 218
Ⅲ－１　タイプ分類…… 218
Ⅲ－２　石英（Ｑｔ）－斜長石（Ｐｌ）の相関について…… 220
Ⅲ－３　螢光Ｘ線分析結果について…… 224
Ⅳ　まとめ…… 226
補促　胎土分析試料の抽出について…… 228
Ⅱ．亀井北遺跡（その１）花粉・珪藻分析報告…… 230
Ⅰ　花粉分析…… 230
Ⅰ－１　試料…… 230
Ⅰ－２　化石の抽出…… 230
Ⅰ－３　分析結果及び考察…… 230
Ⅱ　珪藻分析…… 235
Ⅱ－１　試料…… 235
Ⅱ－２　分析方法…… 235
Ⅱ－３　分析結果…… 235
Ⅱ－４　考察…… 242

挿図目次

第1図　調査区位置図（1：5,000）…… 1
第2図　地区名称図（1：1,000）…… 2
第3図　地区割図（1：1,000）…… 3
第4図　亀井北遺跡と周辺遺跡の分布図（1：50,000）…… 5
第5図　亀井北遺跡周辺地形図…… 6
第6図　A地区東西土層断面図（1/50）…… 12
第7図　B地区東西土層断面図（1/50）…… 13
第8図　C地区東西土層断面図（1/50）…… 14
第9図　SD15001と遺物…… 16
第10図　SD15001断面図…… 16
第11図　落ち込み15001実測図…… 17
第12図　弥生時代前期出土遺物…… 18
第13図　第三～第五黒色粘土層出土遺物…… 18
第14図　自然流路13　実測図…… 19
第15図　自然流路13　断面図及び出土遺物…… 19
第16図　自然河川5　出土遺物…… 20
第17図　自然河川5　出土遺物…… 20
第18図　自然河川4・6　出土遺物…… 21
第19図　SA12001下層出土遺物…… 21
第20図　SA12001断面図…… 23
第21図　赤彩壺出土状況…… 24
第22図　弥生時代後期II遺物出土状況（1）…… 25
第23図　弥生時代後期II遺物出土状況（2）…… 26
第24図　C地区南半弥生時代後期ピット群…… 27
第25図　SD10003断面図…… 29
第26図　弥生時代後期包含層出土遺物…… 29
第27図　1号住居遺物出土状況…… 32
第28図　1号住居実測図…… 32
第29図　1号住居実測図…… 33
第30図　1号住居断面図…… 34
第31図　2号住居実測図…… 35
第32図　2号住居内板状木製品出土状況…… 36

第33図　3・4・5号住居出土遺物…… 37
第34図　3号住居ピット断面図…… 38
第35図　3号住居・4号住居実測図…… 39・40
第36図　4号住居ピット断面図…… 41
第37図　5号住居ピット断面図…… 42
第38図　5号住居実測図…… 43
第39図　住居外のピット断面図…… 44
第40図　SK8060遺物出土状況及び出土遺物…… 45
第41図　B地区北半古墳時代前期Ⅰ遺構変遷図…… 47
第42図　11号住居実測図…… 48
第43図　SD8443・11号住居出土遺物…… 50
第44図　12号住居実測図…… 51
第45図　13号住居実測図…… 52
第46図　SK8049実測図…… 53
第47図　SP8335実測図…… 53
第48図　SP8334実測図…… 53
第49図　SK8036実測図及び手焙形土器…… 55
第50図　土器群Ⅵ出土状況…… 56
第51図　土器群Ⅶ…… 56
第52図　土器群Ⅵ…… 56
第53図　土器群Ⅵ・Ⅶ出土遺物…… 57
第54図　SK8058実測図及び出土遺物…… 58
第55図　SK8058遺物出土状況…… 59
第56図　SK8057出土遺物…… 59
第57図　SK8059遺物出土状況…… 61
第58図　SK8059遺物出土位置図…… 62
第59図　SK8059出土遺物…… 63
第60図　SD8456遺物出土状況…… 65・66
第61図　SD8456遺物出土位置図…… 67
第62図　SD8456出土遺物(1)…… 68
第63図　SD8456出土遺物(2)…… 69
第64図　SD8455遺物出土状況…… 71・72
第65図　SD8455遺物出土位置図…… 73
第66図　SD8455出土遺物(1)…… 74

第67図　ＳＤ8455出土遺物（２）…… 75
第68図　ＳＤ8455出土遺物（３）…… 76
第69図　ＳＤ8455出土遺物（４）…… 77
第70図　Ａ地区古墳時代前期Ⅱ遺構変遷図…… 79
第71図　Ｂ地区北半古墳時代前期Ⅱ遺構変遷図…… 81
第72図　ＳＤ8360実測図及び出土遺物…… 82
第73図　ＳＤ8369遺物出土状況…… 83
第74図　ＳＤ8372遺物出土状況…… 83
第75図　Ｃ地区古墳時代前期Ⅱ遺構出土遺物…… 84
第76図　ＳＰ8104遺物出土状況及び出土遺物…… 84
第77図　Ａ地区古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図…… 86
第78図　ＳＫ8022出土遺物…… 88
第79図　ＳＫ8022遺物出土状況…… 89・90
第80図　Ｂ地区北半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（１）…… 92
第81図　Ｂ地区北半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（２）…… 93
第82図　３Ｃトレンチ古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図…… 93
第83図　Ｂ地区南半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（１）…… 94
第84図　Ｂ地区南半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（２）…… 95
第85図　落ち込み8007実測図…… 97
第86図　落ち込み8007出土遺物…… 97
第87図　土器群Ⅰ遺物出土状況…… 99
第88図　土器群Ⅰ出土遺物…… 100
第89図　土器群Ⅱ遺物出土状況…… 102
第90図　土器群Ⅱ出土遺物…… 103
第91図　ＳＤ8018遺物出土状況…… 104
第92図　ＳＤ8018出土遺物…… 105
第93図　ＳＤ8017・ＳＤ8019出土遺物…… 105
第94図　１号墓全体図…… 106
第95図　主体部実測図…… 107
第96図　１号墓マウンド上面出土遺物…… 107
第97図　土器群Ⅳ遺物出土状況…… 108
第98図　土器群Ⅳ出土遺物（１）…… 109
第99図　土器群Ⅳ出土遺物（２）…… 110
第100図　土器群Ⅳ出土遺物（３）…… 110

第101図　土器群Ⅲ（ＳＫ8015）遺物出土状況…… 111・112
第102図　土器群Ⅲ出土遺物（１）…… 113
第103図　土器群Ⅲ出土遺物（２）…… 114
第104図　土器群Ⅲ出土遺物（３）…… 115
第105図　２号墓全体図…… 116
第106図　２号墓主体部実測図…… 117
第107図　２号墓北西周溝遺物出土状況…… 118
第108図　２号墓北西周溝出土遺物…… 119
第109図　３号墓出土遺物（１）…… 120
第110図　３号墓上面遺物出土状況…… 121・122
第111図　３号墓出土遺物（２）…… 123
第112図　３号墓出土遺物（３）…… 124
第113図　３号墓出土遺物（４）手焙形土器…… 124
第114図　３号墓南周溝遺物出土状況…… 125
第115図　３号墓出土遺物（５）南周溝…… 126
第116図　４号墓北周溝遺物出土状況…… 127
第117図　４号墓出土遺物…… 128
第118図　ＳＫ8019遺物出土状況…… 129
第119図　ＳＫ8019出土遺物…… 130
第120図　落ち込み8006遺物出土状況…… 131・132
第121図　落ち込み8006出土遺物（１）…… 133
第122図　落ち込み8006出土遺物（２）…… 134
第123図　落ち込み8006出土遺物（３）…… 135
第124図　落ち込み8006出土遺物（４）…… 136
第125図　落ち込み8006主要遺物出土位置図…… 137
第126図　ＳＤ8021遺物出土状況…… 139・140
第127図　ＳＤ8021主要遺物出土位置図…… 141・142
第128図　ＳＤ8021出土遺物（１）…… 143
第129図　ＳＤ8021出土遺物（２）…… 144
第130図　ＳＤ8021出土遺物（３）…… 145
第131図　ＳＤ8021出土遺物（４）…… 146
第132図　ＳＤ8021出土遺物（５）…… 147
第133図　ＳＤ8021付近出土遺物…… 148
第134図　ＳＫ8020遺物出土状況…… 148

第135図　ＳＫ8020出土遺物…… 148
第136図　Ｃ地区第Ｘ層出土土製勾玉…… 148
第137図　落ち込み8006北半遺物出土状況…… 148
第138図　土器Ｖ遺物出土状況…… 149・150
第139図　土器群Ｖ出土遺物（１）…… 152
第140図　土器群Ｖ出土遺物（２）…… 153
第141図　土器群Ｖ出土遺物（３）…… 154
第142図　３Ｃトレンチ出土外来系土器…… 154
第143図　ＳＫ8013出土遺物…… 156
第144図　ＳＫ8013遺物出土状況…… 157・158
第145図　ＳＫ8014出土遺物…… 159
第146図　ＳＫ8011出土遺物…… 159
第147図　ＳＫ8014遺物出土状況…… 160
第148図　ＳＫ8007実測図…… 160
第149図　ＳＫ8011遺物出土状況…… 160
第150図　Ａ地区第Ｘ層出土木器…… 162
第151図　Ａ地区第Ｘ層出土遺物…… 162
第152図　Ａ地区第Ｘ層出土遺物…… 163
第153図　Ａ・Ｂ地区出土土製品実測図…… 164
第154図　１Ｂトレンチ第Ｘ層出土遺物…… 164
第155図　Ｂ地区第Ｘ層出土遺物…… 165
第156図　Ｃ地区第Ｘ層出土遺物（１）…… 165
第157図　Ｃ地区第Ｘ層出土遺物（２）…… 166
第158図　Ａ地区第Ｘ層中遺物出土状況（１）…… 167
第159図　Ａ地区第Ｘ層中遺物出土状況（２）…… 168
第160図　Ｂ地区南端古墳時代前期Ⅵ遺構平面図…… 170
第161図　Ｂ地区南端古墳時代前期Ⅴ・Ⅵ遺構断面図…… 171
第162図　ＳＰ8034・ＳＰ8040遺物出土状況…… 171
第163図　ＳＰ8034・ＳＰ8040出土遺物…… 171
第164図　６Ｂトレンチ第Ｘ層上半出土遺物…… 171
第165図　５Ｂトレンチ古墳時代前期Ⅵピット群実測図…… 172
第166図　５Ｂトレンチ古墳時代前期Ⅵピット群断面図…… 172
第167図　自然流路１周辺出土遺物…… 183
第168図　第Ⅵ層出土遺物…… 184

第169図　自然河川２底部遺物出土状況…… 186
第170図　自然河川２出土遺物（１）…… 187
第171図　自然河川２出土遺物（２）…… 187
第172図　自然河川２出土遺物（３）…… 189
第173図　６Ｂトレンチ古代遺構面平面図…… 191
第174図　ＳＤ5021遺物出土状況…… 191
第175図　ＳＤ5023断面図…… 191
第176図　ＳＤ5023出土遺物…… 191
第177図　ＳＤ5021出土遺物…… 191
第178図　ＳＤ5002出土遺物…… 191
第179図　ＳＤ5006木樋実測図…… 192
第180図　ＳＥ5002木枠井戸実測図…… 193・194
第181図　ＳＤ5006・ＳＥ5002南北断面図…… 195
第182図　ＳＥ5002東西断面図…… 195
第183図　ＳＥ5002第１木枠出土遺物…… 196
第184図　ＳＥ5002第２木枠出土遺物…… 196
第185図　ＳＥ5002掘り方出土遺物…… 197
第186図　ＳＥ5002上面出土遺物…… 197
第187図　３Ｂトレンチ古代遺構面平面図…… 197
第188図　ＳＤ5009木樋実測図…… 198
第189図　ＳＢ5001実測図…… 199
第190図　ＳＢ5002実測図…… 199
第191図　ＳＥ5001実測図…… 201
第192図　ＳＥ5001出土遺物…… 202
第193図　ＳＥ4001断面図…… 203
第194図　ＳＥ4004実測図…… 204
第195図　中国製陶磁器…… 204
第196図　ＳＥ4004出土遺物…… 204
第197図　Ｃ地区第Ⅳ層出土遺物…… 205
第198図　Ａ地区第Ⅲ層出土遺物…… 205
第199図　第Ⅱ層出土遺物…… 207
第200図　近世包含層出土遺物…… 208
第201図　ダイヤグラム位置分類図…… 213
第202図　亀井北遺跡（その１）出土土器Mo－Mi－Hb三角ダイヤグラム…… 216

第203図　亀井北遺跡（その１）出土土器Mo－Ch、Mi－Hb菱形ダイヤグラム…… 217
第204図　亀井北遺跡（その１）出土土器Qt－Pl相関図…… 223
第205図　久宝寺遺跡南地区出土土器Qt－Pl相関図…… 223
第206図　亀井北遺跡（その１）出土土器Sr－Rb相関図…… 225
第207図　亀井北遺跡（その１）出土土器Mn－Ti相関図…… 225
第208図　亀井北遺跡（その１）試料　花粉化石ダイヤグラム…… 233・234
第209図　花粉・胞子化石顕微鏡写真…… 235
第210図　花粉・胞子化石顕微鏡写真…… 236
第211図　亀井北遺跡（その１）試料主要珪藻化石ダイヤグラム…… 239・240
第212図　亀井北遺跡（その１）（その２）各地点試料珪落化石群集帯の対比…… 241
第213図　珪藻化石顕微鏡写真…… 245
第214図　珪藻化石顕微鏡写真…… 246

表　目　次

第１表　トレンチ別遺構面対照表…… 14
第２表　亀井北遺跡（その１）出土古墳時代前期土器分類表…… 180
第３表　亀井北遺跡（その１）出土土器胎土性状表（１）…… 214
第４表　亀井北遺跡（その１）出土土器胎土性状表（２）…… 215
第５表　亀井北遺跡（その１）出土土器螢光Ｘ線分析結果表…… 224
第６表　亀井北遺跡（その１）胎土分析用試料一覧表…… 229
第７表　亀井北遺跡（その１）試料花粉分析結果…… 231
第８表　亀井北遺跡（その１）試料珪藻分析結果…… 243・244

図版目次

図版1.　亀井北遺跡周辺航空写真
図版2.　弥生時代前期・中期遺構面
図版3.　C地区弥生時代中期遺構面
図版4.　A・B地区弥生時代後期Ⅰ遺構面
図版5.　C地区弥生時代後期Ⅰ遺構面
図版6.　C地区弥生時代後期Ⅱ遺構面
図版7.　C地区弥生時代後期Ⅱ遺構面
図版8.　B・C地区弥生時代後期Ⅲ遺構面
図版9.　C地区弥生時代後期Ⅲ遺構面
図版10.　A地区古墳時代前期Ⅰ～Ⅲ遺構面
図版11.　A地区古墳時代前期Ⅰ遺構面
図版12.　A地区古墳時代前期Ⅰ遺構面
図版13.　A地区古墳時代前期Ⅰ遺構面
図版14.　A地区古墳時代Ⅰ～Ⅲ遺構面
図版15.　A地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版16.　A地区古墳時代前期Ⅲ遺構面
図版17.　A地区古墳時代前期Ⅲ遺構面
図版18.　A地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版19.　B地区古墳時代前期遺構面
図版20.　B地区古墳時代前期Ⅲ遺構面
図版21.　B地区古墳時代前期Ⅲ遺構面
図版22.　B地区古墳時代前期Ⅲ～Ⅳ遺構面
図版23.　B地区古墳時代前期Ⅰ遺構面
図版24.　B地区古墳時代前期Ⅰ～Ⅱ遺構面
図版25.　B地区古墳時代前期Ⅰ～Ⅳ遺構面
図版26.　B地区古墳時代前期Ⅴ遺構面
図版27.　B地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版28.　B地区古墳時代Ⅳ遺構面
図版29.　B地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版30.　B地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版31.　B地区古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版32.　C地区古墳時代前期Ⅱ～Ⅳ遺構面

図版33.　C地区古墳時代前期Ⅰ及びⅣ遺構面
図版34.　古墳時代前期Ⅳ遺構面
図版35.　C地区古墳時代Ⅲ～Ⅳ遺構面
図版36.　C地区古墳時代前期Ⅰ～Ⅳ遺構面
図版37.　C地区古墳時代前期Ⅰ～Ⅳ遺構面
図版38.　C地区古墳時代前期Ⅰ遺構面
図版39.　土層断面
図版40.　B地区古墳時代前期Ⅵ及び中期遺構面
図版41.　B地区古墳時代前期Ⅵ遺構面
図版42.　A・B地区古墳時代後期遺構面
図版43.　B・C地区古墳時代後期遺構面
図版44.　B地区奈良・平安時代遺構面
図版45.　B地区奈良・平安時代遺構面
図版46.　B地区奈良・平安時代遺構面
図版47.　B地区奈良・平安時代遺構面
図版48.　A・B地区中世Ⅰ遺構面
図版49.　B地区中世Ⅰ遺構面
図版50.　A・B・C地区中世Ⅱ遺構面
図版51.　A地区近世以降遺構面
図版52.　弥生時代前・中期土器、石器
図版53.　弥生時代中・後期土器
図版54.　古墳時代前期土器
図版55.　古墳時代前期土器
図版56.　古墳時代前期土器
図版57.　古墳時代前期土器
図版58.　古墳時代前期土器
図版59.　古墳時代前期土器
図版60.　古墳時代前期土器
図版61.　古墳時代前期土器
図版62.　古墳時代前期土器
図版63.　古墳時代前期土器
図版64.　古墳時代前期土器
図版65.　古墳時代前期土器
図版66.　古墳時代前期土器

図版67.　古墳時代前期土器
図版68.　古墳時代前期土器
図版69.　古墳時代前期土器
図版70.　古墳時代前期土器
図版71.　古墳時代前期土器
図版72.　古墳時代前期土器
図版73.　古墳時代前期土器
図版74.　古墳時代前期土器
図版75.　古墳時代前期土器
図版76.　古墳時代前期土器
図版77.　古墳時代前期土器
図版78.　古墳時代前期土器
図版79.　古墳時代前期土器
図版80.　古墳時代前期土器
図版81.　古墳時代前期土器
図版82.　古墳時代前期土器
図版83.　古墳時代前期土器
図版84.　古墳時代前期土器
図版85.　古墳時代前期土器
図版86.　古墳時代前期土器
図版87.　古墳時代前期土器、土製品
図版88.　古墳時代前期土器、土製品、木製品
図版89.　古墳時代前期土器
図版90.　古墳時代前期土器
図版91.　古墳時代前期土器
図版92.　古墳時代前期土器
図版93.　古墳時代前期土器
図版94.　古墳時代前期土器
図版95.　古墳時代前期土器
図版96.　弥生時代土器、石器、古墳時代土器
図版97.　古墳時代中期、奈良・平安時代土器、焼けた石
図版98.　奈良・平安時代土器
図版99.　奈良・平安時代木製品
図版100.　中・近世陶器、磁器

付 図 目 次

付図1　基本土層縦断面図
付図2　亀井北遺跡（その1）遺構変遷図
付図3　弥生時代後期Ⅰ遺構面全体図
付図4　弥生時代後期Ⅱ遺構面全体図
付図5　弥生時代後期Ⅲ遺構面全体図
付図6　古墳時代前期Ⅰ遺構面全体図
付図7　古墳時代前期Ⅱ遺構面全体図
付図8　古墳時代前期Ⅲ遺構面全体図
付図9　古墳時代前期Ⅳ遺構面全体図
付図10　古墳時代前期Ⅴ遺構面全体図
付図11　古墳時代前期Ⅵ遺構面全体図
付図12　古墳時代後期遺構面全体図
付図13　古代遺構面全体図
付図14　中世Ⅰ遺構面全体図
付図15　中世Ⅱ遺構面全体図
付図16　近世以降遺構面全体図

第Ⅰ章　調査に至る経過

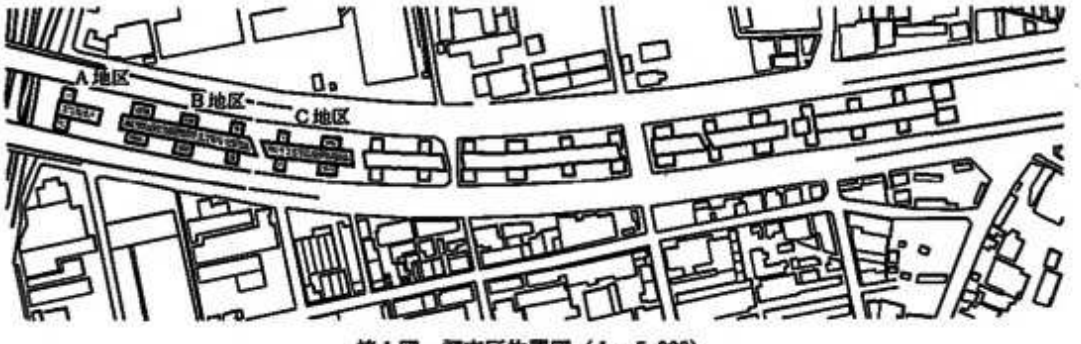
亀井北遺跡は、大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在する。調査は、日本道路公団が進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴うもので、国鉄関西線から国道25号線北約80mまでの間、約570mを範囲としている。道路公団の測量測点でいえばＳＴＡ124＋91から130＋60までにあたる。

この地域は、当初遺跡としては認識されていなかったが、北側の久宝寺遺跡南地区のＪトレンチ、南側の亀井遺跡Ａトレンチで、それぞれ遺構面が周知の遺跡範囲外に続くことが確認されたために、この地域も遺跡である可能性が指摘された。そこで、昭和58年10月～59年２月にかけて遺構分布の広がり、遺構面の深度を探る目的で第１次発掘調査を実施したところ、全域にわたって地表下－4.5mまで調査対象土層が存在することが判明した。また、この調査によって、この地域の遺構分布の中心が古墳時代前期であり、南側の弥生時代を中心とする亀井遺跡よりも北の久宝寺、加美遺跡との共通性が高いことも明らかになった。そこで、遺跡名を亀井北遺跡（略称・ＫＭＮ）とし、昭和59年３月より本調査を実施することになった。

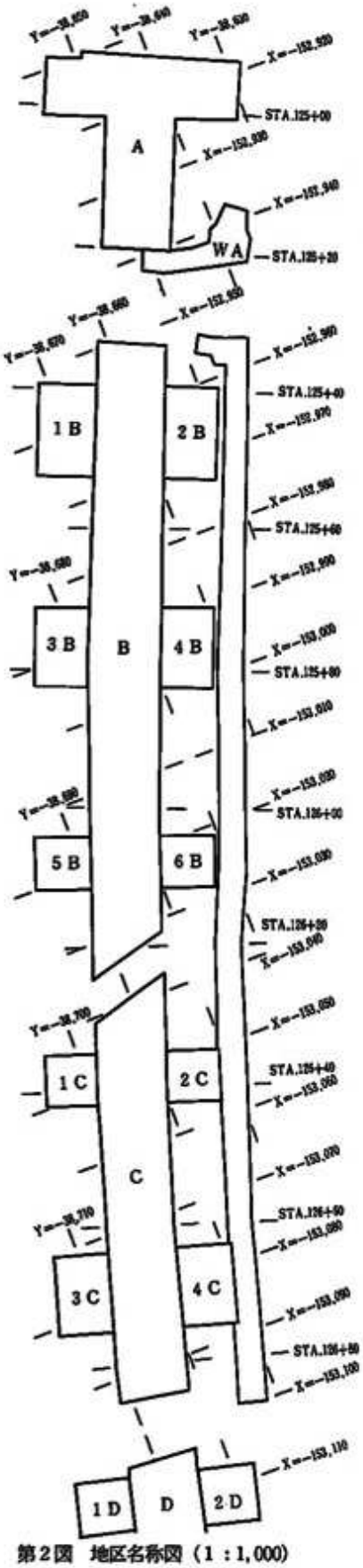
なお、この地域は大阪市と八尾市の市境に当たり、調査区内をその境界が複雑に縦、横断している。近接地を大阪市、八尾市が調査しているが、それぞれの市域内を大阪市は加美南遺跡、八尾市は久宝寺遺跡としているため、現状では同一の遺構群が三つの遺跡名で呼称されている。こうした行政区画の違いによる遺跡名の混乱は、将来的に是正されることが望まれる。

調査は、期間短縮のため、遺跡全長が短いにもかかわらず３分割することになり、北より（その１）（その２）（その３）調査区とした。（その１）調査区は、国鉄関西線南側のＳＴＡ124＋91から126＋85付近の水路までの間194mである。トレンチ名でいえばＡ～Ｃトレンチにあたる。なお、（その２）調査区は、水路南端のＳＴＡ126＋94から、128＋55の横断道路北端までの間161mにＤ・Ｅトレンチが設定され、（その３）調査区は、道路南端のＳＴＡ128＋69から亀井遺跡との境界の130＋60までの間191mに、Ｆ～Ｉトレンチが設定された。

（その１）調査区の調査は、予定通り昭和61年2月に現地調査を終了した。　（赤木）



第１図　調査区位置図（１：5,000）



第2図　地区名称図（1：1,000）

第II章　調査の方法

亀井北遺跡（その1）調査区の調査は、道路、地下埋設管で調査区が分断され、A・B・Cの3本トレンチが設定された。調査深度は、何れもGL－4.5mである。

調査方法は、近畿自動車道大阪線において瓜生堂遺跡以来採用されている「トレンチ調査方式」で実施された。「トレンチ調査方式」とは、まず、路線中央に幅10mのトレンチを設定し、遺構分布、埋没深度等を確認する。その結果を基に、大阪府教育委員会と日本道路公団が高架橋脚の位置を協議し、その後、決定した橋脚部を調査するというものである。前者がトレンチ部の調査、後者が切拡げ部の調査であるが、後者については1対の橋脚がトレンチ部によって2つに分割されるため、それぞれ別のトレンチ番号が与えられている。切拡げ部のトレンチ番号は、A～Cそれぞれのトレンチの北西端を1、北東端を2とし、以下、南に順に番号を付けていくものである。表示は、例えば1B・2B・3Bトレンチとなる。

通常、橋脚部の調査は切拡げ時に行うのであるが、亀井北遺跡（その1）調査区の場合は、北端が国鉄関西線に接しているため、一部例外を作っている。それは、既に調査を先行させていた久宝寺遺跡の南端部の橋脚決定には、幅約50mの関西線を跨ぐ都合上、反対側の亀井北側も位置決めをする必要があったからである。そのため、北端のAトレンチについては、既に橋脚の位置が決まっていることから、T字型にトレンチを設定している。なお、Aトレンチ北際には工業用水管が埋設されており、それを避けるためにトレンチの形状を一部変形させている。Aトレンチの規模は、トレンチ部全長が約28mである。

Bトレンチは、全長92m、切拡げ部が6か所、Cトレンチは全長62m、切拡げ部が4か所である。この他、用地中央を縦断していた水路の付替えのために、仮設水路を用地東端に設置し、それに伴う部分も調査を追加した。水路部

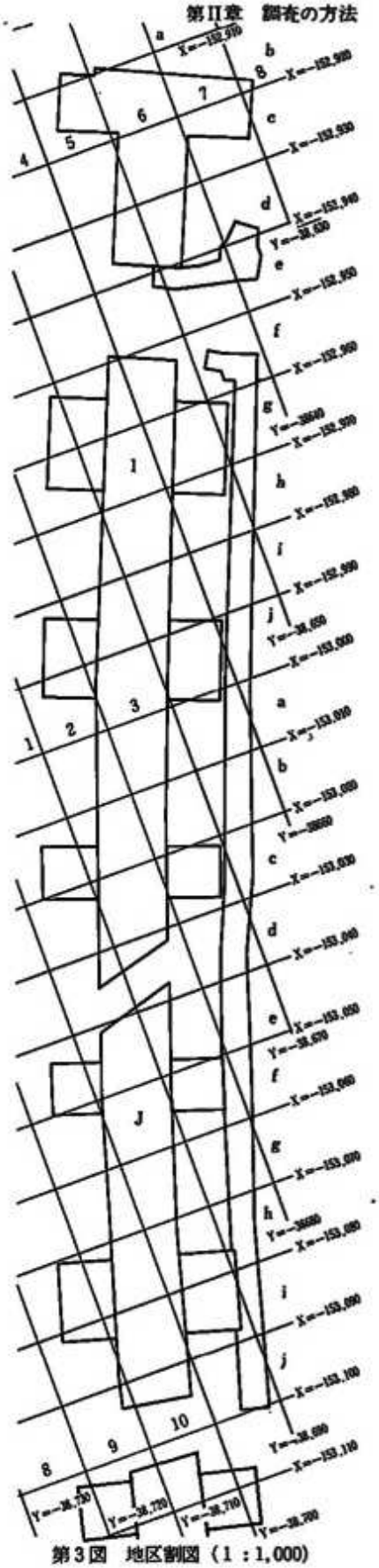
は、各地区ごとにWA、WB、WCトレンチと表示した。

調査は、掘削深度がGL－4.5mであるため、SP．3型7.5mの鋼矢板を打設し、さらに順次2段梁を架設して安全を期した。なお、切拡げ部の調査時には、道路公団の要請により、本体基礎工事にもそのまま使えるSP．3型8.5mの鋼矢板を打設している。鋼矢板の打設については、周辺に振動、騒音の迷惑を及ぼさないようにするために、トレンチ部がプレ・ボーリング工法という鋼矢板の打設予定位置に予め穴を掘り、打設時の抵抗を減少させる方法をとった。切拡げ時には、より無振動、無騒音のサイレント・パイラーによる油圧圧入方式で鋼矢板を打設した。

調査の手順としては、各トレンチへの鋼矢板打設後、盛土、及び耕土を0.35m³クラスのバックホウ（ユンボ）で掘削する。その下の床土からは遺物包含層になり、人力によって遺構面精査を繰り返しながら順次下層への掘削を進める。GL－2.5m前後まで掘削が進むとGL－1.0mのところに1段梁を架設し、－4m前後で2段目の切梁を－3.0mのところへ架設する。これでGL－4.5mまでの掘削が可能になる。その後、駄目押しの筋掘りを入れて、埋め戻すものである。

地区割りは、久宝寺遺跡南地区のものを延長している。これは、第1次調査の結果から、北側の久宝寺、加美遺跡で検出されている遺構群と共通のものが亀井北遺跡でも検出されると予想されたからである。その場合、同一の地区割りを使用したほうが遺構間の対照が容易となるメリットがある。

この地区割りは、国土座標系において東経136°0′、北緯36°0′を原点とする第VI系の区割りを利用したものである。X－152,100.000、Y－39,000.000を基点とし、南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100m単位の大区画を設定し、さらにその大区画の中を北西部を基点として10m単位に南、東へそれぞれa～j、1～10と細分している。表示はAIa1とし、必要に応じてそれを更に南、東へ＋○mとして細分することにしている。　（赤木）



第3図　地区割図（1：1,000）

第Ⅲ章　位置と環境

亀井北遺跡は、大阪市平野区加美南から八尾市北亀井に所在し、久宝寺遺跡南地区より国鉄関西線を介した南側から亀井遺跡の北側にかけての中央環状線に沿った、南北約600mの地域に当たる。

本遺跡は、旧大和川と淀川の２大河川によって、生駒山系の西側に形成された河内平野の中央部南縁に立地する沖積地上の遺跡である。従って当遺跡周辺地域には、南東方向より放射状に展開される旧大和川の堆積作用による扇状地状の低地と、幾度となく形を変えながら発達した自然堤防が複雑に混在している。天井川化した平野川、長瀬川、楠根川、玉串川、恩智川などは、旧大和川の河道の姿を現在に残すものである。亀井北遺跡周辺の現地表は、T.P.+8.0m付近であるが、本調査区における縄文時代以前に当る層位は、T.P.+3.0m以下に当り、その間には、河道の変化や洪水等によって土砂の堆積を繰り返しており、不安定な土地条件が続いている。中世に至ると、地盤がT.P.+6.5m付近に達し、ようやくやや安定した状況が窺われる。

河内平野における旧石器時代の状況は、依然、不明な点が多いが、若江北遺跡、長原遺跡等では、翼状剥片石核等の旧石器時代の遺物の出土が知られている。

縄文時代の河内平野は、海進の影響により低地が湾化するため、集落は海退現象のみられる後期以降まで周辺の台地上などに立地し、平野部にはその存在が認められない。海退現象以後は、集落も平野部に徐々に移行し、晩期には新家遺跡、山賀遺跡等のように、河内平野中心部までその生活範囲を拡大している。本遺跡においても、（その２）調査区を中心に後期、晩期の遺物が出土しており、近隣地域に生活址の存在が想定される。

弥生時代に入ると、河内平野における遺跡の数は急激に増大する。河内平野は、自然堤防等の微高地上に集落をつくり、後背湿地を水田として利用し、稲作を行うといった弥生文化に適応した条件を備えた地域と考えられ、度々発生したと思われる洪水等の自然災害にもかかわらず、急速に河内平野各地に集落が出現している。弥生時代中期には、居住域、水田、墓域としての方形周溝墓群をセットとした、瓜生堂、山賀、亀井、といった大集落も現れる。弥生時代後期には、自然環境が再び不安定になり、集落はやや規模を縮小し、或は移動しつつ平野内に点在し、存続したものと考えられる。本遺跡の調査結果でも、地盤が不安定であったことを示している。

本遺跡周辺に限ってみると、古墳時代初頭に至って土地の安定性は回復している。古墳時代前期の遺構は、本遺跡周辺に断続的に認められる。久宝寺遺跡から大阪市加美遺跡を含めた本遺跡までの間は、住居址、方形周溝墓、小溝群をセットとした遺構の構成に類似性が強く、全体で一つの大集落を構成していることが十分考えられる。河内平野では、西岩田遺跡をはじめ、美園遺跡、八尾南遺跡等でも古墳時代前期の遺構、遺物が多数検出されている。又、巨摩古墳、山賀古墳、美園古墳といった古墳の存在も知られており、自然環境の安定化と共に、河内平野における

第４図　亀井北遺跡と周辺の分布図（１：50,000）

生産性の向上が窺われる。こうした状況は古墳時代後期にはさらに進み、本遺跡もほぼ全域が水田化されるほか、長原遺跡では塚ノ本古墳を中心に多数の小型方墳が築かれている。

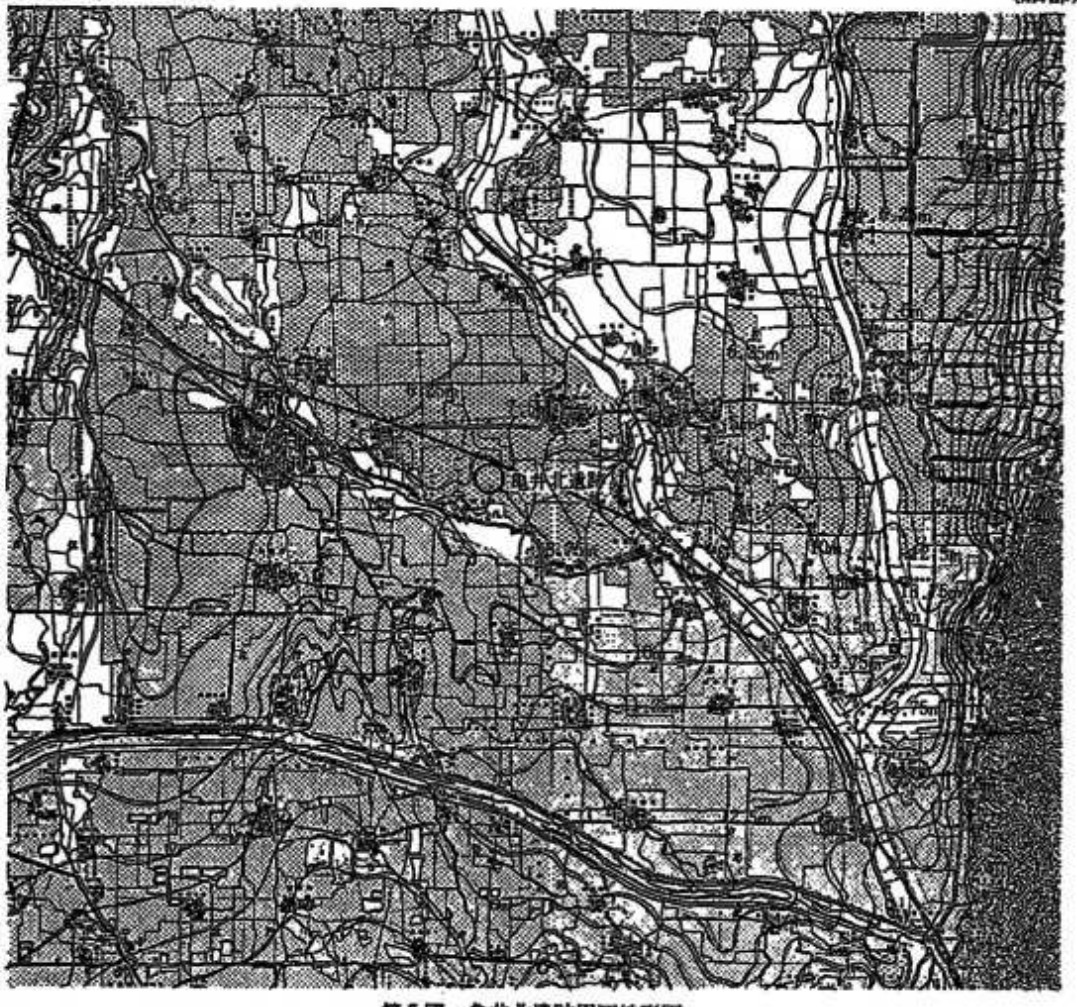
奈良・平安時代の遺構も多く点在し、久宝寺遺跡や本遺跡においても掘立柱建物や木枠井戸等が検出されている。

中世には、若江城などの中世城郭が築かれる他、条理制に基づいた集落が形成される。又、各遺跡で畝状遺構や鋤溝などが検出されており、畑地化の傾向が認められる。

近世に至ると、いわゆる「河内木綿」の栽培が盛行し、久宝寺遺跡等でこれを裏付ける「掻きあげ田」の遺構も検出されている。

以上、河内平野の変遷の概略を述べたが、総じて河内平野の歴史は、大和川をはじめとする河川氾濫の水害との闘いに終始していると言え、本遺跡を含め河内平野における遺跡の各遺構面の大半が砂で覆われているというこれまでの調査結果は、そうした水害の状況を物語っている。宝永元年（1704年）に大和川が付け替えられ、はじめて河内平野に一つの大きな転期が訪れたとも言えよう。

（服部）



第5図　亀井北遺跡周辺地形図

第Ⅳ章　調査の成果

第1節　基本層序

亀井北遺跡を含めた河内平野中央部の各遺跡は、南東方向より放射状に広がる旧大和川の氾濫原上に位置し、幾度となく繰り返された河川氾濫と、土砂の堆積によって形成された沖積地上の遺跡である。従ってこれらの遺跡では、河内平野の形成が始まって以来、現在の地表に至るまで数メートルにも及ぶ膨大な土砂が、複雑な堆積状況を示している。

亀井北遺跡の（その1）調査区に於ける現地表は、T.P.+7.6m～8.0mを測る。現状では、B地区の中央部付近が最も高く、南北両端に向けて徐々に下降し、A地区の北端部でT.P.+7.8m、C地区の南端部でT.P.+7.6mに至る。（その2）調査区以南では、D・E地区でT.P.+7.75m～8.0mの間でゆるやかに上下を繰り返し、（その3）調査区南半部に存在する自然堤防状地形に向けて、T.P.+8.9m付近まで上昇している。このように本遺跡周辺の現地形では、南東から北西に向う何条もの自然堤防状地形が存在し、ゆるやかな上昇、下降を繰り返している。

以下、基本的な層序の概要について上層より順次述べる。（付図1）

第Ⅰ層　盛土及び攪乱土を第Ⅰ層とした。現地表下約1.0m～1.3mは盛土である。この盛土は、中央環状線建設に伴うものと、それ以前における工場用地化の際なされたものである。調査区各所にはこの工場建設に伴う鉄筋コンクリートの基礎が多数残存しており、それらによる攪乱も随所に認められた。C地区においては1Cトレンチより Cトレンチ南にかけて、東西約15m、南北約50mにおよぶ池状の攪乱が存在し、産業廃棄物、汚泥等が現地表下約2.0～2.3mまで認められた。又、A地区南半よりBトレンチ、Cトレンチ西半には、中央環状線建設時に付替えらたコンクリートブロック積水路が南北に縦貫して存在したため攪乱を受け、幅約5mにわたって現地表下3.5m付近まで達している。

第Ⅱ層　盛土直下に位置する暗灰色シルト層を第Ⅱ層とし、近世以降の旧耕土層等に当る。第Ⅱ層は、A地区において比較的良好に残存するが、B・C地区では一部を除いて大半が攪乱、又は削平を受け、ほとんど残存しない。A地区では、第Ⅱ層上面において畝状遺構が検出されており、畑地耕作土と考えられる。又、近世陶磁器を含め、瓦器・土師器等の細片を若干包含する。

第Ⅲ層　第Ⅱ層直下に部分的に存在する茶褐色シルト層を第Ⅲ層とした。A地区、C地区においてはほぼ全面に存在するが、B地区においては自然堤防状地形上位にのみ堆積する。上面は、A地区でT.P.+6.4m、C地区でT.P.+6.5mに当り、層厚約30cmを測る。瓦器、土師器細片を包含し、上面において畝状遺構が検出されることから、中世の畑地耕作土と考えられる。

第Ⅳ層　調査区全域に認められ、T.P.+6.2～6.4m付近で第Ⅳ層とした青灰色シルト層あるいは紫灰色シルト層に至る。この層は流水堆積層と考えられ、南に向かうにつれて粗砂化し、層厚

も増す。層厚は30cm～60cmを測る。遺物はほとんど包含されない。上面では、井戸、鋤溝等、古代から中世までの遺構が混在して検出された。上位には第Ⅲ層によって削平された別の耕作土が存在したことが想定される。

第Ⅴ層　B地区中央付近の自然堤防上にのみ存在する暗茶灰色シルトを第Ⅴ層とした。上面は、T.P.+6.3～6.4mに当り、層厚20～30cmを測る。遺物の包含は少量である。奈良・平安時代の遺構は、第Ⅴ層上面においてのみ、第Ⅳ層上面の遺構群より分離して検出される。

第Ⅵ層　第Ⅳ層、第Ⅴ層の下位に当る暗青灰色粘土層を第Ⅵ層とする。層上面は、A、C地区ではT.P.+5.9m付近、B地区では北半でT.P.+6.2m、南半でT.P.+5.8～6.0m付近にあたり、層厚は比較的一定し、ほぼ15cm前後を測る。上面において足跡が多数検出されるほか、B地区において畦畔の痕跡が認められ、水田耕作土と考えられる。第Ⅵ層周辺からの出土遺物は皆無であり、時期を明確にすることは困難であるが、（その2）、（その3）調査区の調査結果により、古墳時代後期に当るものと考えられる。

第Ⅶ層・第Ⅷ層　第Ⅵ層下位において、層厚4～5cmの薄いピート層状の黒色有機質土層を間層として青灰色粘土層に達する。黒色有機質土層を第Ⅶ層、下位の青灰色粘土層を第Ⅷ層とする。第Ⅶ層は、炭化した植物遺体と灰黒色シルト層の互層堆積である。第Ⅷ層は層厚15～20cmを測り、暗茶褐色マンガン斑を多数含む。（その2）調査区の調査結果によると、古墳時代中期の水田相当層と考えられるが、本調査の調査結果はそれを積極的に示すに至っていない。遺物の出土も皆無に等しい。

第Ⅸ層　B地区においてのみ第Ⅷ層下に存在する土層を第Ⅸ層とした。

B地区北半では、層厚2～5cm前後の薄い灰色砂層に覆われた層厚5～10cmの淡灰色粘土層が、T.P.+5.8～6.0m付近に存在する。上位に当る灰色砂層を第Ⅸ－1層、下位に当る淡灰色粘土層を第Ⅸ－3層とする。ともに遺物の包含は少量であるが、須恵器出現期以後の遺物は含まれない。第Ⅸ－3層上面において、第Ⅸ－1層を埋土とする足跡が検出された。

B地区南半では、第Ⅸ－4層とした緑灰色シルト層が堆積する。T.P.+5.4～5.8mに位置し、層厚20～40cmを測る。B地区中央付近ではこの第Ⅸ－4層が凹地状に下降し、その上位にやや砂質度の強い青灰色微砂（第Ⅸ－2層）が堆積する。又、B地区南端付近（X＝－153,020以南）はこの時期、自然堤防状に隆起しており、その上位に第Ⅸ－5層とした茶褐色砂礫土が堆積している。上面最高位はT.P.+5.8m付近に当り、層厚20cmを測る。第Ⅸ－5層上面において、古墳時代前期のピット群、溝が検出された。第Ⅸ－3層、第Ⅸ－4層、第Ⅸ－5層の各上面は、一連の遺構面（第8a遺構面、古墳時代前期Ⅳ）と考えられ、この遺構面より古墳時代前期の範疇に入ると考えられる。

第Ⅹ層　A地区ではT.P.+5.5m付近、B地区北半部ではT.P.+5.8m付近、B地区南半部とC地区ではT.P.+5.4m付近に灰黒色砂質土層が在り、この層は古墳時代前期の遺物を多量に包含し、炭化物の細粒が多量に混在するため層全体が黒色を帯びる。この古墳時代前期包含層に

当る灰黒色砂質土層を第Ⅹ層とする。B地区以北では層厚30～40cmを測るが、C地区北半部では5～10cmと薄く、ピート層状に変化する。C地区南半部（3C、4Cトレンチ）では再びシルト化、砂質土化し、層厚約30cmを測る。又、A地区及びB地区北半部、C地区南半部では、第Ⅹ層は層厚0.5cm前後の灰色シルトが間層として部分的に介在し、数時期に分層することが可能である。第Ⅹ層中の各層は、基本的には灰黒色を呈しており、大差はないものの、シルト度や含まれる炭化物の量などに若干の差異が認められる。これら各層の上面においては、個々に多数の遺構が検出され、複雑な切り合い関係を示している。しかし第Ⅹ層に包含される遺物は、古墳時代前期に限られる（第8b遺構面－第8e遺構面、古墳時代前期Ⅱ～Ⅴ遺構面）。

第Ⅺ層　T.P.＋4.7～5.6m付近に存在する。灰色シルト、淡黄灰色砂、緑灰色微砂といった一連の流水堆積層を第Ⅺ層とする。層厚は30～40cmを測り、基本的に上半がシルト質、下層に至るにつれて砂質化する。又、C地区南半部は全体にシルト質であり、北へ進むにつれて砂質化する。遺物はまったく包含されていない。B地区南端には、黄白色粗砂が隆起するように堆積しており、これを第Ⅺ－3層とし、この上部北側に若干堆積する緑灰色シルトを第Ⅺ－2層とした。

第Ⅻ層　C地区南半部では第Ⅺ層の流水堆積層直下、T.P.＋5.1m付近に、黒色有機質粘土を上層に薄く堆積する青灰色粘土が層厚約10～15cmで存在する。この上層の黒色有機質粘土を第Ⅻ－1層とし、下半の青灰色粘土を第Ⅻ－2層とした。第Ⅻ－1層上面より多数の足跡が検出されたほか、C地区南端では堤を持つ溝が検出された。第Ⅻ層はC地区中央付近で上昇し途絶するが、B地区南半部において第Ⅻ－2層に当る青灰色粘土が認められ、その上面においても多数の足跡が検出された（弥生時代後期Ⅲ遺構面）。又、遺物の出土は少ないが、第Ⅹ層より下位に当ることから、第Ⅻ層は、弥生時代後期の範疇に入ると考えられる。

第XIII層　B地区中央付近より以南の第Ⅻ層下に、間層的に，認められる灰黒色有機質粘土を第XIII層とした。薄く堆積した植物の腐蝕物と青灰色粘土の互層状を呈し、層厚5cm前後を測る。

第XIV層　B地区中央付近より以南の第XIII層下に存在する暗灰色粘土、青灰色シルト互層、緑灰色粘質土を第XIV層とした。C地区北半部を中心にシルト化するものの、一連の層位と考えられる。又、B地区中央付近には、黄白色粗砂の隆起堆積層（第XIV－4層）が幅約12mに亘って存在し、高さ約0.5mの自然堤防状を呈している。第XIII層及び第XIV－1～3層は、この自然堤防の以南に堆積したものと考えられる。

第XV層　B地区中央付近より以北では第Ⅺ層直下、以南では第XIV層下に当り、弥生時代後期Ⅰ遺構面を覆う流水堆積層が存在する。これを第XV層とする。北半では層厚約50cmを測る。淡黄灰色砂（第XV－1層）下に、淡黄灰色砂、青灰色シルト、灰色シルト互層（第XV－2層）、青灰色微砂（第XV－4層）、灰白色砂、淡黄灰色砂（第XV－5層）、黄灰色砂、灰色砂、灰色シルト互層（第XV－6層）が順次堆積しており、全体で層厚70～80cmを測る。B地区南半部からC地区北半部ではシルト質が強く、第XV－2層とした淡黄灰色砂、青灰色シルト、灰色シルト互層が、層厚10～30cmで堆積する。C地区中央付近、T.P.＋4.9m付近には、自然流路6が第

XV－2層下に存在し、そのオーバーフローによる流水層が、その両側に黄灰色砂、青灰色シルト、灰色微砂の互層を形成して堆積する。この流水性の互層を第XV－3層とした。又、この第XV－3層上面は、面として不安定な様相を示しているが、多数の足跡とともに完形の土器も出土するピットなどの遺構も検出された（弥生時代後期II遺構面）。

第XVI層　T．P．+4.4～4.6m付近に位置し、弥生時代後期の水田相当層と考えられる暗灰褐色粘土を第XVI層とした。層厚10～30cmを測る。この第XVI層上面において足跡多数が検出されたが、水田耕作を積極的に裏付ける遺構、遺物は乏しい（弥生時代後期I遺構面）。

第XVII層　第XVI層下位に薄く存在する間層的な粘土層群を第XVII層とする。C地区南半部には、ややシルト質の暗緑灰色粘土（第XVII－1層）、緑灰色粘土（第XVII－2層）が層厚約5cmで堆積するが、第XVII層は、B地区を中心に認められる灰白色粘土（第XVII－3層）を主体とする。層厚約5cmを測る。A地区及びC地区南半部では、第XVII－3層は部分的に認められるのみである。

第XVIII層　B地区北半部の第XVII層下に、南北幅約40m、深さ40cmを測る凹状地形が存在する。この凹状地形の埋土上半に当り、上部が逆にやや隆起するように堆積する粘土層群を第XVIII層とした。上層より灰褐色粘土（第XVIII－1層）、暗青灰色粘土（第XVIII－2層）、暗緑灰色粘質土（第XVIII－3層）、暗灰色粘土（第XVIII－4層）の順で堆積しており、各々層厚約10cmを測る。遺構、遺物はいずれも皆無である。

第XIX層　凹状地形内堆積層の中位に当る黒色粘土である。層厚10～20cmを測る。以下、黒色粘土が多数存在するため、第XIX層を第一黒色粘土と呼称する。

第XX層　凹状地形内の最下位に当たる暗緑褐色粘土を第XX層とする。層厚約10cmを測る。

第XXI層　B地区のみに間層的に存在する黒褐色粘土を第XXI層とする。黒色有機質層と暗灰褐色粘土の互層で、炭化した植物遺体などにより全体に黒色を帯びる。第二黒色粘土と呼称する。

第XXI層以下は、やや緑色を帯びた淡灰色系の粘土と黒色粘土が交互に堆積している。

第XXII層　B地区を中心にT．P．+4.0m付近に認められる緑灰色粘土に当る。層厚約10cmを測る。遺構・遺物は検出されない。

第XXIII層　A地区においてのみ第XXII層下に介在する青灰色粘土を第XXIII層とする。層厚約10cmを測る。

第XXIV層　T．P．+3.4～4.2mの間に層厚10～15cmで堆積する黒色粘土を第XXIV層とする。第三黒色粘土と呼称する。B地区北半部ではやや下降する。ほぼ全域に認められるが、下層の流水堆積層の影響でC地区北半部で途絶する。

第XXV層　第三黒色粘土直下に当る層位を第XXV層とする。A地区・B地区では層厚10～20cmを測る暗緑灰色粘土（第XXV－1層）である。第XXV－1層は、B地区北半部の凹状地形部分では認められない。C地区では、下層に存在する自然河川5の影響により不安定な状況が窺われ、緑灰色シルト・暗緑灰色粘土互層（第XXV－2層）、青灰色シルト・灰褐色粘土互層（第XXV－3層）、灰色シルト（第XXV－4層）、緑灰色粘土（第XXV－5層）が複雑に堆積する。

第XXVI層　B地区北半部において、間層的に堆積する黒灰色粘土を第XXVI層とする。層全体がやや黒色を帯びるが、完全にピート化するには至っていない。

第XXVII層　第XXVII層以下の各層はB地区中央で南から北に向けて急激に下降し、A地区にかけて再び上昇を見せる凹状地形を呈している。この凹状の地形の形成するベース層の最下位に当たる緑色系の粘土層を第XXVII層とする。上位より緑灰色粘土、淡緑灰色粘土、明緑灰色粘土の三層に分けられるが、基本的には同質の粘土である。凹状地形下位では層厚も薄く、三層の区別も不明瞭となる。A地区では、T.P.+3.2～3.4mに当たる。B地区南半及びC地区北端ではT.P.+3.1m付近に上面を置き、層厚約30cmを測る。又、B地区南端では、第XXVII層上面において弥生時代中期の自然流路、弥生時代前期の遺構が検出された。C地区では、第XXVI層上面を切り込み面として、幅約50cmに亘って自然河川5が存在し、第XXVII層以下の層位は、北端にその右岸部分として残存するのみである。

第XXVIII層　第XXVII層直下に位置する黒色粘土を第XXVIII層とする。C地区北端ではT.P.+3.8m付近に当たり、北に向けて徐々に下降し、A地区北端でT.P.+3.2m付近に至る。層厚は10～20cmを測る。第四黒色粘土と呼称する。

筋掘り調査による土層観察　第XXIV層以下は、平面調査を総て終了後、各トレンチ中央に設けた筋掘りトレンチによる土層観察によって確認した層序である。第XXIII層下には第XXIX層とするシルト層、砂層があり、自然河川6及び7がその供給源と考えられる。層厚20～30cmを測る。B地区南端及びC地区北端では、第XXIX層下に層厚約20cmを測る黒色粘土が認められる。この黒色粘土を第XXX層とし、第五黒色粘土と呼称する。自然河川5を介して層序のつながりは不明確であるが、D・E地区において縄文時代後期の遺物を出土する層位は、この第XXX層付近に当たるものと考えられる。以下は、流水堆積層と見られる第XXXI層としたシルト層、砂層を介し、T.P.+2.6～3.0mで北に向けてやや傾斜を示す黒色粘土に至る。この黒色粘土を第XXXII層とし第六黒色粘土と呼称する。A地区、及びB地区南端では、部分的に第XXXII層下に灰色粘土（第XXXIII層）、緑灰色粘土(第XXXIV層)が堆積することが確認されたが、全体の堆積状況などは不明である。

以上、亀井北遺跡（その1）調査区における基本層序を述べたが、粘土層、シルト層、砂層が繰り返し複雑な堆積を示していると言える。又、本調査区内だけでも各時期ごとに20本もの自然河川や自然流路が存在し、埋没している。こうした自然河川や自然流路が各層に及ぼした影響も多大である。

自然河川2は、幅10m、深さ約2mを測る。第VI層上面を切り込み面とするが、周辺が自然堤防状にやや隆起する状況が第IX層より認められる。従って自然河川2は、位置を大きく変えることなく第IX層堆積以前より存在し、第VI層形成後に今回、検出された規模となり最終的に埋没したものと思われる。自然河川2による自然堤防は、現地表においてもその影響が認められる。

自然河川3は、第VI－3層とした隆起砂層の形成を含め、オーバーフローを繰り返し、B地区

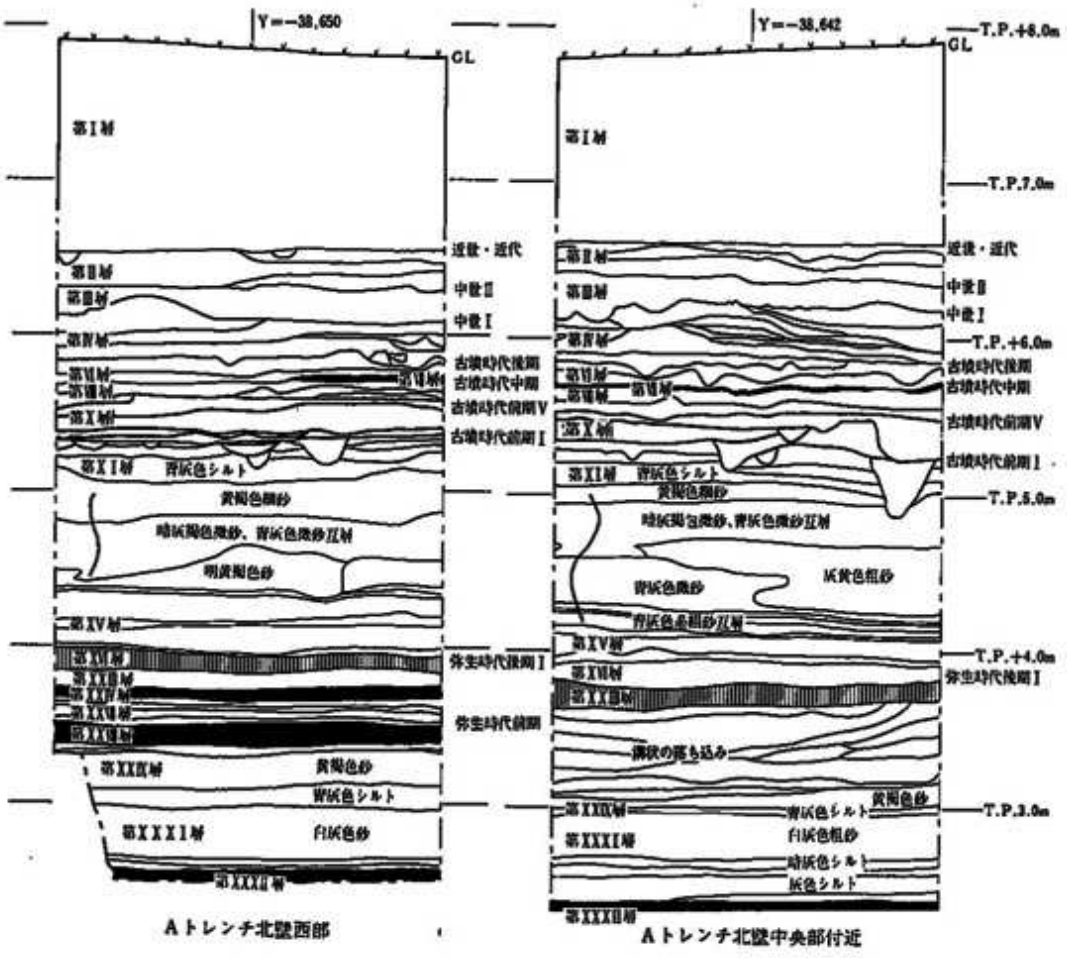
南端で古墳時代前期以降に認められる自然堤防状地形を形成したものと思われる。第XI層の供給源とも考えられる。

自然河川４は、幅約15m、深さ約1.3mを測る。第XII層上面を切り込み面とし、底部は第XXXI層にまで及ぶが、オーバーフローによる土砂は少なく、弥生時代中期～後期にかけて完全に埋没している。

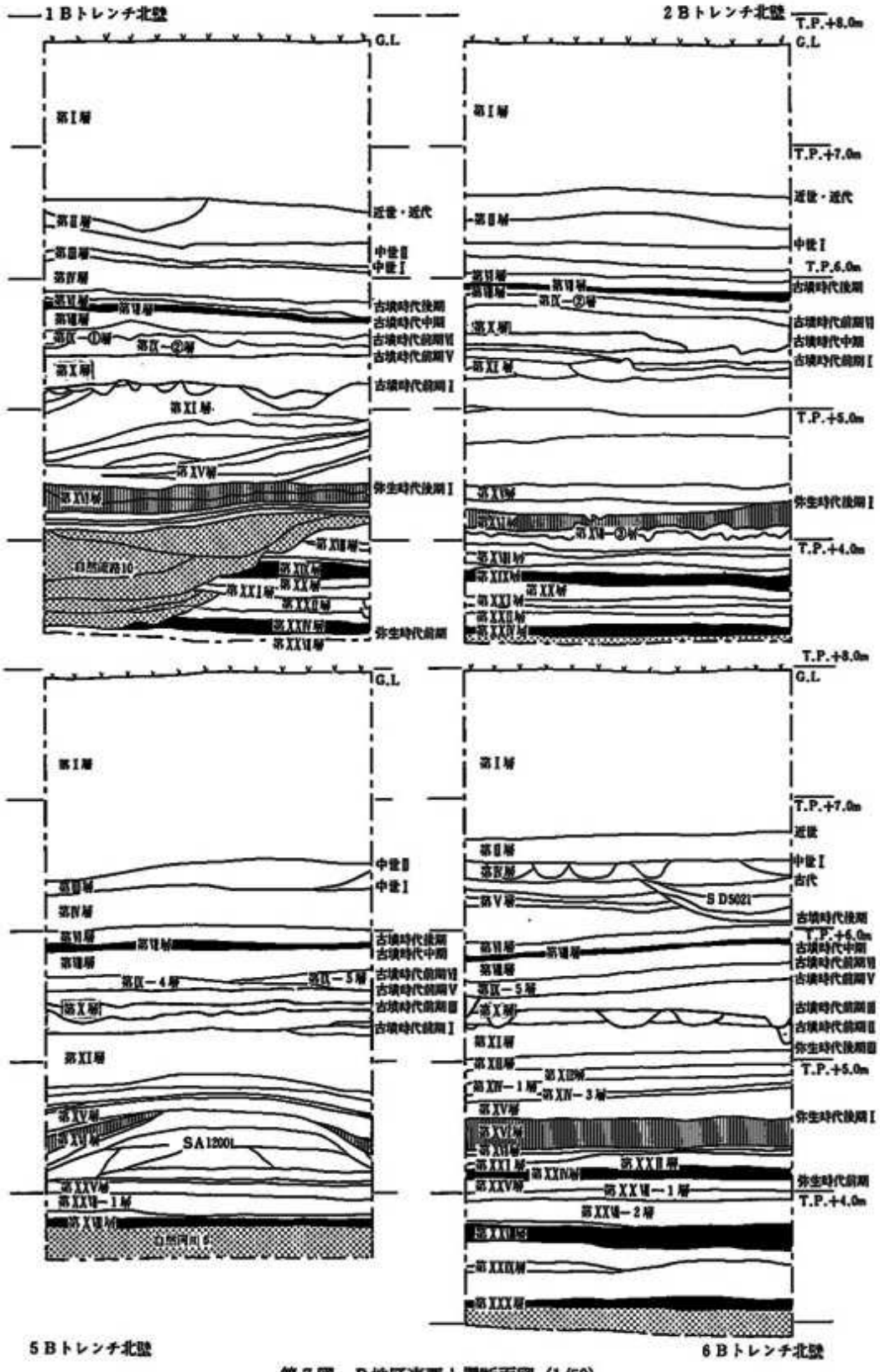
自然河川５は、第XXVII層上面を切り込み面とし、Ｃ地区全体を含み、幅約50m以上に及ぶ。しかし、（その２）調査区においてその左岸は検出されておらず、Ｃ地区、Ｄ地区間に当たるものと考えられる。深さについては、Ｔ．Ｐ．＋2.4m以下にまで及び、今回の調査では確認できなかった。又、自然河川５の上層は、埋没後も小規模な自然流路が幾度となく形成・埋没を繰り返しており、Ｃ地区中央部は、古墳時代前期に至るまで、自然堤防状にやや隆起する状況を示す。

各層における遺物の包含状況は、第Ｘ層より上位に集中し、第XI層以下では、遺物の出土量は急激に減少すると言える。

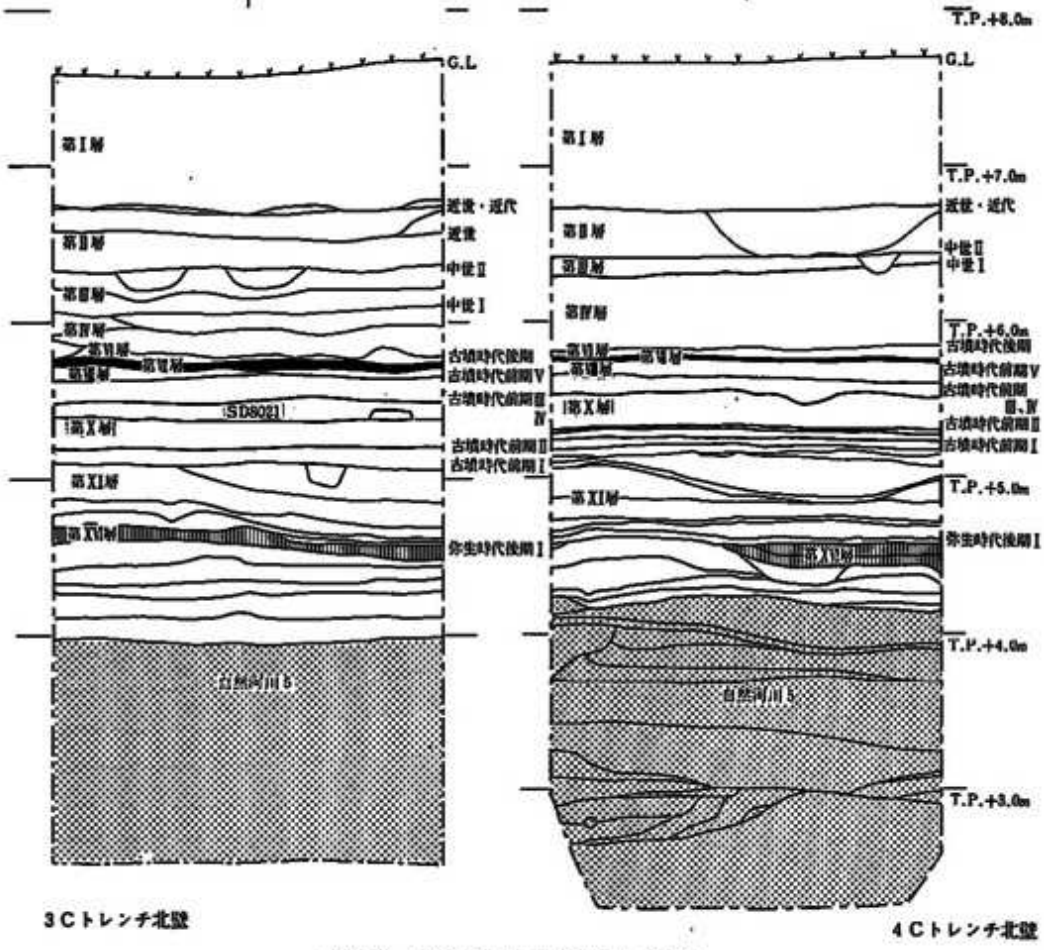
（服部）



第６図　Ａ地区東西土層断面図（1/50）



第７図　Ｂ地区東西土層断面図（1/50）



第8図　C地区東西土層断面図（1/50）

第1表　トレンチ別遺構面対照表

遺構面名称	時代区分	トレンチ別遺構面対照名称													
		Atr	Btr	1Btr	2Btr	3Btr	4Btr	5Btr	6Btr	Ctr	1Ctr	2Ctr	3Ctr	4Ctr	
第1遺構面	近世～近代	第1遺構面					第1遺構面			第1遺構面			第1遺構面	第1遺構面	第Ⅰ層上面
第2遺構面	近代								第1遺構面				第2遺構面		第Ⅱ層中
第3遺構面	中世Ⅱ	第2遺構面			第1遺構面	第1遺構面		第1遺構面		第2遺構面			第3遺構面	第3遺構面	第Ⅲ層上面
第4遺構面	中世Ⅰ	第3遺構面	第1遺構面	第1遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第3遺構面			第4遺構面	第3遺構面	第Ⅳ層上面
第5遺構面	古墳		第1'遺構面						第3遺構面						第Ⅴ層上面
第6遺構面	古墳時代後期	第4遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第3遺構面	第3遺構面	第3遺構面	第3遺構面	第4遺構面	第4遺構面	第1遺構面	第1遺構面	第5遺構面	第4遺構面	第Ⅶ層上面
第7遺構面	古墳時代中期	第5遺構面	第3遺構面	第3遺構面	第4遺構面	第4遺構面	第4遺構面	第4遺構面	第5遺構面	第5遺構面	第2遺構面	第2遺構面	第6遺構面	第5遺構面	第Ⅷ層上面
第8d遺構面	古墳時代前期Ⅴ		第4'遺構面	第4遺構面	第5遺構面	第5遺構面			第6遺構面						第Ⅸ層上面
第8b遺構面	古墳時代前期Ⅴ	第4'遺構面	第4遺構面	第5遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第5遺構面	第5遺構面	第7遺構面	第6遺構面	第3遺構面				
第8c遺構面	古墳時代前期Ⅳ	第4'遺構面	第4遺構面	第5遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第5遺構面	第5遺構面				第3遺構面	第7遺構面	第6遺構面	第Ⅹ層
第8d遺構面	古墳時代前期Ⅲ	第6遺構面	第4遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第7遺構面	第8遺構面	第6遺構面	第3遺構面				
第8e遺構面	古墳時代前期Ⅱ	第6遺構面	第4遺構面	第6遺構面	第11遺構面	第6遺構面	第6遺構面	第7遺構面	第9遺構面	第7遺構面					
第8f遺構面	古墳時代前期Ⅰ	第6遺構面	第5遺構面								第4遺構面		第8遺構面	第9遺構面	
第9遺構面	弥生時代後期Ⅳ		第5'遺構面				第7遺構面	第8遺構面					第9遺構面	第10遺構面	
第10遺構面	弥生時代後期Ⅲ		第8遺構面			第10遺構面		第9遺構面	第10遺構面	第6遺構面	第5遺構面				
第11遺構面	弥生時代後期Ⅱ						第9遺構面	第10遺構面		第11遺構面	第6遺構面				
第12遺構面	弥生時代後期Ⅰ	第7遺構面	第9遺構面	第9遺構面	第13遺構面	第11遺構面	第9遺構面	第10遺構面	第11遺構面	第12遺構面	第7遺構面	第4遺構面	第11遺構面	第12遺構面	第Ⅺ層上面
第13遺構面	弥生時代中期	第8遺構面	第10遺構面	第10遺構面					第12遺構面						
第14遺構面	弥生時代中期		第11遺構面		第14遺構面				第13遺構面	第13遺構面					
第15a遺構面	弥生時代中期		第12遺構面	第11遺構面	第15遺構面		第14遺構面	第14遺構面	第14遺構面	第14遺構面	第8遺構面	第5遺構面	第12遺構面	第15遺構面	第Ⅻ層上面
第15b遺構面	弥生時代前期	第9遺構面													
第16遺構面	縄文時代晩期後期	第10遺構面	第13遺構面	第14遺構面	第16遺構面	第12遺構面	第15遺構面	第15遺構面	第14遺構面	第14遺構面					相当層
第17遺構面	縄文時代晩期後期														

第2節　弥生時代中期以前の遺構と遺物

縄文時代と決定しうる遺構・遺物を検出することはできなかったが、T.P.+3.4m～3.8mに堆積する黒色の有機質の粘土層（上層より四番目）がこれに相当するものと考えられる。第四黒色粘土層の下に、第五、第六黒色粘土層が堆積している。第五黒色粘土層は、T.P.+3.2～3.6mに在り、（その2）調査区で縄文時代後期の土器が出土した黒色粘土層に相当すると考えられる。第三と第五黒色粘土層の間にある自然河川6・7は、後期～晩期に流れたものと推測する。第六黒色粘土層は比較的安定しており、久宝寺南遺跡から（その2）調査区へと続く層である。

弥生時代前期の遺構としては、第15b遺構面に形成されたSD15001、落ち込み15001が挙げられる。SD15001より壺が出土している。Aトレンチに於いても土器を検出したが、遺構を確認することは出来なかった。これらの遺物、遺構は第三黒色粘土層を除去した段階で検出し、第XXⅦ－1～3層、緑灰色粘土層、淡緑灰色粘土層、明緑灰色粘土層をベースとしている。A地区とB地区南端を比較すると、B地区南端が0.5mほど高くなっている。

第五・第四黒色粘土層下に自然河川7と自然河川6が形成され、この河川の隆起によりそれ以降の時期の層は安定せず、やや起伏を持ちながら堆積する。自然河川7の上層と自然河川6の上層はやや高くなり、その間（X＝－152,980地点）ではほぼ水平の堆積をしている。このX＝－152,980地点は、弥生時代前期に於ても依然として低い。

1．縄文時代

縄文時代の遺構は検出することが出来なかった。第四黒色粘土層下に自然河川6と7が存在する。自然河川6は幅約20m以上、深さ約0.9m、自然河川7は幅10m以上、深さ約0.7m以上を測る。いずれも砂が厚く堆積していたが、遺物は出土していない。

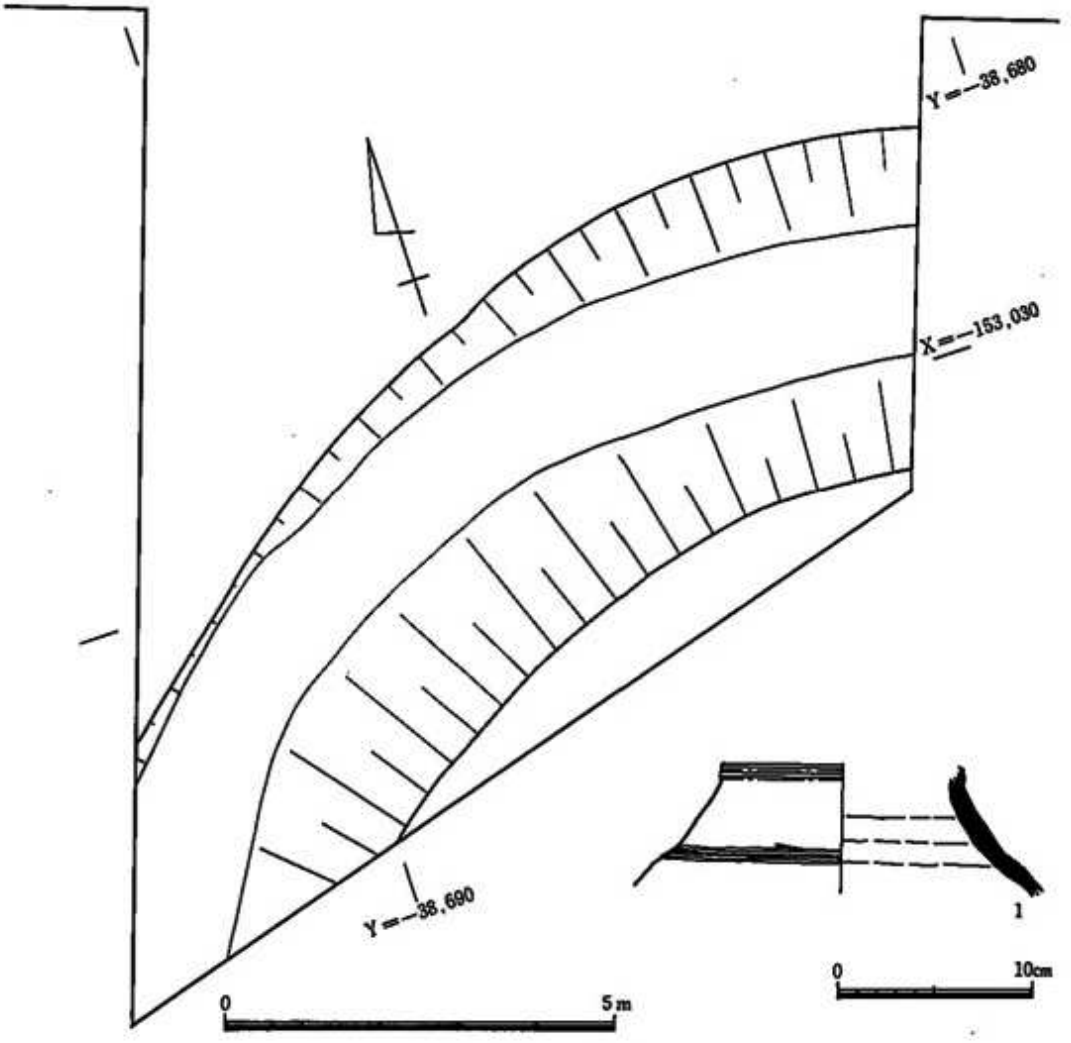
2．弥生時代前期

A・C地区で遺物のみを、B地区で遺構・遺物を検出した。弥生時代前期の遺構・遺物は、第XXⅣ層の黒色粘土層を除去した段階で検出した。A地区では南端に於て、壺底部を数点検出したのみであった。B地区ではSD15001と落ち込み15001を検出し、SD15001内より壺が出土している。SD15001と落ち込み15001の関係は、SD15001が埋没した段階で浅い落ち込み15001が形成された。C地区では自然河川5の上面で土器が出土し、調査当初自然河川5は、弥生時代前期と考えた。しかし、河川内より弥生中期の土器を確認したので、自然河川5は弥生時代前期～弥生時代中期に流れ、土器は上流より流れてきたものと思われる。　（小野）

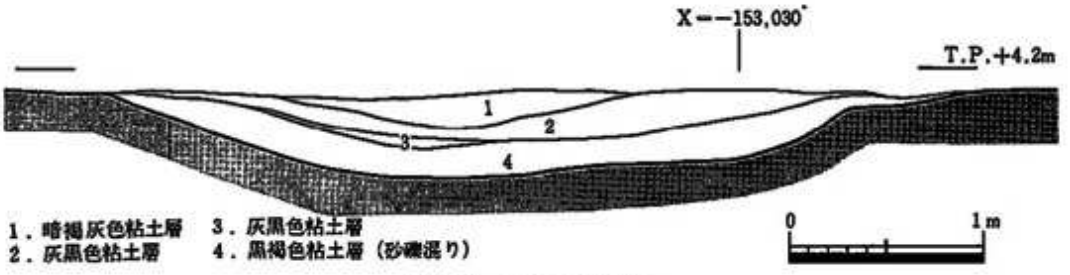
SD15001（第9図・第10図）B地区南端で検出された溝である。第15b遺構面に当る第XXⅦ層上面を切り込み面とする。幅4.5mを測る。半径30m前後の弧状を呈し、両側はさらに調査区外へ延びる。調査区内において約10mを検出した。断面形状は浅い逆台形を呈し、比較的ゆるやかな傾斜を持つ。埋土は黒色系の粘土がレンズ状に堆積する。下層より砂礫混りの黒褐色粘土、灰黒色粘質土、灰黒色粘土、暗褐灰色粘土の順で堆積し、下層になるにつれ砂礫の混入が増す。

中央部肩付近より弥生時代前期の壺(1)が1点ではあるが検出された。出土遺物より弥生時代前期に埋没したものと考えられる。 (服部)

落ち込み15001 (第11図)　B地区南端で検出されたSD15001に後出する落ち込み状の遺構である。SD15001が埋没後、調査区西半が西へ向け約20cm下降し凹状低地を呈する。埋土はほぼ

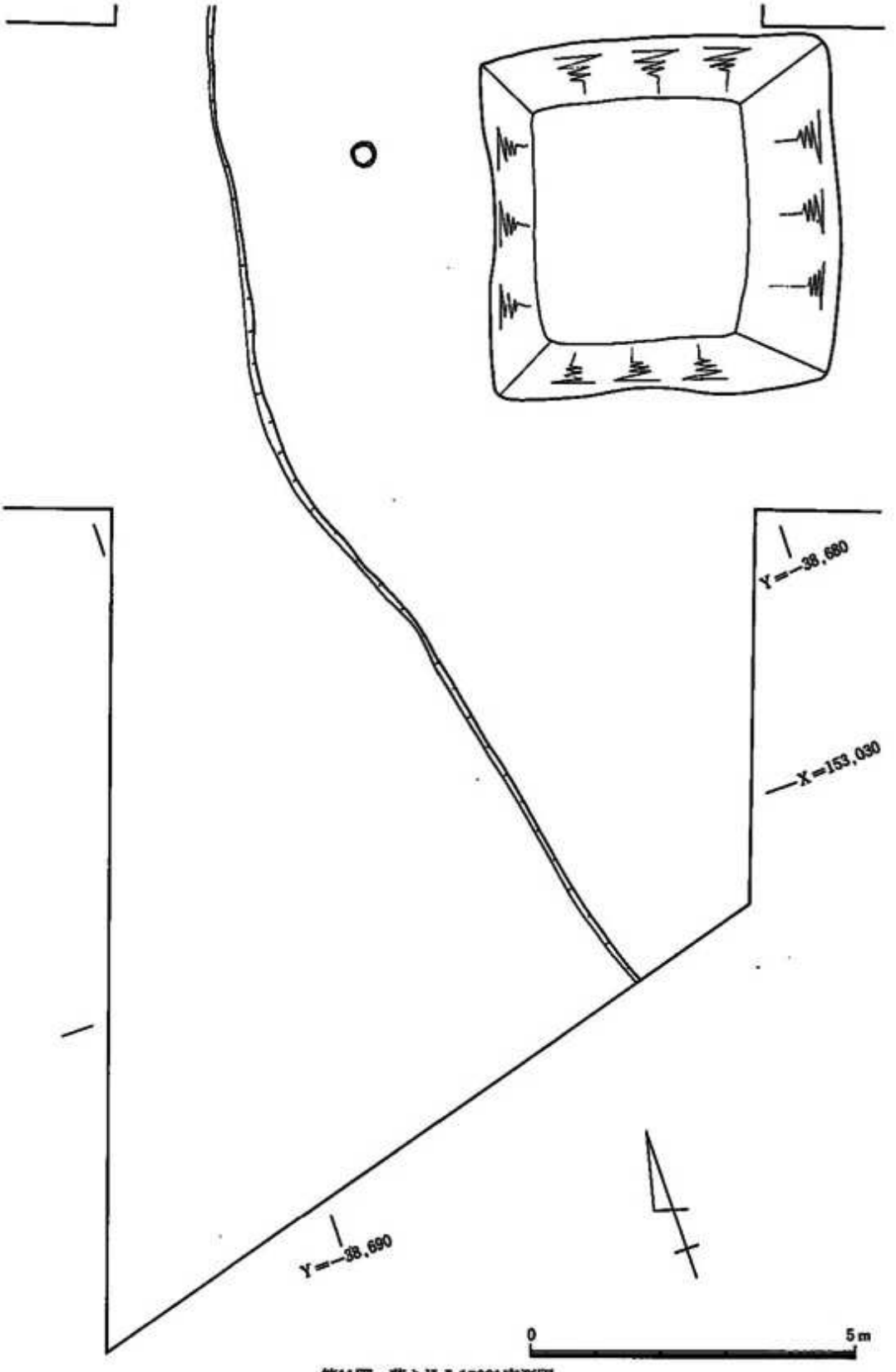


第9図　SD15001と遺物

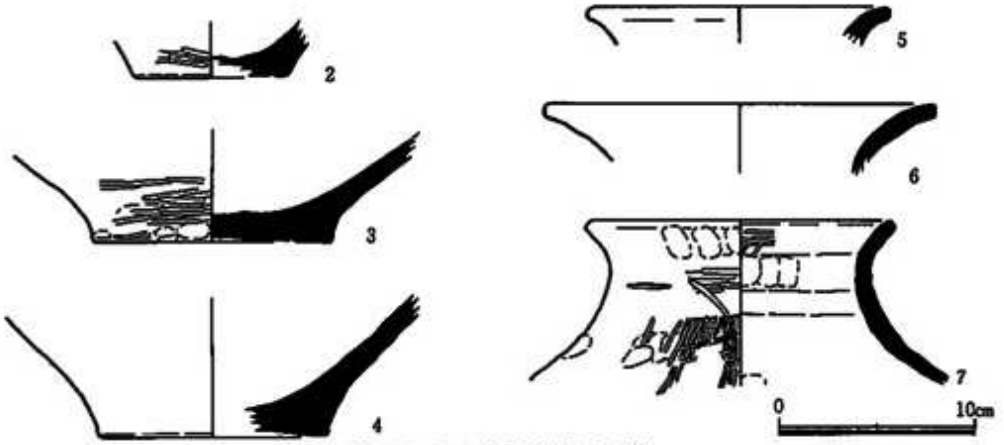


1．暗褐灰色粘土層　3．灰黒色粘土層
2．灰黒色粘土層　4．黒褐色粘土層(砂礫混り)

第10図　SD15001断面図



第11図　落ち込み15001実測図

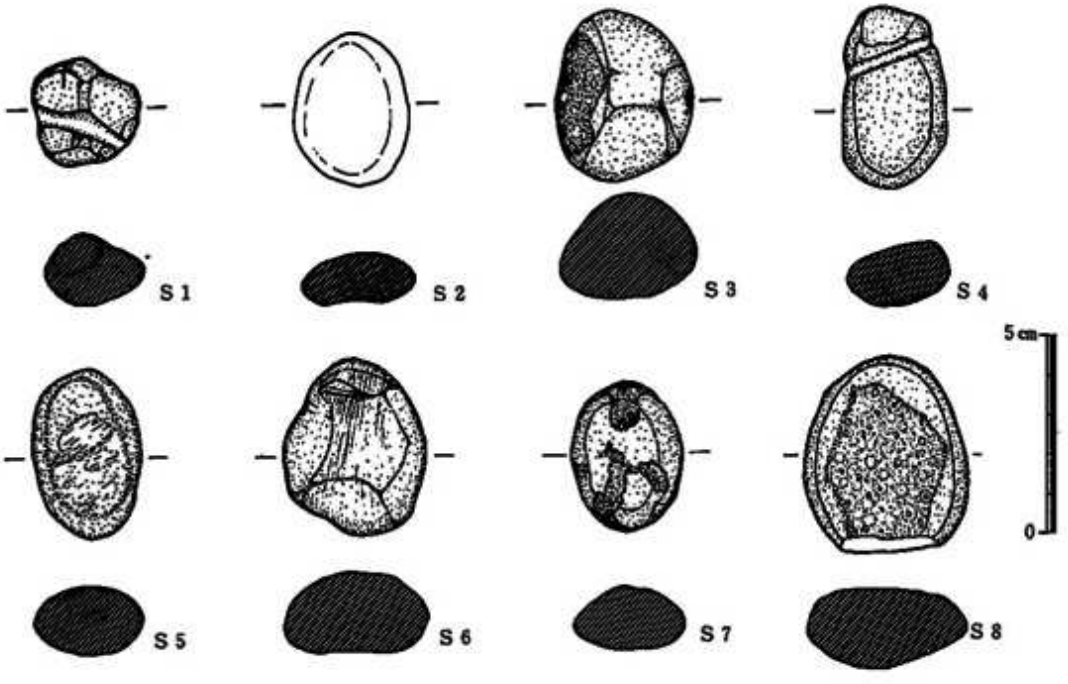


第12図　弥生時代前期出土遺物

全体に均質な暗灰色粘土である。遺構の切り合い関係より弥生時代前期に当たるものと思われる。

出土遺物　〔土器〕（第12図　図版五二）　第Ｉ様式の土器６点を抽出した。７は壺で器壁は厚く、口縁は短く上方へ開く。外面はヘラ磨き、内面は口縁部に横方向のヘラ磨き、頸部下半にハケ状の強いナデを施す。５・６は内外面にヘラ磨きを施す。２・３・４は横方向の外面にヘラ磨きを施す。

〔石器〕（第13図）　８点抽出した。いずれも第三～五の黒色粘土層より出土した。平均重量は34.6ｇである。Ｓ１・Ｓ４には紐擦れの様な痕跡が、またＳ５・Ｓ６には表面に斜め方向の擦痕（線状痕）が、Ｓ３・Ｓ７・Ｓ８には敲打痕が認められる。「飛礫」の類であろうか。



第13図　第三～第五黒色粘土層出土遺物

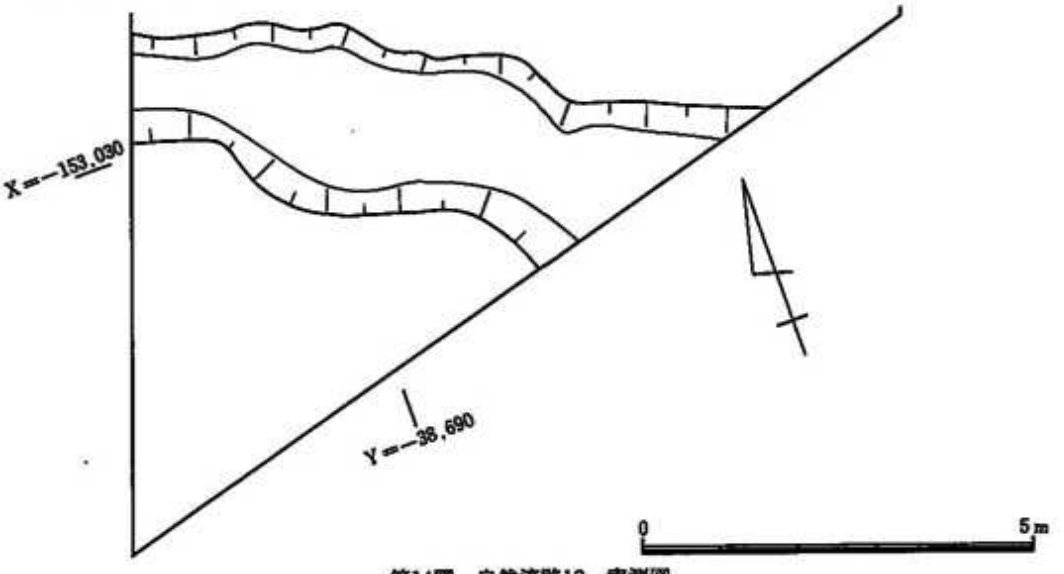
3．弥生時代中期

弥生時代中期遺構面は、第13・14・15ａ遺構面とした面である。弥生時代後期に第12遺構面第XVI層下は複雑な層位を示しており、弥生時代中期遺構面と決定しうる面は第15ａ遺構面の第XXVII－１層上面で緑灰色粘土層である。この層より自然流路13・自然河川５を検出した。第13・14遺構面は、層位が複雑なために、弥生時代中期の遺物と、弥生時代後期の遺物が混在して存在する。遺構としては、Ａ地区に自然流路11と自然河川４がある。

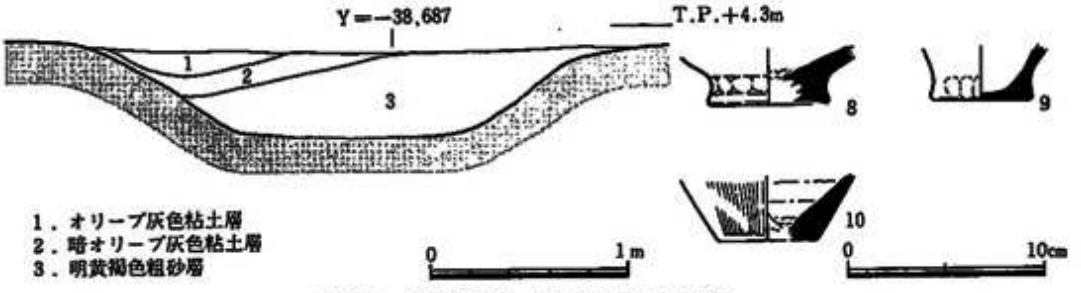
自然流路13（第14図）　Ｂ地区の南端、Ｃ地区の北端部に位置する。主軸は東半部で北西－南東方向におきつつ西側でやや東西方向におく。溝の幅は、1.4～3.6mを測り、深さ43cmを測る。埋土は下層より明黄褐色粗砂・暗オリーブ灰粘土・オリーブ灰色粘土である。南へ約４ｍ離れて自然河川５が存在する。自然流路13は自然河川５とほぼ主軸を同じくし、同時期に流れたものと思われる。

出土遺物（第15図）　甕底部３点が出土している。８は体部が外へ伸び、９は体部がやや直立する。いずれも厚みがあり、内外面はナデを行なっている。10は外面が縦方向のヘラ磨きを、内面をナデ調整を施している。

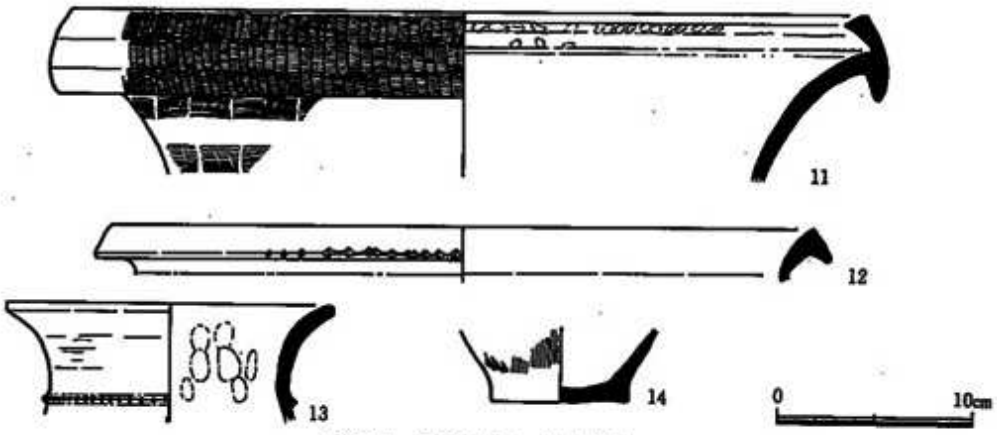
自然河川５　本遺構はＣ地区のほぼ全域にかかり、地区北端部約８ｍを残して肩部を確認した。



第14図　自然流路13　実測図



第15図　自然流路13　断面図及び出土遺物

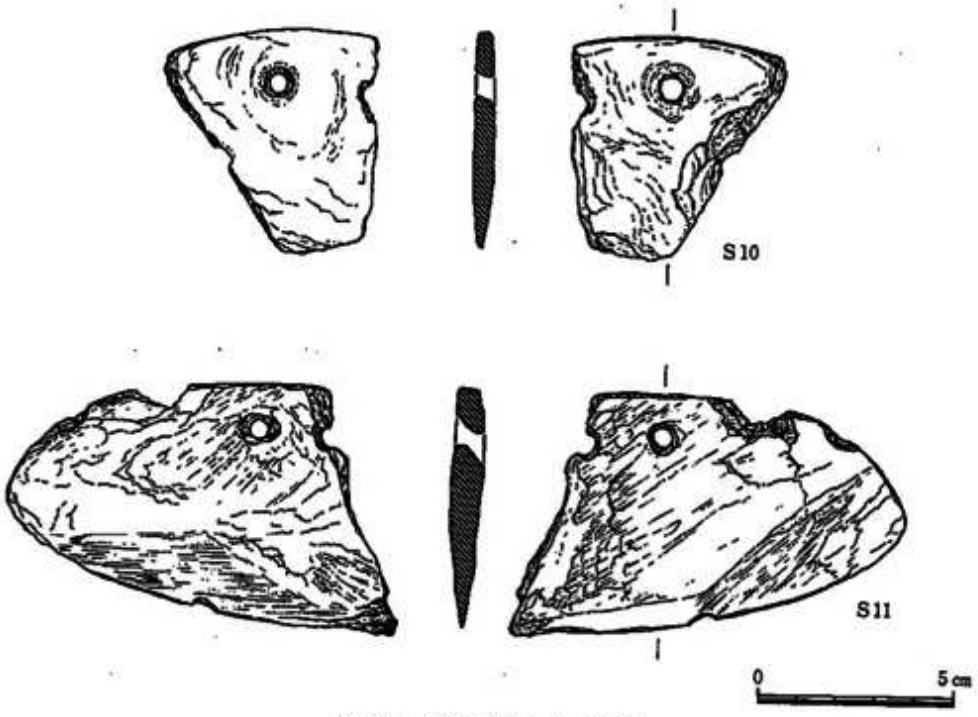


第16図　自然河川５　出土遺物

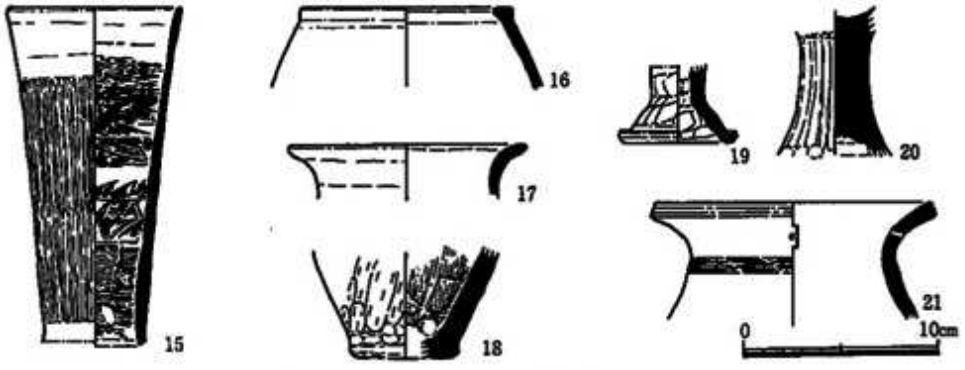
幅51ｍ以上、深さ1.5ｍ以上を測り、主軸をほぼ南北方向におく。土層観察により２時期に亘って流れていたようである。この河川は第XXⅦ－１層（Ｔ．Ｐ．＋４ｍ）より切り込んで形成されている。南側の肩部は調査区外の為、確認することが出来なかった。遺物としては、河川上面より、土器・石器が多く出土している。中間層～下層にかけては、自然木・種子類・木葉を多量に検出している。

出土遺物　〔土器〕（第16図　図版五二）　11は広口壺で、生駒山西麓産の胎土を有する。口縁部に三段の簾状文を施し、頸部に２条の簾状文を施す。13は頸部に断面三角形の貼付突帯を巡らし、端部に刻み目を施す。12は口縁端部に刻み目を施す。14は縦方向のヘラ磨きを行う。

〔石器〕（第17図　図版五二）　Ｓ10は直線刃、Ｓ11は外彎刃形態で、緑色片岩である。



第17図　自然河川５　出土遺物



第18図　自然河川４・６出土遺物

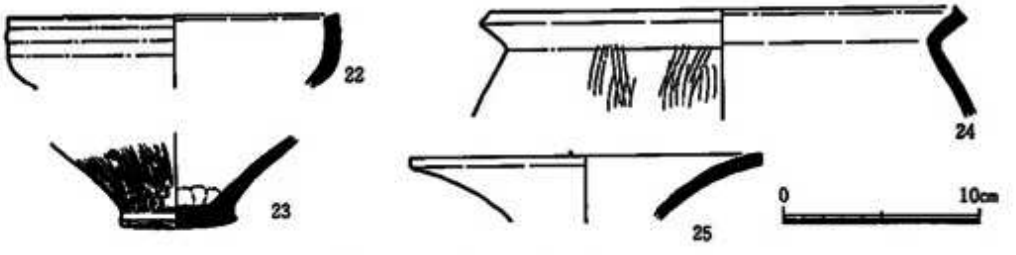
自然河川４　Ａ地区南半部に位置し、自然流路11と6.5m離れている。河川幅約９～16.2m、深さ1.4mを測る。河川内には砂が厚く堆積しており、この砂は北側へオーバーフローして河川外へ流れている。出土遺物としては土器があり、弥生時代後期の土器が若干混入しているので、弥生時代中期～後期にかけて流れたと考えられる。

出土遺物　〔土器〕（第18図　図版五二）　15は外面に縦方向のヘラ磨きを、内面に横方向のハケ目調整を施す。胎土は生駒山西麓産である。21は口縁部に小孔を穿っている。18は外面に下から上にヘラ削り、内面に縦方向のナデを行う。19は小型のものである。脚台部端部に小孔が２個ずつ５対穿たれているが、３孔は貫通していない。外面は縦方向のヘラ磨きを行い、内面はヘラによってナデている。

〔ＳＡ12001下層出土遺物〕　４点を抽出。これらの遺物はＣ地区北端部、ＳＡ12001を除去した段階で検出した。25は壺の口縁部である。22は高杯の杯部である。口縁端部は水平な面を有し、外面に３条の凹線文を施す。23・24は甕で生駒山西麓産の胎土を有している。外面は縦方向のハケ目調整を、内面はナデ調整を施している。23は外面に縦方向の細かいヘラ磨き調整を加え、内面底部に指頭押圧痕を残す。

小　結

縄文時代に於いては２条の自然河川が流れ、後期から晩期にかけて大規模に流れていたようである。弥生時代前期の遺構は、溝と落ち込みがあり、ＳＤ15001より土器が出土した。生活面は地形的に高くなっていた自然河川６の上層であり、弥生時代中期の遺構面もＢ地区以南である。この時期の自然河川５は、亀井北遺跡周辺地域に大きな影響を及ぼしたと思われる。　（小野）



第19図　ＳＡ12001下層出土遺物

第3節　弥生時代後期の遺構と遺物

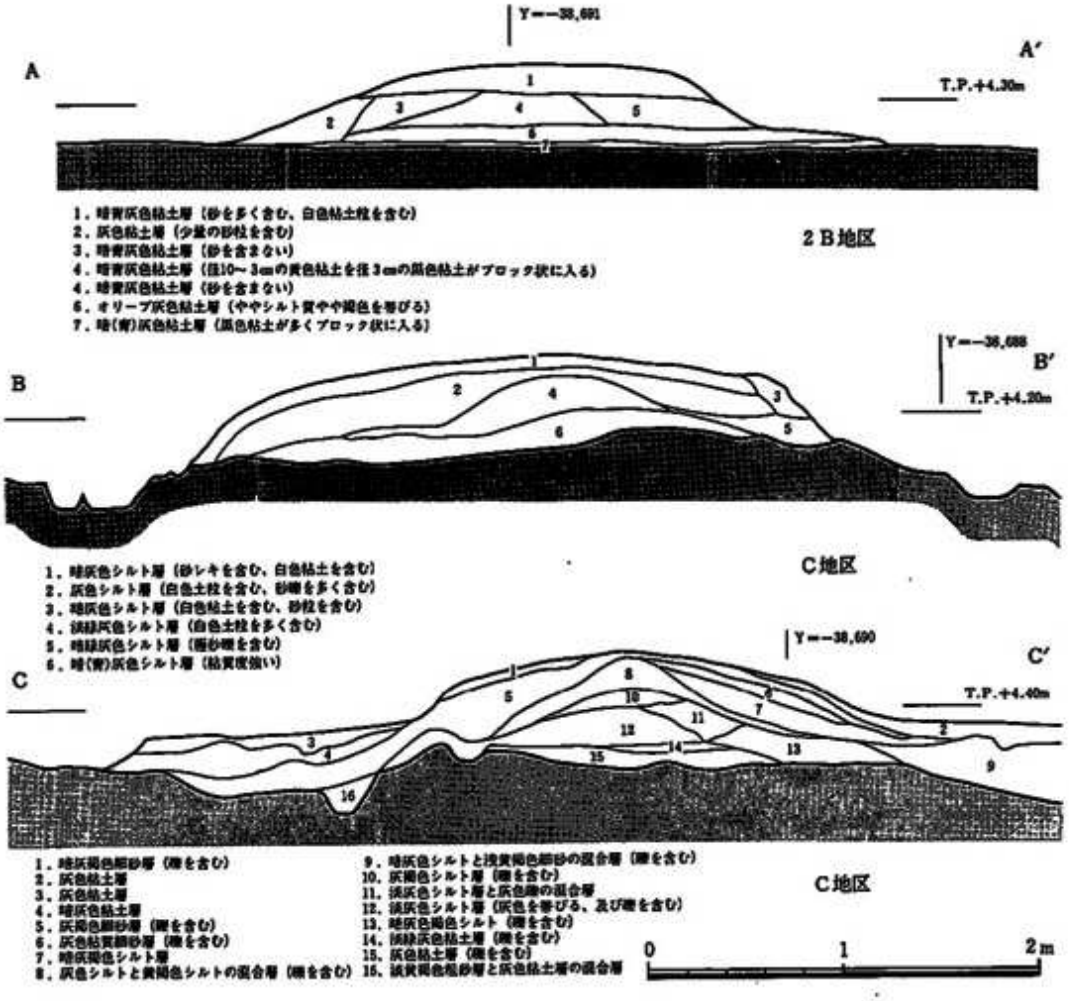
弥生時代後期の遺構面は4面を検出した。下層より第12遺構面（後期Ⅰ）、第11遺構面（後期Ⅱ）、第10遺構面（後期Ⅲ）、第9遺構面（後期Ⅳ）としたが、この時期の層位は複雑である。古墳時代前期の第Ⅹ層下、つまり第Ⅺ層から第Ⅵ層（T.P.+5.4m～T.P.+4m）までが、後期の層として捉えられ、シルトと砂、粘土の互層で、流水堆積層を成し、層厚は0.6～1.2mを測り、厚く堆積している。A地区からB地区北半にかけては安定した層位を示しているが、南半からC地区にかけては、複雑に堆積している。これは、下層の弥生時代中期自然河川5の砂の隆起と、D地区の自然河川内の砂がオーバーフローすることが大きな要因である。他の要因としては、この地区に小さな自然流路が数条形成されることもあげられる。

弥生時代後期と確定しうる遺構面としては、第Ⅵ層上面（後期Ⅰ）と第Ⅴ－3層上面（後期Ⅱ）であり、土器が出土している。第12遺構面では足跡群と、畦畔状遺構・自然流路・溝を検出し、第11遺構面では土器を伴うピット群と自然流路を検出した。第10遺構面では、足跡群と堤を有する溝を確認した。第9遺構面では、B地区南端部にのみ自然河川を検出した。

1．弥生時代後期Ⅰ　（付図　3）

第12遺構面とした遺構面で、第Ⅵ層の上面である。厚さ10～30cmの暗灰褐色粘土層をベース層としている。この層はA地区北端部では平坦な面を成すが、X＝－152,920からX＝－152,930にかけて、上昇して高くなり、南端で、浅い凹地面となる。B地区のX＝－152,970まではほぼ平坦な面を形成し、若干上昇してB地区の中央部X＝－152,980に至り、ほぼ平坦となる。X＝－153,060からC地区中央部にかけては、起伏を持ちながらやや高くなり、C地区南半にかけては、また平坦な面となる。A地区の北端部とB地区の最高所の差は0.6mを測り、C地区の最高所の差は0.8mを測る。こうした状況は、A地区の自然河川4・B地区の自然流路10・C地区の自然河川5など下層の影響によるものである。全域で足跡を検出した他、C地区で堤状の遺構を検出した。

ＳＡ12001（第20図）　B地区南端部（5B地区）からC地区北端部にかけて検出した堤状の遺構である。更に、調査区外へ延びる。主軸をほぼ南北方向におき、Y軸上、つまりY＝－38,690の線上にのる。自然流路6と約6m東に離れ、平行するかのようにして位置する。大きさは調査区内で全長47m、基底部幅約3.5～4m、上部幅1.5～2.5m、高さ40～60cmを測る。本遺構は土を盛り上げて造られたものである。土層観察により、大きく3層～4層に分けられる。下層は暗青灰色もしくは緑灰色のシルト層、中間層は、暗青灰色粘土層もしくは灰色シルト層で、白色粘土粒や砂礫を含む層である。上層では、暗青灰色粘土層もしくは暗灰色シルト層に、砂礫と白色粘土粒を含む層である。これらの層中には、下層の黒色粘土がブロック状に混入しており、3回に亘って、盛り上げられている。尚、土層観察ではC地区に於いて、本遺構の両側に小規模な溝を確認した。幅約30～50cm、深さ約15cmを測る。出土遺物としては、畦畔内より甕等の土器



第20図　ＳＡ12001断面図

が出土している。

足跡分布状況　足跡は、第XVI層の暗灰褐色粘土層のベースに踏み込んだもので、上層の砂層を除去すると検出できた。足跡は調査区のほぼ全域で確認したが、ＳＡ12001より北側に多く遺存しており、特にＡ地区では全面に認められた。足跡の分布状況を観察すると、先ずＡ地区では２Ａ地区に集中しており、Ｂ地区では１Ｂ地区に集中している。そして、分布密度は少ないが、Ｘ＝－152,990からＸ＝－153,010のＢ地区と４Ｂ地区に認められる。

自然流路６　Ｃ地区に於いて確認した流路で、非常に浅く、Ｃ地区の北端部では急に狭くなり、幅が一定していないので、溝とは区別した。ＳＡ12001の南側約６ｍ離れて位置する。ＳＡ12001とほぼ平行しており、主軸は南北方向におき、南から北へ流れている。全長は調査区内に於いて50.5ｍを測り、幅約３ｍ、深さ約30cmを測る。流路内には砂が堆積しているが、この砂は、遺構検出面を覆う砂と同じである。流路内と流路周辺に於いて足跡を検出した。尚、３Ｃ地区の西半部に於いても同一方向の、落ち込み状の遺構を検出したが、自然流路か、あるいは自然地形の

ものかは不明である。

2．弥生時代後期II（付図　4）

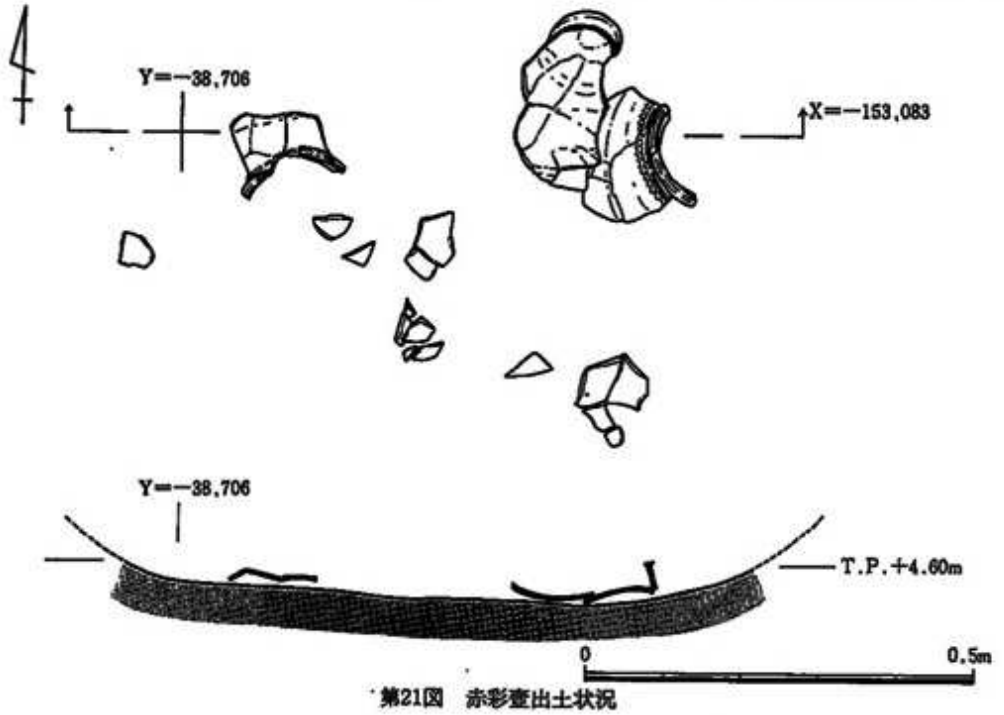
C地区の南端部に於いて、第XV－3層、青灰色シルト層の上面より土器を有するピット群と杭例を検出した。この遺構面を第11遺構面とし、下層の第XVI層上に堆積することから、後期IIの時期として、後期Iの遺構とは別に登録した。この第XV－3層はA地区とB地区に於いて継続し、それに伴って、自然流路と足跡が存在する。

落ち込み11001（第21図）　自然流路や足跡群の南約12m、ピット群の北約7mに位置する。非常に浅い落ち込み状遺構で、赤彩壺が検出された。本来は壺を埋置した土坑であったものであろう。

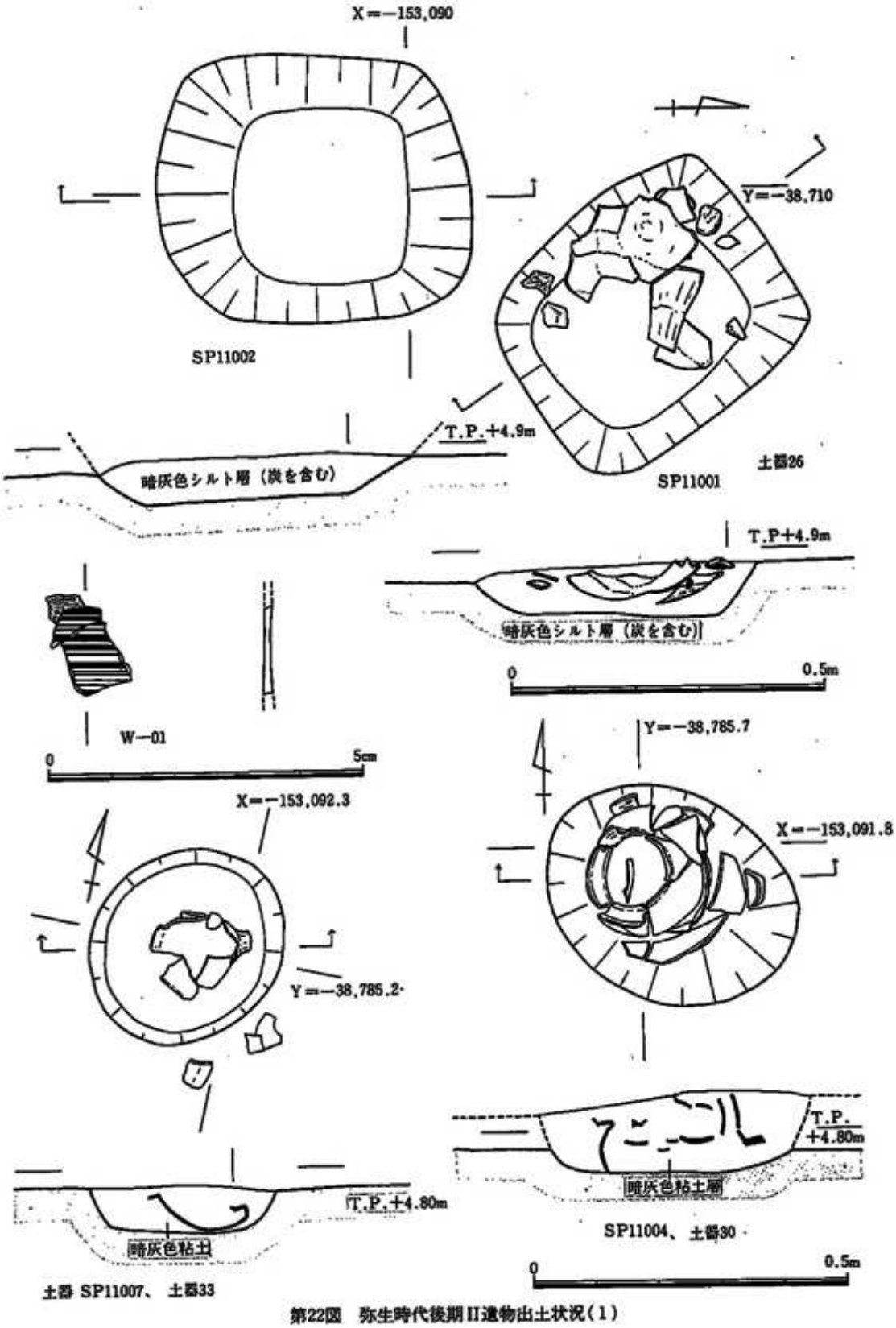
出土遺物　土器28（第24図　図版五三）は、外面に赤色顔料を塗布する台付の壺である。口縁端部を拡張する。端面に3条の凹線を、頸部に4条の凹線を、更にその下位に刺突文を施す。胴部上半に波状文を施す。口縁部はハケ目調整を、胴部下半にヘラ磨きを施す。内面は口縁部に横方向のハケ目調整を、体部にはヘラ削りを施す。胎土は他地域産である。

土器を有するピット群（第23図　図版六）　落ち込み11001の南約7.5～9mで検出されたピット群である。SP11001～SP11009で構成される。SP11002とSP11003を除いて、いずれも土器を有している。また側溝内でも甕1個体が検出されており、ピットが存在したものと思われる。ピットは平面形より2種類に分類出来る。方形のピットと、円形のピットで、前者はSP11001とSP11002、後者はSP11003～SP11009である。

ピット内の土器は、大半が甕であるが、SP11001では壺、SP11008では赤色顔料を塗布した



第21図　赤彩壺出土状況



第22図　弥生時代後期Ⅱ遺物出土状況（1）

高杯である。

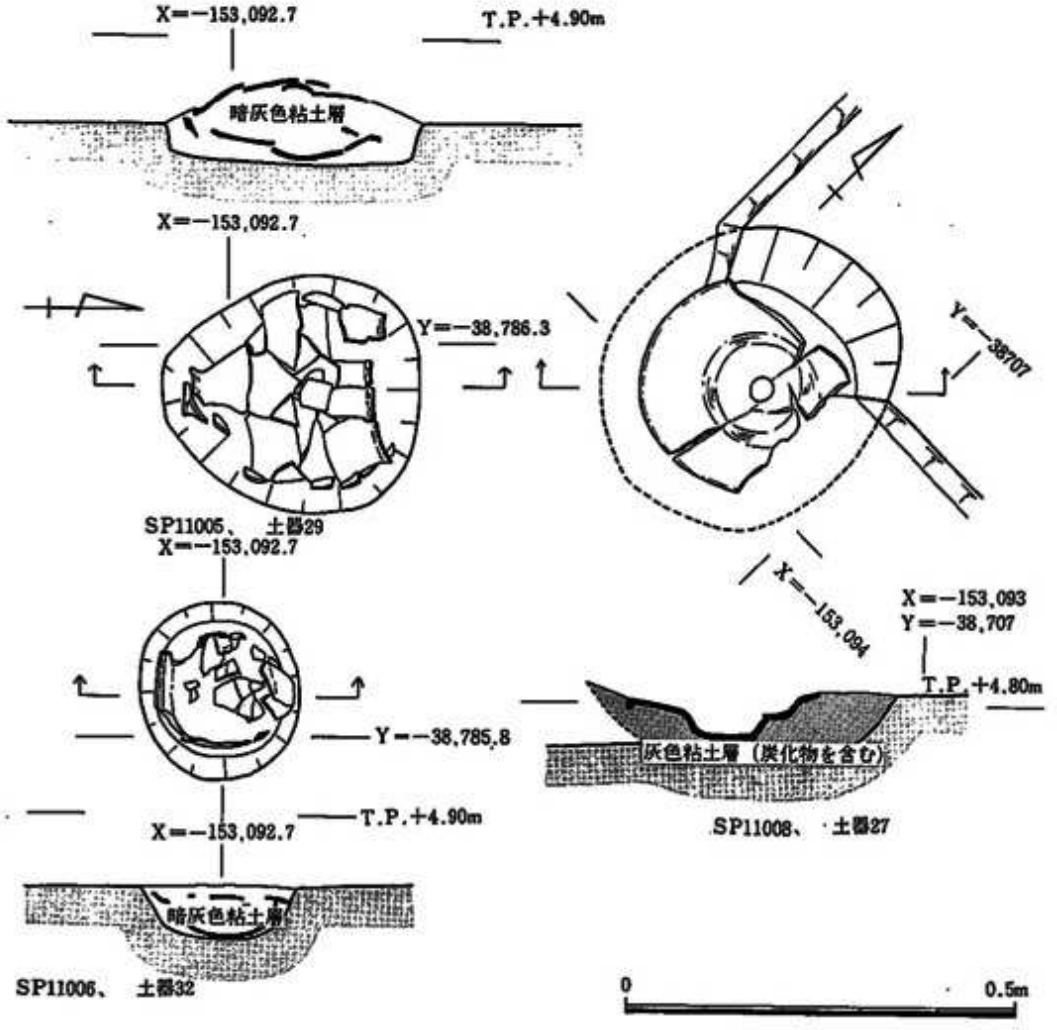
ＳＰ11001（第22図　図版六）　土器26を有するピットである。Ｃトレンチ西端、Ｘ＝－153,081.2に位置する。隅円方形を呈し、短辺39cm、長辺45cm、深さ５～10cmを測る。長軸Ｎ－45°－Ｗにおく。埋土は炭を含む暗灰色シルトである。土器の他、径約５cmの石と、赤色顔料を塗布した漆塗の木片が検出された。

土器26は口縁部を欠く壺である。胴部は球形を呈し、外面がヘラ磨き、内面は頸部に指頭押圧痕を残し、斜め方向のハケ目を施す。底部はヘラ削りが認められる。

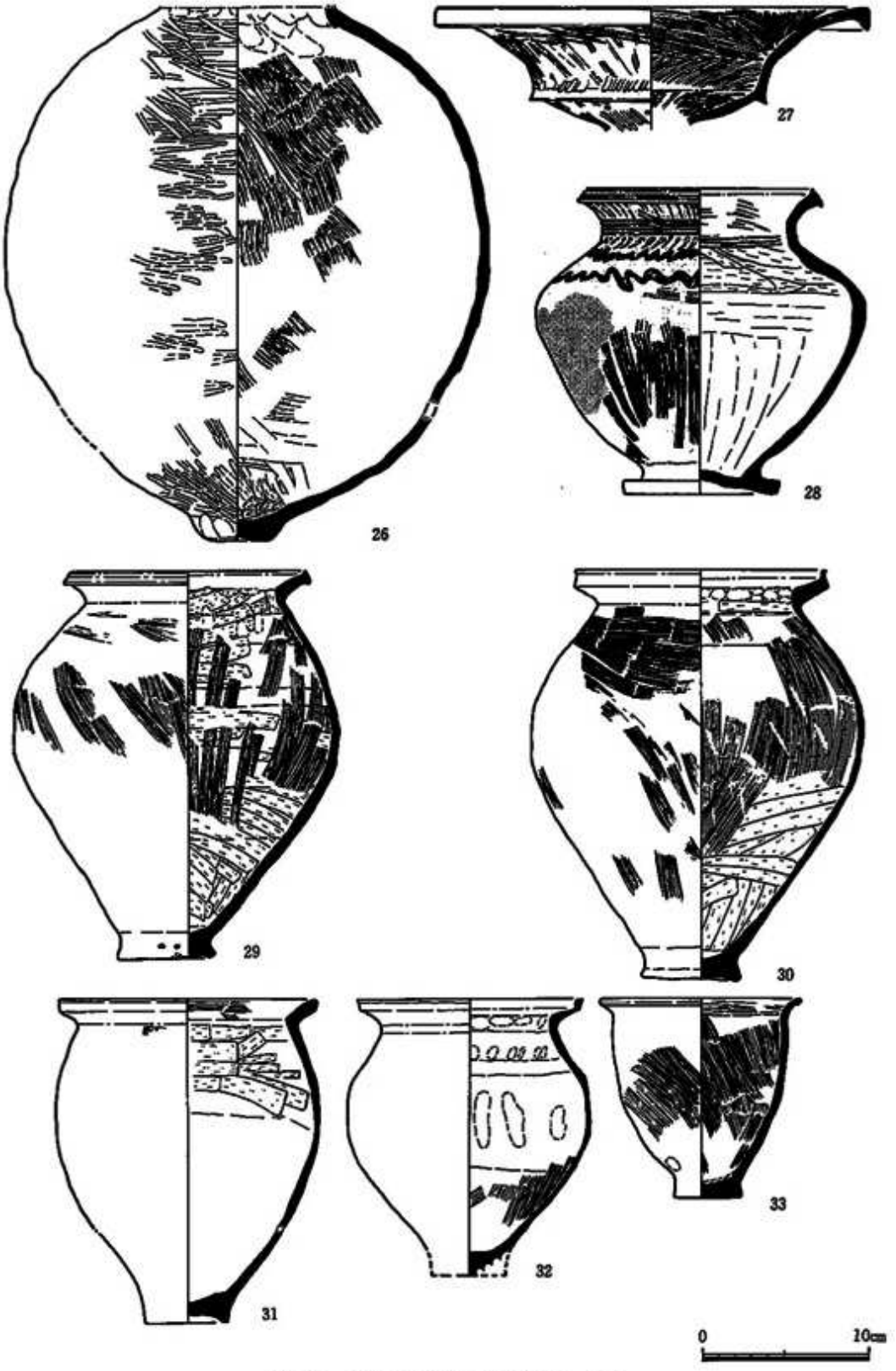
Ｗ１は、残存径1.4×0.9cmの木製品小片である。表面は黒漆の塗布後に赤色顔料を塗布している。細かい沈線が残されているので、ロクロを挽いた可能性がある。

ＳＰ11002（第22図　図版六）　ＳＰ11001の南側に近接する隅円方形のピットである。長辺50cm、短辺43cm、深さ約５cmを測る。埋土は暗灰色シルトである。長軸を南北方向に置く。

ＳＰ11003　ＳＰ11002の南東へ約3.5mに位置する楕円形のピットである。長径50cm、短径40cm、



第23図　弥生時代後期Ⅱ遺物出土状況（２）



第24図　C地区南半弥生時代後期ピット群

深さ4cmを測る。南北方向に主軸をおく。埋土は炭を含む暗灰色粘土で、遺物は検出されない。

ＳＰ11004（第22図　図版六）　ＳＰ11003の東側約1.3mに位置する楕円形のピットである。土器30を納める。長径42cm、短径30cm、深さ推定13cmを測り、主軸をＮ－45°－Ｅにおく。埋土は暗灰色粘土層である。土器30は甕で、口縁部を斜め上方に向けて埋置される。口縁部は「く」の字状に外反させ、端部が肥厚し内傾化しつつ、つまみ上げて直立させる。胴部最大径を上位に置き、体部下半は底部にかけて窄まる。底部は厚く、「ハ」の字状に開く。口縁部外面は、横ナデ、体部外面は、ハケ目による。底部は横ナデによる。内面は、ヘラ削りと細かいハケ目による。

ＳＰ11005（第23図　図版六）　ＳＰ11003の南東約1.2mに位置し、土器29を埋置するピットである。平面形は卵形を呈し、径約30cm、深さ約5cmを測る。主軸を南北方向におく。埋土は暗灰色粘土である。土器29は甕で口縁部を北に向け、寝かせ納める。口縁部は「く」の字状に外反し、肥厚する。口縁部は内傾し、上下に少し拡張する。口縁端部上位には、一条の退化した凹線を有し、端部中位にやや凹みを有する。胴部最大径は中位にあり、底部にかけて窄む。底部は厚く「ハ」の字状に開き、横方向より径2～3mmの孔を刺突する。口縁部は内外面とも横ナデ、体部の継目に指圧痕を残す。外面はハケ目を、底部には強い横ナデを施す。内面はヘラ削りの後にハケ目を施す。土器30と形態、技法上酷似し、口縁部の形態は土器28と酷似する。

ＳＰ11006（第23図　図版六）　ＳＰ11005の東側に隣接する円形のピットである。径約20cm、深さは6cmを測る。土器32を埋置する。埋土は暗灰色粘土層で、底面には炭が多く堆積する。土器32は甕で、口縁部を斜め上方向に向けて納められる。小型で器高17cmを測る。土器30を全体的に小さくした形態を持つ。口縁部も酷似するが、口縁端部をやや肥厚し、頂部に平坦な面を成し、やや受け口状となる。二次焼成を受けており、剥離が著しい。

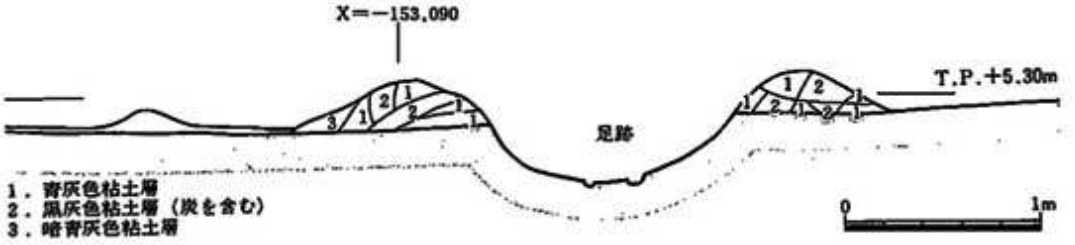
ＳＰ11007（第22図　図版六）　ＳＰ11004の南東約1mに位置する円形のピットである。径約30cm、深さ7cmを測る。埋土は暗灰色粘土である。土器33を検出した。土器33は小型の甕で、口縁部を南に向けて寝かせて納められる。器高12.2cmを測る。

ＳＰ11008（第23図）　ＳＰ11006の南西約1.5mに位置するピットである。径推定40cm、深さ8cmを測る。赤色顔料塗布の有孔高杯27を検出した。埋土は灰色粘土層で、炭化物を含む。土器27は口縁部を上にして納められ、脚部を欠く。杯底部面に孔が穿たれている。孔は3孔を一組にし、四方に配して∴に焼成前に穿たれる。1ヶ所は2個で計11孔である。口縁部は大きく斜め上方へ開き、端部を下垂する。杯部と底部の境をつまんで外へ拡げ、凸帯状にする。口縁部と、凸帯に赤色顔料を塗布する。調整は外面がハケ目の後ヘラ磨き、内面がヘラ磨きを施す。

ＳＰ11009　ＳＰ11006の南東約0.5mに位置し、円形を呈する。径約20cm、深さ5～9cmを測る。土器31を納める。土器31は、「く」の字に屈折した口縁部を持ち、口縁部端部面はほとんど拡張せずに終わる。胴部の最大径は中位にあり底部に向けて窄まり、底部外面は凹みを持つ。

杭列　Ｃ地区南端で杭跡を4ヶ所確認した。ピット群との関係が考えられる。

流路と足跡　Ｃ地区中央で灌漑用水路的機能が想定される流路と、密集する足跡を検出した。



第25図　ＳＤ10003断面図

３．弥生時代後期Ⅲ

第Ⅶ－１・２層の黒色有機質粘土層と青灰粘土層をベース面とした第10遺構面に当たる。遺物に乏しく時期設定の決め手に欠く。古墳時代前期ベース層となる厚い第Ⅸ層下に当たり、弥生時代後期の範疇にあると判断し、弥生時代後期Ⅲ遺構面とした。溝と溝に伴う堤、足跡を検出した。

ＳＤ10001　Ｃ地区中央から南東部にかけて走行する溝である。主軸を南北方向におき、幅0.6～1.6m、深さ20cmを測る。ＳＤ10002に後出する。

ＳＤ10002　Ｃ地区中央部に位置し、ＳＤ10001と交差する溝である。主軸を東西方向におき、幅約0.9～1.1m、深さ30cmを測る。ＳＤ10001に先行する。

ＳＤ10003　Ｃ地区南端に位置し、両肩部に堤を築く。堤は下層の青灰色粘土と炭を含む黒色有機質粘土を掘削して盛り上げている。堤の高さは24cm、基底部幅0.8～１mを測る。溝は幅２m、深さ54cmを測る。溝内より若干の足跡を確認した。主軸を北西－南東方向におく。

足跡分布状況　足跡は、Ｂ地区南端とＣ地区南半に於いて顕著に認められる。Ｃ地区の足跡は、溝の主軸方向に集中する。Ｂ地区では方向性を持った分布を示す。ＳＡ12001は、後期Ⅲの段階では完全に埋没するが、それ以後も、周囲の遺構面よりも高くなっており、自然地形なりにその役割を果たしていたと思われ、足跡はその北側に集中すると言える。

小　結

弥生時代後期の遺構は、後期Ⅰ：堤・自然流路・足跡、後期Ⅱ：堤・自然流路・土器ピット、後期Ⅲ：溝・堤・足跡、後期Ⅳ：自然河川である。これらの遺構の中でＳＡ12001は特筆すべきで、（その２）調査区の弥生時代後期河川の両側に伴う堤の一つである。その距離は約50～60mを測る。堤の北側では多くの足跡を検出した。Ａ地区の足跡は、一定の規則性が窺われ、水田の可能性がある。弥生時代後期ⅡではＣ地区の南端で土器を伴うピット群を検出した。堤、あるいは水田の祭祀に伴うものであろう。　（小野）

第26図　弥生時代後期包含層出土遺物

第４節　古墳時代前期の遺構と遺物

古墳時代前期の遺構は、第Ⅸ層上面より第Ⅺ層上面までの間で検出される。Ｔ．Ｐ．＋5.6ｍ～６ｍにあたる。この間において検出される古墳時代前期の遺構面は、最大６面にも及ぶ。これら６面の遺構面は、下層より順に、古墳時代前期Ⅰ～Ⅵ遺構面と呼称する。遺構面番号は、古墳時代前期に相当する遺構面全体を第８遺構面とし、細分された各遺構面を、上面より順に、第８ａ遺構面～第８ｆ遺構面とした。

第Ｘ層は、層厚30～40cmを測る。全体として灰黒色を呈した砂質土であるが、層厚0.5cm前後の灰白色微砂、黄白色シルトを間層として、部分的に３～４層に分層される。間層を介し分層される第Ｘ層中の各層上面には各々異なった遺構が存在し、複雑な切り合い関係を示している。しかし、第Ｘ層の層厚も一定せず、間層に当たる灰白色微砂・黄白色シルトも部分的にしか存在しないため、調査区全体で各遺構面を分離することは極めて困難である。こうした状況から、第Ｘ層上面から第Ⅺ層上面の間では、地区によっては複数の時期の遺構が同一の遺構面で検出される場合があり、現地調査においてはこれらを分離し得ていない。従って、古墳時代前期Ⅰ～Ⅳ遺構面は、トレンチ部で得られた調査結果と各遺構面の分離可能な地区での調査結果を基本とし、検出された遺構の切り合い関係を再整理することによって、各遺構の帰属する遺構面を示したものである。

以下、古墳時代前期Ⅰ～Ⅵ遺構面について、その概略を述べる。

古墳時代前期Ⅰ遺構面（第８ｆ遺構面）は第Ⅺ層の灰色シルト層、淡黄灰色砂層上面をベース面とする。Ａ地区及びＢ地区北半においては竪穴式住居が存在し、不定方向の溝も若干認められる。Ｂ地区南半からＣ地区にかけては遺構は希薄であるが、Ｃ地区南半において土坑、溝が存在する。

古墳時代前期Ⅱ遺構面（第８ｅ遺構面）は第Ｘ層下半をベースとする。一定の方向性をもつ数条単位の小溝群が、数時期重複して存在する。また方向性を一定にしない溝も少数存在する。

古墳時代前期Ⅲ遺構面（第８ｄ遺構面）は第Ｘ層中層をベース層とする。一定の方向性をもつ数条単位の小溝群が、数時期重複して存在する。また、これより若干後出する土坑などがＡ・Ｂ地区で認められる。Ｂ地区南端の自然堤防状地形以南では遺構は希薄となるが、Ｃ地区南半には、再び小溝群が存在する。

古墳時代前期Ⅳ遺構面（第８ｃ遺構面）は、古墳時代前期Ⅲ遺構面とほぼ同一面をベース面とする。部分的に古墳時代前期Ⅲ遺構面を整地、削平して形成される。Ａ地区では遺構は希薄であるが、土器集積や溝が認められる。また、Ｂ・Ｃ地区において周溝墓４基が築かれ、Ｃ地区南半（３Ｃ、４Ｃトレンチ）には遺物を多量に出土する溝、落ち込みが存在する。

古墳時代前期Ⅴ遺構面（第８ｂ遺構面）は第Ｘ層上面に当たる。Ａ・Ｃ地区では遺構は希薄である。Ｂ地区では周溝墓の周溝がほぼ埋没した段階に当たり、１号墓において土器集積が認められ

る他、２号墓において、マウンドの一部を削平する土坑が形成される。

古墳時代前期Ⅵ遺構面（第８ａ遺構面）は第Ⅸ層上面に当たる。Ｂ地区北半は灰白色粘土が薄く堆積しており、湿地化したものと考えられる。Ｂ地区南端では自然堤防状の微高地上にピット群が形成される。Ａ・Ｃ地区では遺構は存在しない。

１．古墳時代前期Ⅰ（付図　６）

基本的には第Ⅺ層上面に当たる。第Ⅹ層に当たる灰黒色砂質土層を総て除去した段階で検出される遺構群であり、第Ⅹ層中で検出される遺構群の内、最下層に当たるものである。

Ａ地区では、住居10棟と多数のピット、それらに先行する溝などが検出された。住居は、３時期以上の重複が認められ、集落内の居住域としてめまぐるしく展開した状況が窺われる。また、住居として確認されたもの以外にも多数のピットが存在し、床面まで削平された住居や倉庫などの建物がさらに存在した可能性も考えられる。こうした状況は、久宝寺遺跡南地区より本調査区にかけてこの時期の集落の中心が存在したことを示している。検出された住居には１辺が６～７ｍの規模のものと３～４ｍの規模のものがあり、規模や方向性の異なるものが混在する。

Ｂ地区北半では、大きく分けて３時期にわたる遺構群が複雑な切り合い関係を示して存在する。これらの遺構群はＡ地区より広がりをみせるものと思われ、住居３棟が検出されている。３時期の遺構は、住居及びピット群と、それに先行する２時期の不定方向の溝や土坑で構成される。

Ｂ地区中央部以南では、遺構は急激に希薄となり住居も存在しない。

Ｂ地区中央部付近では、土坑１基と小規模な土器集積が認められるのみである（３Ｂトレンチ）。Ｂ地区南半では遺構は皆無である。

Ｃ地区北半においても遺物は希薄であるが、土坑２基が検出された。Ｃ地区南半は後世の攪乱によって不明な点が多いが、残存状況の良好な３Ｃ・４Ｃトレンチでは多量の土器を出土する溝や土坑が検出された。

全体的には、Ａ地区からＢ地区にかけて調査区の北半が久宝寺遺跡より続く居住域の南縁に当たると見られ、それより数十メートルの空白地を経て、集落の外縁部に土器などの遺物を多量に伴うやや性格の異なる遺構群が存在するものと考えられる。（服部）

（１）　Ａ地区

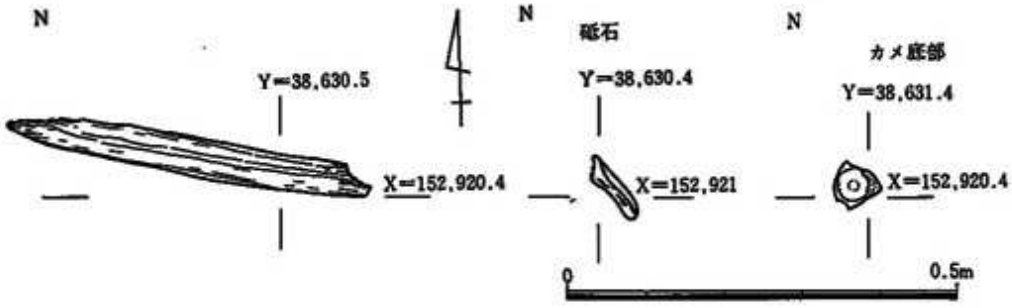
竪穴式住居10棟と、それに先行する２条の溝等を検出した。

ＳＤ8386・8387　１Ａ地区、Ａ地区に於いて溝を検出した。この２条の溝は、竪穴式住居よりも以前に掘削されたと考えられる溝である。２条の溝は、北北西－南南東と、同一方向に主軸をおき、溝の幅、深さとも類似する。溝の幅はＳＤ8386が30～40cm、ＳＤ8387が30～60cmで、深さはＳＤ8386が７cm、ＳＤ8387が５cmを測る。埋土は暗灰色シルトである。

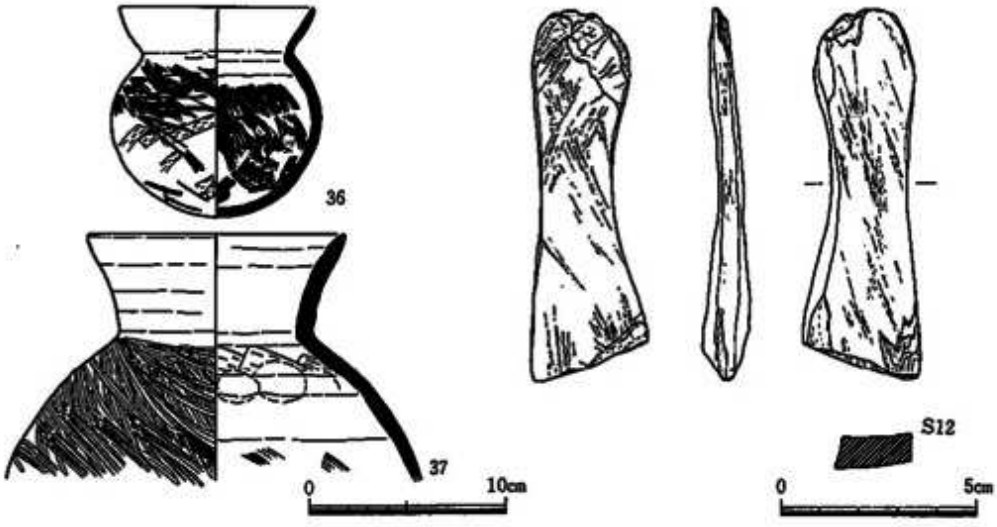
１号住居（第27・29・30図　図版一一）　２Ａ地区の北半部に位置し、２号住居より東へ約４ｍ離れて位置する。本住居は７号住居や８号住居と重なり合っている為に、ピットの関係が複雑なものとなっている。住居は平面形が隅円長方形を呈し、長軸を東北東－西南西に置く竪穴式住

居である。大きさは、4.8m×4.1m、深さ20cm（床面まで）を測る。住居内では、炉、多くの柱穴、壁溝を検出した。壁は垂直に掘り下げ、その直下に溝を巡らす。溝は、断面がU字形を呈し、幅35cm、深さ8cmを測る。壁溝内では壁板材の痕跡を見出せなかった。炉は、P25がそれに当たる。住居のほぼ中央に位置し、円形を呈し、長径47cm、短径41cm、深さ15cmを測る。炉内から、炭化物を多く検出した。住居の重複より見極めるのは困難であるが、P12、P16、P38、P42の4ヶ所が主柱と思われる。柱間距離は、P12とP16、P38とP42が各々1.9m、P12とP38、P17とP42が各々1.65mを測る。P12－P16、P38－P42は、壁から1.15m～1.25m離れ、更にP12－P38、P17－P42は壁から1.58m離れている。壁溝際にはP1、P3、P4、P9、P19、P47、P32の小穴が存在する。これらのピットも、何等かの機能を果たしていたものと推測される。更に住居外のP65、P20、SP8249、SP8250、SP8251、SP8252、SP8253、P56、P64も付随建造物と考えられる。

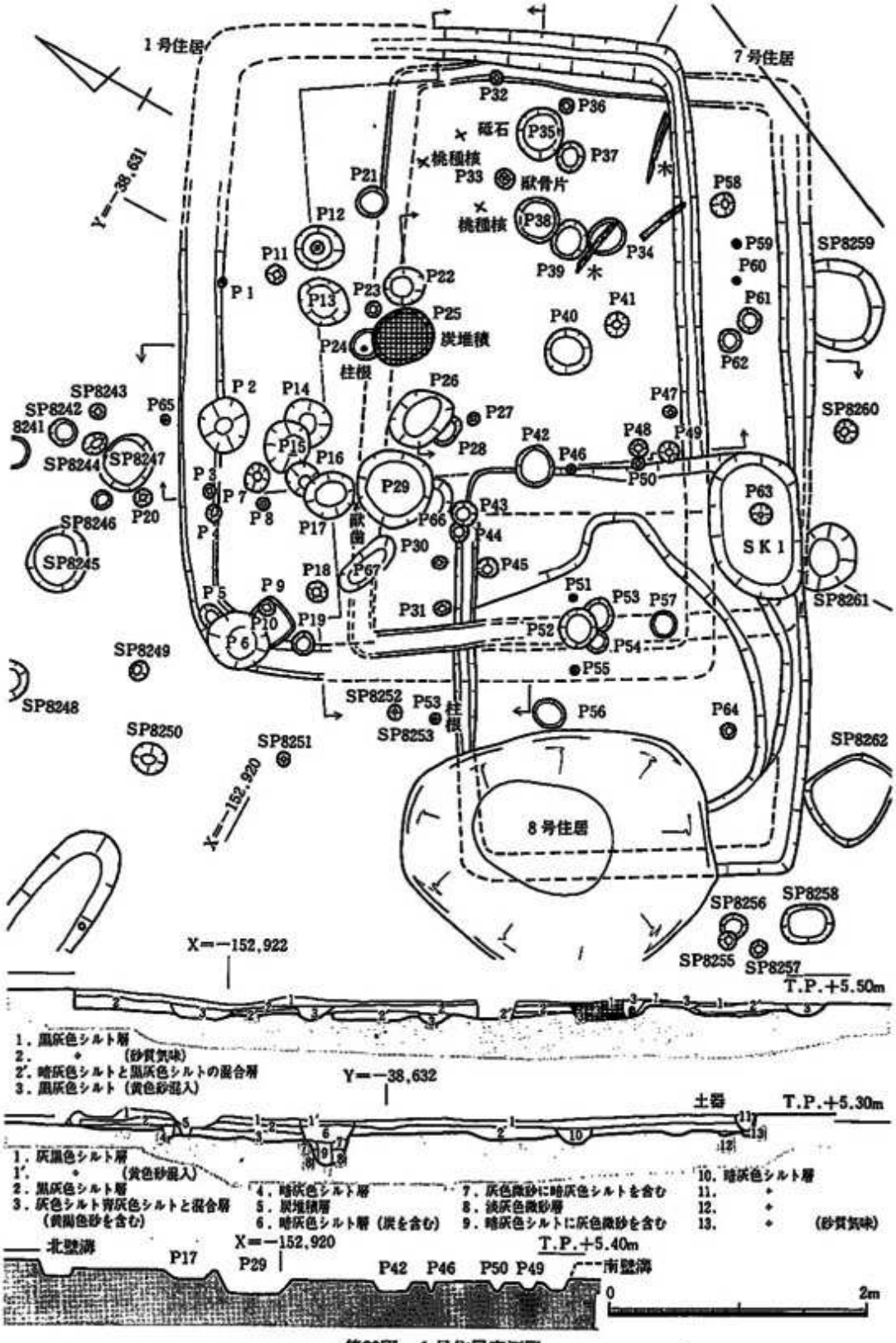
出土遺物としては、土器、砥石、桃の種核、骨片、獣骨片、獣の歯、板材を検出した。特に板材は、東隅に於いて出土した。板材は幅、長さともほぼ同じで、45～50cmを測る。



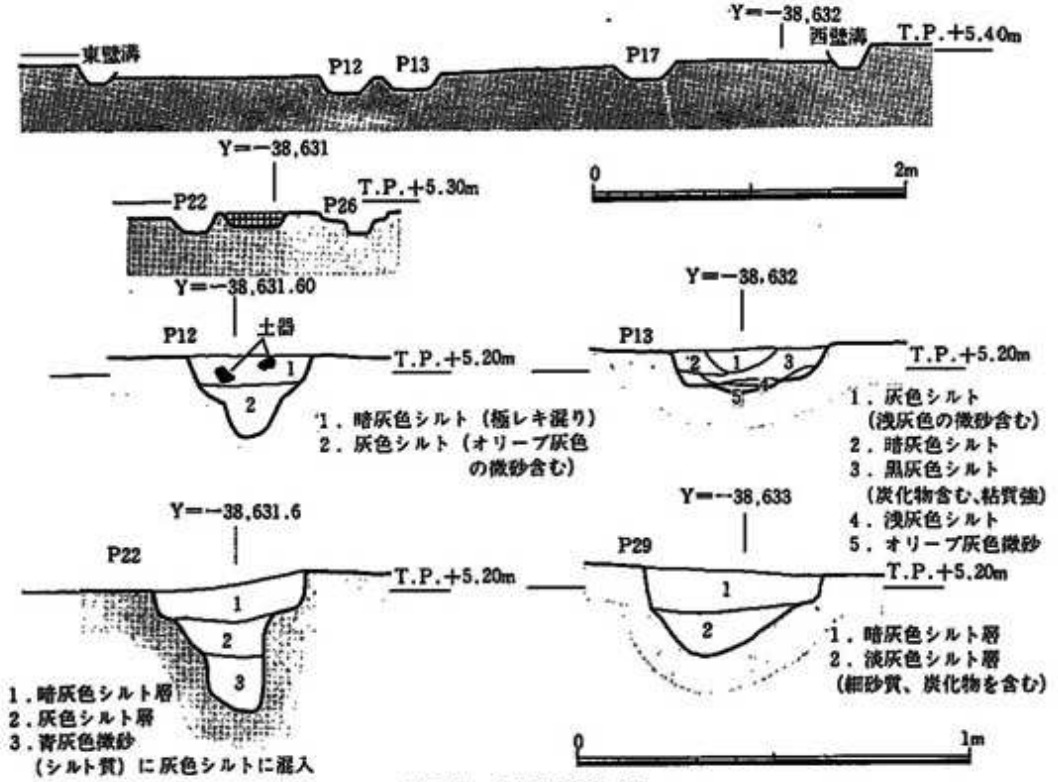
第27図　1号住居遺物出土状況



第28図　1号住居実測図



第29図　1号住居実測図



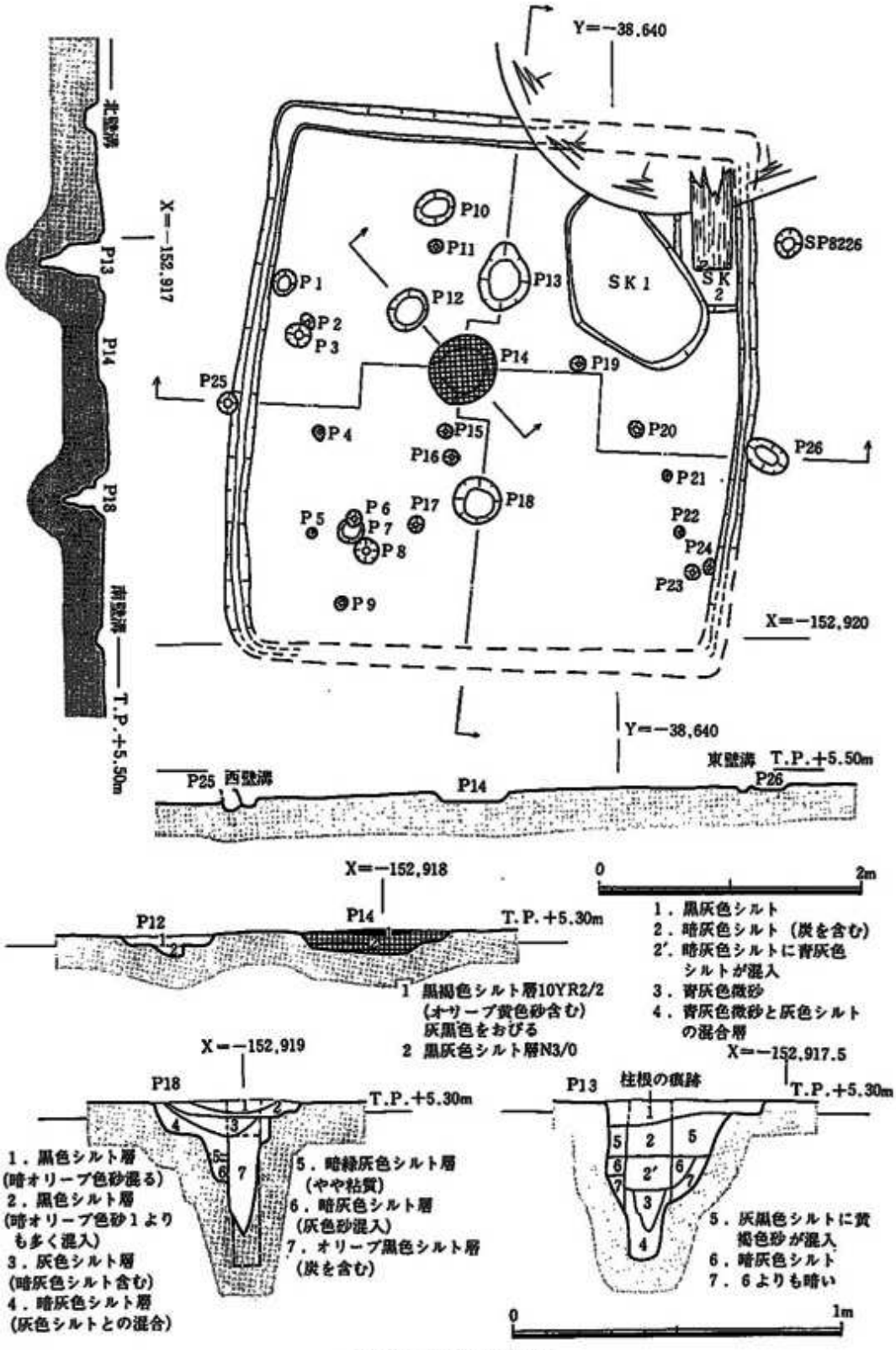
第30図　1号住居断面図

出土遺物（第28図　図版五四）

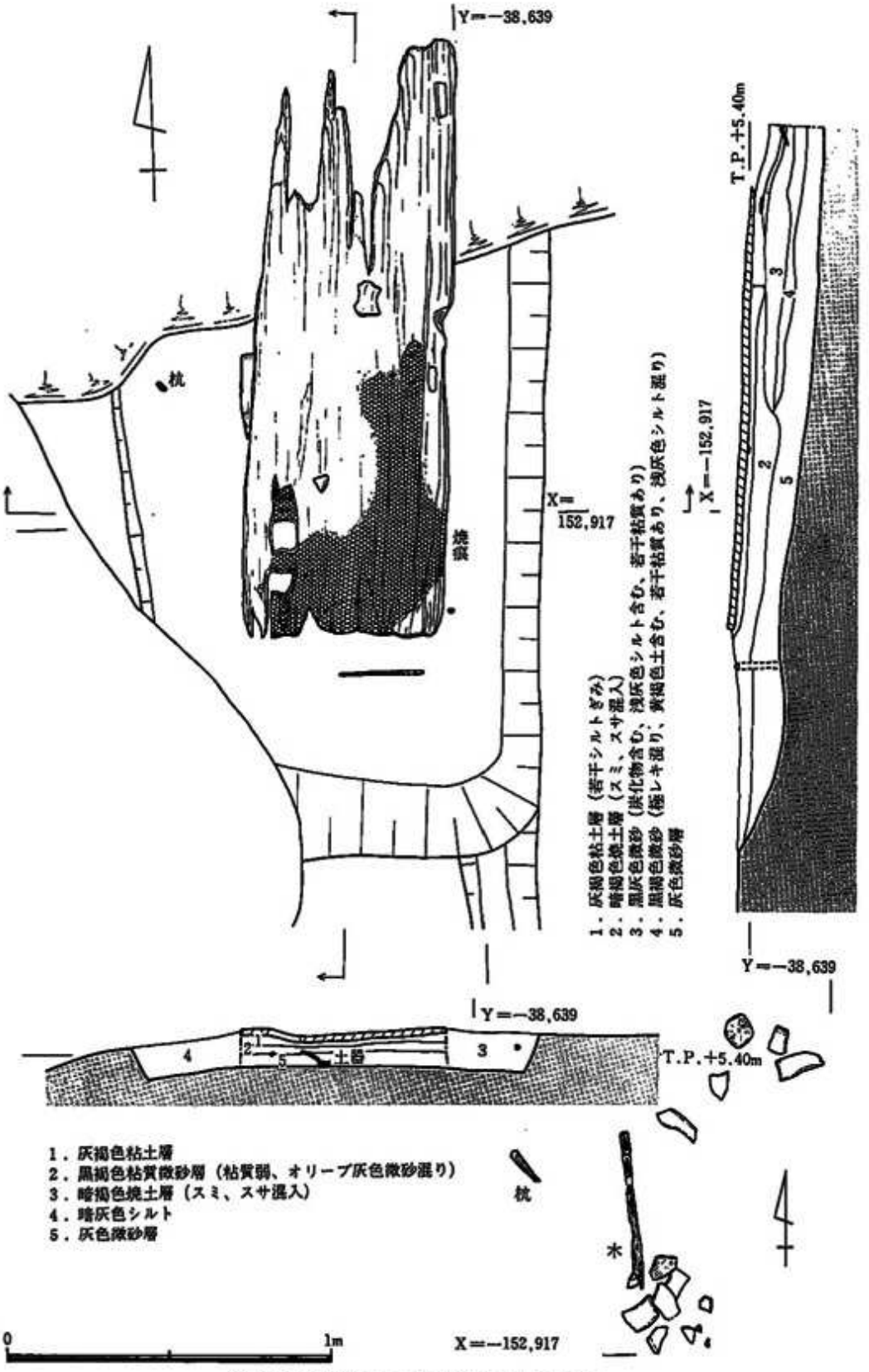
土器36は、口縁部は横ナデ、体部外面は上半がヘラ磨き、下半がヘラ削りによる。内面は強いハケ状のナデを施す。土器37は、壺である。口縁部は横ナデにより、体部外面は縦方向ヘラ磨きを施す。内面は、上半がヘラ削り、下半がハケ目を施す。S11は、砂岩質の砥石である。長さ9.3cm、幅3cm、厚さ1.2cmを測る。両面及び両側面に使用痕跡がある。

2号住居（第31・32図　図版一二）　A地区北端、1号住居の西約4m、3・4住居の北約2.5mに位置する隅円長方形を呈する遺構で、住居と考えられる。長軸はN−20°−Eにおき、他の住居とはその方向を異にする。長辺4.2m、短辺3.95mを測る。住居内に於いては壁溝、炉、柱穴、SK1、板状木製品を伴うSK2を検出した。壁溝は断面U字形で四周に巡る。幅13〜23cm、深さ8cmを測る。壁板材の痕跡はない。炉は、住居の中心に位置する。平面形は円形を呈し、炉内では炭が堆積していた。柱穴は、この炉を挾む様にして南北にP13、P18があり、P13と炉の距離は0.7mを測り、P18と炉の距離は1mを測る。主柱穴として考えられるものはP13とP18で2本柱[註1]である。他に小穴があるが、深くてしっかりした柱穴はこの2ヶ所である。柱穴は東西壁溝より1.8〜1.9m離れ、南北壁溝から1.15m離れている。他の小穴も、何等かの機能を果たしていた柱穴と思われる。また、住居外にP25、P26が在り、このピットも柱穴として機能を有していたと考えられる。更にSP8185、SP8190、SP8227、SP8233も壁溝より約1.2m離れているが、このピットも、2号住居と有機的な関係があったと思われる。

SK2内板材（第32図　図版一二）　2号住居の北東隅に長方形の土坑が在り、土坑内より板



第31図　2号住居実測図



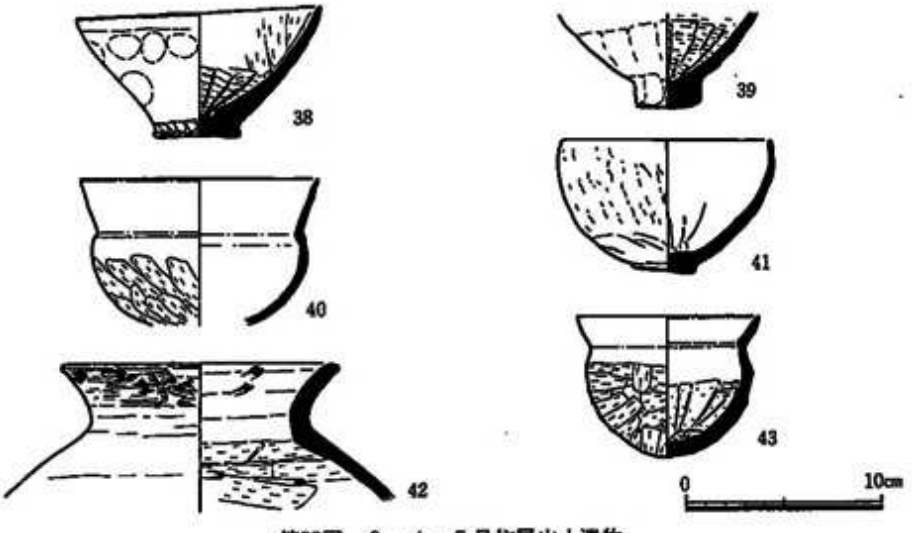
第32図　2号住居ＳＫ２内板状木製品出土状況

材を検出した。土坑は、北側を一部壊されているものの、現存長1.95m（推定3.25m）、幅1.35m、深さ12～20cmを測る。板材の長さは1.85m、幅0.65m、厚さ２～３cmを測る。材はスギの材を用い、縦木取りである。板の一端に４つの方形の穴を穿つ。長辺に長方形の穴を、小口部に方形の穴を穿っている。表面には小口部に焼けやた痕跡がある。板材の上と、直下に十数片の土器が出土した。

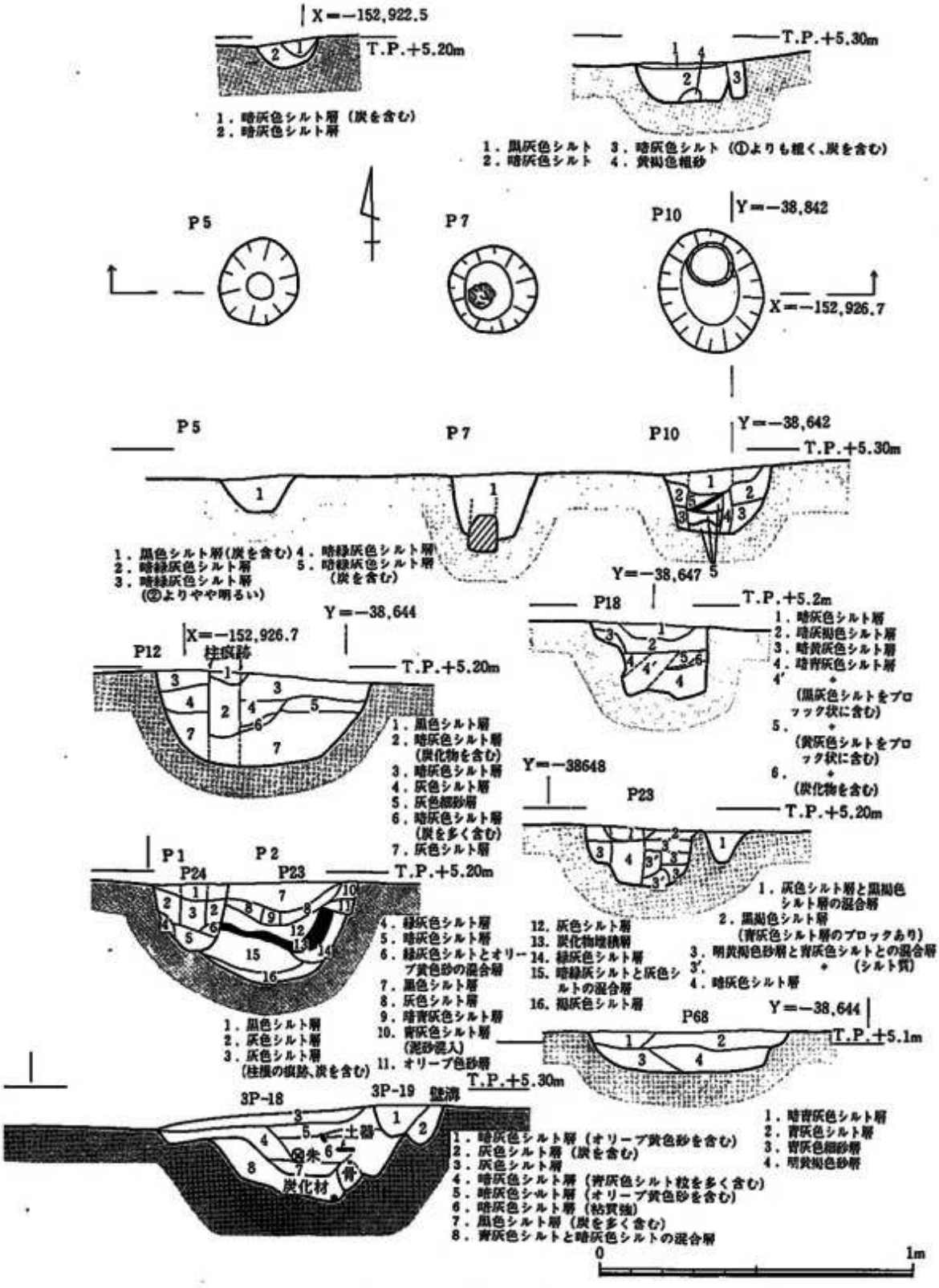
本遺構は調査当初、土坑と板材、更に小口部で、板材から10cmほど離れて木片が出土したので、木棺墓を想定した。しかし、調査を進めるに従って積極的な根拠を見出せる資料は得られなかった。先ず、土坑の底部に板材はない（ただし、木蓋土壙であればそうではない）。また、この板材は転用材である。板材の下の土は黒褐色あるいは黒灰色のシルト等の土で炭が多く混入している。周囲には、土壙墓らしき遺構は存在しないことから、木棺墓とはせずに、この遺構・遺物は、２号住居に伴う、何等かの施設ではなかったかと考えられる。

３号・４号住居（第34・35・36図　図版一三）　Ｃ地区の中央部に位置し、２号住居の南側へ約２ｍ離れて位置し、重複して存在する。３号住居は４号住居によって切られている。いずれも隅円方形の竪穴式住居と考えられ、多数のピットを検出した。

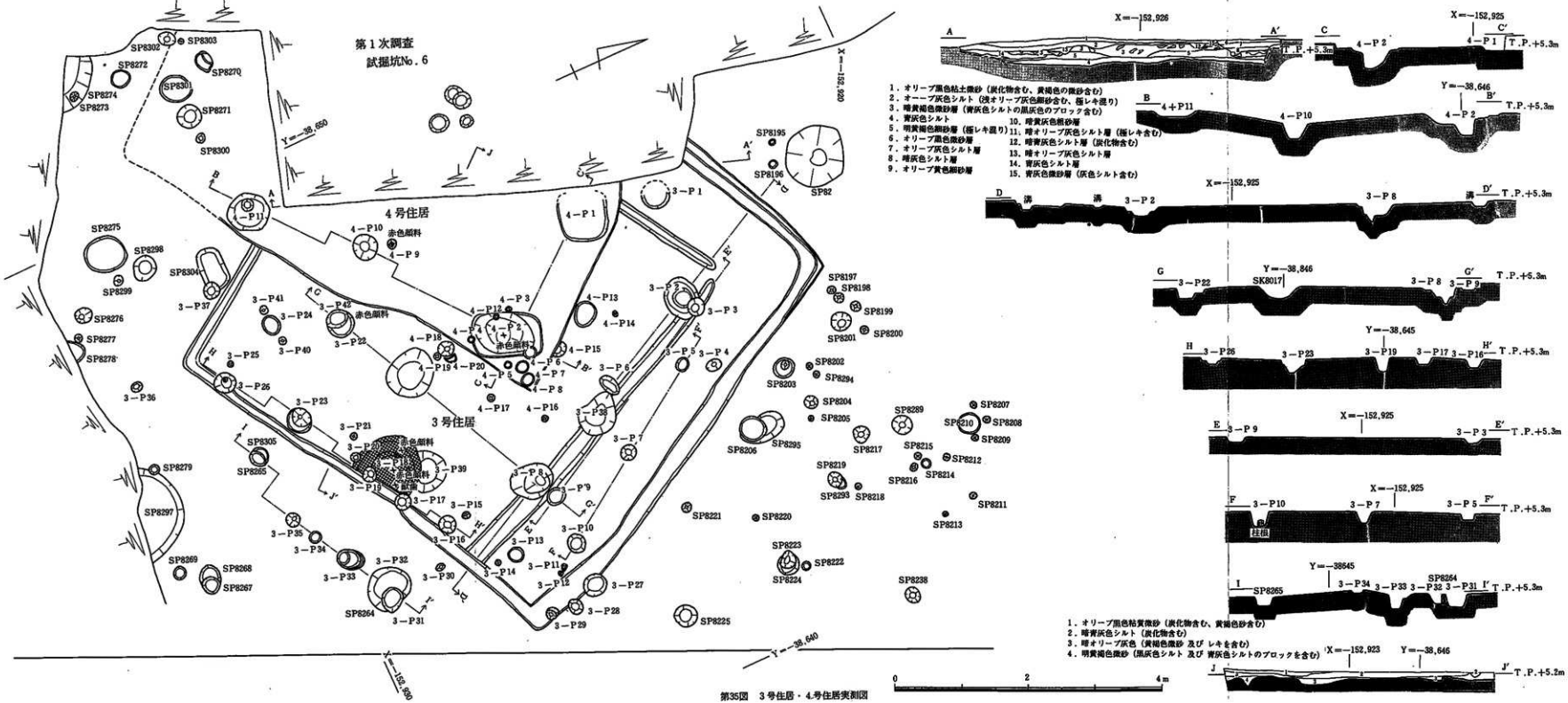
３号住居は、西側を第１次調査の試掘坑と、４号住居によって壊されている。一辺約7.2ｍを測る。長軸を北東－南西方向におく４本柱の竪穴式住居である。１号住居、７・８号住居と同一方向を示す。壁溝は四周に巡らし、幅40cm、深さ８cmを測る。尚、北側壁溝と東側壁溝の内側に沿って別の溝があり、二重となる。更に壁溝の内側１ｍの位置に、幅40cm、深さ５cmの溝が設けられている。この溝の内外で床面のレベルが異なり、内側が若干低くなる。高い所は、所謂、ベッド状遺構的である。炉は、南側壁溝際で検出された。半円形を呈し、径約90cm、深さ30cmを測り、段状に掘り込まれる。炉内から、炭・炭化材を検出し、骨片、赤色顔料も認められた。主柱と考えられるものは、３－Ｐ２・３－Ｐ８・３－Ｐ22である。柱間距離は3.5～3.7ｍを測る。



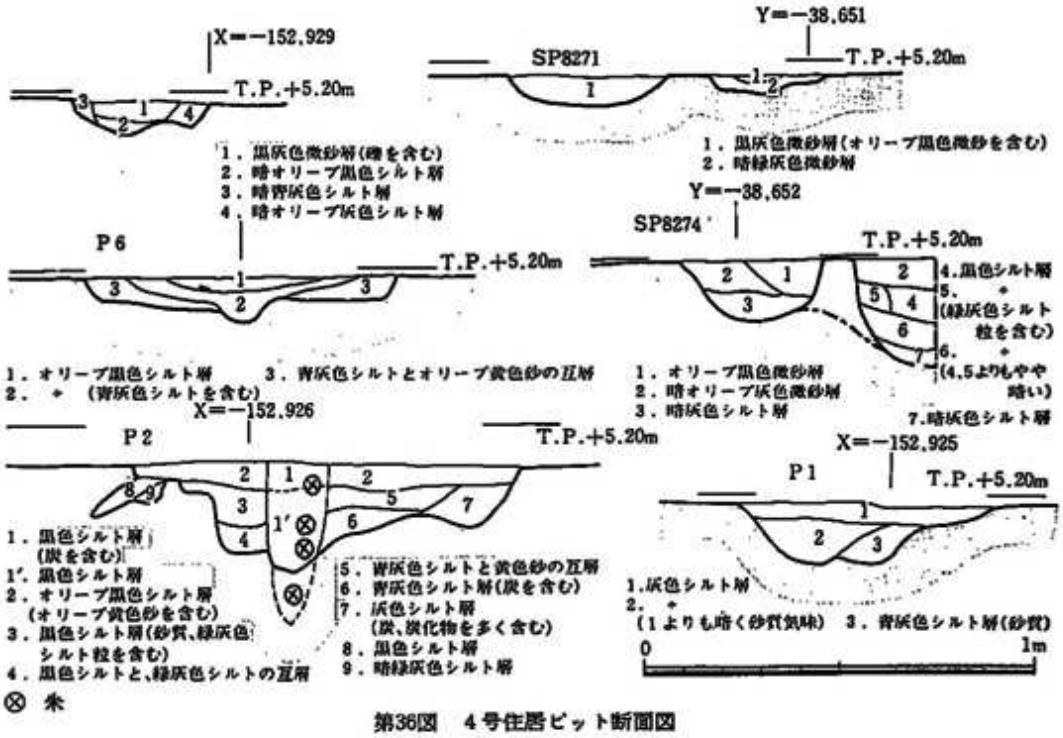
第33図　３・４・５号住居出土遺物



第34図　3号住居ピット断面図



第35図　3号住居・4号住居実測図



第36図　4号住居ピット断面図

主柱には、3－P2の北側に3－P3、3－P8の北側に3－P9、3－P22の南側に3－P42のピットが各々存在する。尚、第1次調査試掘坑No. 6で検出されたピット4ケ所は、本調査の事実と合致し柱材の抜き取り痕と思われる。

これらの柱穴以外にも、住居に伴う小柱穴があり、住居内壁溝際に存在するものと、住居外炉跡南側に存在するものに分類される。壁溝際に存在するものの柱間距離は、1.2～1.5mを測り、計7ヶ所を数える。

炉跡南側に存在するピット群は、3－P30・SP8265・3－P31・SP8264・3－P32・3－P33・3－P34・3－P35で3号住居に付随する施設と考えられる。これらのピットは、住居址内南壁溝際のピットに各々対応し、南辺に平行して直線的に並び、方形に張り出す区画のように配置される。SP8198・8203・8206・8221も本住居に付随する可能性が考えられる。

4号住居（第36図　図一三版）　3号住居に後出し、重複して造られる。方向はやや異なる。方形の竪穴式住居で、1辺約7m、深さ20cmを測り、3号住居とほぼ同規模と考えられる。壁溝は検出されなかった。炉も不明である。柱穴は4－P1・4－P2・4－P10・4－P11・SP8277・SP8270がある。第一次調査ではSK04と呼ばれる4－P2と同一方向を示す遺構が在り、本遺構との関連が考えられる。又、3号住居と同様、住居外に付随する柱穴が有り、4－P14・4－P13・4－P15・4－P16・4－P17・4－P18・4－P19・4－P20・SP8272・SP8301・SP8302・SP8303が、4号住居を囲む様に存在する。尚、4－P2は、柱穴内より赤色顔料が検出されたことや、周囲に小穴が存在することから、特殊な柱穴と思われる。

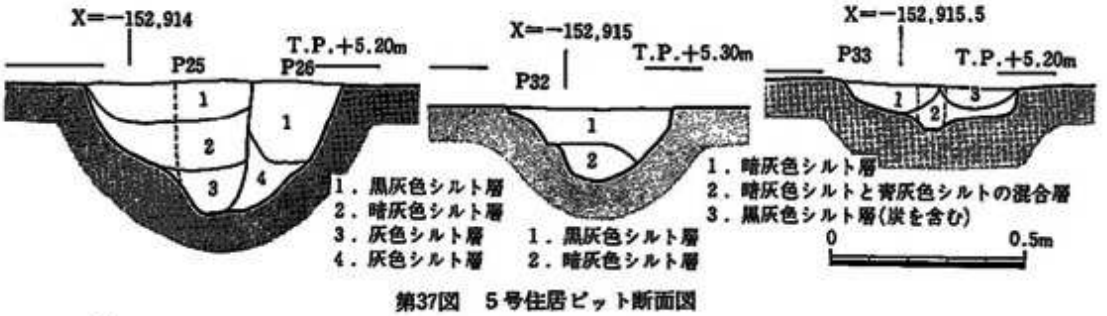
註1．２本柱の住居址は城山遺跡、竪穴住居３の例があり、弥生時代後期である。（上林史郎「大阪市平野区城山遺跡における弥生中・後期の集落」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』1984．７）。また福岡県稗田遺跡後・Ⅱ・15号住居とも酷似する（下稗田遺跡調査指導委員会『豊前下稗田遺跡』1985．３）。

５号住居（第38図　図版一二）　１Ａ地区に位置し、３号住居とは北西約8.5m離れ、２号住居とは西へ約8.5m離れて位置する。平面形が方形を呈する竪穴式住居である。住居内より壁溝、柱穴、炉を確認した。大きさは一部調査外の為に不明であるが、推定、5.5m×5.5mを測り、深さは20cmを測る。壁溝を四周に巡らす。幅20cm、深さ５cmを測る。炉は中央に位置し、ピットは平面形が円形を呈する。炉の大きさは径90cm、深さ10cmを測る。柱穴は、他の住居と同様に住居内より多数検出した。主柱となるのはＰ４、Ｐ９、Ｐ25で、もう１つは溝によって壊されているが、本来４本柱であったものと考えられる。Ｐ４とＰ９の柱間距離は2.3m、Ｐ９とＰ25の距離は３mを測る。本住居も他の住居の様に、主柱とは別に付随する柱穴がある。例えば、Ｐ７、Ｐ12、Ｐ21、Ｐ17である。そして主柱の外にＰ５、Ｐ６、Ｐ10、Ｐ13、Ｐ27が存在する。Ｐ１もこれらと同じ機能を有していた柱穴と思われる。そして、更に壁溝に沿って並ぶ柱穴がある。この柱穴は２種類ある。この事は３・４号住居に於いて確認したことである。１つは径10～20cmのもの、もう１つは30～50cmのものである。これらのピットが東側と南側に本住居を「コ」の字形に囲むようにして存在している。尚、本住居の西端に、Ｐ35に付随して２個の小穴がある。４号住居の４－Ｐ２と類似する。住居内の出土遺物は、土器以外に土製の玉、桃の種核が埋土より検出された。

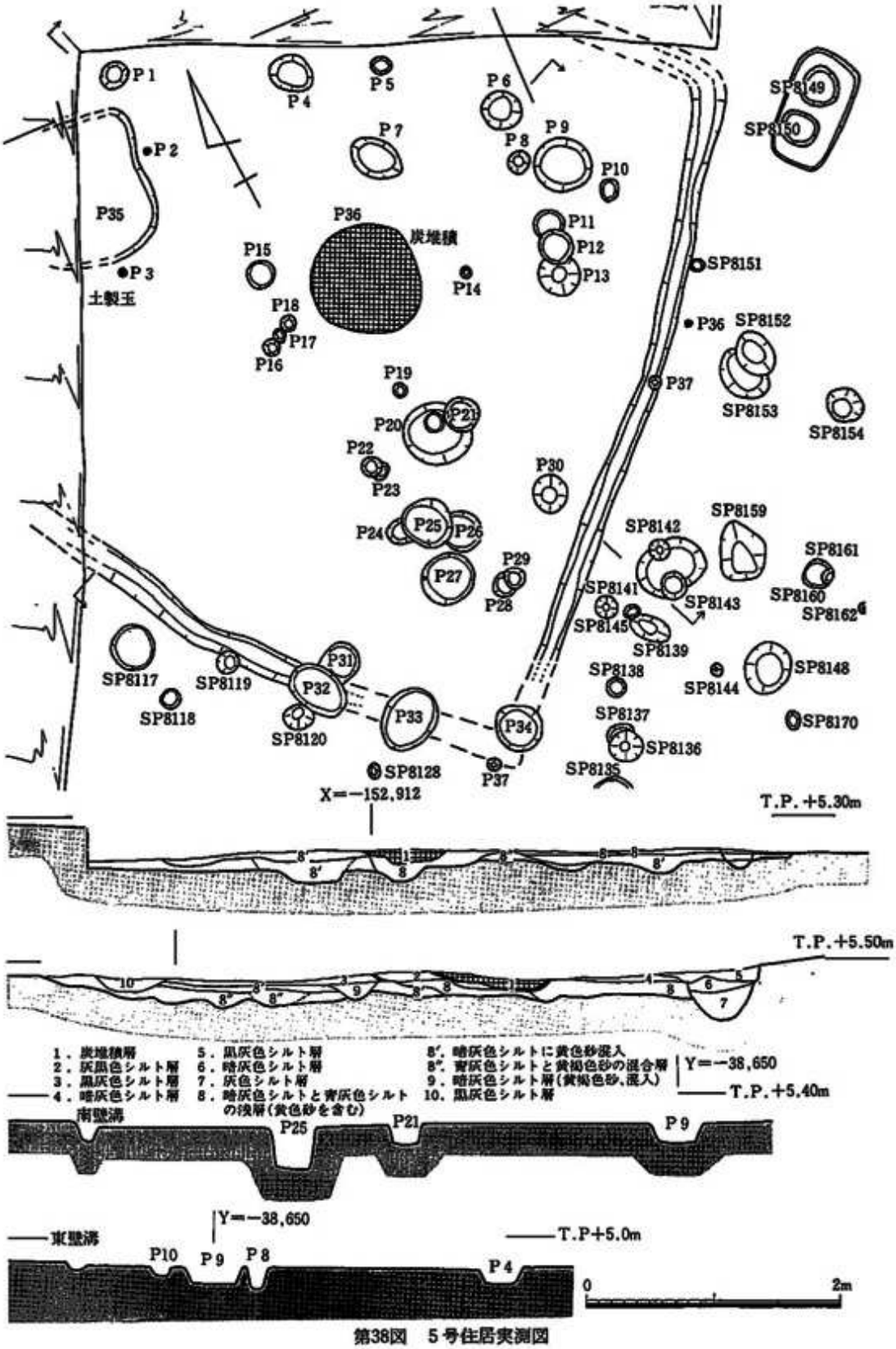
土製玉（第153図）　Ｔ３はＰ35の南側へ0.2m離れて出土した。大きさは直径1.85cmを測り径0.3cmの孔を穿っている。外面をヘラで磨いており、孔の周囲を指で押さえる。胎土は生駒山西麓産と考えられる。重さは6.92ｇである。

６号住居　５号住居の東側３mに位置する。住居の大半が調査区外で、西側の住居コーナー部と、柱穴を検出したのみである。住居の形状は、隅円方形と考えられ、５号住居と同規模の竪穴式住居が考えられる。深さは10cmを測る。壁溝は確認できなかった。コーナー部に５つの柱穴が存在する。径30～40mを測る。方向は３号住居に近い方向を示す。

７号住居（第29図）　１号住居、８号住居と重複し、特に１号住居に壊されている為に壁溝の確認、柱穴の位置関係の把握が難しい。隅円長方形の竪穴式住居と考えられ、柱穴と壁溝を検出



第37図　５号住居ピット断面図



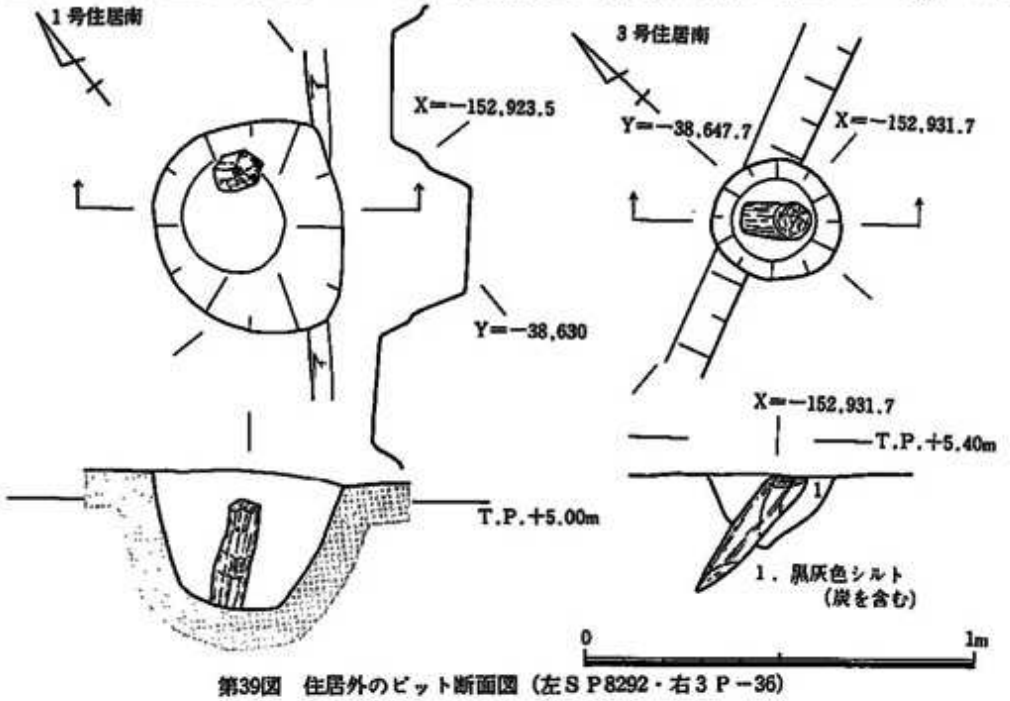
第38図　5号住居実測図

した。1号住居と同一方向を持つ。長辺約4.5m、短辺3.5mを測る。壁溝は幅18～25cm、深さ3cmを測る。主柱と成り得るのにP33・P58・P63・P43がある。

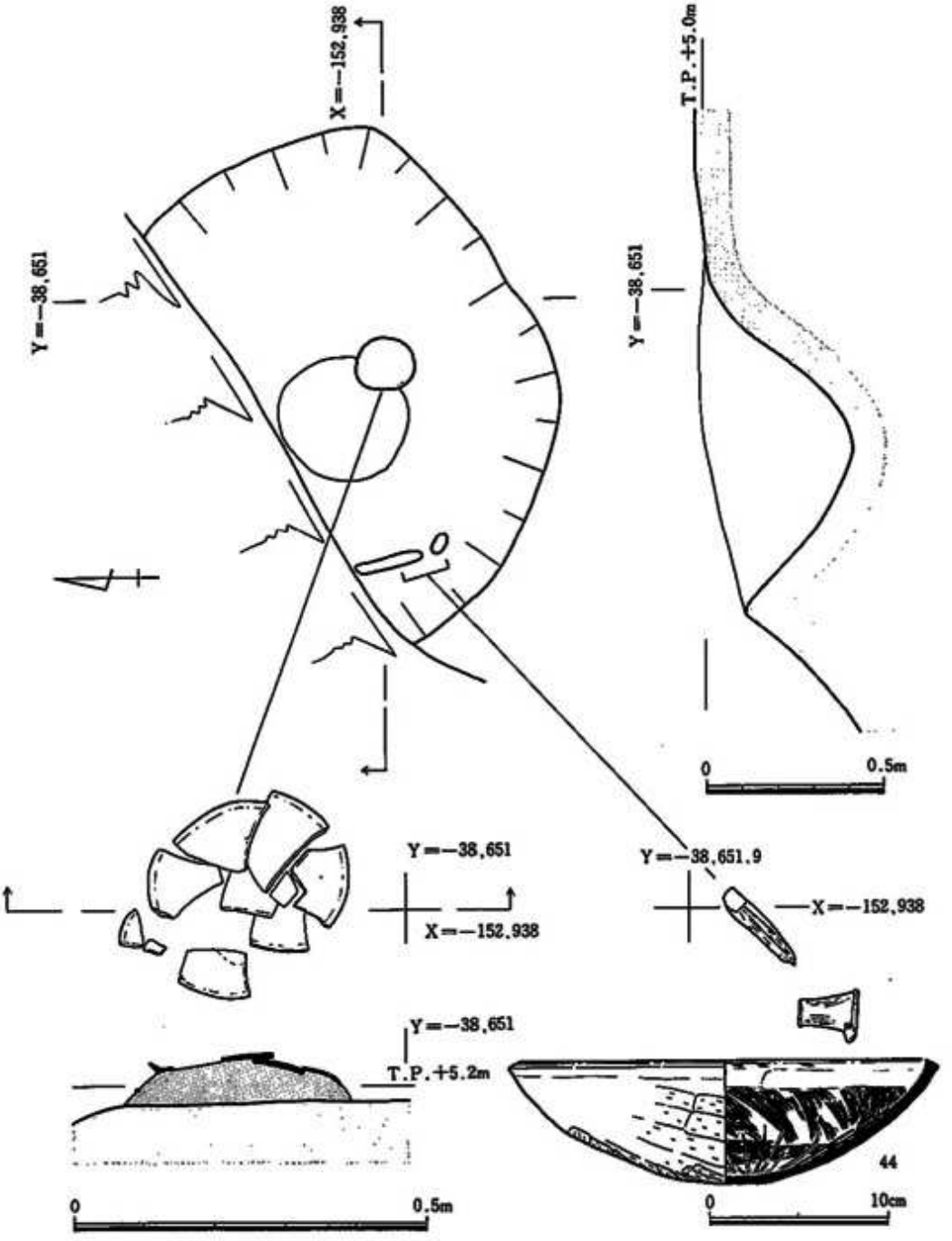
8号住居（第29図　図版一一）　1・7号住居よりも最下層に当たり、小規模な住居である。1号・7号住居によって壊されている。1号・7号住居と同一方向を示し、規模は小さい隅円長方形の住居である。長辺3.25m、短辺2.75mを測り、幅約23cm、深さ3cmを測る壁溝を巡らす。主柱は、P52・P57で2本柱が考えられる。他に付随する柱穴P45・P53・P54・P56・P64が在る。また、住居外壁溝に沿って、P49・P48・P50・P46・P43・P44・P30・P31・SP8253・SP8256・SP8255・SP8257の小穴が配置される。規模が小さいと云う事と、南東のコーナー部に1.2m×0.6mの土坑的な遺構を持つ点を特徴とする。第1次調査試掘坑No.6で検出したSK04と同様に4号住居の4－P2とも合致する。

9号住居・10号住居　2Aトレンチ南端でその一部を確認したに過ぎない。方形プランを持つ遺構である。大きさ、柱穴等から云えば今後、多くの問題を抱えているが、ここでは住居として復元を試みた。9号住居は3号住居の東側約2.5m、2号住居の南側約2.5～3mに位置する。10号住居は9号住居の東側へ近接して位置する。本住居には壁溝と考えられる溝が、SK8048から3号住居に向けて存在し、また、SK8048から直角に南に向けて存在する。そして8号住居の大きさを重ねると、2A地区南端の方形土坑がちょうど入るのである。9号住居と10号住居は埋土では他の住居と非常によく似ており、土層中にベースの青灰色シルトや黄色砂が混入し、炭を多く含む。10号住居の場合、8号住居と規模的に酷似する。

SK8060（第40図）　A地区南端X＝－152,940付近に位置し、径1.3m、深さ40cmを測る円形の土坑である。埋土は暗灰色シルトである。鉢形土器や高杯、木片が出土している。44は浅い



第39図　住居外のピット断面図（左SP8292・右3P－36）



第40図　ＳＫ8060遺物出土状況及び出土遺物

鉢である。外面はヘラ削り、内面はやや粗いハケ目を施す。

その他のピット（第39図）　住居内の柱穴、或いはそれに付属する柱穴以外に、多くのピットを検出した。5号住居東側、1・2号住居間に多く分布するが、明確に建物などを抽出するには至っていない。ただし、ピット列、建物を想定し得る部分があり、強いて掘立柱建物とするならば、住居の柱穴を考慮して、ＳＰ8228・8240・8230・8245・8232・8250・1号住居のＰ6が考えられ、2間×2間の建物が想定される。また5号住居の東側に位置するＳＰ8147・8146・8148・8145は1間×1間の建物を推定することが出来る。建物以外の建造物としては2号住居と6号住居の間に東北東－西南西方向に、ＳＰ8189・8188・8187・8184・8182・8181・8166・8164・8162・8136のピットが一直線上に並ぶ。ピット間の距離はＳＰ8189－8184は2.2m、ＳＰ8184－8182が2.7m、ＳＰ8181－8166は2.3m、ＳＰ8166－8162は2.1m、ＳＰ8162－8163は2.2mで平均2.2mの距離間隔で造られたと思われる。この様なピット列は、2号住居と3号住居の間に於いても見られる。ＳＰ8199・8186・8192・8201・8206は主軸を3号住居と同じくし、住居に沿うようにして存在する。これらのピットの間隔は1.5～2mである。また、ＳＰ8206を基点にして、ピット列より東へ45°の方向にＳＰ8209・8214・8217・8295・8206が並ぶ。

Ｃ地区の南端に於いても建物が建てられていた可能性があり、ＳＰ8281、8283、8286が並ぶ。以上の様な建物、建造物の性格を得たピット以外に於いて、柱根を検出したピットが在る。1つは7号住居南側のＳＰ8135で、もう1つは3号住居南側のＳＰ8137である。この二つのピットはどうも性格が異なるようである。先ずＳＰ8135の大きさは55cm×50cm、深さ35cmを測る。柱根は直径約10cmで、ナラ類の木を利用し、端部は平坦である。そして、ほぼ直立している。ＳＰ8137はＳＰ8135とは反対にピットの大きさも小さく、深さも浅い。大きさは、35cm×30cm、深さ18cmを測る。杭（柱根）は一端を尖っており、約45°の角度でもって、打ち込まれている。杭(柱根)の材は約10cmを測る。材はサカキを使用している。　（小野）

（2）　Ｂ地区

Ｂ地区北半遺構群

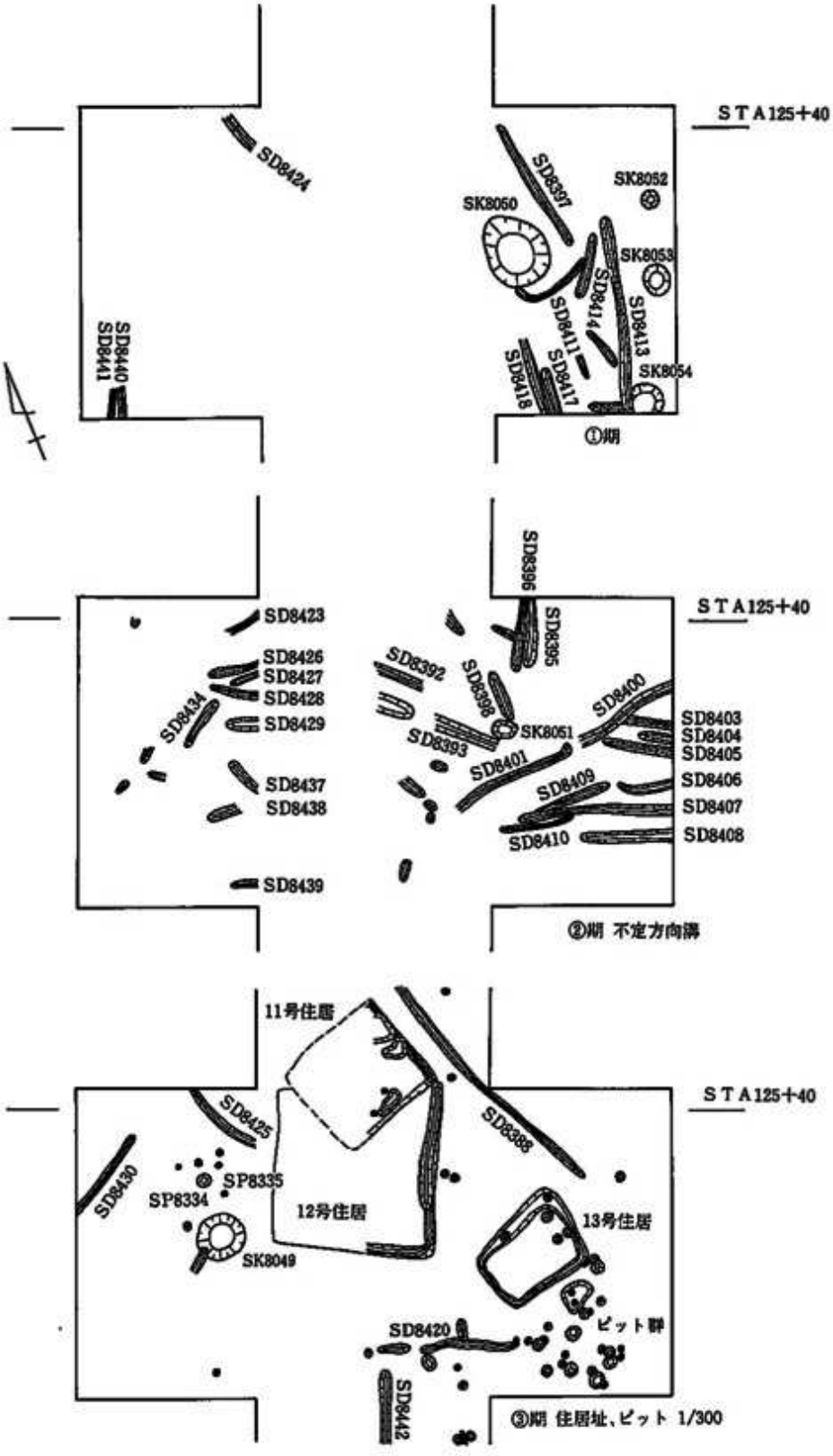
各遺構の切り合い関係を整理することにより大きく3時期に分類される（第41図）。

①期の遺構

後出の遺構との切り合い及び整地、削平を受けていると見られ、遺構の残存状況は悪い。遺構面全体が東に向けてやや傾斜するため、2Ｂトレンチでは遺構の残存状況が比較的良好である。土坑4基と若干の小溝が検出された。小溝は基本的に南北方向を示す。

ＳＫ8050　13号住居の下層に位置する浅い土坑である。長径約3.5m、深さ約20cmを測る。上半を削平されているものと思われ、遺物の出土もごく少量である。

ＳＫ8052～ＳＫ8053・ＳＫ8055　いずれも2Ｂトレンチ東端で検出された土坑である。ＳＫ8052は、径約1mを測る土坑である。ＳＫ8053は、矢板打設に伴い東半を欠くが径約1.3mを測る。ＳＫ8055は、南端が調査区外に当たるが径約1.5mの土坑と考えられる。いずれも深さ15～20cm



第41図　B地区北半古墳時代前期Ⅰ遺構変遷図

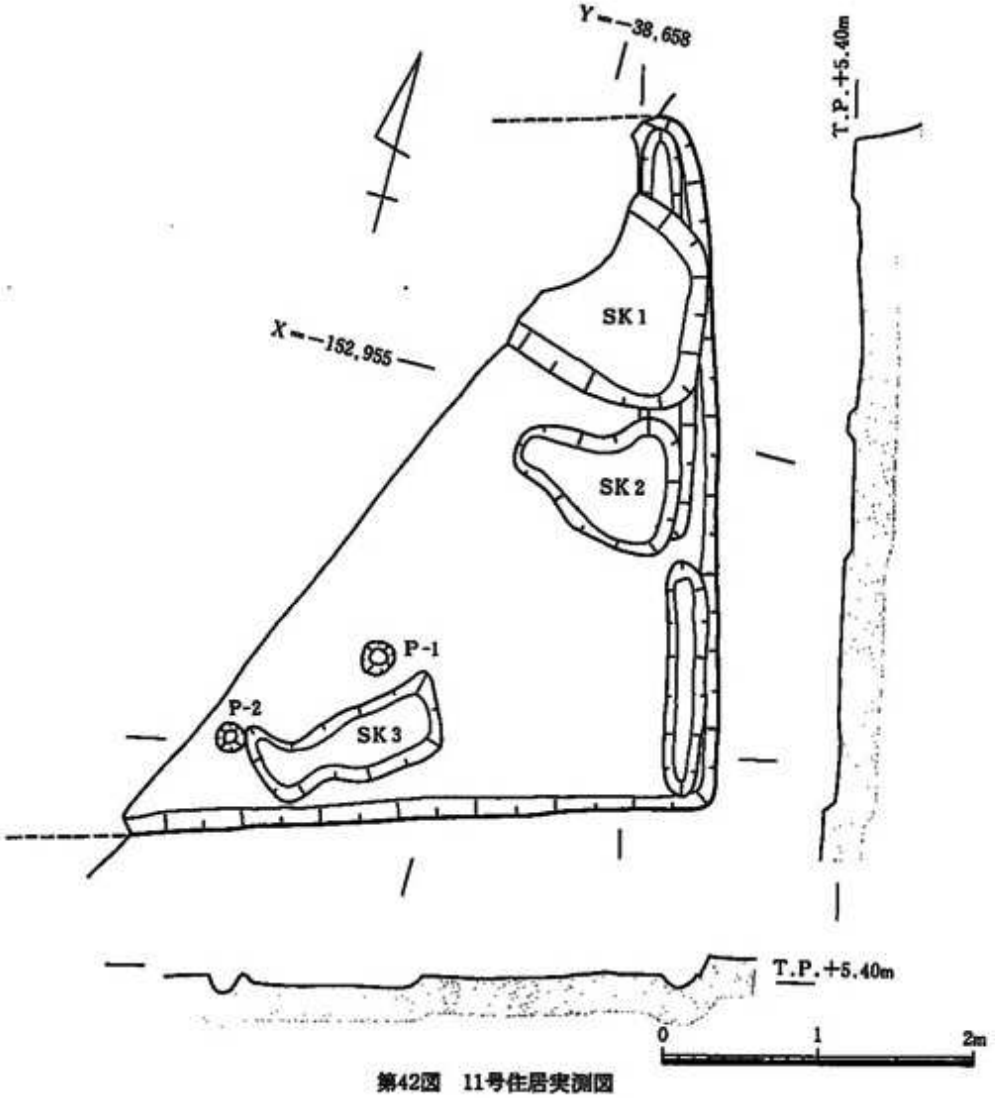
を測るのみで、遺物の出土も皆無に等しい。埋土は、黒褐色シルト或いは粘質土である。

小溝　基本的には南北方向を示す小溝群の一部が残存したものと考えられる。ほぼ南北を示すもの（ＳＤ8397他）とＮ－30°－Ｅ前後の方向をもつもの（ＳＤ8413他）の２時期が存在した可能性が考えられる。前述の土坑４基より若干後出するものと思われる。ＳＤ8402は、ほぼ東西方向を示し、西端で北へ屈曲するなどやや性格を異にする。

②期の遺構

基本的に東西方向を示す小溝群の一部が残存したものと考えられる遺構群である。ほぼ東西方向を示すものと、Ｓ－45°－Ｅ前後の方向を示すもの、その他の３つの小時期を示すグループが存在したものと考えられる。

ＳＤ8428・ＳＤ8392～ＳＤ8394・ＳＤ8403～ＳＤ8410は、Ｓ－45°－Ｅ前後の方向を示す小溝群である。各小溝は幅40～60cmを測る。小溝の間隔は、遺構の残存状態が悪く一定しないが、



第42図　11号住居実測図

ＳＤ8403～ＳＤ8405が示す最小の間隔は約50cmである。

ＳＤ8425・ＳＤ8427・ＳＤ8429・ＳＤ8438・ＳＤ8400・ＳＤ8401は、ほぼ東西方向を示す小溝群である。同様に一定の間隔と方向性をもつ小溝群であったと考えられるが、残存する一部を検出したのみで全容には不明な点が多い。

上記の２つの方向の他にやや異なった方向を示す小溝が若干存在する。調査区の主軸にはほぼ平行するＮ－30°－Ｅ前後を示すＳＤ8394、ＳＤ8395や、およそＮ－60°－Ｅを示すＳＤ8432～ＳＤ8434、ＳＤ8423などがそれぞれに当たる。

各小溝群の形成過程は、Ｓ－45°－Ｅ前後のもの→ほぼ東西方向を示すもの→Ｎ－45°－Ｅ前後のものの順である。小溝群に伴う遺物は小量である。

③期の遺構

②期の小溝群の廃絶後、ある程度整地が施された後に形成されたと考えられる遺構群である。住居３棟（11号・12号・13号住居）、住居に伴う可能性のある溝（ＳＤ8388・ＳＤ8420）、土坑、ピット群などが検出された。

住居は、一辺約7.5mを測る大型のものと、４～５mの小型のものがあり、Ａ地区と同様に２つの異なった方向性を示し、内２棟が重複した状態で検出された。

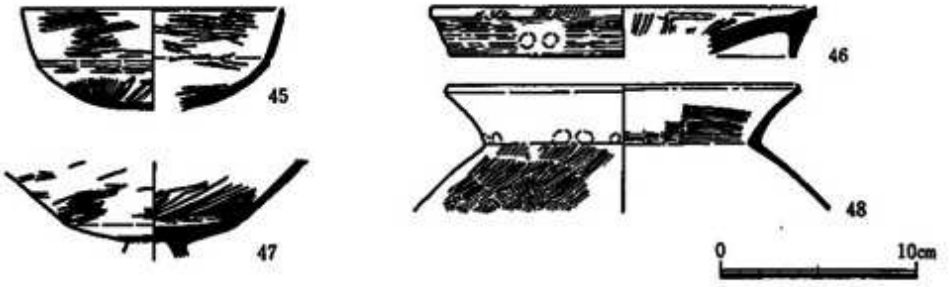
１Ｂトレンチ、２Ｂトレンチ南半では住居以外に多数のピットが検出されており、床面まで削平された住居などさらに別の建物が存在した可能性も考えられる。又、大型の土坑（ＳＫ8049）も認められる。

以下、主要な各遺構について個々に述べる。

11号住居（第42図）　Ｂトレンチ北端Ｘ＝－152,955付近で検出された方形の竪穴式住居である。現代水路によって西半を欠く。主軸方向は、Ｎ－10°－Ｗを示す。南半は、12号住居と重複する。南東コーナー及び南辺・東辺を検出したのみであるが、一辺約4.5mを測る。残存壁高約20cmを測る。東壁下に沿って、幅約30cm、深さ約10cmを測る壁溝とみられる小溝を伴う。南壁側では壁溝は検出されなかった。第Ⅺ層を掘削して造られており、砂層をベースとするため床面にはやや凹凸が認められるが、貼床などの施設は確認されなかった。東壁側において、炭化物、焼土を多量に含む不定形の浅い土坑２基が検出されており、炉址などに関連する遺構と思われる。南側においても浅い不定形土坑１基が検出されたが、埋土内に焼土などは認められない。ピットは２ヶ所で検出されたが、いずれも主要な柱穴とは考えられないものである。この内Ｐ－２からは、高杯杯部が納められたとみられる状態で検出された。住居全体の埋土は、第Ⅹ層が流入したものとみられ、基本的に灰黒色シルト或いは砂質土である。切り合い関係より、12号住居より後出の住居と考えられる。

出土遺物（第43図　46～48）

47は、Ｐ－２より出土した高杯杯部である。脚部下半及び口縁端部を欠く。暗黄褐色を呈し、やや軟質な胎土を持つ。内外面とも横及び斜め方向のヘラ磨きが施される。46、48は床面付近よ



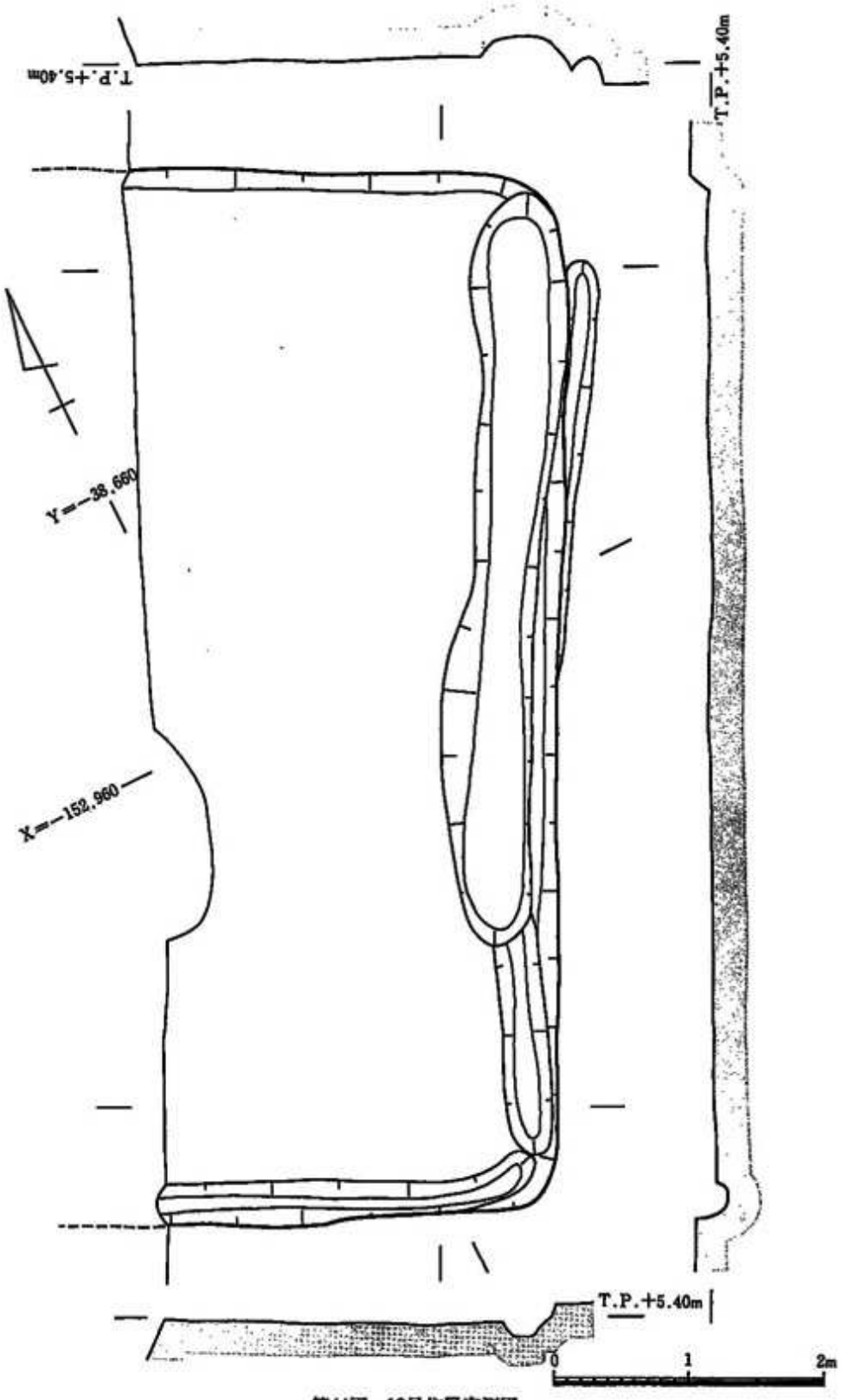
第43図　ＳＤ8443・11号住居出土遺物

り検出されたものである。46は、外彎ぎみの口縁部を下方に拡張する壺である。拡張部外面に疑凹線４条をめぐらし、２個１組の円形浮文を張り付けた痕跡が残る。復元口径19.6cmを測る。48は、外反する口縁部の端部を上方につまみあげる甕で、体部内面はヘラ削りが施され頸部内面はシャープな形状を持つ。

ＳＤ8388　幅約40cm、検出長13mを測る南北方向の小溝である。11号住居の東辺に平行し、約１m東側を走行する。11号住居と同時期に存在したとみられ、13号住居とともに集落内の住居域における同一区画を示す可能性が考えられる。

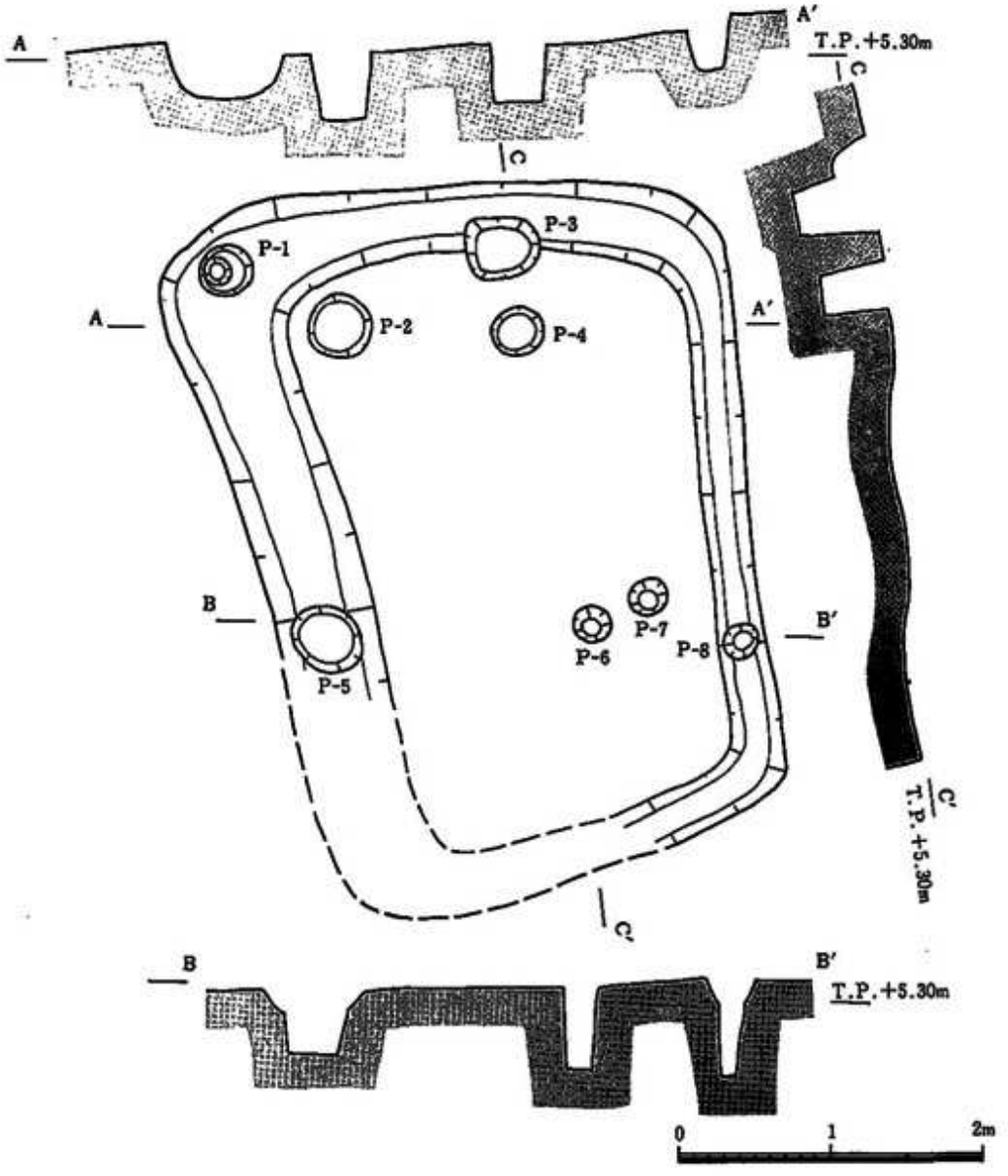
ＳＤ8443　Ｂトレンチ X＝－152,972で検出された東西方向の小溝である。西端をＳＤ8442で切られる。時期について詳細に確定することの困難な小溝である。他の小溝と異なり若干ではあるが土器が検出された。大半は甕体部などの小片で図化し得るものは、土師器高杯１点のみである（第43図　45）。45は高杯杯部の破片である。内外面とも細かいヘラ磨きが施されるが、全体の器形が須恵器的な形状を持つ点注目される。

12号住居（第44図）　Ｂトレンチ北部、11号住居の南側で検出された方形の竪穴式住居である。調査区の主軸にほぼ平行し、Ｎ－30°－Ｅに主軸を置く。西半を現代水路によって欠く。東辺で一辺約7.5mを測る。残存壁高約15cmを測る。床面は11号住居と同様、第Ⅺ層の砂層である。やや凹凸が認められるが、貼床などの施設は認められない。東辺及び南辺で壁溝と考えられる溝が検出された。南壁側の壁溝は、幅約40cm、深さ約５cmを測る。南東コーナー部では東壁側壁溝に直結せず、コーナーに沿ってやや屈曲して一旦終結する。東壁側壁溝は、３条程度が重複して存在したものと考えられる。北東コーナーより約５m、幅約50cmの壁溝が最上位にあり、その南側に、南東コーナーまでの間に幅約40cmのものがあり、最下位にやや外側へ広がるものが存在する。これらは、微妙に方向が異なり、同一箇所に複数の住居が重複している可能性も考えられる。ピットについては、その痕跡を検出し得ていない。このことは、住居廃絶後あまり時間を経ずに、ベース面である砂層中より柱材が除去されたものと理解しておきたい。住居址内の埋土は、上層包含層とあまり差異がなく、灰黒色シルト或いは砂質土である。又、床面からは土坑なども検出されておらず、炉など焼土を伴う遺構の痕跡も認められなかった。遺物は、埋土内より土器片が若干検出されたのみで、住居に確実に伴うと考えられるものは検出されなかった。

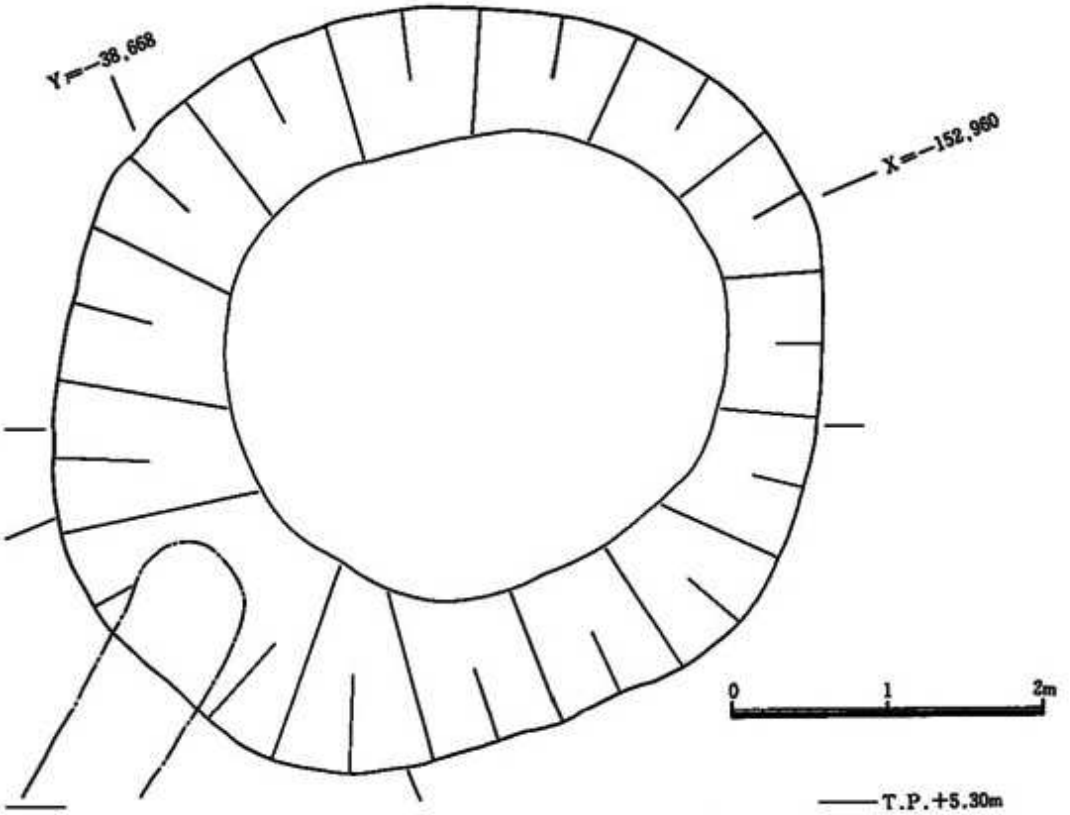


第44図　12号住居実測図

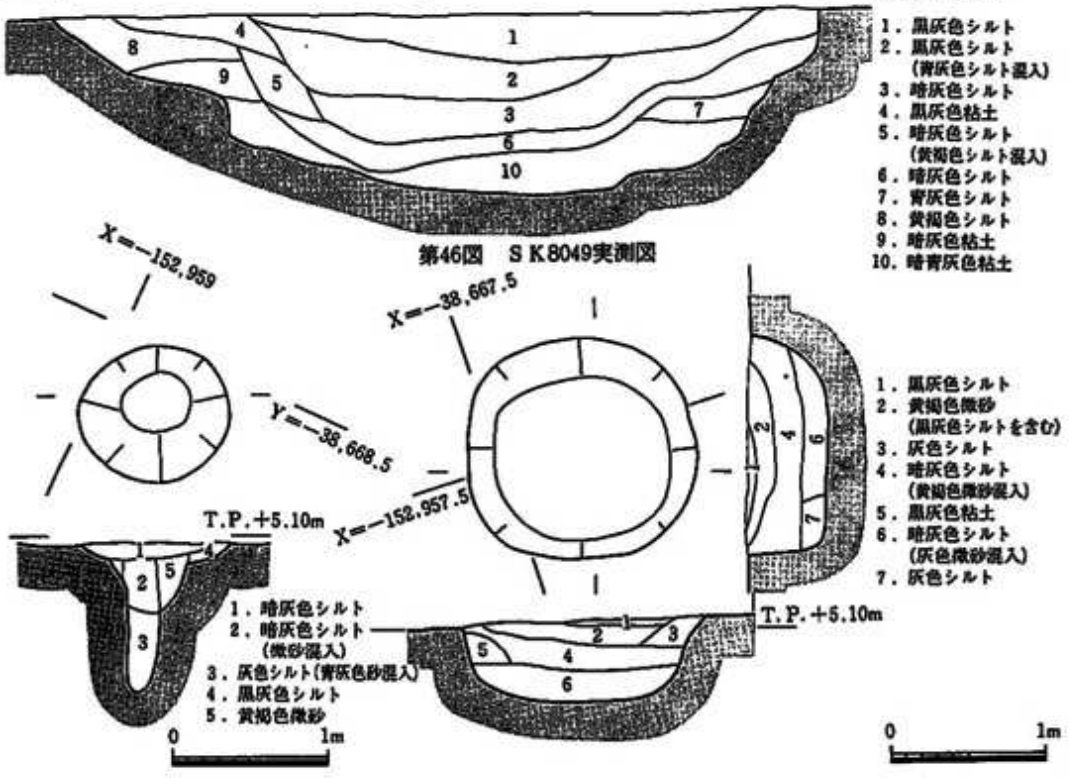
13号住居（第45図）　２Ｂトレンチ中央部西半で検出されたやや不整な長方形の区画をもつ遺構である。長辺4.5m、短辺約3.8mを測る。周囲に壁溝状の溝をめぐらすこと、内部に柱穴を伴うことから、小規模な竪穴式住居と考えられる。長軸方向をほぼ東西におき、11号住居址と同一の方向性を持ち、南側約７mに位置する。北西コーナー部を矢板打設によって欠く。西辺長約３mに対し、東辺長約3.8mを測り、東側がやや広がる不整な形状を呈する。壁南面はあまり明確でなく大半削平されている。壁溝は、北側、東側ではやや広く、幅50～70cmを測り、南側では幅約30cmを測る。深さは20cm前後である。床面にやや凹凸が認められる他、西へ向け、ゆるやかな傾斜をみせる。貼床などの施設は検出されなかった。又、焼土、炭化物も床面からは認めら



第45図　13号住居実測図



第46図　ＳＫ8049実測図



第47図　ＳＰ8335実測図　　第48図　ＳＰ8334実測図

れず、炉跡などの施設も検出されなかった。ピットは合計８ヶ所検出された。長軸上のＰ－３・Ｐ－４・北壁溝内のＰ－１・Ｐ－５・南壁溝内のＰ－８などが主要な柱穴とみられる。埋土は灰黒色系のシルト或いは砂質土である。本住居址に確実に伴う遺物は皆無に等しい。

ＳＫ8049（第46図）　１Ｂトレンチ中央部東端Ｘ＝－152,960付近で検出された円形の土坑である。径約２ｍ、深さ約0.5ｍを測る。埋土は、下層より暗青灰色粘土、暗灰色シルト、青灰褐色シルト、青灰色シルト混りの黒灰色シルト、黒灰色シルトが、中央部にレンズ状に堆積し、壁面付近には、茶褐色シルト、暗灰色粘土が落ち込むように堆積する。住居址と同時期に存在することから、井戸などの機能が考えられるが、性格を確定するには至っていない。遺物は、土師器小片が少量検出された。

ＳＰ8330～ＳＰ8336　１Ｂトレンチ北半Ｘ＝－152,956～－152,960付近においてピット７ヶ所が検出された。ＳＰ8334（第48図）は、ピット群の中心付近に位置し、径約60cmを測る。やや隅円方形に近い平面形状を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は基本的に水平ないしはレンズ状に堆積した、黄褐色微砂、暗灰色シルト、暗青灰色シルトの３層である。遺物の出土は少量である。ＳＰ8336を除く他の５つのピットは、ＳＰ8334を中心として、その北側、及び東側に比較的、直線状に並ぶように検出された。建物の一部を構成するピット群である可能性が考えられる。ＳＰ8335においては、土層断面観察より、径約10cmの柱の痕跡が認められた（第47図）。

２Ｂトレンチピット群　２Ｂトレンチ南半において、住居址以外にピット30ケ所と土坑１基が検出された。ＳＰ8296・ＳＰ8236～8238を除く大半は、13号住居の南側に集中する。径約20cmのものと、径約30～40cmのものがある。部分的に直線、或いはコーナー部状の配置を示すものもあるが、具体的に建物を復元するには至っていない。又、ピット自身にも切り合い関係があり、建物であれば、数棟が重複して存在したものであろう。

ＳＫ8054　13号住居南側のピット群中で検出された不整形な土坑である。長さ径約1.2ｍ、深さ約10cmを測る。埋土内に若干炭化物が認められた。

Ｂ地区中央部の遺構

１Ｂ・２Ｂトレンチ以南では、遺構の存在が急激に希薄となる。これは、後出の遺構の形成に伴い、早い時期で整地・削平をうけており、遺構の残存状態が極めて悪いことも一要因となっているが、Ａ地区より広がりを見せる住居域の南縁に当たることを示しているものと思われる。

ＳＴＡ125＋60付近では、数次の切り合いを持つ溝数条が検出された。

ＳＤ8442・ＳＤ8444　Ｎ－30°－Ｅの方向を示す溝である。ＳＤ8442は、検出長約５ｍを測り、南半を現代水路によって欠く。ＳＤ8444は、ＳＤ8442の東約３ｍに位置する。長11ｍを測る。深さ20～30cmを測り、黒褐色粘質土を埋土とする。

ＳＤ8447・ＳＤ8448・ＳＤ8452　ほぼ東西方向を示す溝である。いずれも灰黒色系のシルト、粘質土を埋土とする。

ＳＤ8446・ＳＤ8449・ＳＤ8450　Ｎ－15°－Ｗ前後の方向を示す溝である。ＳＤ8449・ＳＤ8450

は、やや蛇行しており、他の小溝と若干異なった走行を示す。

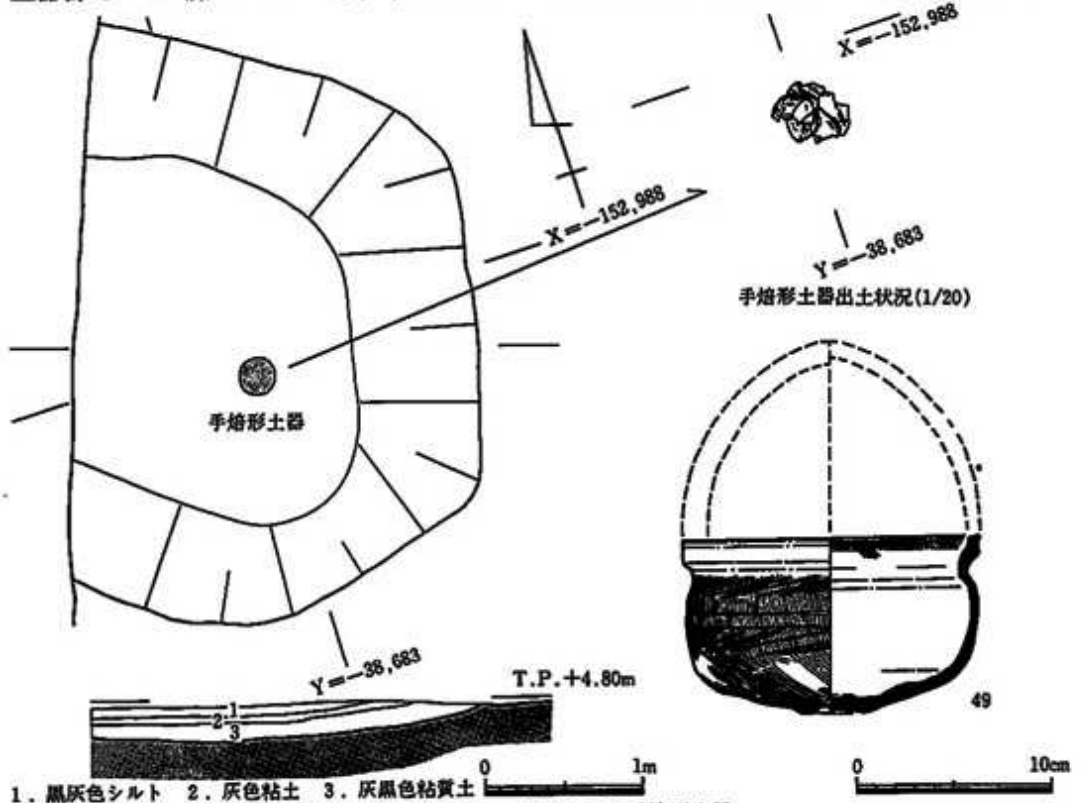
これらの小溝は、切り合いよりみてN－15°－W→ほぼ東西方向→N－30°－Eの順に形成されている。（服部）

ＳＫ8036（第49図　図版二三）　３Ｂ地区、中央部に位置する。平面形は不整な円形を呈する。大きさは3.7m×４m、深さ25cmを測る。埋土は下層から①灰黒色粘土、②灰色粘土、③黒灰色シルトが堆積する。出土遺物としては、手焙形土器１点を検出したのみであった。手焙形土器は鉢部の底部を真上にしてつぶれた状態で検出した。手焙形土器は覆部を欠いている。本遺構の性格は、西側と南側に近接する土器群Ⅵと土器群Ⅶの存在を考慮しなければならない。

出土土器（第49図　図版五五）　手焙形土器49は、覆部を欠くが、鉢部と覆部を接合した痕跡がある。口縁部は受け口状で、体部に斜線文とクシ描き直線文、その下位は斜線文を施す。口縁部は、内外面ともにハケ状のナデを行い、内面はその後に横ナデを行う。頸部には横ナデを行う。体部にはほぼ縦方向のハケ目を、底部に右下りの粗いハケ目を施す。内面は体部にハケ状ナデを、底部は指頭押圧後にナデを施す。底部面には若干の突出があるが、面を浅く凹ます。色調は体部が灰白を、底部外面は黒色を呈する。本遺物は胎土・色調・調整技法が美園遺跡で出土したＤ104やＤ133に酷似[註2]し、滋賀県湖南地域の土器[註3]と考えられる。

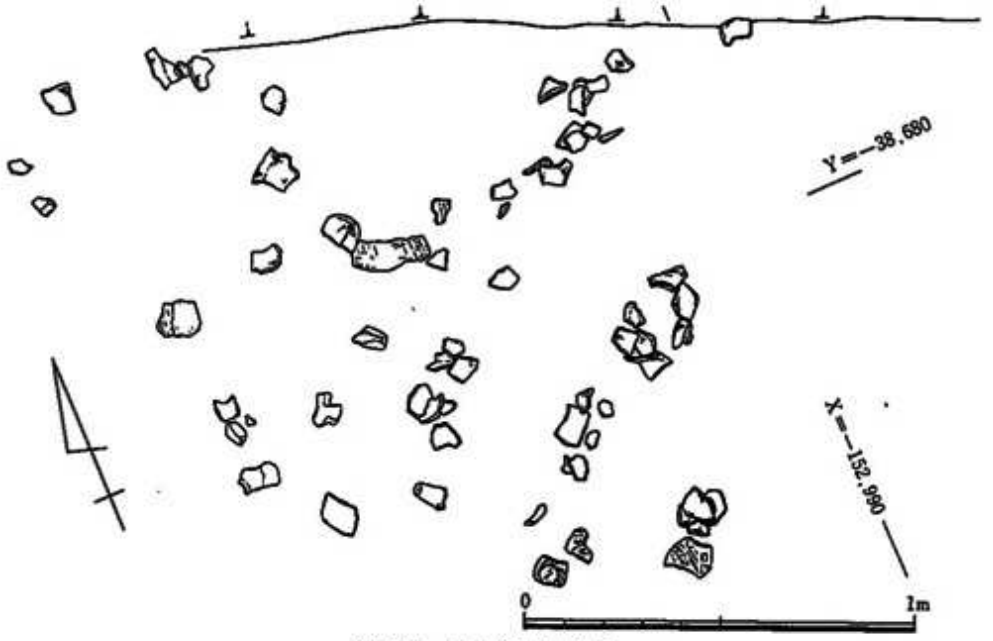
尚、本遺物には内面口縁部に煤が付着している。

土器群Ⅵ・Ⅶ（第50・51・52図　図版二三）　手焙形土器が出土したＳＫ8036の東南側約４m

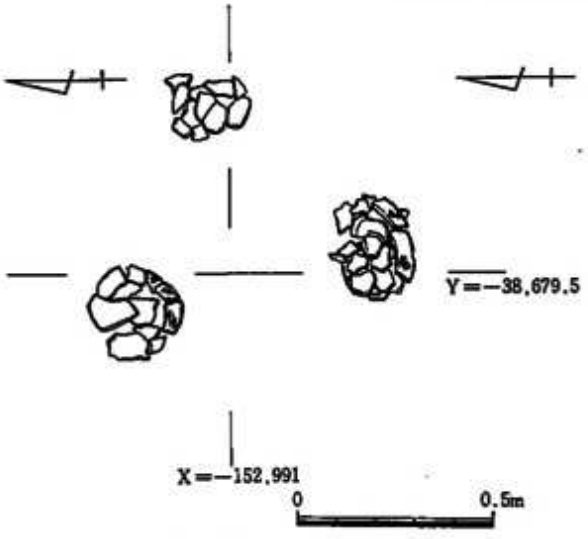


１．黒灰色シルト　２．灰色粘土　３．灰黒色粘質土

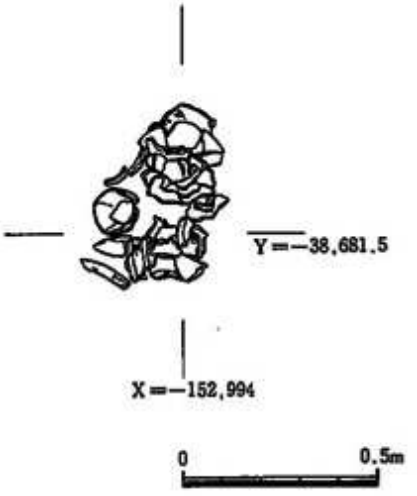
第49図　ＳＫ8036実測図及び手焙形土器



第50図　土器群Ⅵ出土状況



第51図　土器群Ⅶ

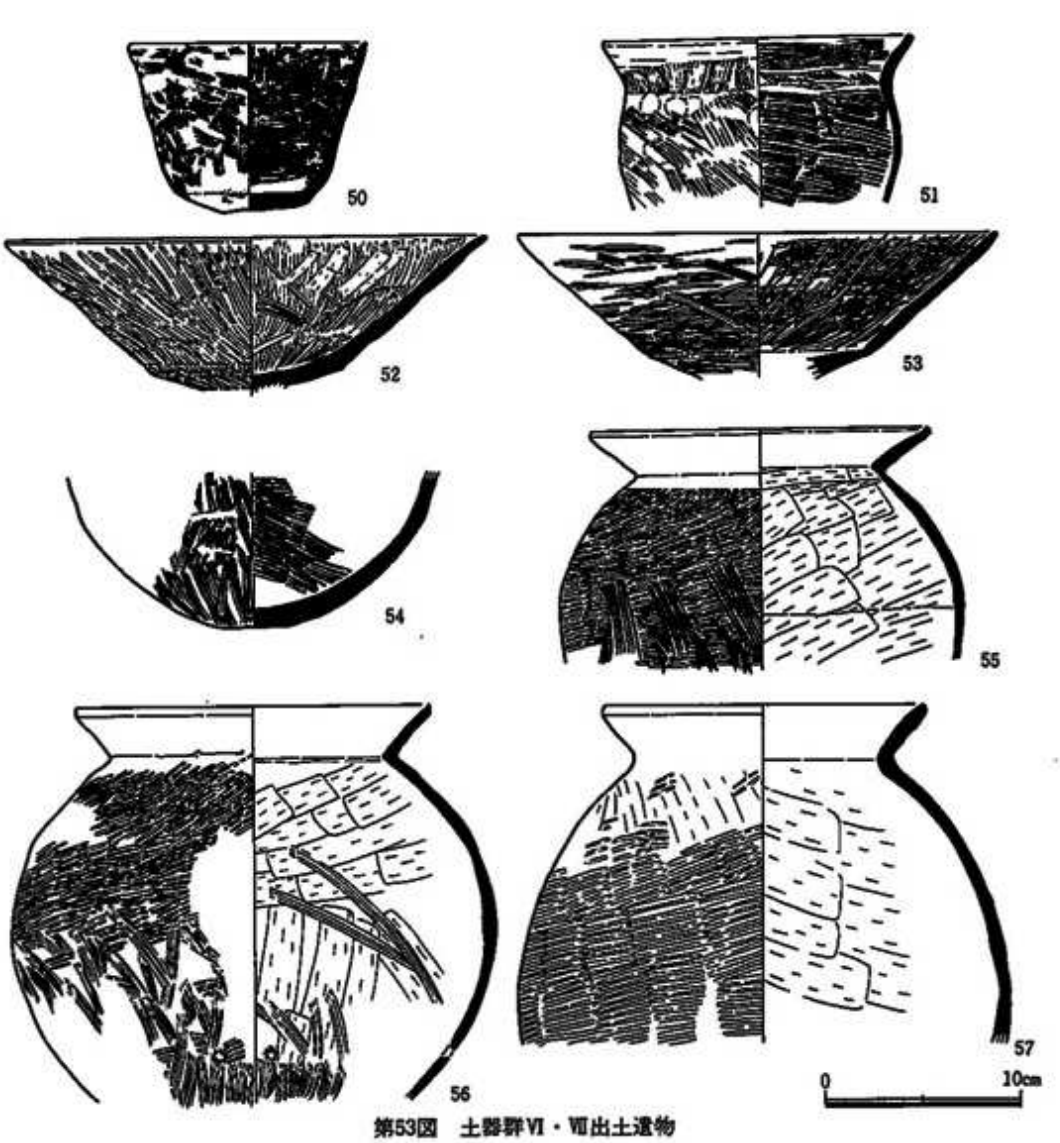


第52図　土器群Ⅵ

離れて位置する。両土器群は、第Ⅹ層の包含層を除去した段階で検出した。土器群Ⅵの下層にはＳＫ8037が、土器群Ⅶの下層にはＳＤ8340が存在する。土器は、甕、鉢、高杯である。

出土遺物（第53図　図版五五）

甕、51は小型である。口縁部はゆるやかに外へ屈曲させ、大きく開き、口径に最大径がある。端部を若干、内側へつまむ。調整は、外面は口縁端部に横ナデ、頸部にハケ目、体部にハケ目を施す。内面は、口縁部がハケ目の後に横ナデ、頸部が縦方向のハケ目の後にヘラによるナデを施す。体部はハケ目による。55・56は「く」の字形の口縁部を持ち、端部を若干つまみ上げる。いずれも体部は球形を呈する。調整は、口縁部に横ナデを、体部外面はタタキ目の後、下半にハケ



第53図　土器群Ⅵ・Ⅶ出土遺物

目を施す。又、下半には径0.6cmの孔を穿つ。土器57は器壁が全体的に厚く、口縁部は「く」の字状に開き、上方へのびる。全体的にやや長胴気味である。口縁部に横ナデを、体部は外面にタタキ目を施す。内面はヘラ削りによる。

高杯、52は口縁部を外反させる。杯部と底部の接合部を浅く凹ませる。外面に斜め方向のヘラ磨きを施し、端部は横ナデによる。内面は縦方向のヘラ磨きを基本とし、一部にハケ目を施す。53は口縁部が逆「ハ」の字に真直ぐに伸びる。端部は丸くおさめる。屈曲部外面に鋭い沈線を入れる。内外面ともヘラ磨きによる。

鉢、50は小型の土器である。底部は平坦な面を有し、口縁部は逆「ハ」の字に真直ぐに上方へ伸びる。端部はやや鋭い。体部の中位に全体的に押さえた痕跡があり、若干凹む。調整は口縁部が横方向のハケ目の後に横ナデ、体部がハケ目による。底部は整形後にナデる。内面は口縁端部に横ナデ、体部にハケ目を施す。底部は指による押圧の後にナデている。色調は赤褐色を帯びる。

胎土は生駒山西麓産と考えられる。

註２．野藤和也「美園遺跡出土の手焙形土器について」『美園』大阪文化財センター1985．の形態分類でⅡＢ３類に属し、Ｄ103やＤ104の様な端面が考えられる。

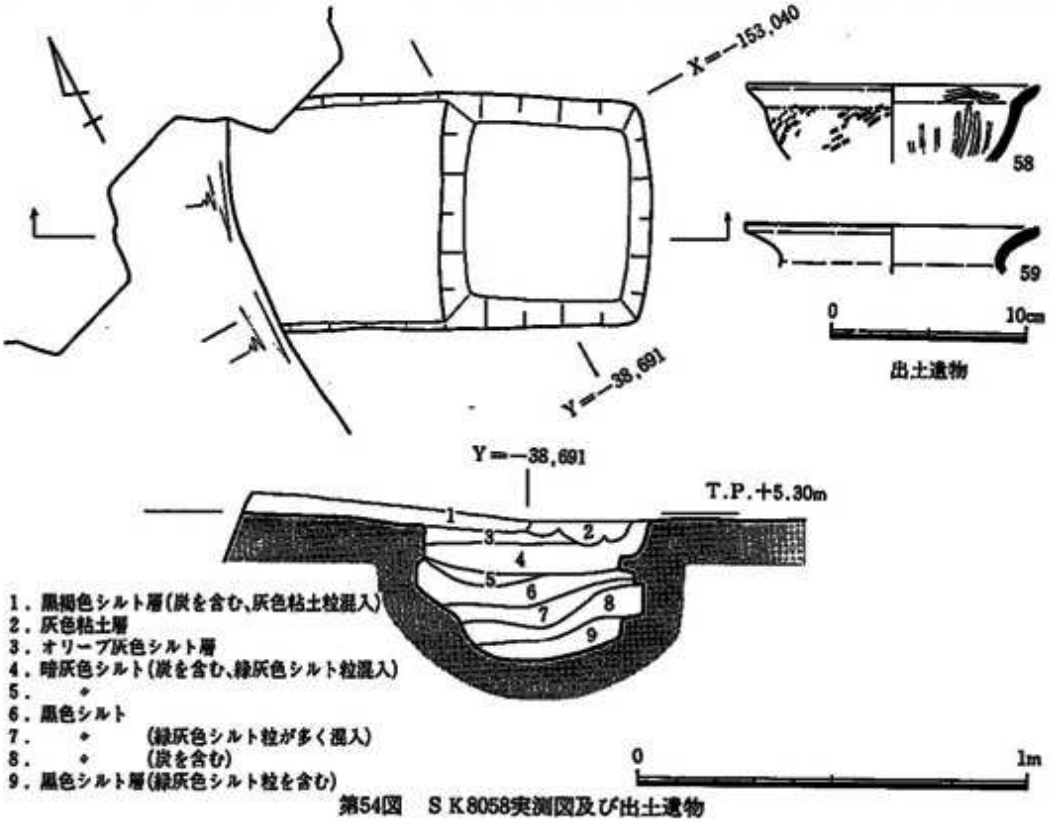
註３．1984年２月　兼康保明氏より御教示を受け、また大津地域の土器も拝見させて頂いた。

（３）　Ｃ地区

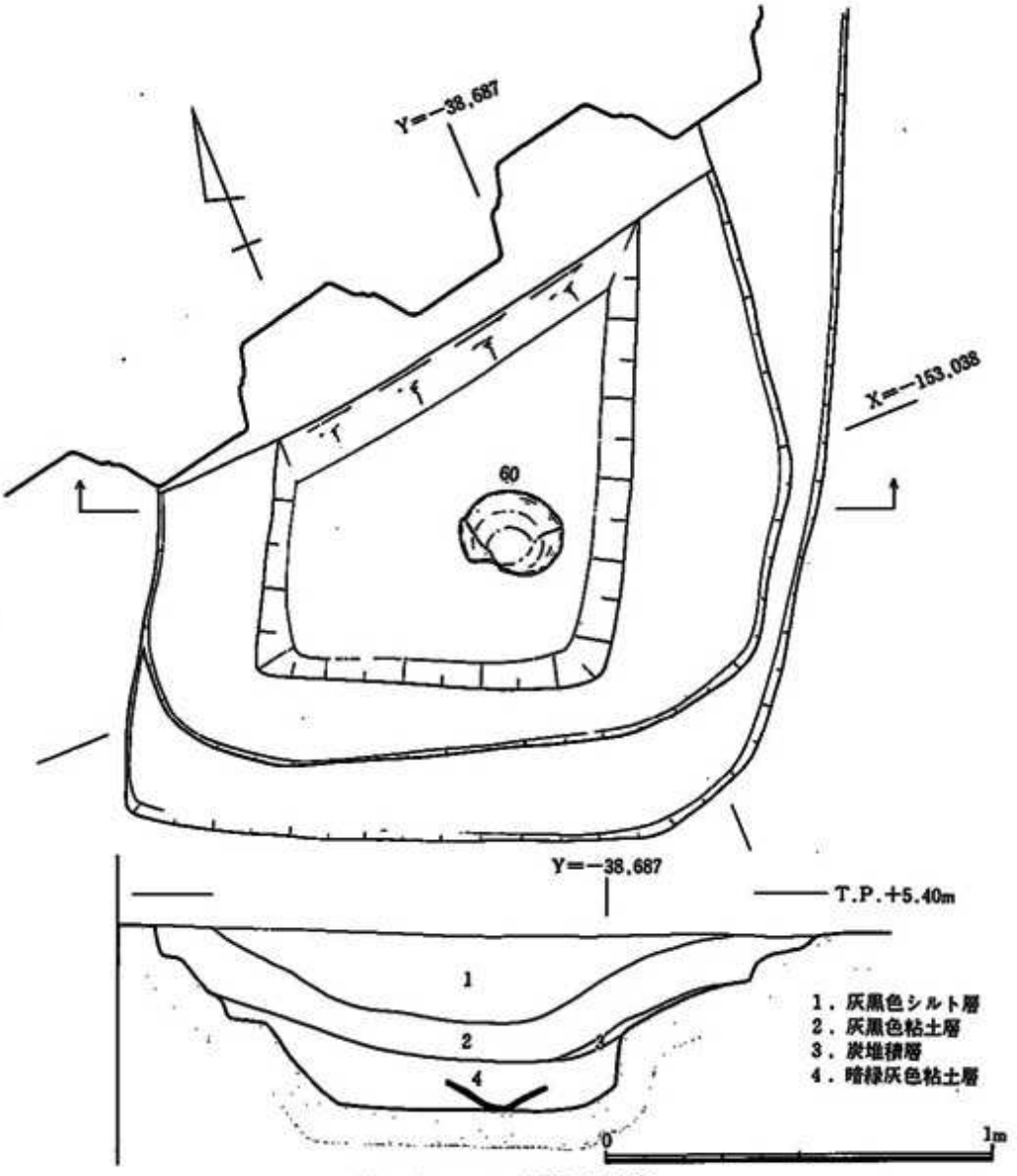
ＳＫ8058（第54図　図版三三）　古墳時代前期Ⅳ期第８Ｃ遺構面、第３号墓の下層より検出。一部現在の水路によって壊されている。ＳＫ8057の南西約2.5m離れて位置し、主軸を北西－南東方向におく。本遺構は先ず1.1m以上×0.64m、深さ６～10cmの長方形の土坑を掘削し、そして東端へ60cm×56cm、深さ36cmの方形の土坑を設け、２段に造る。土坑の埋土は３時期に亘って堆積している。下層から暗灰色シルト、中間層は黒色シルト、上層は灰黒色シルトである。土坑内より少量の土器を検出した。土器58は鉢、土器59は甕の口縁部である。

ＳＫ8057（第55図　図版三三）　ＳＫ8058の北東約2.5m離れて位置し、大半が調査区外で、その一部を検出した。大きさは、長さ2.1m以上×1.7m、深さ46cmを測り、主軸を北北東－南南西におく。土坑は３回に亘って、段状に掘り込んでいる。埋土は下層より、暗緑灰色粘土、灰黒色粘土、灰黒色シルトである。土坑の底部より高杯杯部60を上に向けて検出した。高杯は脚部を打ち欠いたようである。他に甕、壺等が出土している。

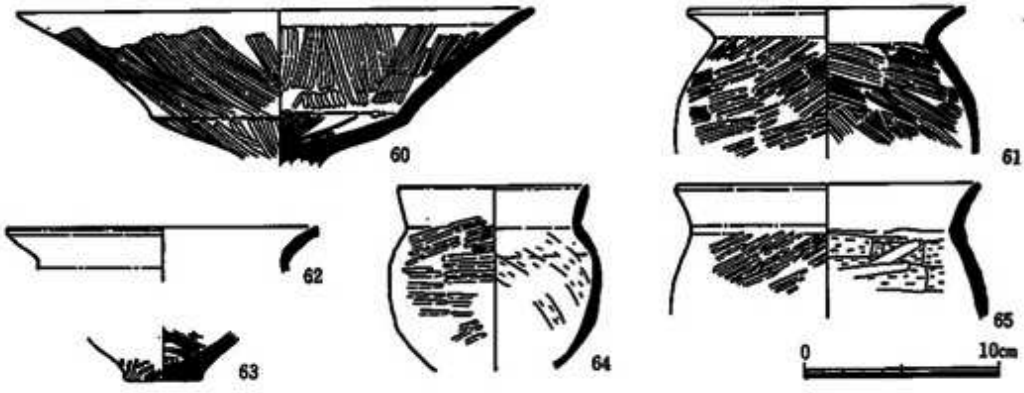
出土遺物（第56図、図版六二）　土器60は高杯であり、口縁部を上方に外反させ、杯底部と口



第54図　ＳＫ8058実測図及び出土遺物



第55図　ＳＫ8058遺物出土状況



第56図　ＳＫ8057出土遺物

縁部を接合し、外面の接合部分に沈線が入る。口縁端部は内外面ともに横ナデにより、他は基本的に縦方向のヘラ磨きによる。土器61・62・63・65は甕である。いずれも口縁部は横ナデを行い、外面は右上がりのタタキ目を施す。 (小野)

3Cトレンチの遺構

SP8341～SP8349　3Cトレンチ北端部において、ピット9ヶ所が検出された。遺構の分布は周辺では希薄であるが、これらピット群は比較的集中して検出された。分布状態より北側調査区外へ広がる可能性が考えられる。深さは10～25cmで比較的浅く、断面形状などから見ても建物の柱穴とは考えにくいピット群である。いずれのピットからも遺物の出土は皆無に等しい。埋土は、黒褐色シルト或いは粘質土である。SP8341は径約70cmを測り、規模、深さとも最大である。SP8342が径約20cm、SP8343が径40cm、SP8344・SP8345が径約10～15cm、SP8346が径約60cm、SP8348は径約60cm、SP8349が径約50cmを各々測り、SP8347は楕円形を呈し、長径約50cm、短径約30cmを測る。

SD8454　3Cトレンチ北半で検出されたL字状に屈曲する溝である。3Cトレンチ北端中央付近より南へ進み、約5mの付近で東へほぼ90°屈曲する。調査区外へ北に延び、東半を水路及び攪乱によって欠く。南北部分での幅約1.3m、東西部分での幅2.2mを測る。深さは15～20cmを測る。埋土は、下半がやや粘質土となる黒褐色シルトで、上半には浅く第X層に当たる上層の灰黒色シルトが落ち込むように堆積する。遺物の出土は皆無に等しい。

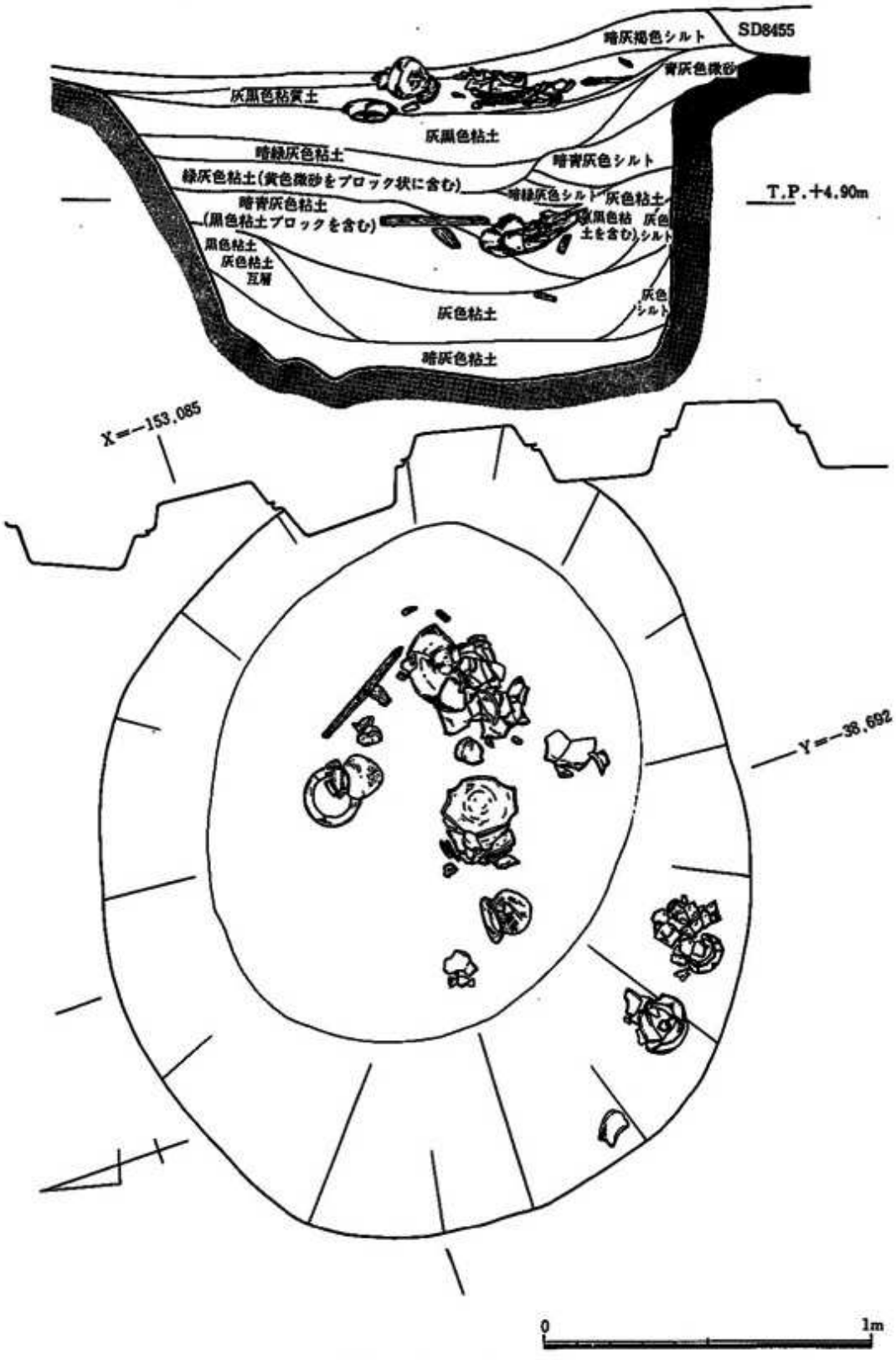
4Cトレンチの遺構

4Cトレンチでは、一括性の高い遺物を多数出土する土坑、溝などが検出された。4Cトレンチの第X層付近の層序は、A・B地区とは若干異なった様相を示す。第Ⅷ層直下において第X層に至るが、第X層は、ピート状の黒色粘土層を間層として、上半が黒灰色シルト或いは砂質土、下半がやや黒色を帯びた暗灰色粘土に分層される。下半の暗灰色粘土は、部分的にしか存在せず、ピート状黒色粘土直下で第XI層上面に至る部分もある。従って古墳時代前期I遺構面（第8f遺構面）は、古墳時代前期Ⅳ遺構面（第8d遺構面）を除去後、その下位に当たるピート状の黒色粘土層を介した第XI層直上に当たる。検出面は、T.P.+5.5mを測る。

検出された遺構は、土坑1基（SK8059）、溝2条（SD8455、SD8456）、ピット1ヶ所（SP8350）である。これらの遺構は、SP8350を除きそれぞれ切り合い関係を有し、SK8059→SD8456→SD8455の順で形成されたものである。

以下、各遺構と遺物について述べる。

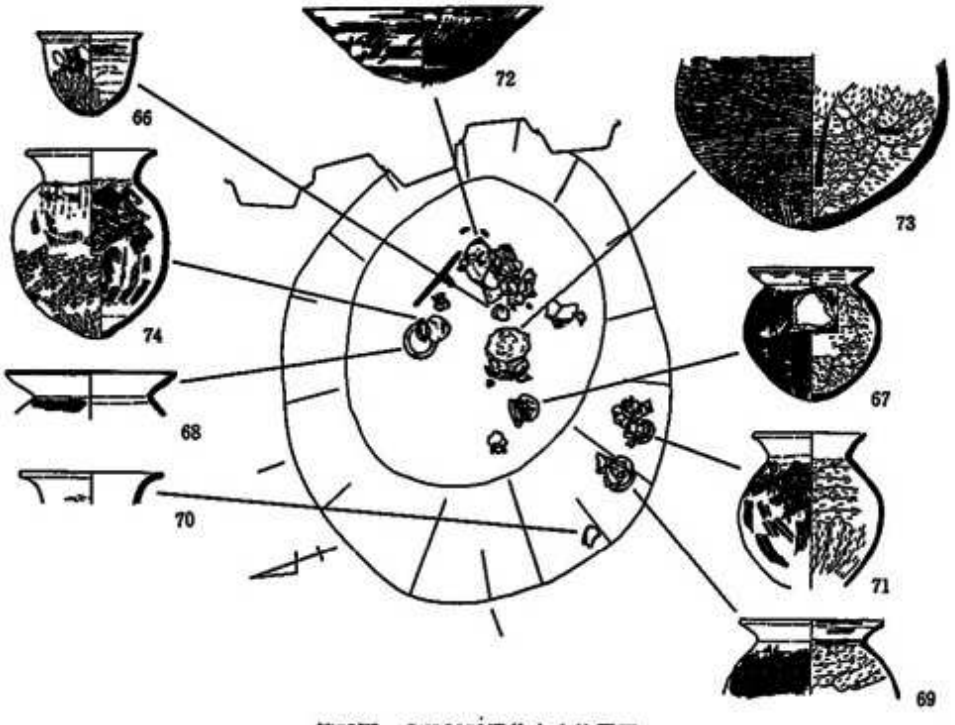
SK8059（第57図）　4Cトレンチ東端X＝－153,085で検出された土坑である。土坑の周囲は深さ約10cm、径約3.5～4.0mを測る浅い落ち込みとなっており、全体で2段に掘り込まれる構造を持つ。中央部分の土坑本体は、やや楕円形を呈し、長径約1.2m、短径約1.0mを測る。外側の落ち込みは、東側部分が調査区外に及び、南側で一部SD8455と切り合い関係を持つ。切り合い関係の観察よりSK8059は、SD8455に先行して形成された遺構と言える。検出面から底ま



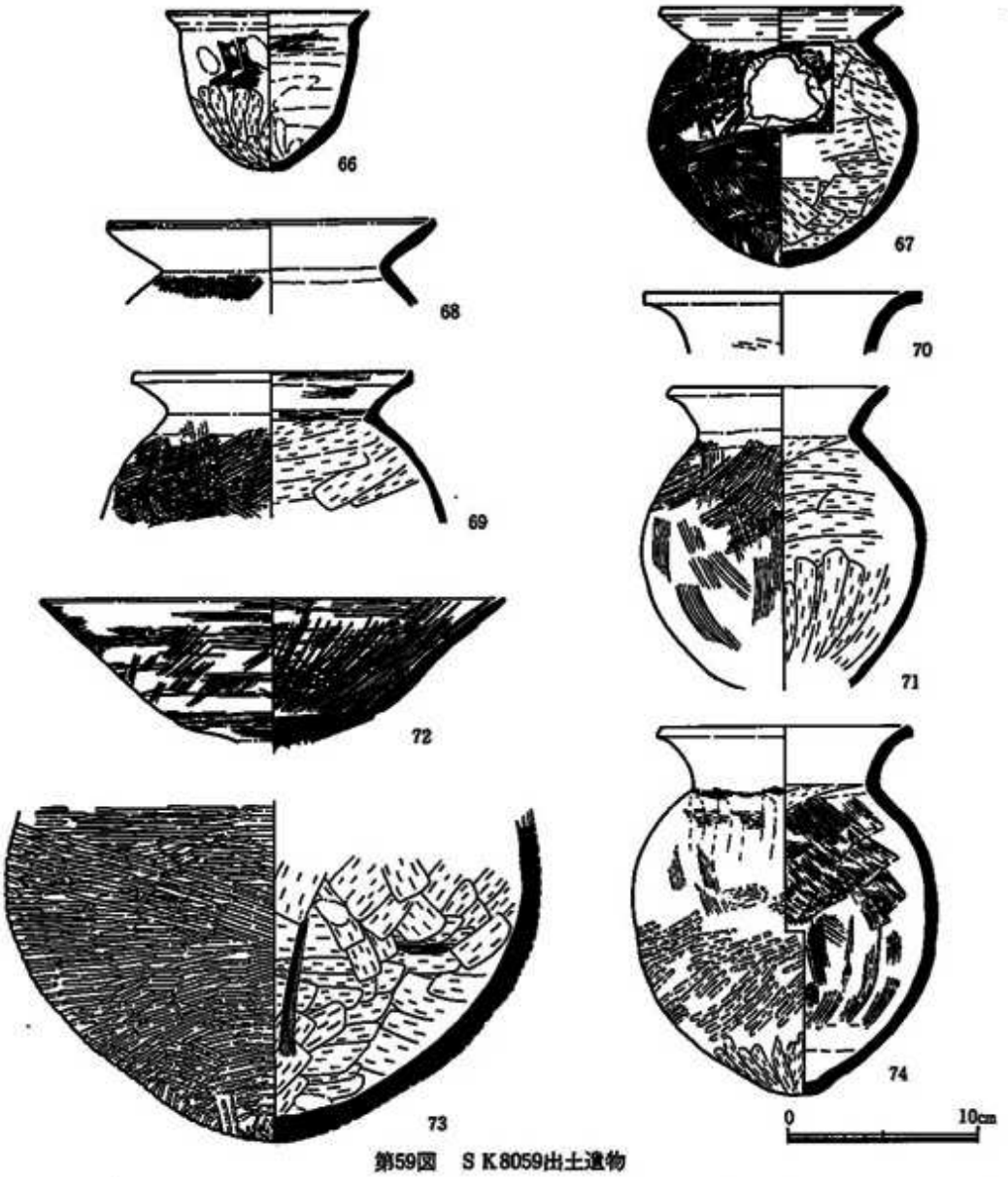
第57図　ＳＫ8059遺物出土状況

での深さは、約1.1mを測る。

埋土は、大きく3層に分かれる。最下層は、底部より約50cm堆積するブロック混じりの灰色系の粘土である。部分的には流入土と思われる灰色シルトが認められるが、黒色粘土をブロック状に含む暗青灰色粘土、灰色粘土がある。人為的、或いは比較的短時間に埋没したと考えられる堆積状態を示している。最下層からは、ほとんど遺物は検出されていない。中層部分は、最下層が凹状に落ち込み、層厚約40cmで堆積する緑灰色系の粘土及びシルトである。ある程度、徐々に流入したと考えられる堆積状況を示しており、下半はシルト質が強く、緑灰色粘土と黄色微砂、シルトが互層をなして堆積する。中層下半からは、杭状の加工木が出土した他、脚部を欠失した高杯杯部が上面を上にして検出された。又、高杯周辺には植物遺体も若干認められた。中層部分上半からの遺物の出土は希薄である。上層部分は、その下半が灰黒色粘土、上半が灰黒色粘質土である。周囲の落ち込み部分は、徐々に粘質が弱くなり、シルト化する。上層は、土坑の中心に向けややレンズ状を呈し落ち込むように堆積する。下半の灰黒色粘土上面には炭化物を多く含む層が薄く堆積する。この炭化物層上面を中心に上半の灰黒色粘質土より、完形品を含む多数の土器が検出された。主要な遺物の出土位置との関係は、第58図に示す通りである。72の高杯は、唯一中層部分より検出されたもので、脚部を欠損する高杯杯部を土坑内に埋納する点でＳＫ8057と類似する。上層からの出土遺物は、土坑の中央部にほぼ集中する。73の大型の甕は、中心に位置し、その周囲に67・68・74などの壺、甕が点在する。69・71は肩部付近に２個体が並列するように口縁部を下にして伏せた状態で検出された。66の鉢は、全体のほぼ二分の一の破片で検出され



第58図　ＳＫ8059遺物出土位置図



第59図　ＳＫ8059出土遺物

たが、およそ90m離れた３Ｂトレンチの土器群Ⅵより検出されたほぼ同様の二分の一の破片と接合した。人為的に分割され、別々の地点に埋納或いは廃棄された可能性も考えられる資料である。以上のような土器出土状況と土坑の形態からみてＳＫ8059は、土器を用いた人為的行為に伴う遺構と考えられる。

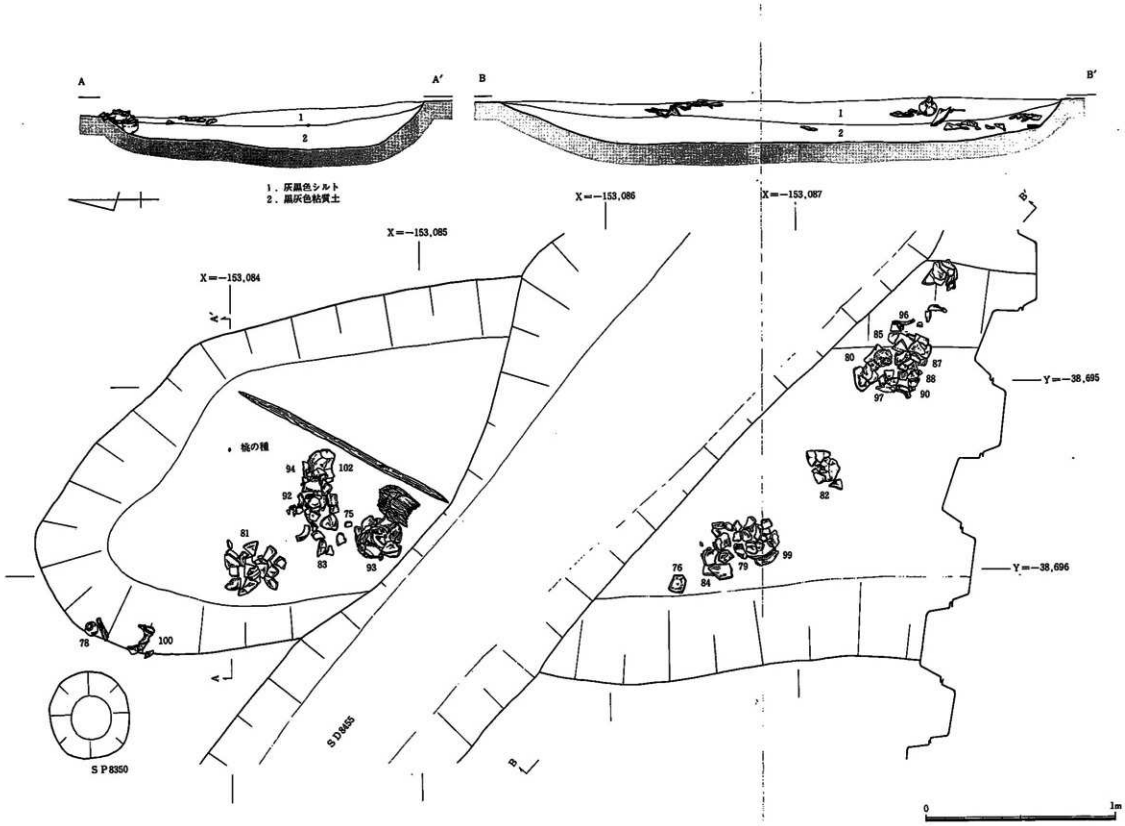
出土遺物（第59図）

66は小型の鉢である。赤褐色を呈し下半に黒斑を有す。深い体部に短く屈曲する口縁部を持つ。外面下半は単位幅が狭く強いヘラ削りが施され、上半には一部指押えとハケ目が残る。内面はナデ調整による。72は高杯杯部である。水平に近い杯底部より外彎ぎみに斜め上方に口縁部が伸びる。内外面とも横方向の後斜方向にヘラ磨きが施される。67～69は甕である。67は小型で口縁径

約12.8cmを測る。体部外面はタタキ目の後、下半にハケ目が施される。体部側面には径約3cmの孔を穿つ。73は大型の甕の体部下半である。外面は粗いタタキ目、内面はヘラ削りによる。体部は復元最大径約28cmを測る。70・71・74は壺であり、形態的に壺と甕の中間的器形を持つ。ＳＫ8059の遺物は、全体的に器壁が厚く、粗いタタキ目など本遺跡においてＳＫ8057に後出するやや古い様相を示す遺物群である。

ＳＰ8350　Ｘ＝－153,082、Ｙ＝－38,697付近、ＳＤ8456北端部西側で検出されたピットである。径約45cm、深さ約20cmを測る。埋土は、上半が灰黒色シルト、下半は粘質土である。遺物は、炭化物を除いて全く検出されない。柱の痕跡も認められず、単独で存在することから、建物を構成するピットとは考えられない。３Ｃトレンチ北端で検出されたピット群と同様の性格のものであろう。

ＳＤ8456（第60図）　４Ｃトレンチ南半、Ｘ＝－153,082～－153,087、Ｙ＝－38,695で検出された溝である。主軸方向は、ほぼ南北方向を示す。北端部は丸く終結し、南側は調査区外へさらに延びる。検出長約５ｍ、最大幅約2.1ｍを測る。又、ＳＤ8455との切り合い関係により、斜め方向に横断する形で中央部分を欠く。深さは最大で約20cmを測る。底部は北端部より南に向けて傾斜を示し、徐々に深さを増す。埋土は、上下２層に分層される。下層は黒灰色粘質土で、底部より10～15cm堆積し、遺物の出土が比較的希薄な部分である。上層は、灰黒色シルトで炭化物を多く含む層である。下層上面から上層にかけて、多数の遺物が検出された。ＳＤ8456は、遺構の切り合い関係よりＳＤ8455に先行して形成・埋没した溝である。ＳＤ8456における主要な遺物の出土位置は第61図に示す通りである。出土遺物の分布は、１個体、或いは数個体でそれぞれグループを形成する。溝北端部の西側肩部からはミニチュアとも言える小型壺１点と、ほぼ１個体分の甕口縁部が、炭化した木片とともに検出された。小型壺78は、口縁を上にし、甕口縁部100は伏せた状態で検出された。北半中央部からは、大きく３つのグループの土器と加工木が検出された。北側のグループからは、高杯81が１個体分検出された。中央のグループからは、甕３個体分92・94・102と鉢75などが検出された。甕94・102は、検出地点でつぶされたと思われる状態であった。南側グループは、甕93の上半部１個体分である。口縁を下にし伏せた状態にあったものと思われる。又、この甕の東側からは、厚さ約10cmを測り、表面の一部に焼けた痕跡のある木片が検出されたが、残存状態が悪く原形を留めない。さらにこれら遺物群に沿って長さ約1.2mを測る棒状の加工木も出土している。南半からは４つのグループの土器が検出された。西側のグループは、甕99、壺84それぞれ１個体分ずつである。高杯82は、溝のほぼ中央付近に当たる。東側には、溝の肩部分に甕101があり、やや内側よりに直口壺85、小型器台80などが混在して検出された。溝中央部分は、埋没後、ＳＤ8455によって破壊されており、この間についての遺物の分布状況は不明である。全体として、甕は口縁を下にし、壺・高杯の類は口縁を上にして検出される傾向を示す。これらの遺物は、黒褐色粘質土が溝下半に堆積後に設置されたものである。又、埋土内からは、桃の種核も検出された。

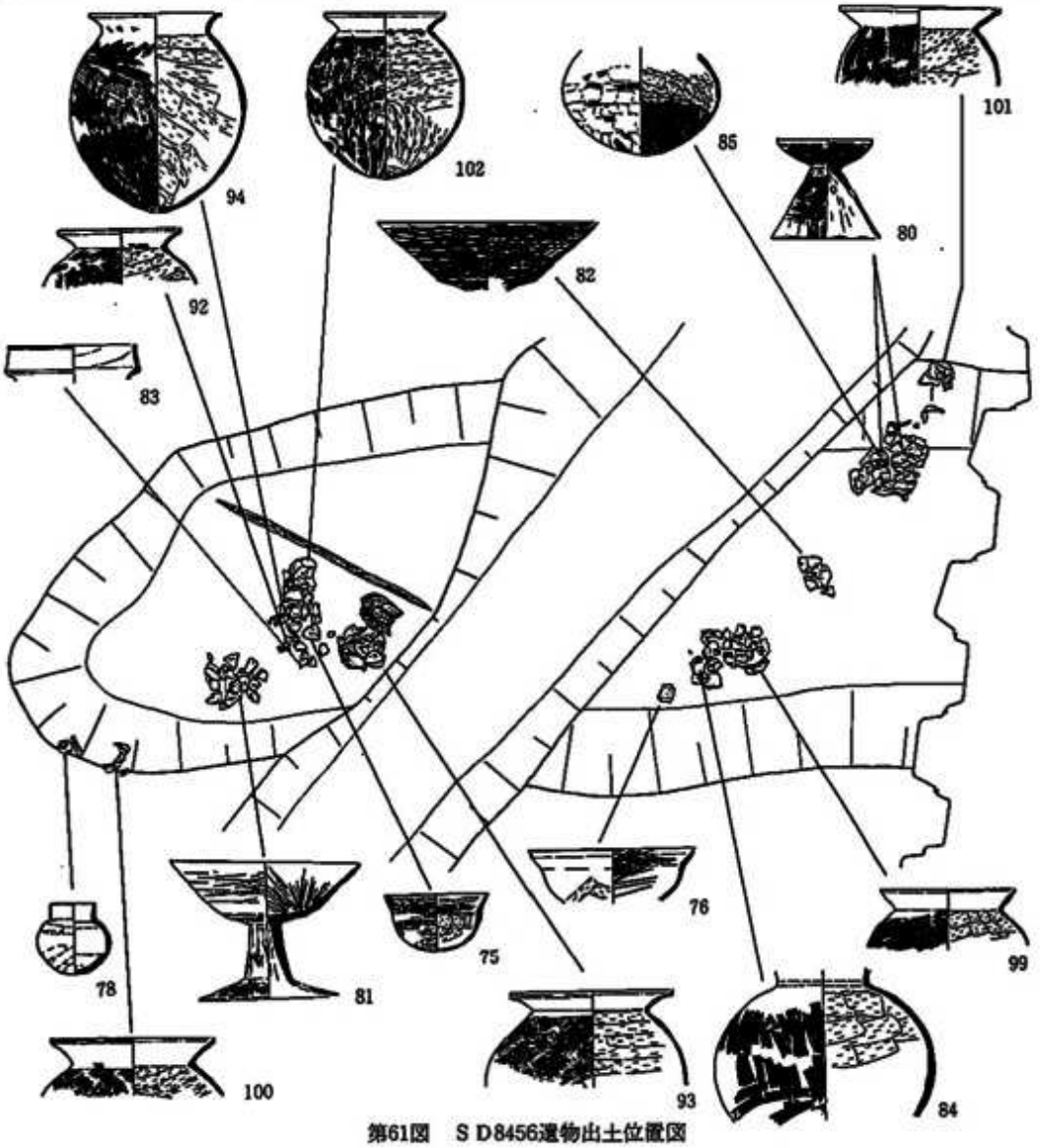


第60図　ＳＤ8456遺物出土状況

出土遺物（第62図　第63図）

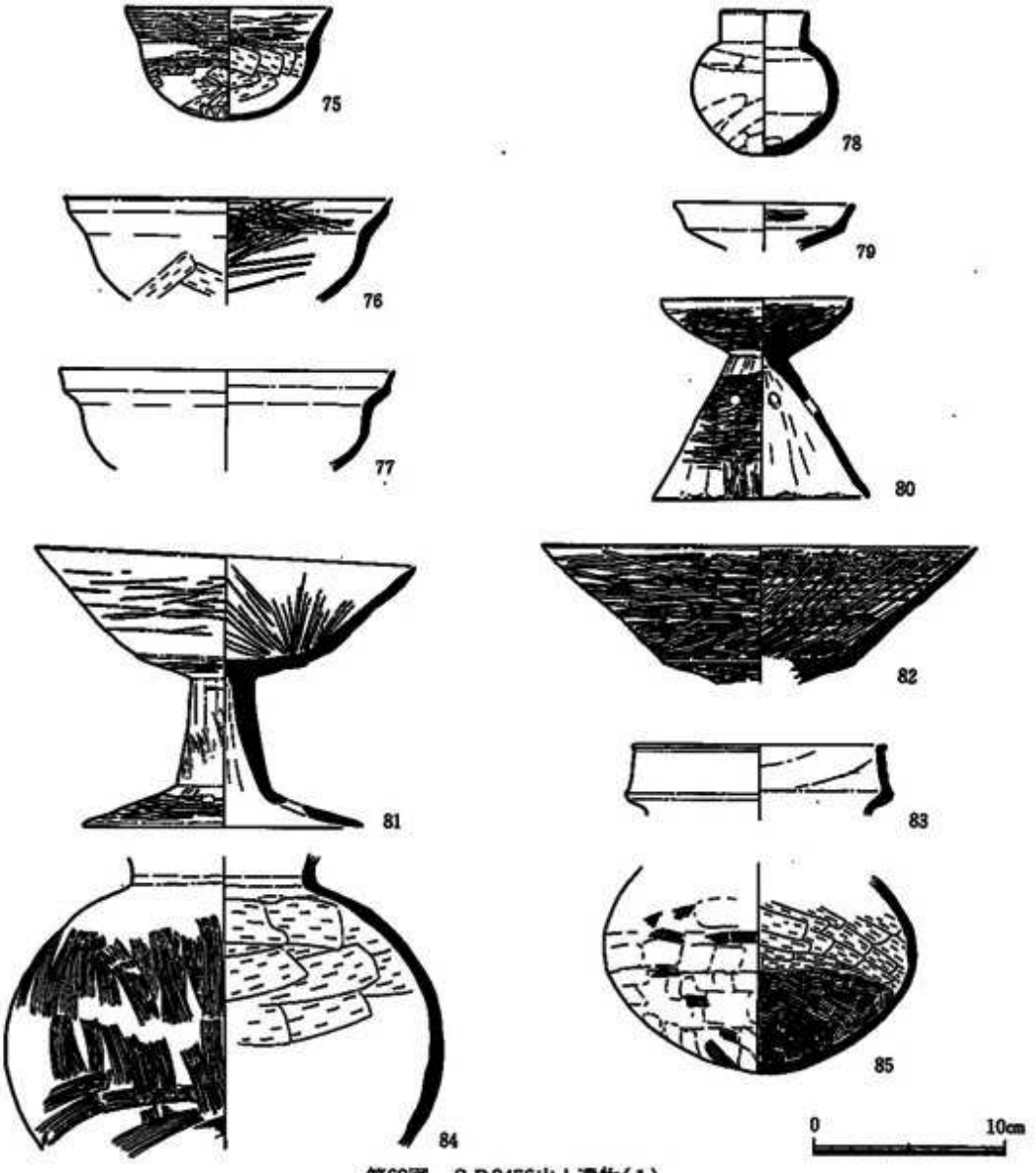
ＳＤ8456より出土した遺物は、コンテナ総数約５箱を数える。検出した遺物の内、実測し得るものは破片を含めその大半を図化した。

75～77は、鉢である。半球形に近い体部に斜め上方に短く屈曲する口縁部をもつものと、浅い体部に２段に屈曲する口縁部をもつものがある。いずれも体部外面下半はヘラ削りによる。75は体部内面にもヘラ削りが認められ、口縁部外面は横方向のハケ目が施される。78は、ミニチュアとも言える小型壺である。ほぼ球形に近い体部に垂直に短く立ちあがる口縁部を持つ。口径約4.5cm、器高7.6cmを測る。調整は内外面ともナデによる。79・80は小型器台である。79は、杯部の小片である。口縁部は斜め上方に延び、杯部がやや深くなる傾向を示す。外面は横ナデにより、内面にはヘラ磨きが一部に残る。80は、やや丸みをもった杯部に上方につまみ上げた口縁端部を

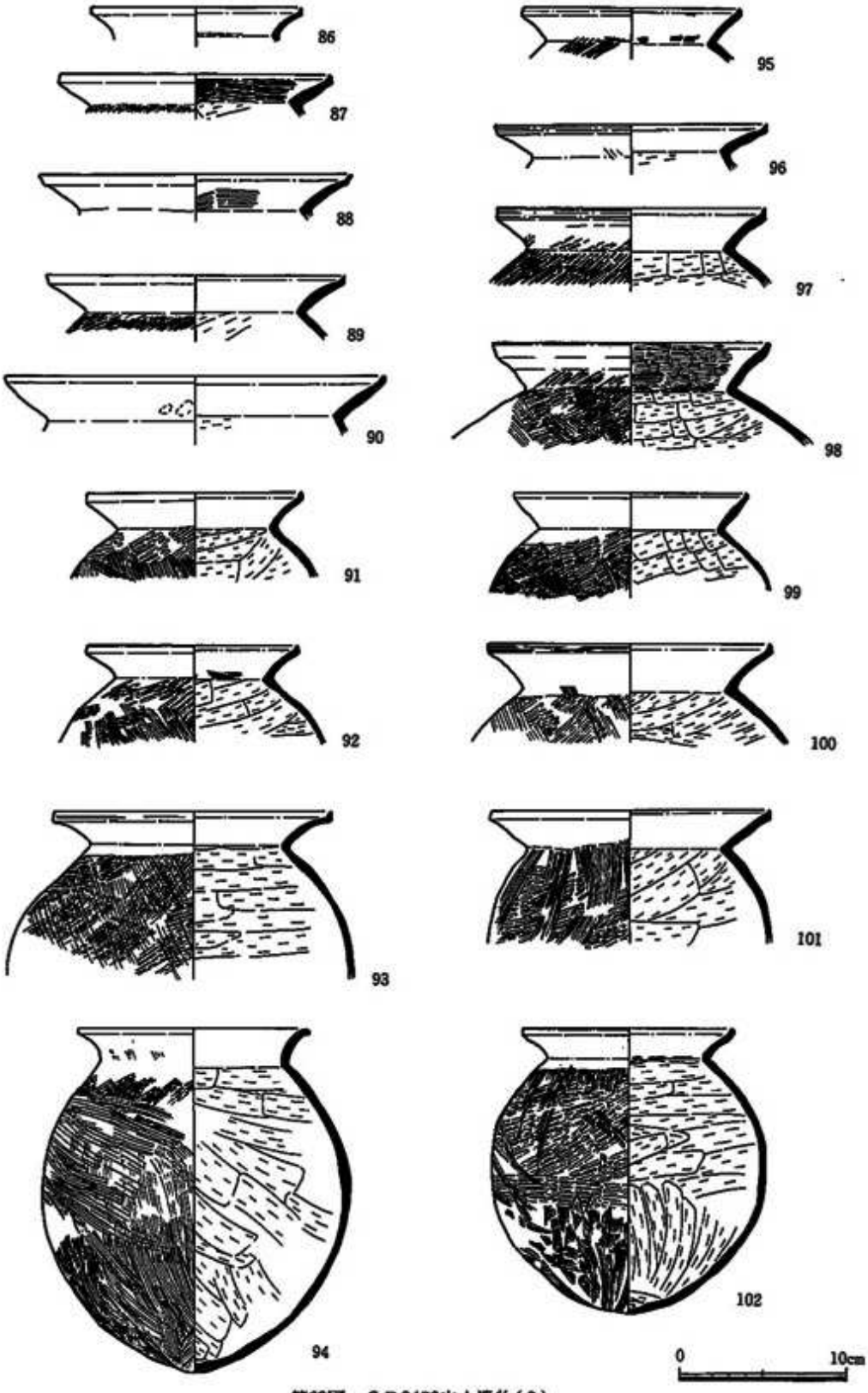


第61図　ＳＤ8456遺物出土位置図

持つ。杯部は内外面ともヘラ磨き、脚部外面は縦方向のヘラ磨きが施され、孔を４方に穿つ。81・82は高杯である。81は、暗灰褐色を呈し、口縁部径約20cm、脚下端径約14.5cm、器高約14cmを測る。器壁表面はかなり剥離するが、外面及び内面には、総てヘラ磨きが施される。脚裾部には孔を４方に穿つ。全体にややシャープさを欠く。82は、高杯杯部の破片で脚部を欠く。ほぼ水平な杯底部より屈曲し、斜め上方へ直線的に延びる。外面は基本的に横方向、内面は横方向の後に斜め方向のヘラ磨きが施される。83は、他地域産の可能性が考えられる土器の口縁部である。淡白褐色を呈する。体部より短く屈曲した後、さらにやや内傾ぎみに立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は外側へやや肥厚し、上部にほぼ水平な平坦面を持つ。復元口径約13cmを測る。調整は横ナデによる。84・85は壺である。84は、頸部から体部下半にかけての破片で、口縁部及び底部



第62図　ＳＤ8456出土遺物（１）

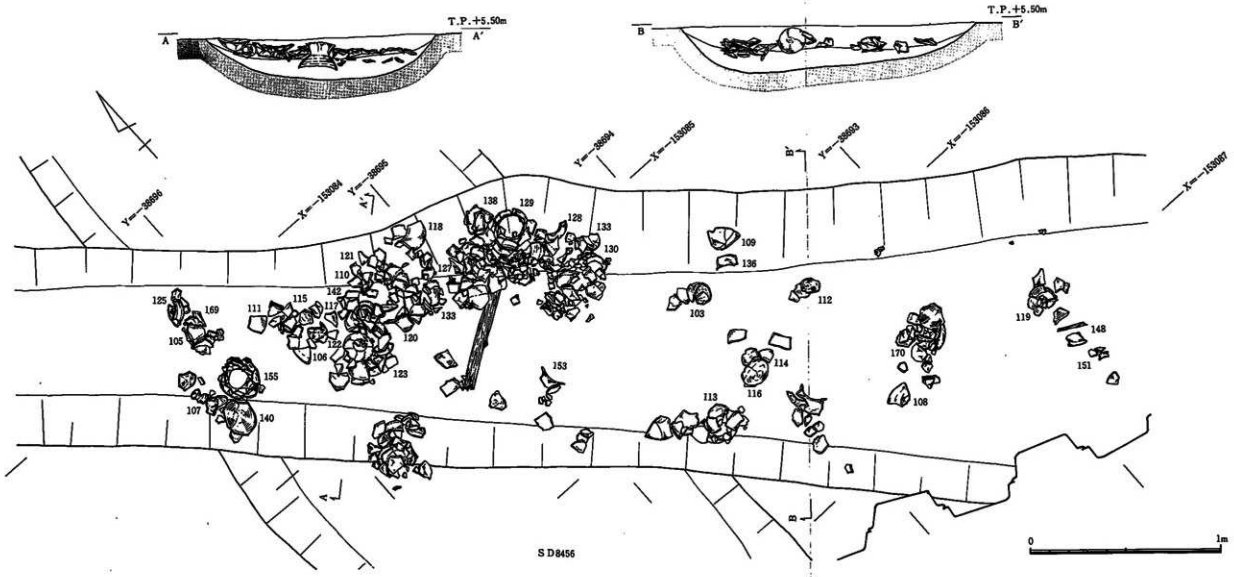


第63図　ＳＤ8456出土遺物（２）

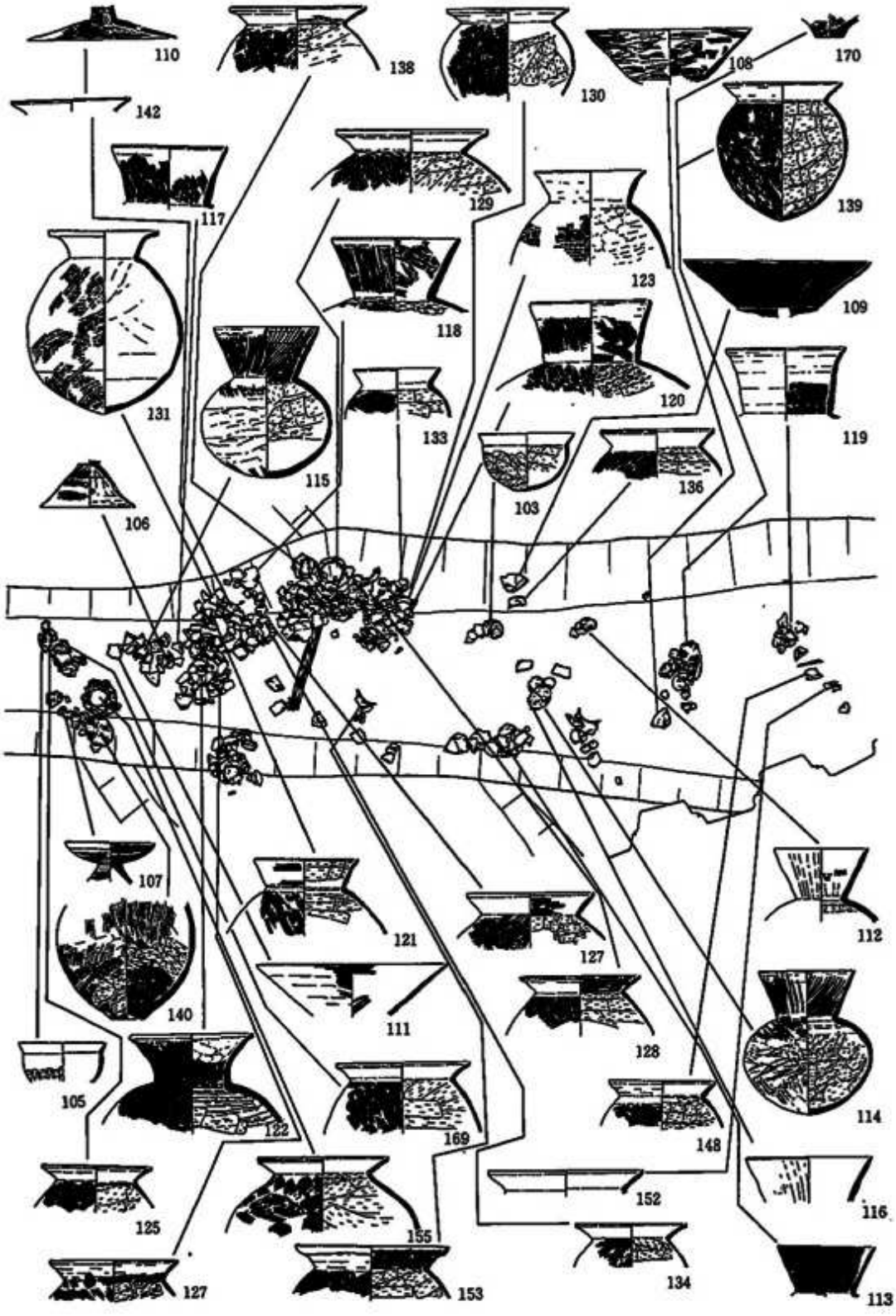
を欠く。体部外面は、上半が縦方向のハケ目、下半が斜め方向のハケ目が施される。内面上半はヘラ削りによる。85は、直口壺の体部で、口縁部を欠く。やや偏平な球形を呈し、底部は尖りぎみに納める。外面は、ヘラ状の工具でやや強くナデられており、部分的にハケ目も認められる。内面はヘラ削りを施されるが粘土紐の継ぎ目も明瞭に残る。

86～102は甕である。大半は外彎する口縁で、端部は上方につまみ上げるものである。体部外面はタタキ目の後、体部上半まで、或いは上半近くまでハケ目が施される。頸部屈曲部内面はヘラ削りにより、シャープな稜を持つものが多い。90・99など、内彎傾向を示すものも若干含まれる。95は、やや胴長で尖りぎみの底部をもつ。口縁部は強く外彎し、壺的な形状を示す。淡灰白を呈し、器形・胎土ともやや異質なものである。外面は、タタキ目の後下半は縦方向、上半に斜方向のハケ目が施される。口径約14cm、器高約21cmを測る。甕は、口縁部の破片、又は口縁部から体部上半のものが大半を占め器形全体を復元し得たものは、94、102の２点のみである。完形品及び底部、口縁部を含む破片により認識した個体数は、壺２点、甕25点、鉢３点、高杯３点、小型器台２点である。

ＳＤ8455（第64図）　４Ｃトレンチ南半で検出されたＳＤ8456と交差する溝である。主軸方向は、Ｎ－45°－Ｗを示す。西側は、攪乱によって欠損し、東側は、調査区外へさらに延びる。攪乱部を挟んで西側に当たる位置の３Ｃトレンチに ＳＤ8454が存在するが、幅、方向性、遺物の出土状況などに異なる点が多く、別の溝と考えられる。検出長約8.5m、東端で幅約1.8m、西端では幅約１ｍを測る。深さは20～25cmを測る。埋土は、大きく上下２層に分層される。下層は、底部より約10cmの厚さで堆積する黒褐色粘質土である。下層からの遺物の出土は比較的少ない。上層は黒褐色シルトである。下層上面から上層において、多数の遺物がまとまって検出された。ＳＤ8455は、遺構切り合い関係よりＳＤ8456、ＳＫ8059に後出する遺構である。本遺構における主要な遺物の出土位置は、第65図に示す通りである。出土遺物の分布は、検出部分の中央付近、ＳＤ8456との交差部分の北寄りに列状に集中するグループと、検出部分の東半にいくつかのグループが散乱した状態で検出された。中央の列状に集中する部分は、大半が壺、甕で構成される。個々の個体は、完形に復元されないが、口縁を中心として個体ごとにまとまりを持って押しつぶされた状態で重なり合って検出された。全体的な傾向として、壺は口縁を上にして、甕は口縁を下にして伏せられた状態にあるものが多い。壺、甕以外の器種は極めて少ない。又、土器列の下より棒状の加工木も１点検出された。東半より検出された遺物には完形に復元できるものは少なく、破片が多い。東端部のグループは、壺の口縁部119が上向きの状態で検出された他、甕の口縁部などが検出された。その西側0.6m付近では、甕139が１個体つぶれた状態にあった他、高杯杯部108の破片などが検出された。その西側から土器列の間では、鉢約½個体103、横向の状態のほぼ完形に復元可能な直口壺114、 直口壺の口縁部116・112、甕口縁部128・136、高杯杯部の破片109などがやや散乱した状態で検出された。土器列に比べ、破片ではあるが器種がやや豊富である。土器列に関しては、人為的に設置された可能性が十分考えられる。



第64図　ＳＤ8455遺物出土状況

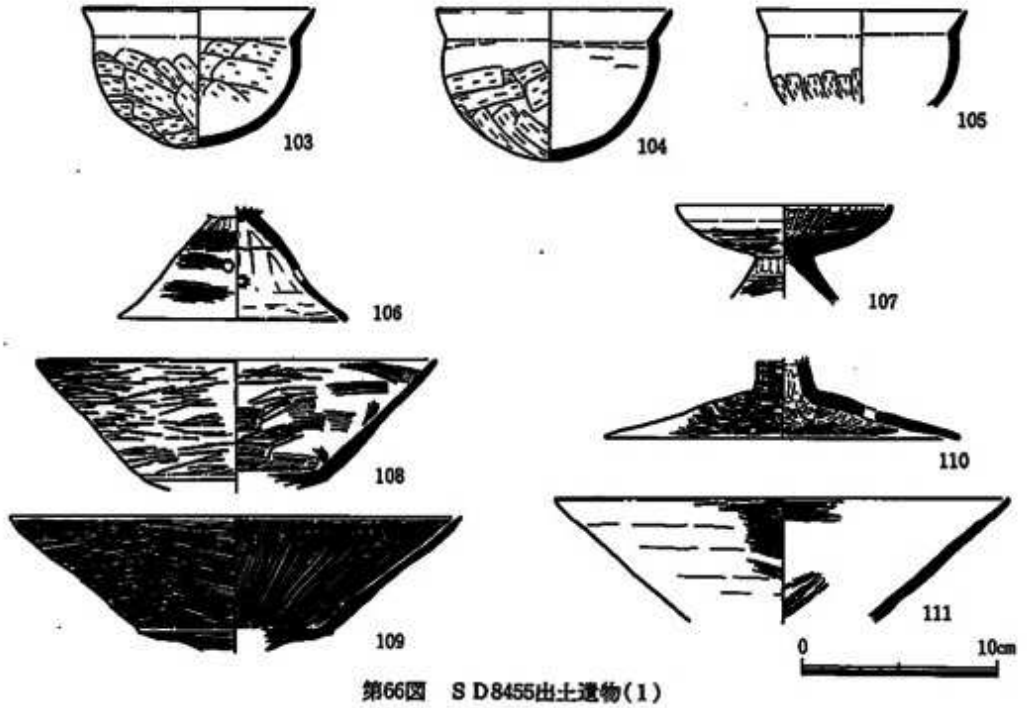


第65図　ＳＤ8455遺物出土位置図

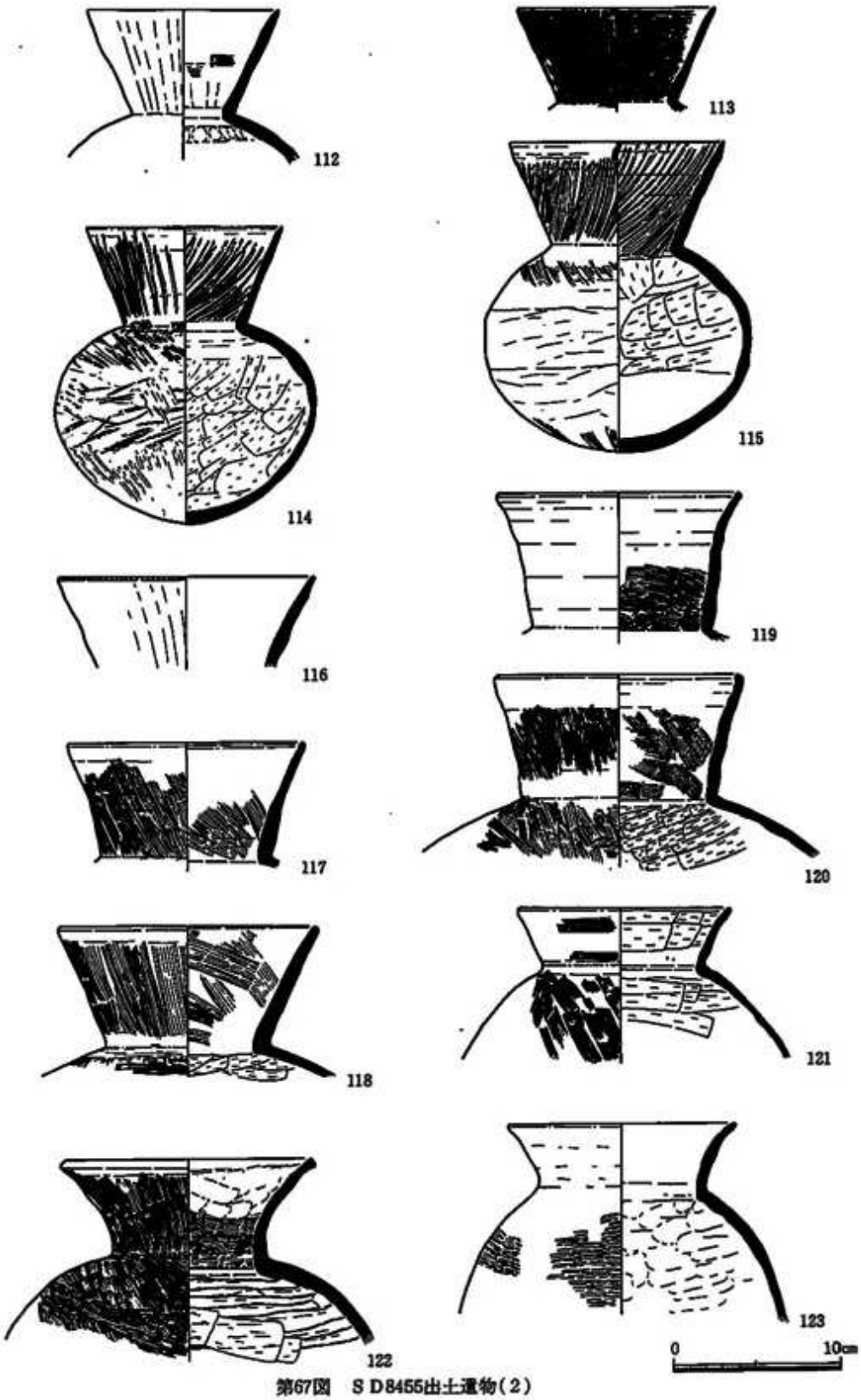
出土遺物（第66図、第67図、第68図、第69図）

ＳＤ8455より出土した遺物は、コンテナ総数約10箱を数える。検出した遺物の内土器は、可能な限り復元作業を実施した後、個体数を判別するため完形品と口縁部及び底部を含む破片を抽出し、実測し得るものは破片を含めその総てを図化した。

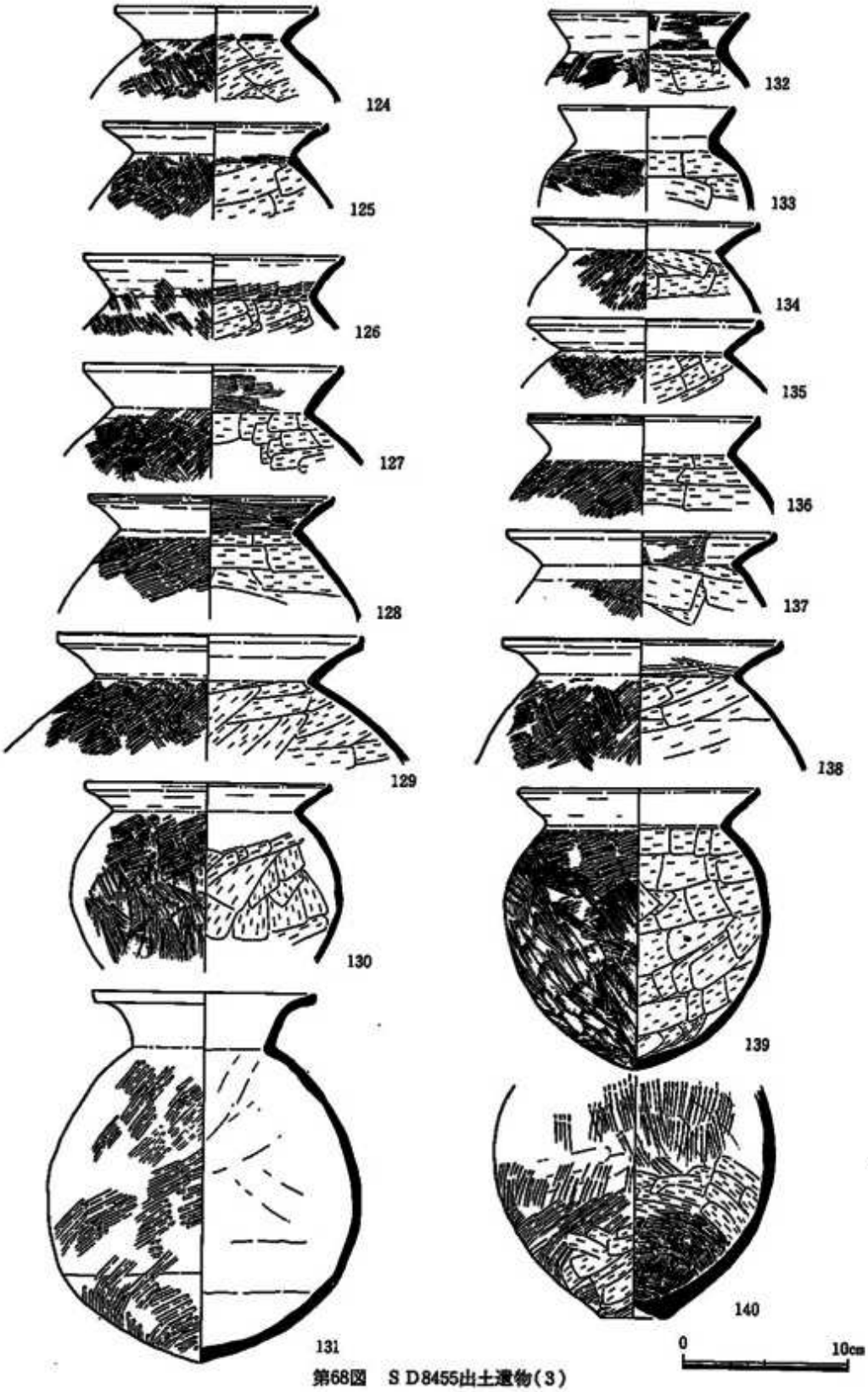
103～105は、鉢である。いずれも半球形に近い体部に斜め上方に短く屈曲する口縁部を持つものである。体部下半はヘラ削りにより、他は基本的に横ナデによる。106は、やや裾広がりで低い形状を持つ小型器台の脚部である。赤褐色を呈する。４方に孔を穿つ。107は、小型器台である。108・109・110は、高杯杯部の破片である。いずれも水平な杯底部より斜め上方に直線的に伸びる。110は、低脚高杯の脚部である。112～115は、直口壺である。いずれも口径12～13cmを測り、ほぼ球形の体部をもつ。口縁部内外面にはヘラ磨きが施される。体部内面は、ヘラ削りが施されるが、粘土紐の痕跡も明瞭に認められる。体部外面は、横方向のナデを基本とし、ハケ目、ヘラ磨きが併用される。114の体部外面には、タタキ目の痕跡が残る。116～120は、短頸壺である。116は、復元口径約16cmを測り、口縁部に刻み目をもつ。117・118は、復元口径14～16cmを測り、外面に縦方向のハケ目が施される。119・120は口縁部が高さ約８cmを測り、垂直気味に立ち上がるやや大型のものである。121～123も広口壺である。外面全面にハケ目が施されるもの122と、タタキ目の残るもの123がある。131も広口壺である。赤褐色を呈し、下ぶくれの体部に尖りぎみの底部を持つ。他は、甕である。完形まで復元されたものはほとんどなく、大半が口縁部より体部上半のもの、或いは口縁部の破片である。甕は基本的に口縁が外反し端部をつまみ上げるものが主流を占め、内彎傾向を示すもの、端部が丸く終わるものがそれに次ぐ。調整では



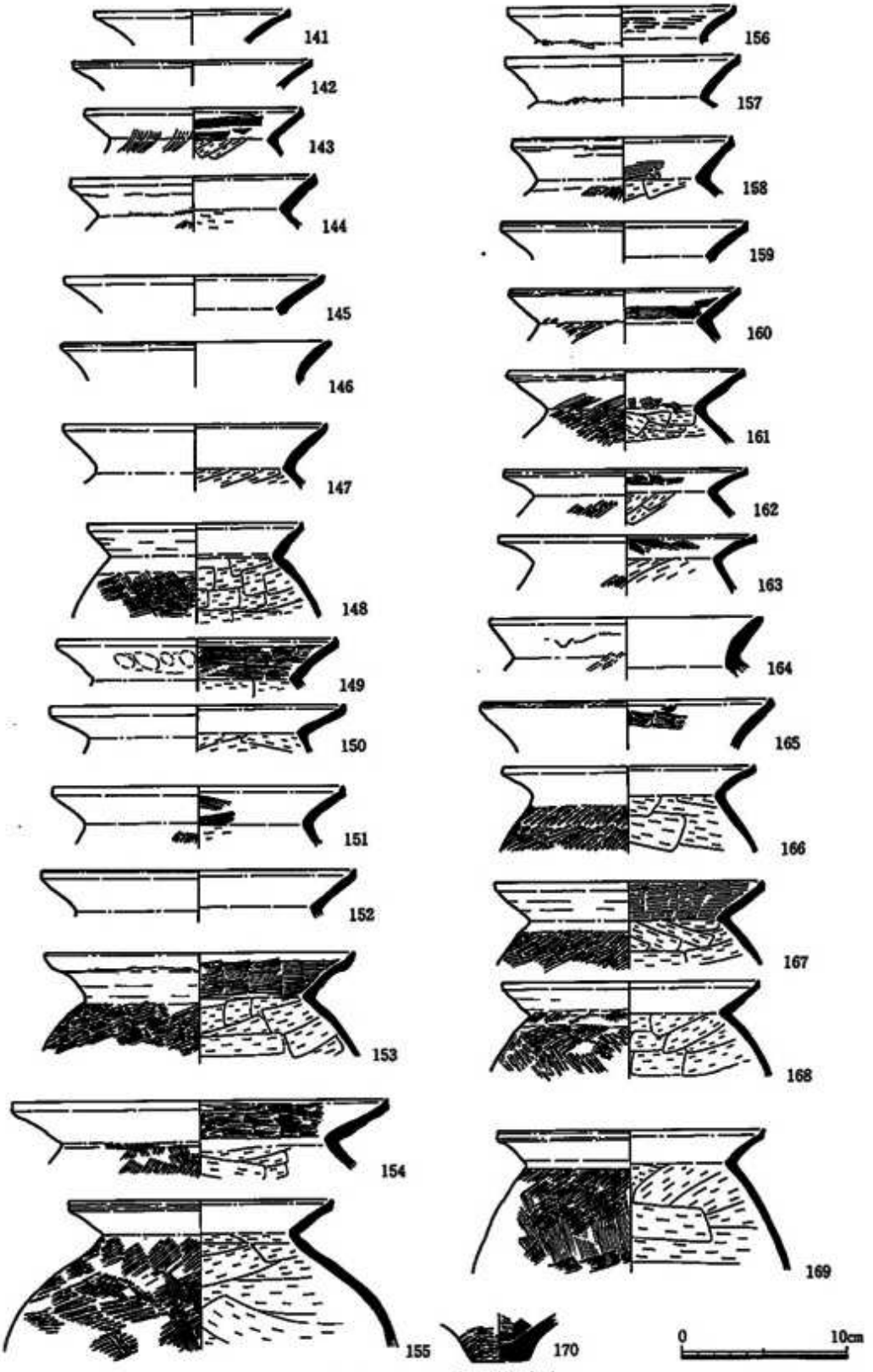
第66図　ＳＤ8455出土遺物（１）



第67図　ＳＤ8455出土遺物（２）



第68図　ＳＤ8455出土遺物(３)



第69図　ＳＤ8455出土遺物（4）

体部外面にタタキ目が全面に施された後、ハケ目が体部上半にまで及ぶものが大半を占める。内面はヘラ削りによる。

2．古墳時代前期II（付図　7）

基本的には、第X層下半で検出される遺構群である。第X層中の各間層は、部分的にしか検出することができず一定しないが、上半で検出される遺構群の下層で別の遺構群が第X層下半で検出された。これらの遺構群は、おおむね近似した時期に当たるものと考えられるが、トレンチによっては複数の遺構面にわたって検出されたものもあり、単純な遺構面としては検出し得ていない。従って古墳時代前期II遺構面は、それら第X層下半より検出された遺構群を、検出状況、埋土、方向性などから切り合い関係について整理したものである。

A地区では、微妙に方向性が異なる3時期の小溝が重複して検出された。

B地区北半では、東西方向と南北方向の2時期の小溝群と、若干の不定方向の小溝が存在する。南半では、遺構の存在は希薄となるが、6Bトレンチを中心として、小溝やピットなどが検出された。

C地区では、北端で数条の小溝と小穴群、南半で溝、小溝、ピット、土坑などで構成される遺構群が検出されたが、遺構検出面付近まで攪乱を受けており、遺構の残存状況は悪い。

全体として、調査区北部を中心に、数時期の小溝群が重複して存在する他、それに先行して方向を一定にしない小溝群などが若干存在する状況を示している。以下、各地区ごとに述べる。

（1）　A地区

切り合い関係より大きく3時期の小溝群に分けられる（第70図）。

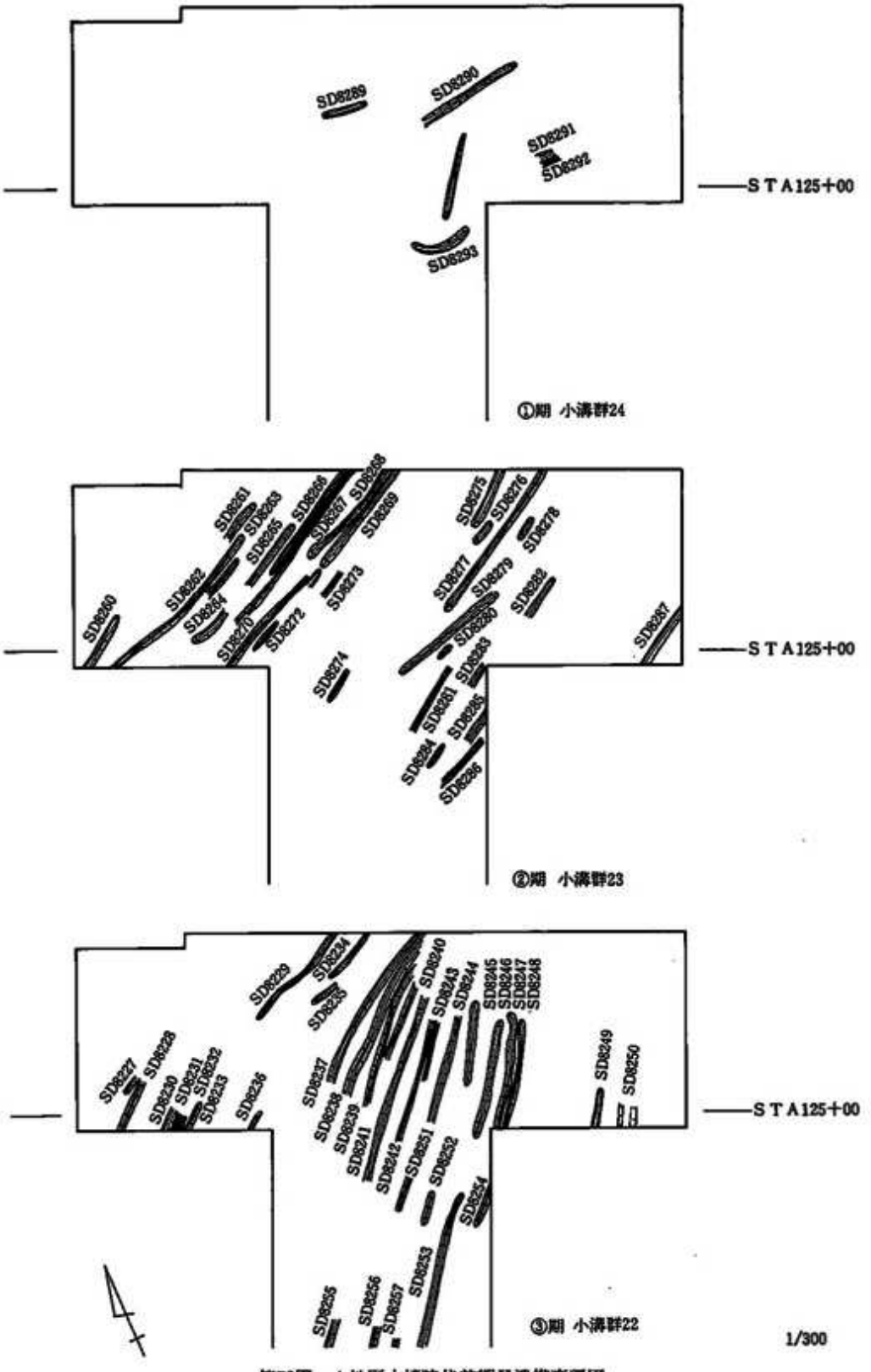
①期の遺構

小溝群24　後出する遺構との切り合い及び整地・削平を受けた遺構群とみられ、検出された遺構は極めて少ない。SD8289～SD8292が検出された。ほぼ東西方向を示し小溝群の一部が残存したものと考えられる。検出した小溝は、極めて断片的であり、小溝群の全容については不明な点が多い。

その他の小溝　切り合い関係より最も古い段階に形成されたと考えられるが、小溝群24に帰属するとは考えられない方向を示す小溝2条が検出された。SD8293は、X＝－152,924付近のトレンチ部東半で検出されやや弧を描く小溝である。検出長約2.5m、幅約30cmを測る。SD8459は、SD8293の北側で検出されたN－30°－Eの方向を示す溝である。検出長3.5mを測る。小溝群24との前後関係については不明である。

②期の遺構

小溝群23　SD8260～SD8288で構成される小溝群である。N－60°－E前後の方向性を持つ。個々の小溝は、幅30～40cmを測り、深さは5～10cmである。小溝の間隔は、数cmから40～50cmと一定しない。それについては残存状況に起因するものと思われるが、同一の方向性を持つ小溝群が重複する可能性も考えられる。又、SD8260～SD8273、SD8274～SD8286は、共に幅約



第70図　A地区古墳時代前期Ⅱ遺構変遷図

7.5mの間にややまとまりを見せ、2つのグループを形成する傾向を示す。2つのグループの間隔は約3mを測り、SD8286とSD8287、SD8288との間隔も約2mを測る。SD8287東側調査区外にも小溝群が広がることが十分考えられ、小溝群23は、本来、幅7.5mの範囲に形成される小溝群が、約3mの間隔を置いて連続する形態を採っていた可能性が考えられる。

③期の遺構

小溝群22　SD8227～SD8259で構成される小溝群である。N－30°－EからN－45°－Eの方向を示し、やや放射状を呈した分布状況を示す。各小溝の間隔は、南に向けて広がりを見せ、調査区の北側で集中するかのような傾向を示す。個々の小溝は、幅約30cmを測り、深さは5～10cmである。東端に当たるSD8250は、幅約50cmを測る。各小溝の間隔は、ほぼ平行になる南半部分で、60～70cmを測る。

これらA地区で検出された小溝群22～24は、炭化物を多く含み、緑灰色シルトを含む第X層下半の灰黒色砂質土をベース層とする。個々の小溝の埋土は、いずれもベース層よりも炭化物をやや多く含み、若干粘質をもつ黒褐色シルトで、あまり差異は認められない。又、小溝群検出面、及び各小溝埋土から土器片が検出されているが、包含層的出土状況を示し、小溝群に直接伴うとは限定されないものである。総じて小溝群付近からの遺物の出土量は少量である。

（2）　B地区

B地区北半遺構群

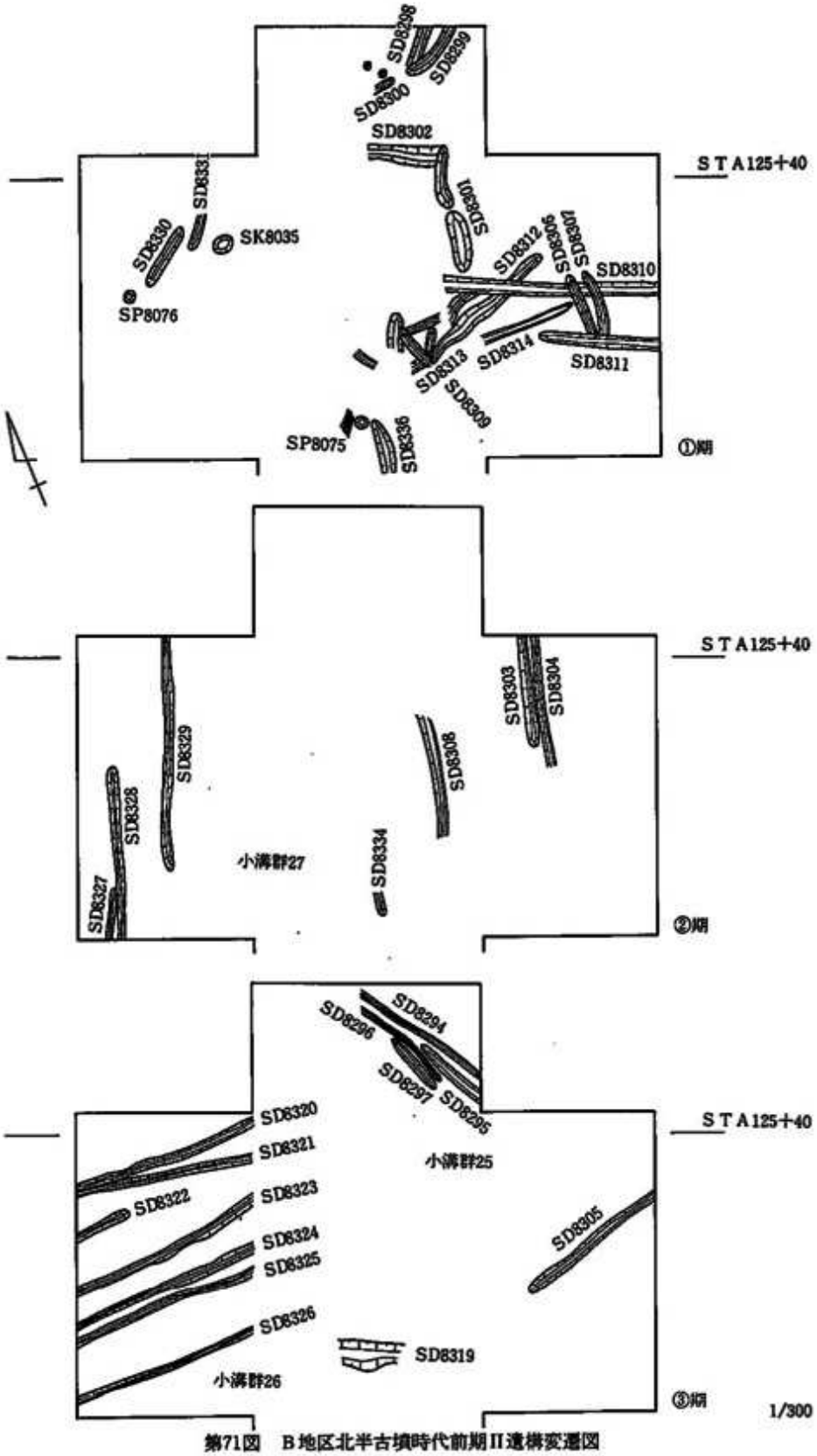
各遺構の切り合い関係を整理することにより大きく3時期に分類される（第71図）。

①期の遺構

後出の遺構群と異なり一定の方向を示さない小溝が検出された。切り合い関係より最も先行して形成された遺構と考えられる。①期とした個々の遺構には切り合い関係にあるものもあり、さらに細かな形成過程を示している。検出された遺構は、残存状況が悪く非常に断片的であるため、性格については不明な点が多い。①期に属すると考えられる遺構は、溝SD8298～SD8302、SD8306～SD8307、SD8309～SD8318、SD8330～SD8331の他、土坑SK8035、ピットSP8073～SP8076がある。埋土は、いずれも灰黒色系のシルト及び粘質土である。又、遺物の出土は少量である。

②期の遺構

小溝群27　SD8303・SD8304・SD8308・SD8327～SD8329・SD8334で構成され、調査区主軸にほぼ平行するN－30°－Wの方向性を持つ小溝群である。削平、整地を受けていると見られ、検出された遺構は断片的である。各小溝は、幅30～50cmを測る。埋土は、炭化物を多く含む灰黒色シルトである。埋土内より若干の土器片が検出されたが、少量である。各小溝の間隔は、断片的で不明な点も多いが、SD8327とSD8328、SD8303とSD8304が隣接するように走行することから、隣接して走行する数条の小溝で単位を形成して、一定間隔で連続していた可能性が考えられる。



第71図　B地区北半古墳時代前期Ⅱ遺構変遷図

③期の遺構

方向性の異なる２つの小溝群と、その他の溝２条が検出された。

小溝群25　Ｂトレンチ北端で検出されたＳＤ8294～ＳＤ8297で構成される小溝群である。Ｎ－30°－Ｗの方向性を示す。幅約２ｍの間に集中して検出されたもので、広がりなどは不明である。

小溝群26　１Ｂトレンチで検出されたＳＤ8320～ＳＤ8326で構成される小溝群である。ほぼ東西方向を示す。各小溝は、幅40～50cm、深さ約10cmを測る。小溝の間隔は、0.5～2.5mと一定しない。ＳＤ8321は、方向、間隔に乱れを示し、微妙に異なる。

ＳＤ8030　２Ｂトレンチで検出された、小溝群26と近似した方向を示す溝である。小溝群26の広がりを直接示すものかどうかについては不明である。

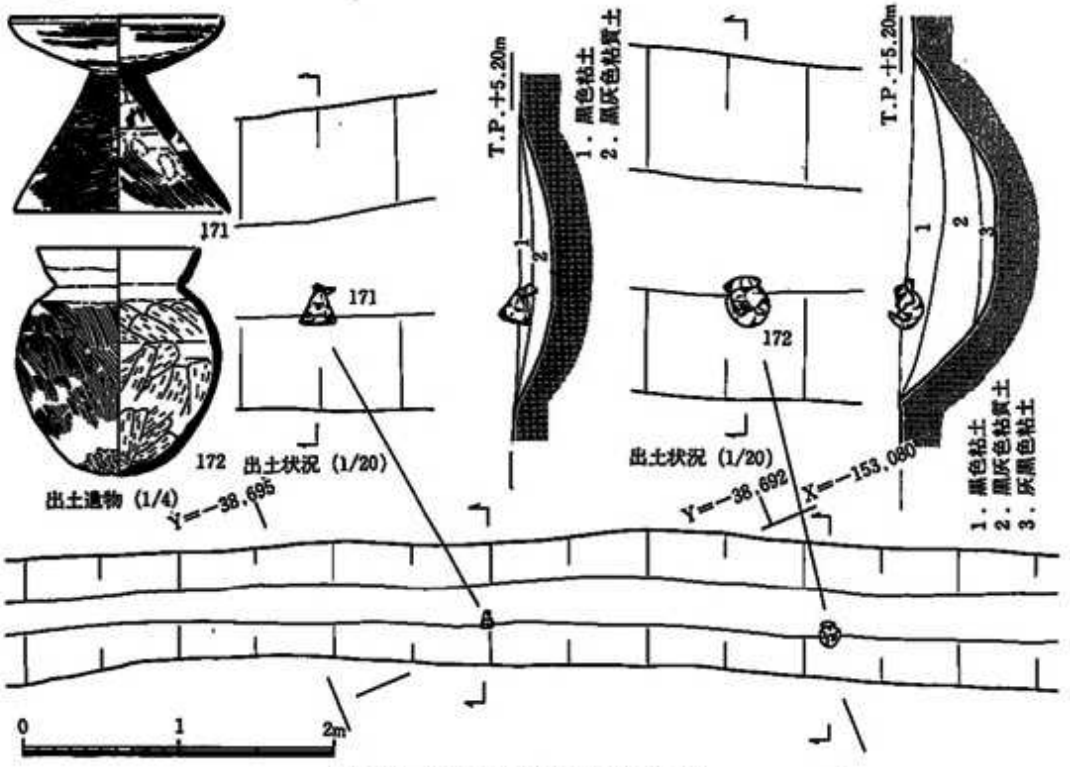
ＳＤ8319　Ｘ＝－152,968付近で検出された東西方向の溝で、幅約１ｍを測る。小溝群中の溝とは規模的にやや異なる。　（服部）

Ｂ地区中央部の遺構

１Ｂ・２Ｂトレンチ～３Ｂ・４Ｂトレンチの間で、Ｎ－20°－Ｗの方向を示す溝ＳＤ8335、ＳＤ8336、それに先行して直交する溝ＳＤ8337、ＳＤ8338の他、若干のピット、溝等が検出された。

（３）　Ｃ地区

３号墓下層遺構　Ｃ地区の北端に位置する。遺構面はＣ地区南半部の遺構面を形成する層と同一層の第Ⅺ層で、淡黄灰色砂を基層とする。遺構は、５条の溝と、20個の小穴群、土坑１基を検出した。

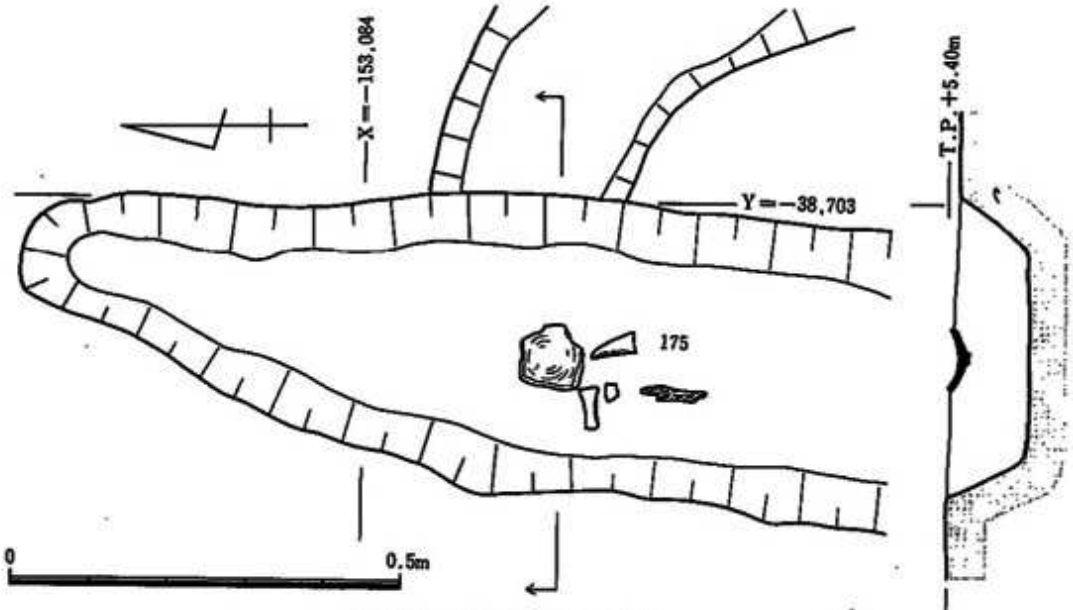


第72図　ＳＤ8360実測図及び出土遺物

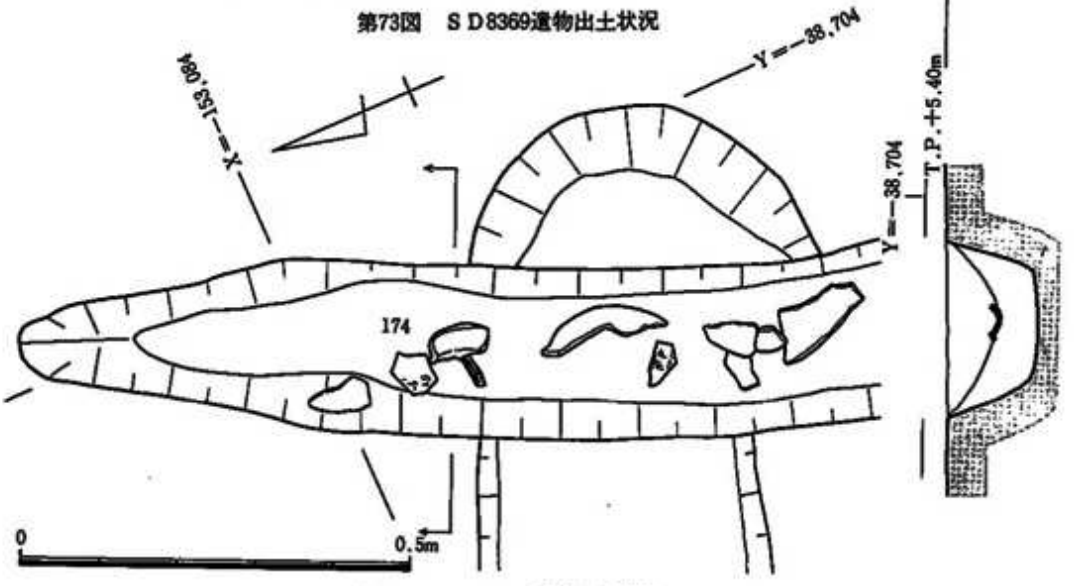
C地区南半遺構群で、前期Ⅱの時期の多くの落ち込み、溝、土坑、柱穴を確認した。前期Ⅱの時期では、ＳＤ8360より南側が生活面に当たるものと思われる。

ＳＤ8360（第72・75図）　C地区南に位置し、落ち込み8008Wと8008Eの南側約1.4m離れて位置する。４CからC地区に流れ、C地区で若干蛇行する。主軸はほぼ西北西－東南東方向におく。溝の断面形は逆梯形状を呈する。幅0.6～1.2m、深さ20～55cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。土器は壺173、器台171、甕172が出土した。

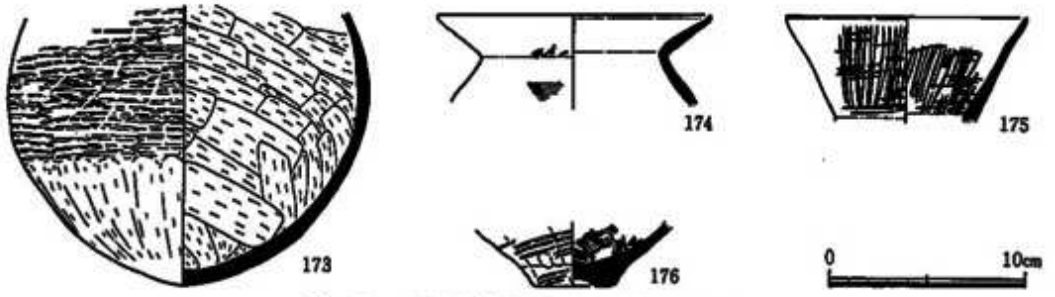
171は完形で、内外面に横方向のヘラ磨きを、脚部内面にハケ目を施す。172は体部外面にハケ目を、内面はヘラ削りを施し、別の粘土を以て補修した痕跡が認められる。173は体部外面をタタキ目、底部はヘラ削りを施す。内面はヘラ削りを施す。



第73図　ＳＤ8369遺物出土状況



第74図　ＳＤ8372遺物出土状況



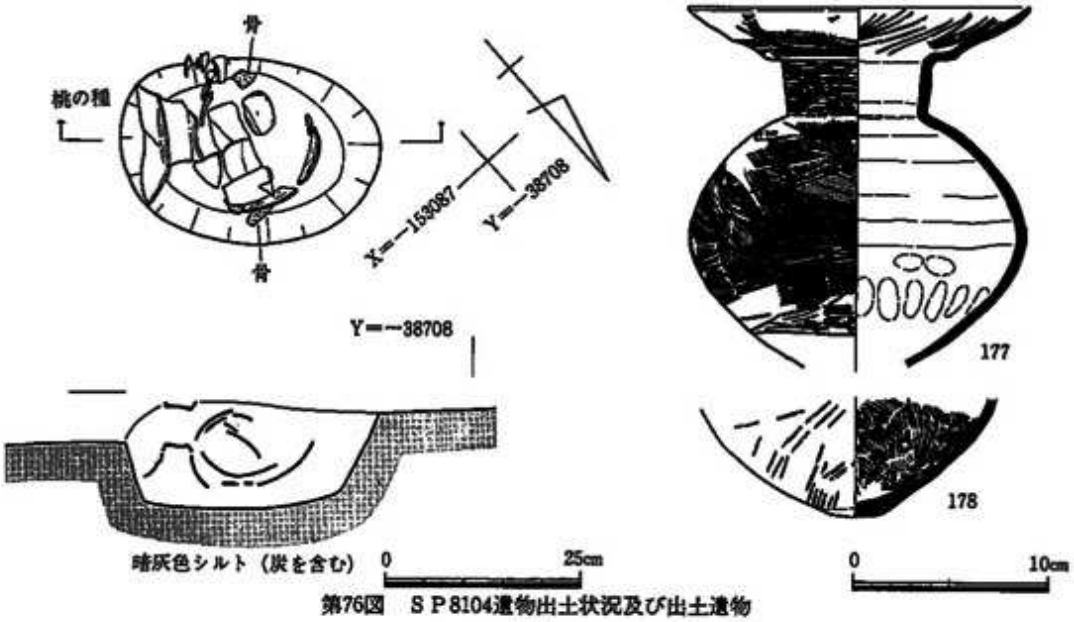
第75図　C地区古墳時代前期II遺構出土遺物

C地区南半遺構群

ＳＤ8361・8369・8372（第73図・74図）　土器を検出した溝である。ＳＤ8361とＳＤ8369は連続する可能性がある。ＳＤ8361はＳＤ8360付近で先ず南北方向へ主軸をとり、そして逆「く」の字に曲がりながら北北東－南南西に主軸を向けるようにしてＳＤ8369に至る。この溝と逆になるのがＳＤ8363である。幅60～38cm、深さ20～10cmを測る。遺物としては、甕176底部と直口壺175が出土している。ＳＤ8372はＳＤ8369の東に位置し、約0.7m離れる。溝は幅約20cm、深さ11cmを測る。

出土遺物（第75図）　174は、「く」の字形の口縁部をもつ甕である。176は、甕の輪台状の底部で、外面にタタキ目を施し、内面に強いハケ目を施す。174・176は生駒山西麓産である。175は直口壺の口縁部で、内外面ともヘラ磨きを施す。

ＳＰ8104（第76図）　C地区南半部の遺構群の西側約2.5m、X＝－152,987に位置する楕円形のピットである。二重口縁の壺１個体を納めた遺構である。長径34cm、短径25cm、深さ13cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。土器は口縁部を南東方向に向けて横へ水平に寝かし、更に別個体の壺底部で、底部をおさえていた。土器以外に骨片２片と、桃の種核１個を検出した。桃の種核は口縁部付近、骨片は土器の外側、体部付近で確認したものである。埋土は暗灰色シルトで炭



第76図　ＳＰ8104遺物出土状況及び出土遺物

を含んでいる。土器棺墓としての可能性があるが断定出来ない。

出土土器（第76図　図版六二）　177は二重口縁壺である。頸部は若干開きつつ直立し、中位に張りをもつ。口縁部は頸部から水平に伸びた後、斜め外方に屈曲し、端部を丸くおさめる。体部はソロバン玉状を呈し、底部はやや尖り気味に終わると思われる。調整は口縁部がヘラ磨き、体部は基本的にハケ目・ヘラ磨きによる。178は壺底部である。

落ち込み8008W・8008E　ＳＤ8306の北側に位置する。浅い不整形な落ち込みである。埋土は暗灰色粘土層である。

ＳＫ8039～ＳＫ8044　３Ｃ地区に集中する。平面形は、円形を呈する土坑（ＳＫ8042・8044・8045)、長円形の土坑（ＳＫ8039・8040・8041)、不整な円形を呈する土坑（ＳＫ8043）に分類される。また大きさによっても分類出来、径約0.6～0.9mの土坑（ＳＫ8041・8042・8044・8045)、1.2～1.4mの土坑（ＳＫ8039・8040)、径2.4mの土坑（ＳＫ8043）に分類出来る。

ＳＰ8090～ＳＰ8116　３Ｃ地区のＳＫ8043の以南と、Ｃ地区の溝群付近に集中する。ピットの大きさはほぼ同じである。一直線上に並ぶピットがある。ＳＰ8093・8097・8101・8100のグループとＳＰ8105・8108・8112・8113のグループである。これらのピットは掘立柱建物というより柵列であろう。　（小野）

３．古墳時代前期Ⅲ（付図　８）

第Ｘ層上半で検出される遺構群である。第Ｘ層は、部分的にではあるが、３～４層に大きく分層することが可能である。Ａ地区及びＢ地区では、その最上層に当たる第Ｘ層上部に、やや黒色度の強い灰黒色砂質土が、層厚５～10cmで平均的に堆積しており、古墳時代前期Ⅲ遺構面は、第Ｘ層中の最上層直下において検出される遺構群である。Ｃ地区では、第Ｘ層の堆積が薄く、古墳時代前期Ⅲ遺構面は基本的に検出されていないが、３Ｃトレンチでは、再び第Ｘ層の層厚が増し、古墳時代前期Ⅲ遺構面が分離して検出された。

Ａ地区では、方向の異なる３時期の小溝群とそれに後出する土坑の合計４時期に亘る遺構が複雑な切り合い関係を示して検出された。

Ｂ地区北半では、方向性を異にした小溝群や土坑などの遺構が、５つの時期に細分される複雑な切り合い関係を示して検出された。Ｂ地区南半においても、合計４時期に亘る切り合い関係を示す小溝群、土坑、ピットなどが検出された。

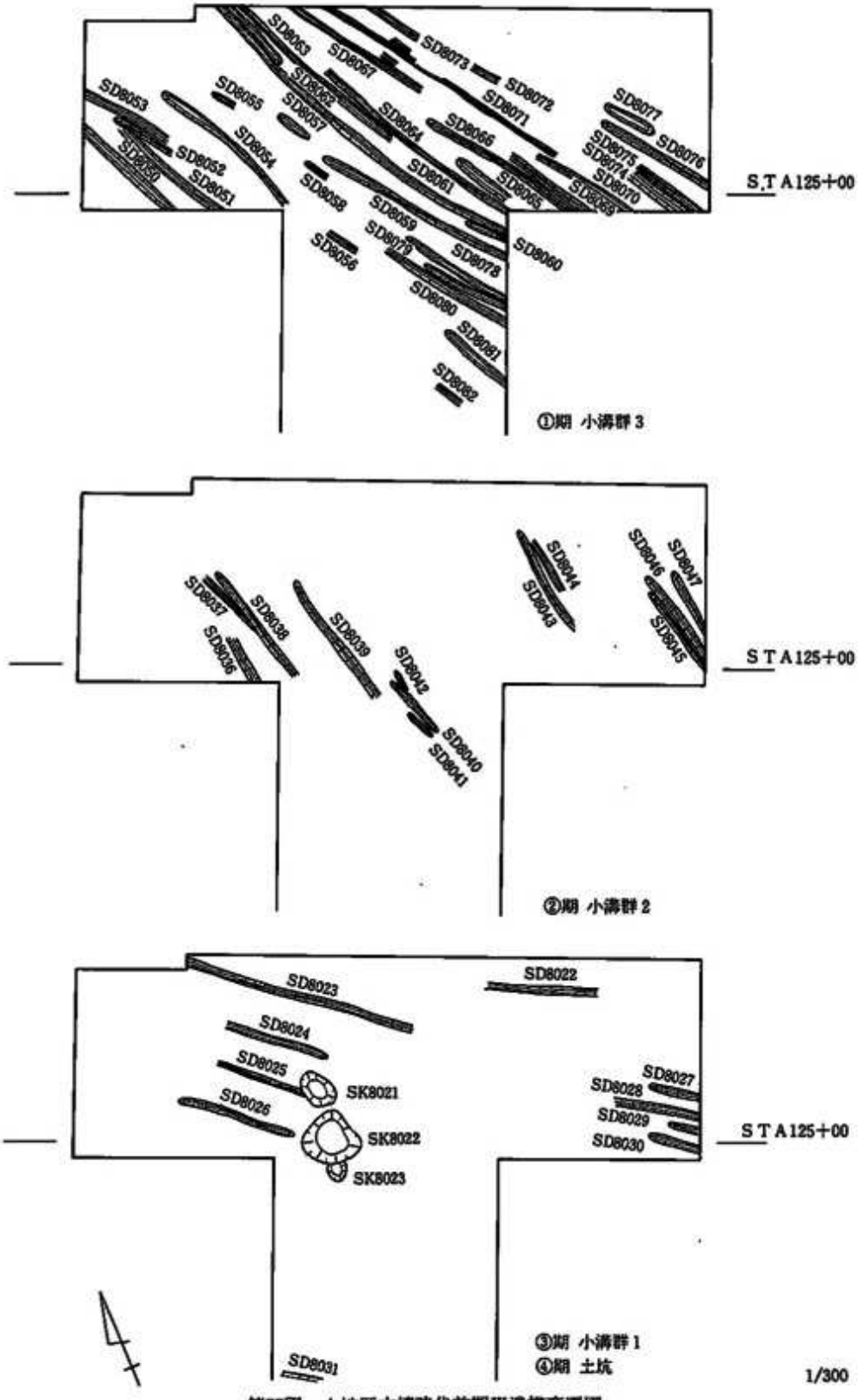
Ｃ地区南半に当たる３Ｃトレンチでは、２時期に分けられる小溝群が重複して検出された。

全体として、古墳時代前期Ⅲ遺構面には、Ｃ地区北半を除いて、調査区全体に亘って方向性を持った数時期の小溝群が重複して存在しており、それにやや後出して土坑、ピットなどが若干形成されている。

（１）　Ａ地区

検出された遺構の方向性、切り合い関係より、４つの時期に分類される（第77図)。

①期の遺構



第77図　A地区古墳時代前期III遺構変遷図

小溝群３　ＳＤ8050～ＳＤ8083で構成される小溝群で、Ｎ－30°－Ｗ～Ｎ－45°－Ｗの方向性を持つ。北に向けてやや弧を描く傾向を示す。個々の小溝は、幅30～40cm、深さ約10cmを測る。小溝の間隔は、ほぼ隣接するものから、1.5m前後のものであまり一定しない。方向性にやや幅が認められることから、さらに複数の小溝群が重複する可能性が考えられるが、現状からは抽出し得ていない。

②期の遺構

小溝群２　ＳＤ8036～ＳＤ8049で構成され、小溝群３に後出する小溝群である。Ｎ－20°－Ｗの方向を示す。他の小溝群同様、個々の小溝は、幅30～40cm、深さ10cmを測る。整地・削平を受けていると考えられ、遺構の残存状況は悪い。各小溝間の距離は、ほぼ隣接するようにあるものと1.2～1.5mを測るものがあり、それによりＳＤ8036～8038、ＳＤ8039～ＳＤ8042、ＳＤ8043～ＳＤ8044、ＳＤ8045～ＳＤ8047といった４つのグループに分類することが可能である。抽出されるグループの幅は約1.5mを測る。従って小溝群２は、断片的ではあるが数条の小溝で構成される幅約1.5mの小溝群が、1.2～1.5mの間隔で連続する形態を持つ可能性が考えられる。

③期の遺構

小溝群１　ＳＤ8022～ＳＤ8035で構成される小溝群である。Ｎ－45°－Ｗの方向性を持ち、小溝群２より後出する遺構群である。各小溝は、他の小溝群と同様の規模を持つ。各小溝の間隔は、ＳＤ8022～ＳＤ8026で約1.6m、ＳＤ8027～ＳＤ8030で約0.5mを測る。整地・削平を受けていると考えられ、極めて断片的なものである。　（服部）

④期の遺構

①～③期の小溝群に後出する土坑３期が検出された。

ＳＫ8021　Ａ地区北半部に位置し、ＳＫ8022と近接する。平面形は不整な卵形を呈する。大きさは、1.8m×1.3m、深さ10cmを測り、浅い落ち込み状の遺構である。埋土は暗灰色シルトである。遺物は、壺、甕、高杯を検出した。これらの遺物は長軸の南北方向線上にのっており、土坑の北端と南端に於いて見られる。

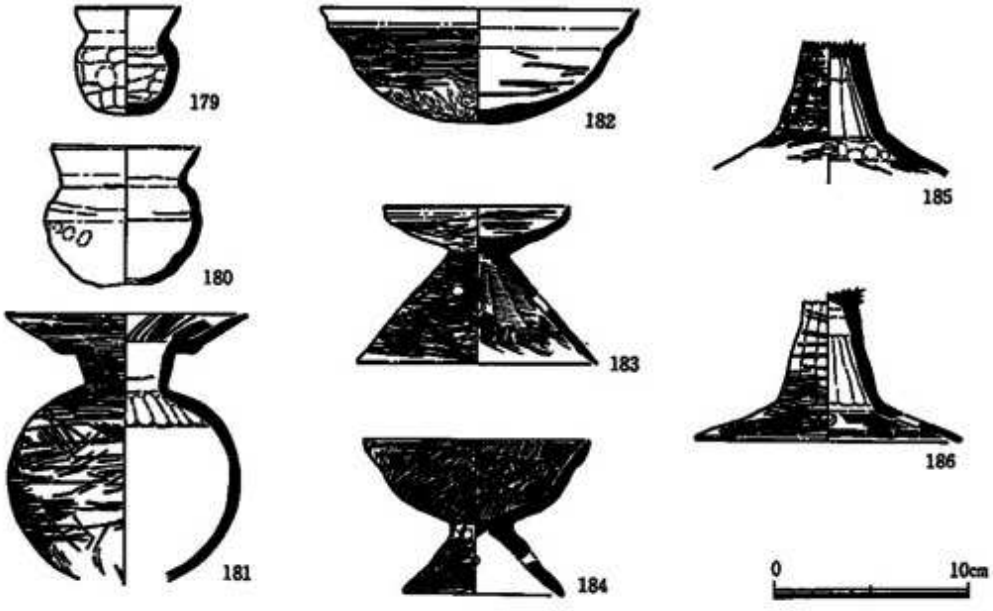
ＳＫ8023　ＳＫ8022の南側に位置し、ＳＫ8022によって壊されている。平面形は円形を呈する。大きさは0.9m以上×0.7mを、深さは30cmを測る。埋土は暗灰色シルトである。遺物は壺・甕・鉢等の土器が出土している。

ＳＫ8022（第79図　図版一六・一七）　ＳＫ8021とＳＫ8023の間に在り、下層の３・４号住居の北側に位置する。本遺構はＳＫ8021・8023が平面形と円形であるのに対して、楕円方形を呈する。断面形は擂鉢形を呈する。土坑の大きさは、2.25m×2.1m、深さ0.55mを測る。主軸は、長軸を北北西－南南東におき、３号住居とは若干異なるが、ほぼ同一方向である。埋土は大きく５層に分かれ、下層より①灰色シルト層、②灰色シルト層（灰色粘土混入）、③暗灰色シルトもしくは暗緑灰色シルト層、④黒灰色シルト層（粘質強）、⑤黒褐色シルト層、である。そしてこれらの層より多量の土器とともに赤色顔料、桃の種核、瓢箪等の種子、獣骨、貝、木製品を検出

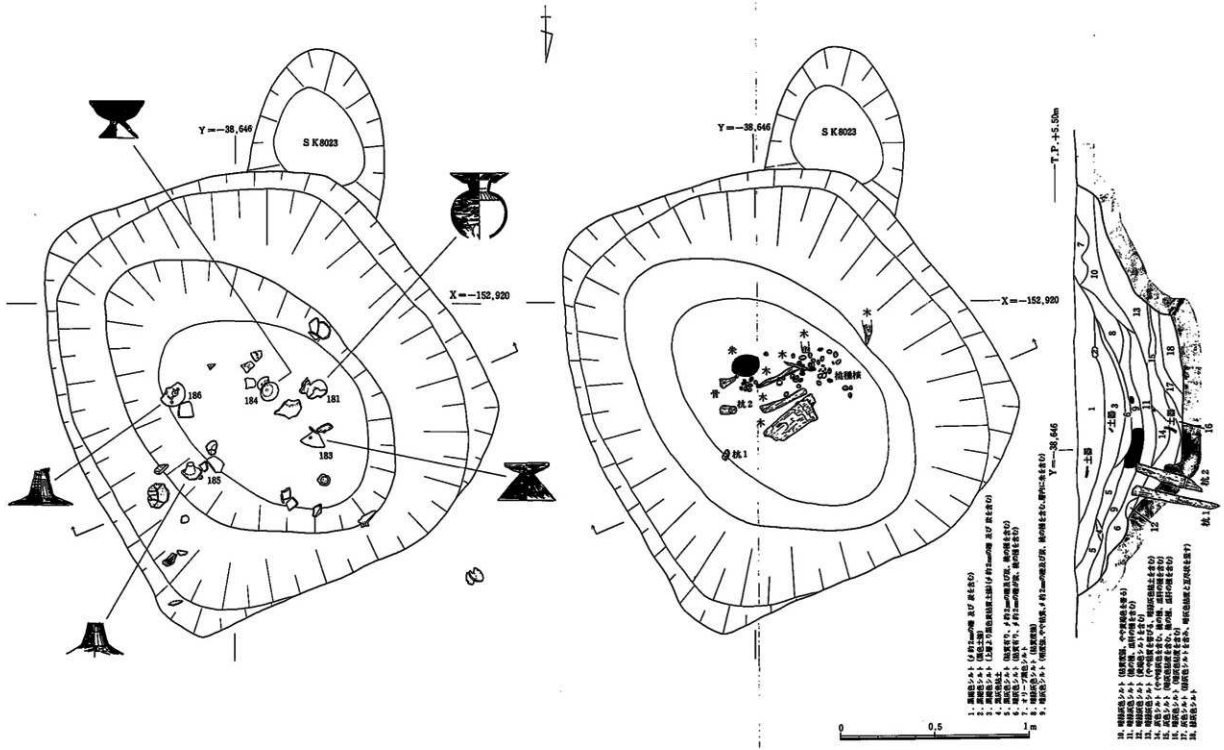
した。①の層からは穴の開いていない桃の種核と貝、②層は桃の種核（穴の開いている）、瓢箪の種子、③層は土器、赤色顔料、桃の種核、木製品、④層は土器、桃の種核、⑤層は土器が出土している。土器は、壺、高杯、甕、鉢、器台の器種である。木製品は、柄穴を有する板材と、角材、杭である。獣骨は鹿と推測される。貝はシジミと思われる。尚、土坑の東端に杭１・杭２を検出した。杭は一端を削っている。土坑は、第８ｆ遺構面、古墳時代前期Ｉから存在した可能性がある。

出土遺物（第78図　図版六三）

土器は多量に出土しているが、８点抽出した。181は二重口縁の壺で、底部を欠く。体部は球形を呈し、頸部は中位に膨らみを有しながら直立する。口縁部は水平にし、段を有しながら上方へ外反させる。調整は口縁部外面に横方向のヘラ磨きを、体部外面は上位にヘラ磨きを、下半部は横方向のヘラ磨きの後に斜め方向のヘラ磨きを行う。内面は口縁部にヘラ磨きを施す。高杯184は内外面全体に横方向のヘラ磨きの後、斜め方向のヘラ磨きを行う。脚部内面に指頭押圧痕を残す。185・186は杯部を欠く。185は脚柱部にハケ目の後に横方向のヘラ磨きを行う。内面は指頭押圧の後にヘラ磨きを行う。186は外面に横方向のヘラ磨き、内面はハケ目を施す。器台183は口縁部外面に凹線を入れる。杯部内外面は横方向のヘラ磨きを、脚台部外面は横方向のヘラ磨きを、内面はハケ目を施す。鉢182は精製の鉢で、口縁部は段を有する。口縁部は内外面に横ナデを、体部にヘラ磨きを施す。底部は外面全体にヘラ削りを施す。手捏179・180は、小型の土器である。179は底部が平坦面となる。口縁部内外面は横ナデを施す。体部内外面に指頭押圧痕を明瞭に残す。180は底部を焼成後に打ち欠き、孔を穿つ。体部外面は、上位にナデ調整を、下半部に指頭押圧痕の後にナデ調整を施す。内面は、上位は指頭押圧の後にナデを、底部は指頭押圧痕を残し



第78図　ＳＫ8022出土遺物



第79図　ＳＫ8022遺物出土状況

たままである。　(小野)

(2)　B地区

B地区北半遺構群

検出された遺構の切り合い関係より、5つの時期に細分される（第80図、第81図）。

①期の遺構

小溝群10　2Bトレンチ北半を中心とするSD8121～SD8124で構成される小溝群である。調査区主軸にほぼ直行する方向を示す。極めて断片的で、遺構の広がりなどは不明である。

SD8130・SD8131　1Bトレンチにおいて検出された他の遺構に先行する、方向の異なった2条の溝である。規模、埋土は他の小溝と異ならないが、性格等については不明である。

②期の遺構

整地、削平を受けており断片的に遺構が検出されたのみで、各遺構の詳細な性格は不明である。

小溝群7　SD8102～SD8104で構成されるほぼ南北方向を示す小溝群である。

SK8024　1Bトレンチ北東部でその一部を検出した、径1.5m前後と考えられる土坑である。

SK8025　2Bトレンチ西端で検出された楕円形を呈した浅い土坑で、長径約3mを測る。

③期の遺構

調査区の主軸にほぼ平行するN－30°－Eの方向を示す小溝群2ヵ所が検出されたが、方向性から見て同一の遺構群である可能性も考えられる。

小溝群5　Bトレンチ北端で検出されたSD8096、SD8097の2条の平行する溝である。

小溝群9　1Bトレンチで検出されたSD8116～SD8120で構成される小溝群である。小溝の間隔は、ほぼ接するものから約1.2mを測るものまであり、一定しない。小溝群5を含め東西に広がる小溝群の一部が残存したものと考えられる。

④期の遺構

ほぼ東西方向を示す2つの小溝群と、それとやや方向が異なる小溝群が検出された。

小溝群6　Bトレンチ北端に位置し、SD8098～SD8101で構成される小溝群である。ほぼ東西方向を示し、小溝群8と同一の方向性を持つことから、本来は同一の小溝群と考えられる。

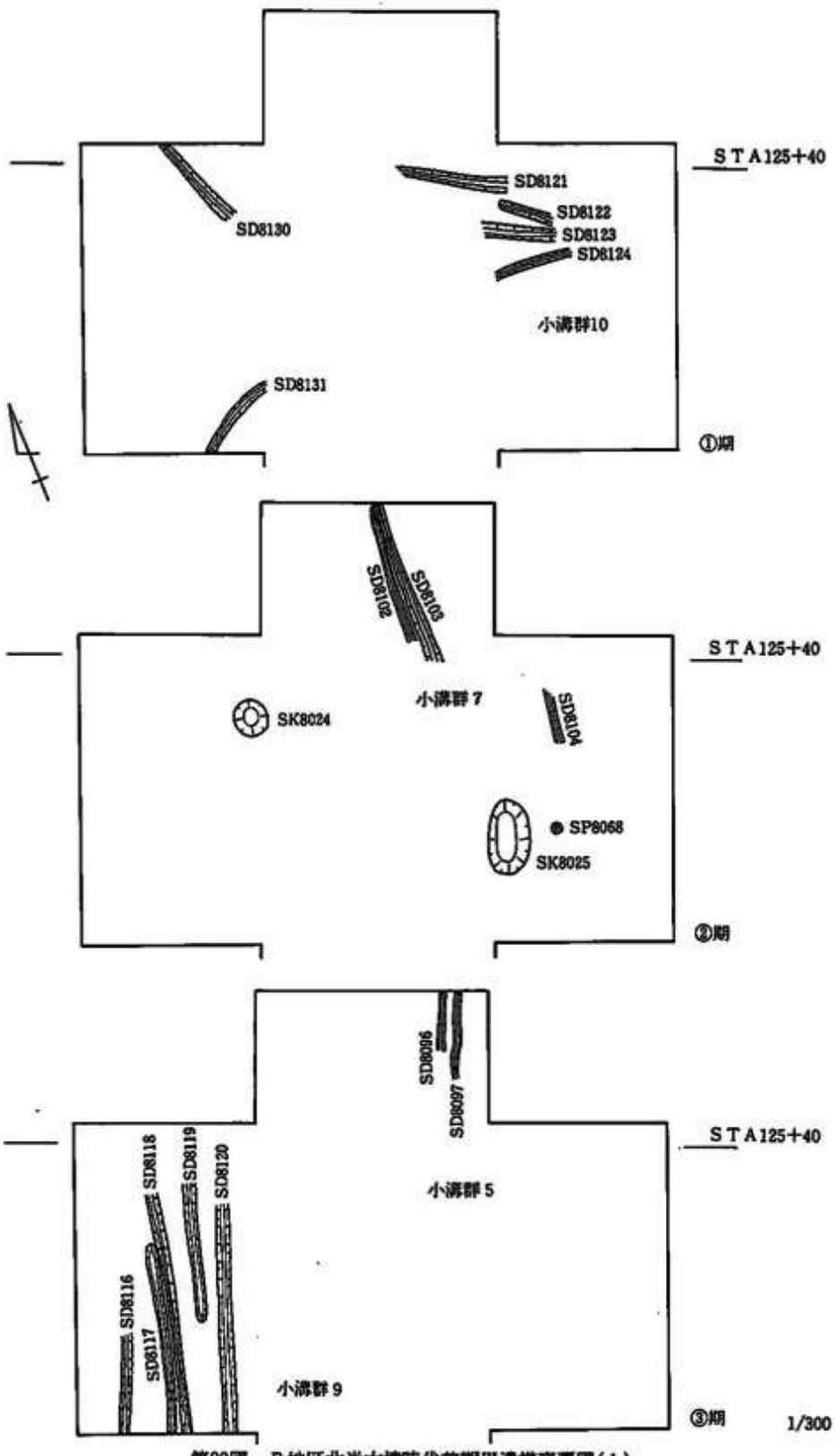
小溝群8　1Bトレンチで検出された東南方向を示す小溝群で、SD8106～SD8115で構成される。各小溝の間隔は最小で0.5mを測る。

小溝群11　2Bトレンチ南半で検出されたSD8125～SD8127の平行する溝3条で構成される。各小溝の間隔は、約1.2mを測る。調査区主軸に直交するN－60°－Wの方向を示す。

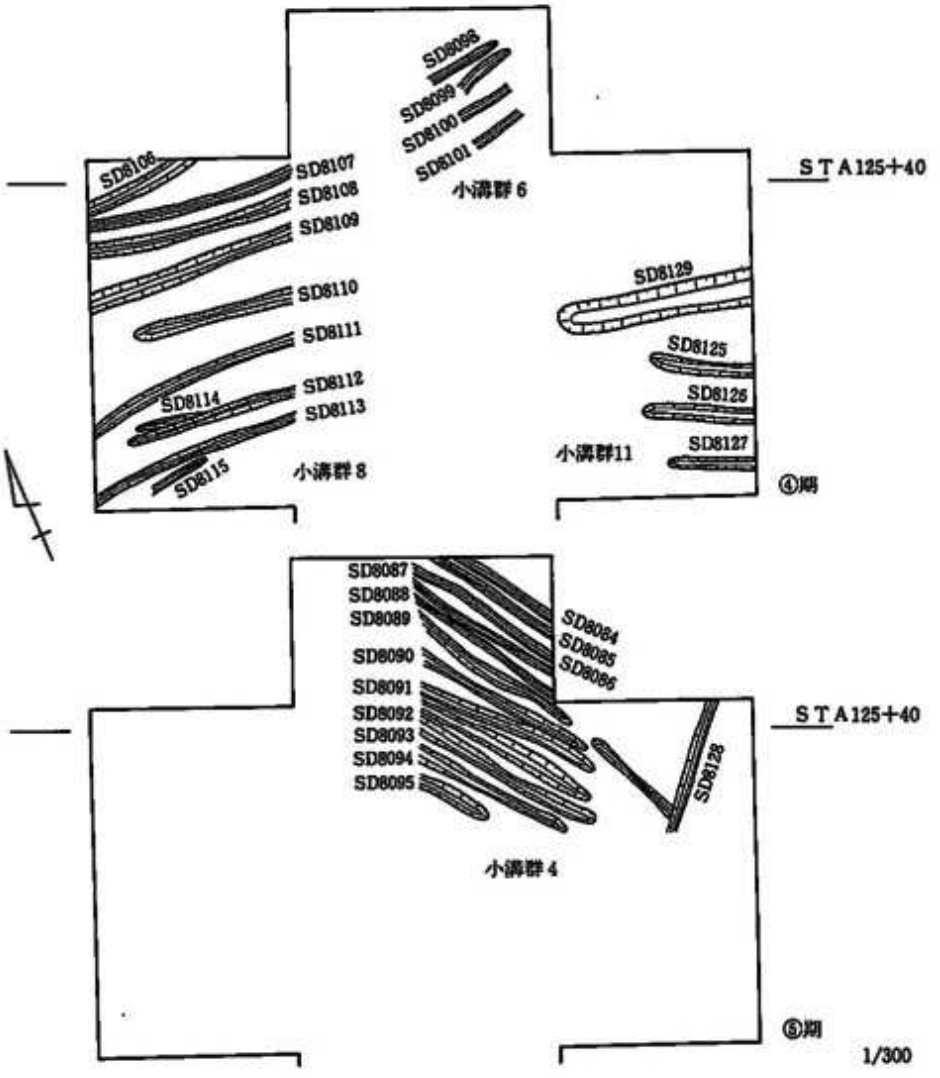
SD8129　小溝群11の北側で検出された南東方向を示す溝である。幅約1.2m、深さ約10cmを測り、小溝群を構成する溝よりはやや規模が大きい。遺物は土器片少量が検出されたのみである。

⑤期の遺構

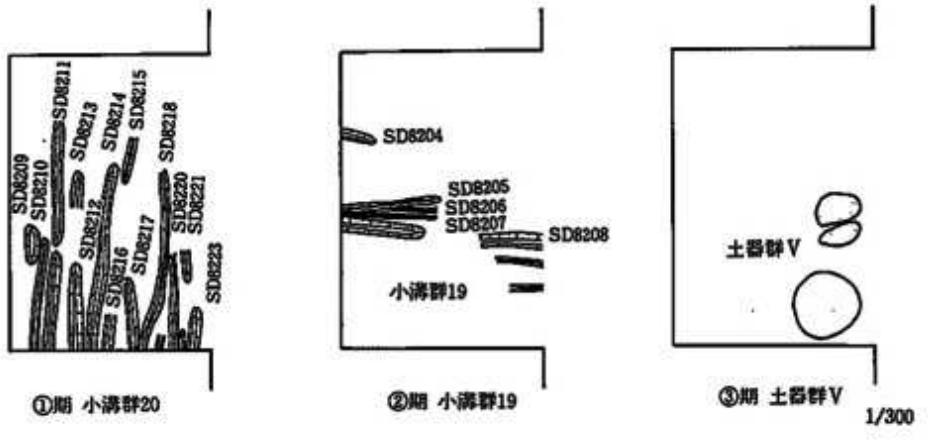
小溝群4　SD8084～SD8095で構成される小溝群である。最も残存状態が良好な小溝群で、幅約9mの間にN－30°－Wの方向性を持つ小溝12条が、ほぼ平行して整然と走行する。小溝の



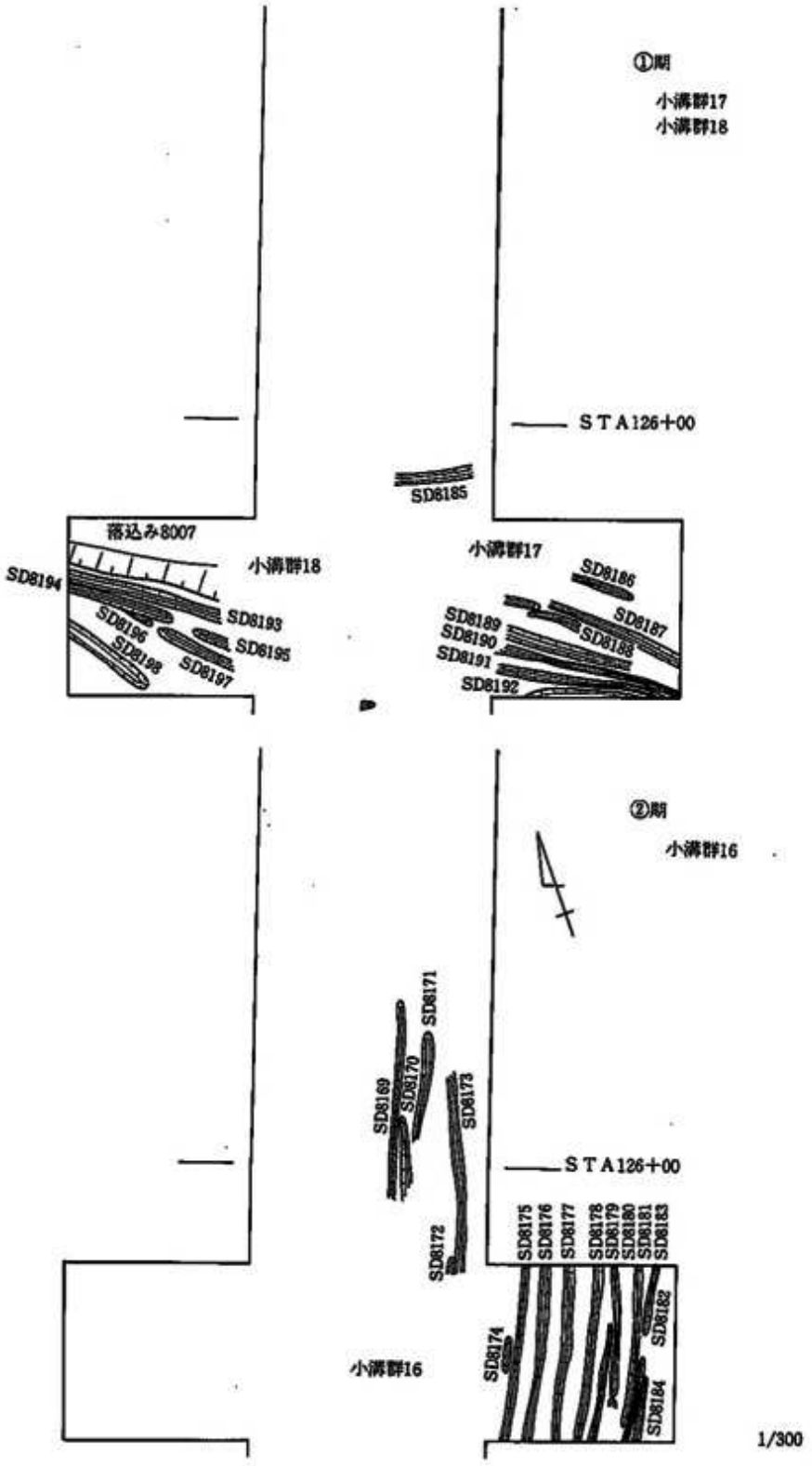
第80図　B地区北半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図(1)



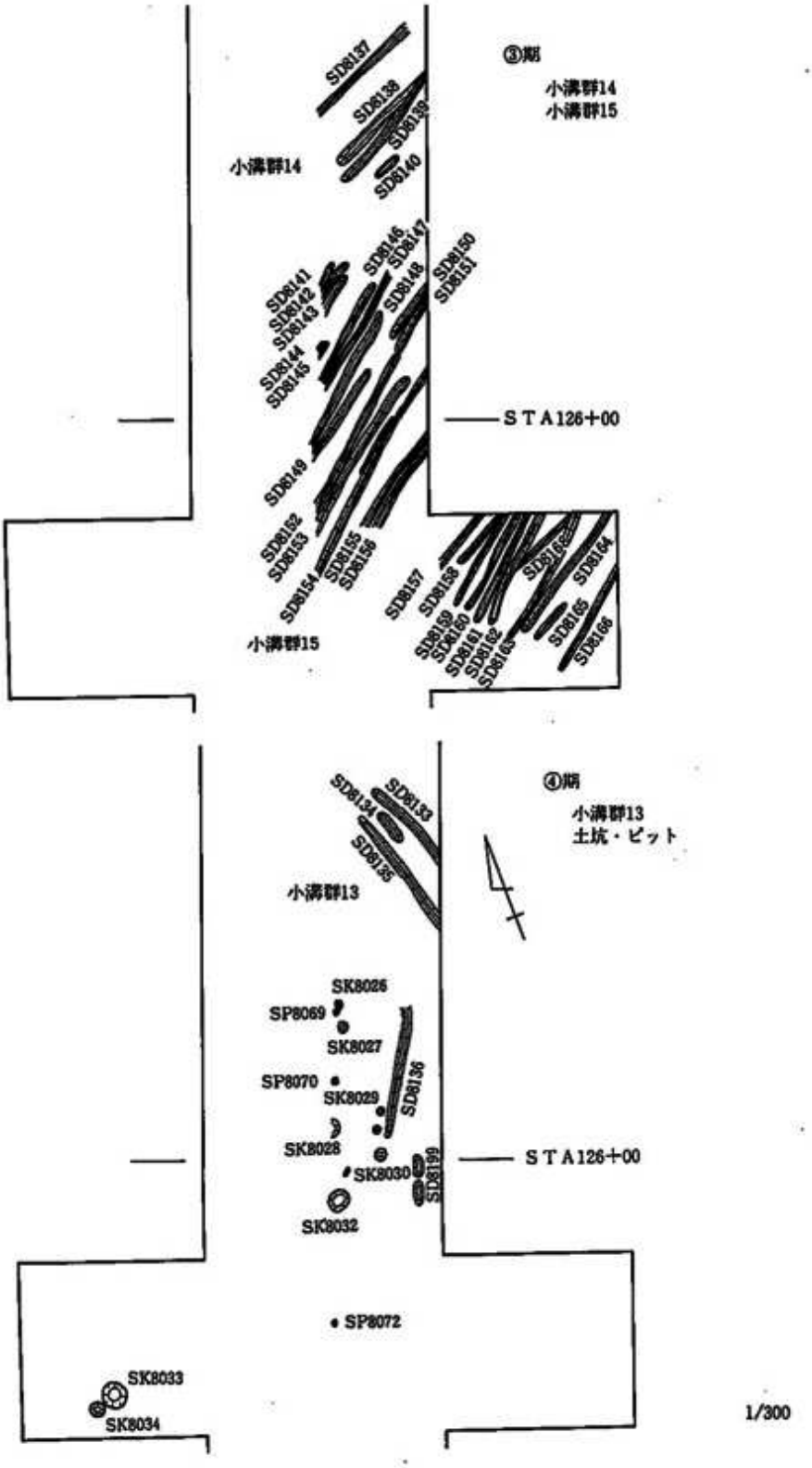
第81図　B地区北半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（2）



第82図　3Cトレンチ古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図



第83図　B地区南半古墳時代前期III遺構変遷図(1)



第84図　B地区南半古墳時代前期Ⅲ遺構変遷図（2）

間隔は50cm前後を測る。またＳＤ8128は、小溝群４の東端を画する可能性のある溝である。

Ｂ地区南半遺構群

ＳＴＡ．125＋40～ＳＴＡ．126＋20の間で、４期に細分される小溝群、ピット等を検出した。

①期の遺構

小溝群17　６Ｂトレンチで検出した小溝群でＳＤ8186～ＳＤ8192で構成される。Ｎ－45°－Ｗ前後の方向を示し、西に向けやや放射状に広がりを見せる。

小溝群18　５Ｂトレンチで検出した小溝群でＳＤ8193～ＳＤ8198で構成される。小溝群17とほぼ同様の方向性を示すが、方向性に微妙なバラつきが認められる。

落ち込み8007（第85図）　５Ｂトレンチ北半で検出した溝状の落ち込みで、北半は調査区外に当たる。検出幅は、東端で3.5ｍを測り、深さ約30cmを測る。埋土は、下層が黒灰色粘質土、上層が暗灰色シルトである。底部は、北端で北に向け上昇する傾向を示す。埋土上層より、完形に復元可能なもの数点を含む、土器を検出した。

出土遺物（第86図）

187は内彎し、端部が肥厚する口縁に球形の体部を持つ甕である。体部外面は縦方向のハケ目が施され、肩部に横方向のハケ目を巡らす等、布留式の特徴を備えるものである。188は、外面全体にタタキ目の残る丸底の鉢である。189は、ロート状の形状を持ち、底部に焼成前に孔を穿つものである。内外面ともやや幅が広く強いヘラ磨きが施される。190は、径5.2cm、器高4.8cmを測る手捏土器である。内外面とも指頭押圧痕が残り、外面にヘラ状工具の当たった痕跡が残る。

②期の遺構

小溝群16　小溝群17に後出し、ＳＤ8169～ＳＤ8184で構成される小溝群である。５Ｂトレンチでは特に残存状態が良好である。小溝の間隔は、平均して0.6～１ｍを測るが、近接するものもある。Ｎ－30°－Ｅの方向性を持つ。

③期の遺構

小溝群14　２号墓下層で検出したＳＤ8137～ＳＤ8140で構成される小溝群である。小溝群15と同様の方向性を示し、基本的に同一の遺構群である。

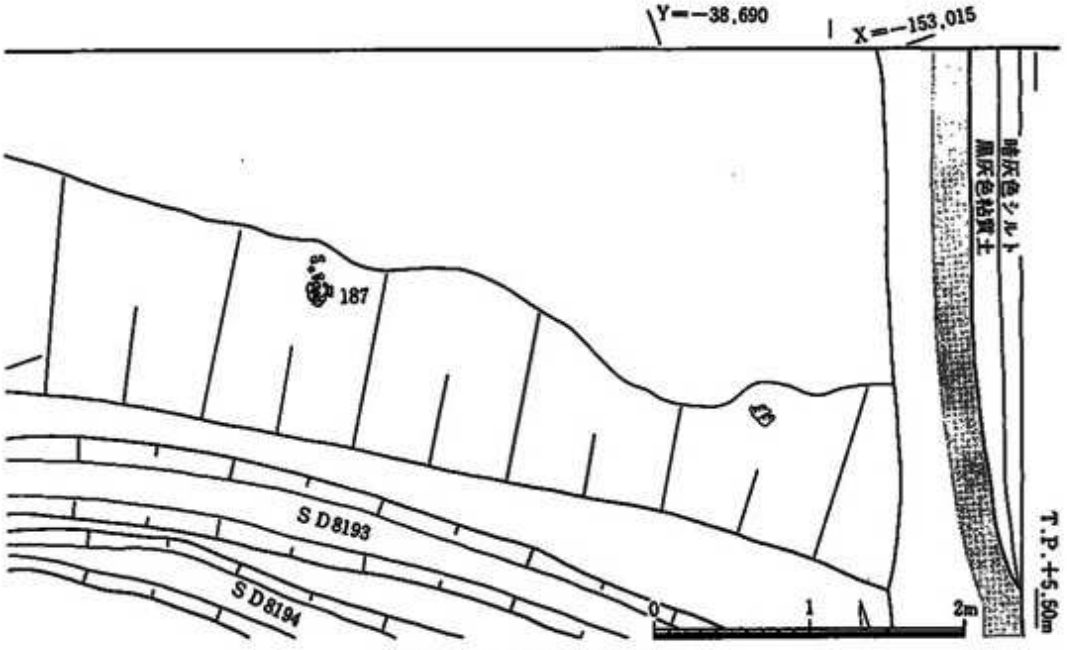
小溝群15　Ｘ＝－153,005～－153,028の間で検出したＮ－45°－Ｅの方向を示す小溝群である。ＳＤ8141～ＳＤ8166で構成される。小溝群の残存状態は比較的良好で、整然とした配列をみせる。ＳＤ8141～ＳＤ8143、ＳＤ8146～ＳＤ8148というように、幅1.2ｍ前後で数条の単位を構成する可能性もあるが、総てについて抽出し得ていない。

ＳＤ8168　５Ｂトレンチで小溝群15に先行し、微妙に方向が異なる小溝が検出されている。

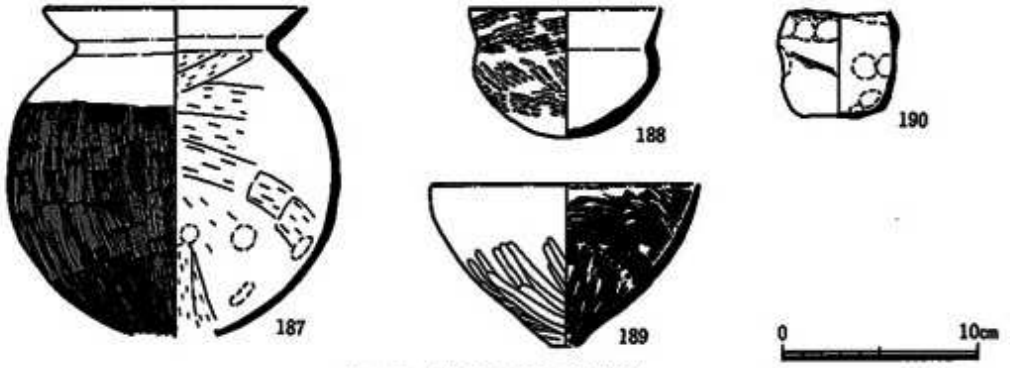
④期の遺構

③期の遺構群より後出する小溝群と、溝、ピット、土坑がある。

小溝群13　２号墓下層で検出した小溝群で、小溝群13に後出するものである。ＳＤ8133～ＳＤ8135で構成され、Ｎ－15°－Ｗの方向性を持つ。



第85図　落ち込み8007実測図



第86図　落ち込み8007出土遺物

ＳＤ8136　Ｂトレンチで検出した小溝群15に後出する溝で、Ｎ−30°−Ｅの方向を示す。他の小溝と方向が一致せず、単独で存在する。

ピット　Ｂトレンチ X＝−153,005〜−153,020でピット３ヵ所を検出した。

土坑　Ｂトレンチにおいてピットと共に土坑６基を検出した。また、５Ｂトレンチにおいても土坑２基を検出した。Ｂトレンチで検出した土坑には、規模的にはピットと大差のないものも含まれるが、浅い形状を持つものを土坑とした。５Ｂトレンチで検出されたＳＫ8033は、径約１ｍ、深さ約15cmを測り、ＳＫ8034は、径約60cm、深さ約５cmを測る。

（３）　Ｃ地区（第82図）

３Ｃトレンチにおいて、切り合い関係より、２時期に分類される小溝群が検出された。

小溝群20　３Ｃトレンチほぼ全面に亘って検出した小溝群である。ＳＤ8209〜ＳＤ8223で構成され、Ｎ−30°−Ｅの方向を示す。方向、間隔がやや不揃いの部分もある。

小溝群21　３Ｃトレンチ中央部を横断するＳＤ8204～ＳＤ8208による小溝群である。　(服部)

４．古墳時代前期Ⅳ

第Ｘ層中で、小溝群等の遺構が埋没し、周溝で区画する墓が出現する時期を、古墳時代前期Ⅳとし、遺構面を第８Ｃ遺構面とする。遺構数は全体的に少なく、Ａ地区では土器集積遺構（土器群Ⅰ・Ⅱ)、土坑（ＳＫ8016・8017・8018)、溝（ＳＤ8018・8019・8020）等が、Ｂ地区では２基の墓（１号墓・２号墓)、土坑（ＳＫ8019)、土器集積（土器群Ⅲ・Ⅳ）を、Ｃ地区では２基の墓（３号墓・４号墓)、土坑（ＳＫ8019・8020)、土器が多量に出土した溝（ＳＤ8021）等が存在する。下層が耕作の時期とするならば、この時期は、造墓の時期としたい。

墓に於いて主体部を確認したのは、１号墓と２号墓である。墓はそれぞれ主軸を異にし、大きさもそれぞれ違う。１号墓や２号墓の様に、陸橋部（狭義の墓道）を造り出すものがある。また、１号墓の主体部の小口部に置かれた石は、巨摩廃寺遺跡の下層遺構である弥生時代後期方形周溝墓に於いて見られたものである。また、土器については土器群Ⅲ・Ⅳの様にセット関係が捉えられるものもある。３号墓は土器の出土状況が、他の墓とは異なり、墳丘上面に多量の土器が出土した。祭祀は、溝とともに墳頂部に於いても行われていた。

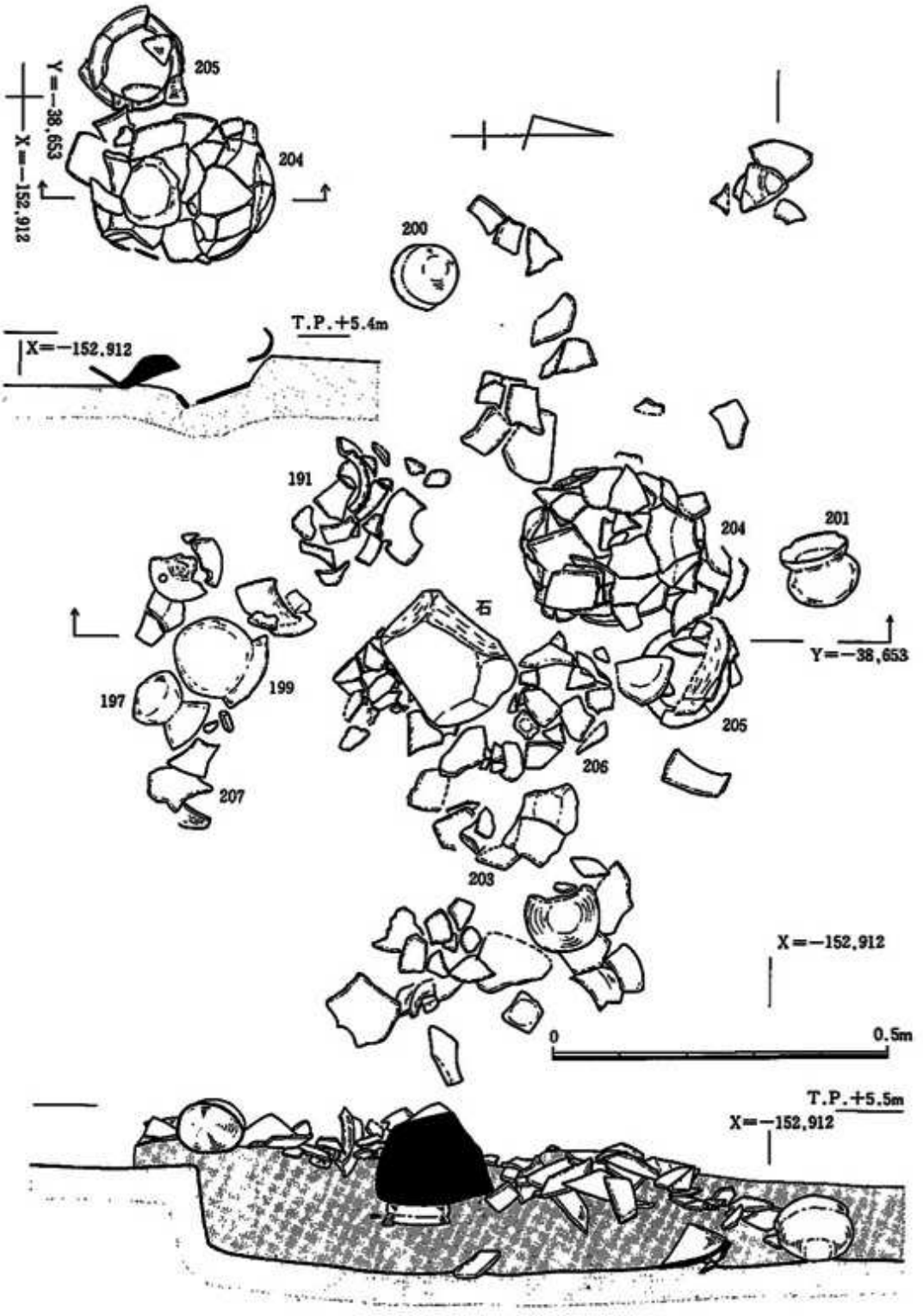
本遺跡の北側に加美遺跡や久宝寺が所在し、本遺跡は一連の遺跡と考えられるが、集落は幾つかの小単位に分かれていたものと推測される。

Ａ地区に於いて、土器集積の遺構を２ヵ所確認した。これらの遺構は明瞭な掘方を伴わないことを特徴とする。この様な遺構は久宝寺遺跡（現家電工場内）に於いても確認されている。[註4]

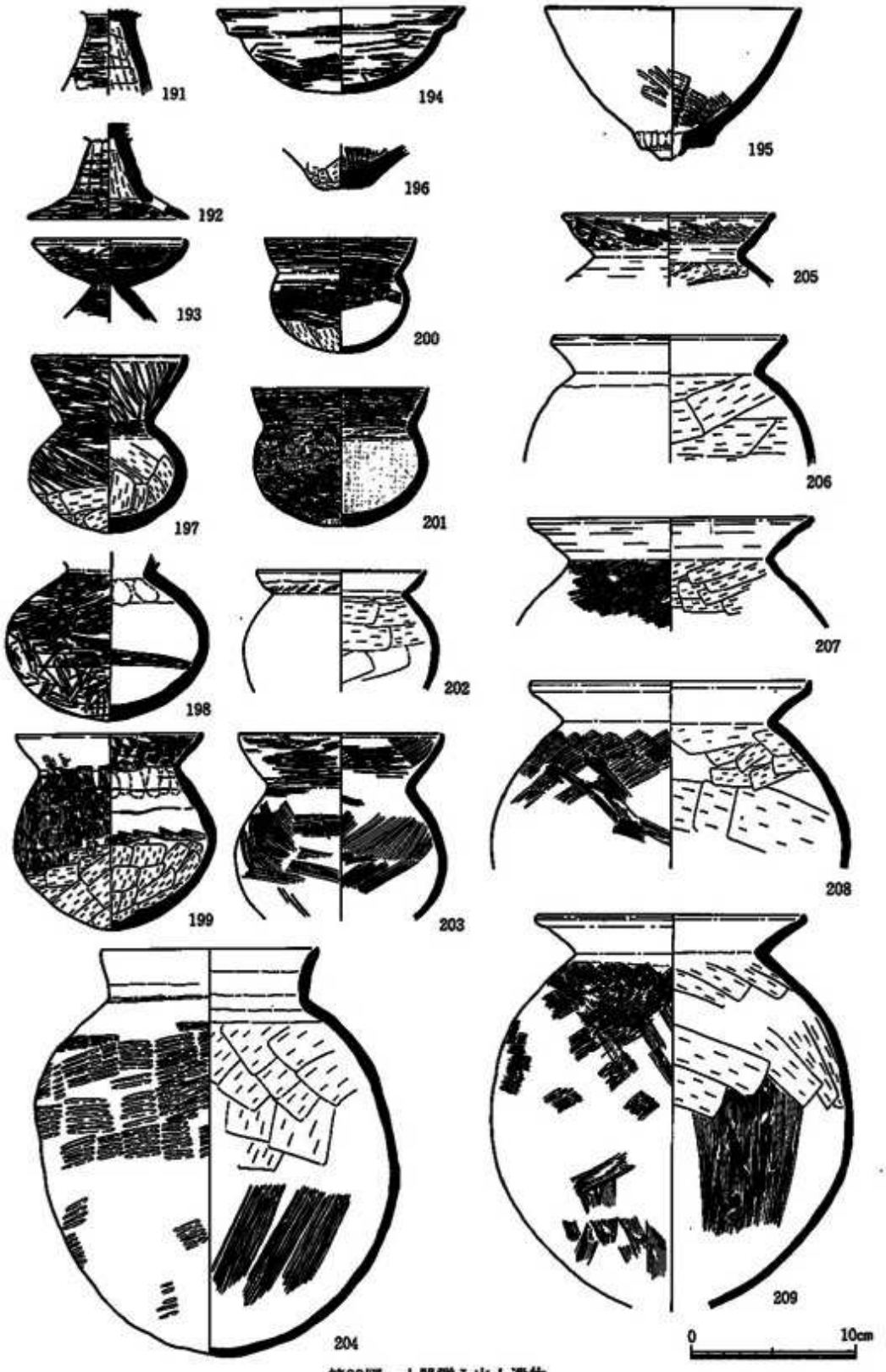
（Ａ地区）

土器群Ⅰ（第86図　図版一八）　１Ａ地区の西端で検出した土器の集積遺構である。土器は約40個体分が出土した。土器は径1.5mの範囲で広がるが、遺構に伴うものではない。本遺構は、上層のＳＤ8006の調査中に検出した。当初、土器群はＳＤ8006に伴うものか、または、別の遺構が存在するものと考えたが、精査した結果遺構を見出すことは出来なかった。土器は、壺、甕、高杯、鉢、小型鉢、小型丸底鉢，器台の器種構成である。特に小型丸底鉢201の内面に、赤色の顔料が厚く付着しているのを確認した。また人頭大の石も検出した。表面は磨滅している。

出土遺物（第88図　図版六四・六五）　19点を抽出した。壺（又は甕）204、は短い口縁部が直立する。器壁は厚い。体部外面はタタキ目を、内面は、上半部にヘラ削り、底部にはハケ目を施す。197は口縁端部をつまみ上げる。口頸部、体部外面にヘラ磨きを施し、底部はヘラ磨きの後にヘラ削りを施す。内面は口頸部にヘラ磨きを、体部にヘラ削りを施す。198は体部外面に横のヘラ磨きを施す。底部には不整方向のヘラ磨きを施す。内面はナデ調整を行う。甕199・202・203は、小型である。口縁部・体部の内外面にハケ目調整、199はヘラ削りを施す。202は口縁部にヘラによる刺突文を行う。196はヘラ削りを施す。205～209は口縁端部をつまみ上げ、209は端部に強い沈線が入る。207～209は体部外面にタタキ目を、内面にヘラ削りを施す。208と209は体部外面にタタキの後にハケ目を施す。206では、全体的に表面をナデている。205は、口縁部内外



第87図　土器群Ⅰ遺物出土状況



第88図　土器群Ⅰ出土遺物

ともにハケ目の後に横ナデを施す。高杯191・192は横方向のヘラ磨きを施し、192は内面にヘラ削りを施す。器台、193は内外面にヘラ磨きを施す。鉢194は内外面とも横方向のヘラ磨きを施す。200は体部外面に横方向のヘラ磨きを内面にハケ目を施す。底部外面にはヘラ削りを施す。201は内面に赤色顔料が付着。口縁部内外面にヘラ磨きを、体部上位にはハケ目の後にヘラ磨きを施し、中位には横方向のヘラ磨きの後に斜めのヘラ磨きを施す。底部には縦方向のヘラ磨きの後、斜めのヘラ磨きを施す。195は有孔の鉢である。焼成前の穿孔。外面はタタキ目を残し、全体的に横ナデ調整、内面に強いハケ目を行う。

土器群Ⅱ（第89図　図版一五）　A地区の南半部に位置し、ＳＫ8018の上層に存在する。土器群Ⅰと同様な土器集積遺構である。土器は約50個体分が出土し、径1.3m×1.9mの範囲のひろがり見せる。下層にＳＫ8018が存在する。土器群Ⅰと同様に石が一緒に存在する。石は２個出土しており、いずれも表面は磨滅している。土器の器種構成では土器群Ⅰと異なり、本遺構では、二重口縁の壺、椀形の杯部を持つ低脚の高杯が存在する。

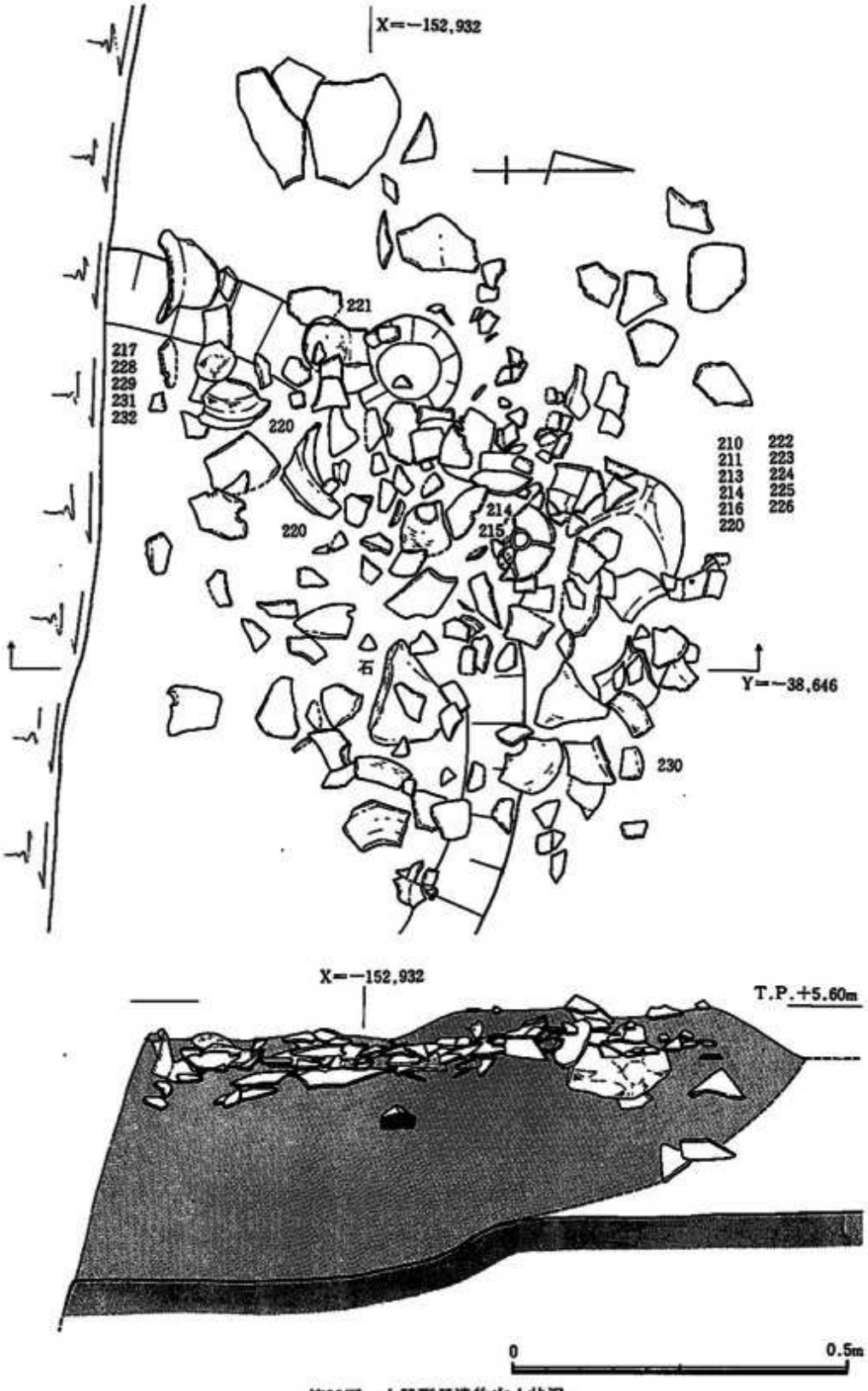
出土遺物（第90図　図版六五）　23点を抽出した。220は、口縁部がきつく外方へ屈曲する。口縁部内外面に横ナデを、頸部外面にハケ目を施す。221は体部にヘラ削りを施し、内面は横ナデを施す。甕222は、外面全体に横ナデを、内面にヘラ削りを施す。228は外面にハケ目を施し、内面にヘラ削りを行う。224～227は口縁端部をつまみ上げる。内面は横ナデを施す。229・232は外面にハケ目調整、内面にヘラ削りを行い、229の口縁端面に凹線が入る。230は内外面とも横ナデを施す。223は他地域産。鉢210・212は段を有する。外面に横方向のヘラ磨きの後に斜めのヘラ磨きを施す。211は底部を欠くが、小型の丸底気味である。231は端部をつまみ上げる。口縁部にタタキ目を残す。体部にはヘラ磨きを施す。器台214・215は同一個体である。全体に横方向のヘラ磨きを施す。口縁部に６条の直線文を施す。杯部内面にはヘラ磨きを施す。213は口縁端部に凹線状に凹む。高杯216は、ハケ目の後にヘラ磨きを施す。底部に沈線を入れる。218はハケ目の後に、ヘラ磨きを施す。317は円い椀形の杯部が付き、内外面ともに横方向のハケ目を施す。219は脚部にヘラ磨きを行う。

ＳＤ8017　C地区の南半部に位置し、ＳＤ8018と近接している。主軸は北東－南西方向におく。溝幅25cm、深さ５～10cmを測る。器台脚部が出土している。

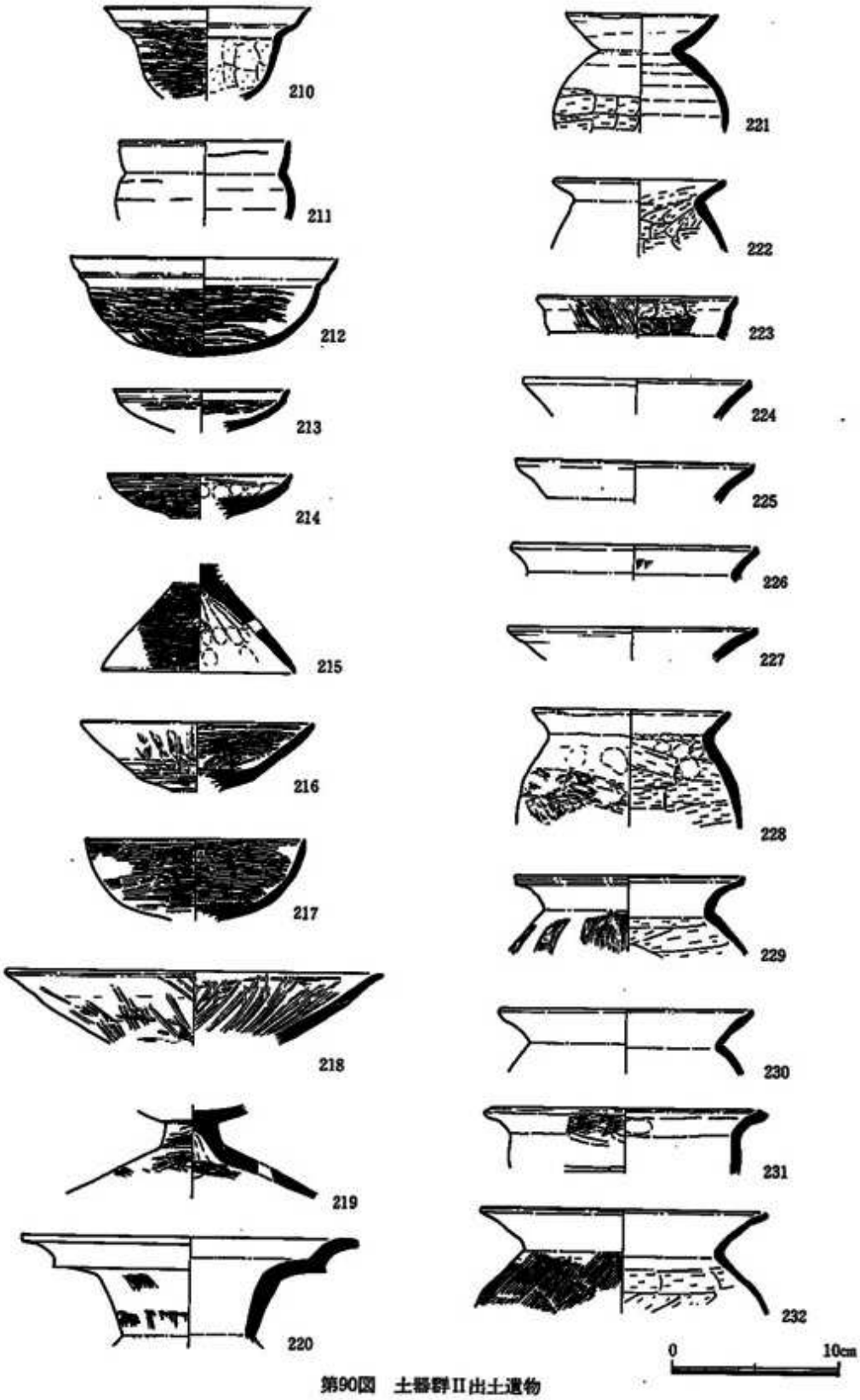
出土遺物（第93図）　240は外面に横方のヘラ磨きを施した後、右下がりのヘラ磨きを行い、内面は横方向のハケ目の後に、右下がりのハケ目調整を行う。

ＳＤ8018（第91図　図版一五）　ＳＤ8019の北側約１m離れて位置する。幅30cm～45cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰色シルトである。ＳＤ8017と同一方向に主軸をおく。溝内より土器が出土しており、南西より高杯脚部（238）、小型鉢（234）、甕体部（236）、高杯（239）、甕口縁部（237）、直口壺（233）、高杯杯部（235）の順である。

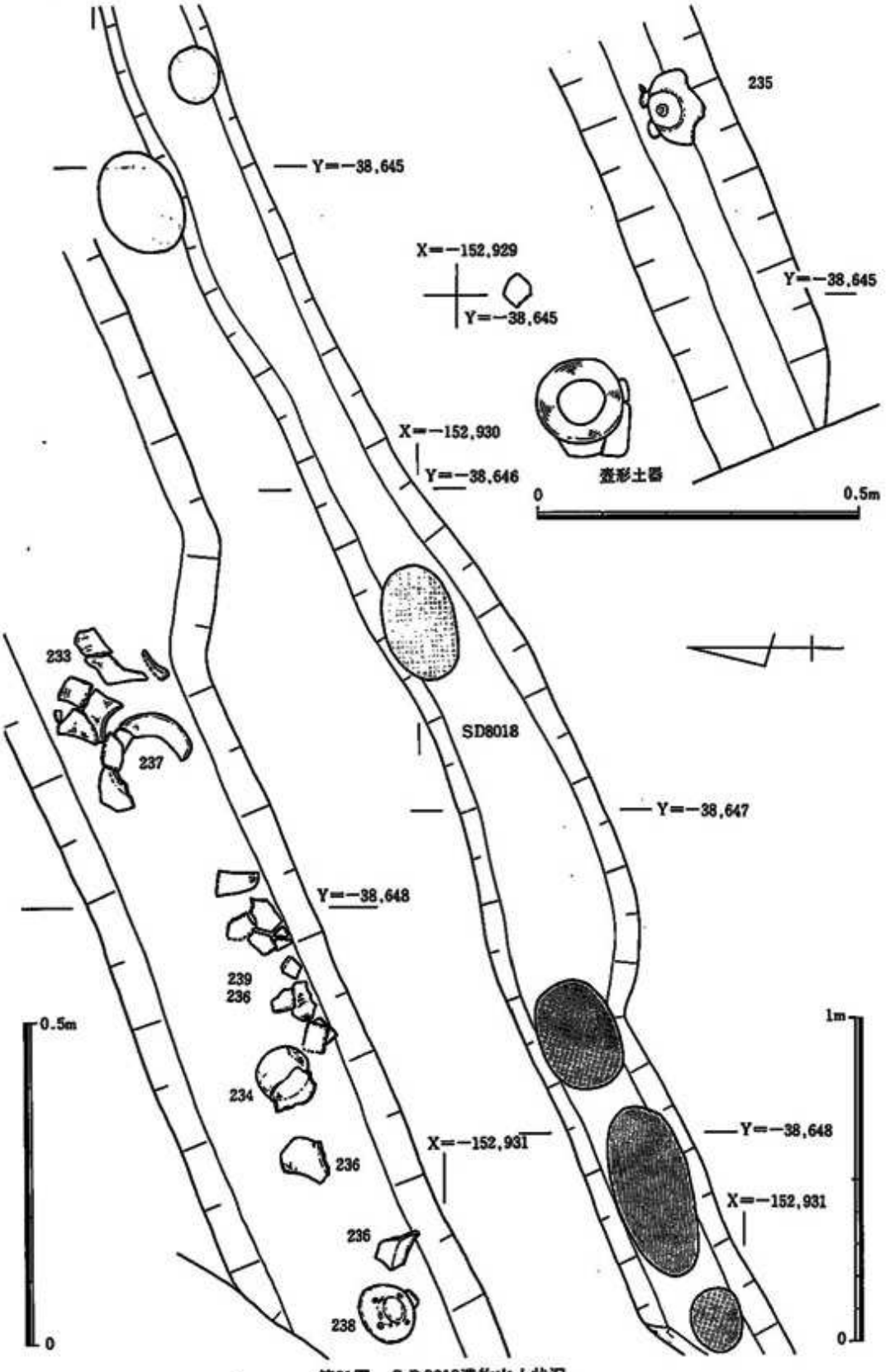
出土遺物（第92図　図版六六）233は内外面に横方向のヘラ磨きを施す。235の外面は底部と口縁部の接合部をやや凹ませる。外面は横方向のヘラ磨きの後に、斜め方向のヘラ磨きを施し、内



第89図　土器群II遺物出土状況



第90図　土器群Ⅱ出土遺物



第91図　ＳＤ8018遺物出土状況

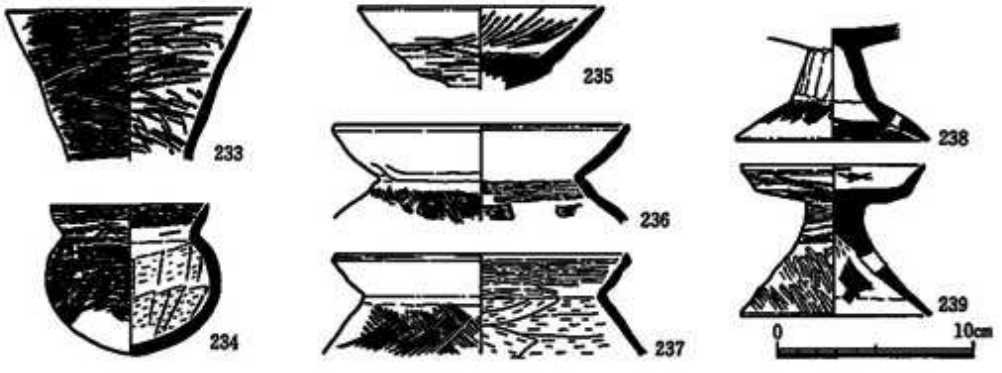
面に放射状のヘラ磨きを行う。238は口縁部を欠く。脚柱部外面にヘラ磨きを行い、脚台部内外面はハケ目を施す。239は器台とも考えられ、浅い杯部を有する。杯部は先ず底部を水平にし、口縁部はやや外方へ向ける。口縁部・脚部外面に横方向のヘラ磨きを行う。脚部外面上位に横方向のヘラ磨きを施し、脚台部外面に斜め方向のヘラ磨きを施す。杯部内面に斜めのヘラ磨きを施す。234は口縁部を若干肥厚させる。口縁部内外面を横方向のヘラ磨きを施す。体部外面はハケ目調整の後に、横方向のヘラ磨きを行い、底部には斜め方向のヘラ磨きを施す。体部内面はヘラ削りを施す。

ＳＤ8019　ＳＤ8018の南側に隣接する。主軸を北東－南西方向におきつつ、東へ若干傾ける。溝幅50～60cm、深さ５～17cmを測る。出土遺物は、壺、甕、器台等がある。

出土遺物（第93図　図版六六）　242は、口縁部外面に横ナデ調整を行い、底部に指頭押圧、内面に放射状のヘラ磨きを行う。

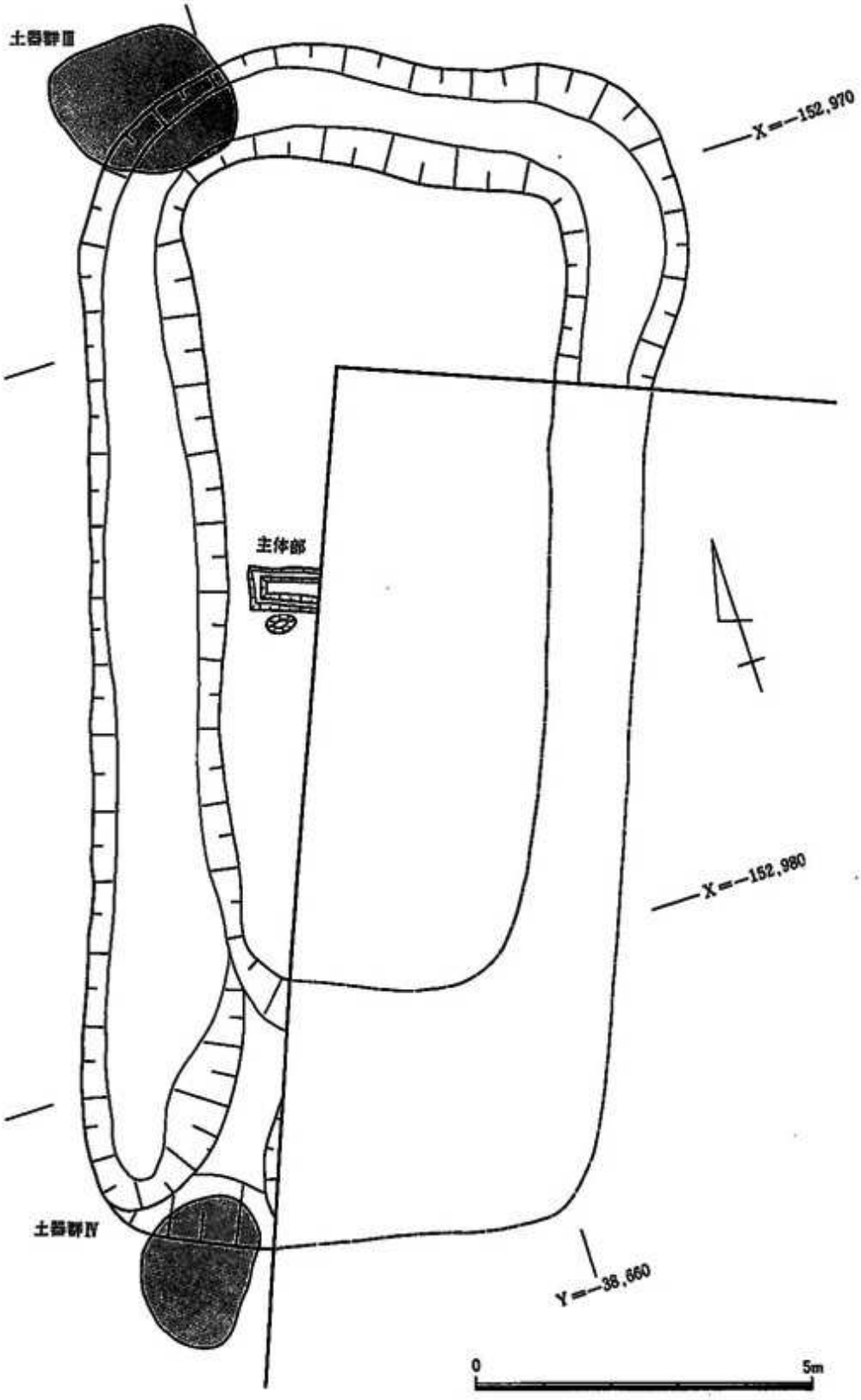
ＳＫ8016・8017・8018（第93図　図版六六）　ＳＫ8016は、上層の井戸によって壊されている。幅約１ｍ，長さ1.7ｍ以上を測り、深さ10cmを測る。浅い方形の土坑である。ＳＫ8017は不整な円形の土坑であり、径80cm×67cm、深さ20ｃｍを測る。土坑内より高杯241が出土している。241は脚部を欠く。杯部の外面は、横方向のヘラ磨きを、内面に放射状のヘラ磨きを施している。ＳＫ8018は、ＳＤ8019の南側に近接して位置する。土坑は近代水路によって半壊している。径は1.5ｍ、深さ20cmを測る。埋土は、下層より灰黒色粘土（炭を含む）、暗灰色シルト（炭を含む）、灰色シルト（黄色砂混入）である。土坑の底面より小型の鉢が出土している。鉢は、底部を丸くし、外面はヘラ磨きを、底部はヘラ削りを施す。内面はヘラ磨きを行う。　（小野）

註４．1984年４月、本遺跡の東側の八尾市久宝寺遺跡に於いても土器集積遺構が調査されている。八尾市文化財調査研究会、原田昌則氏、成海佳子氏より御教示を受けた。



第92図　ＳＤ8018出土遺物

第93図　ＳＫ8017・ＳＤ8019出土遺物



第94図　1号墓全体図

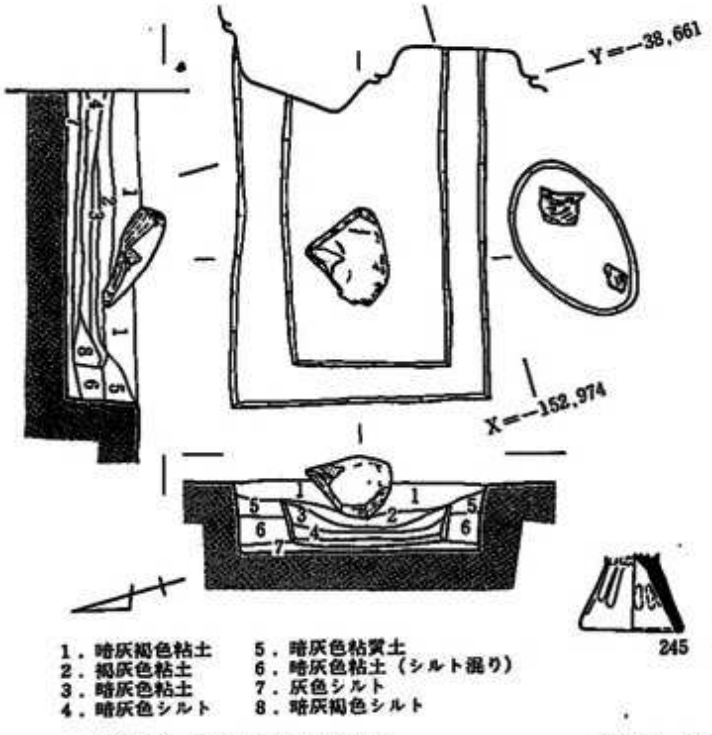
（2）　B地区

B地区では、２基の周溝墓が検出された。

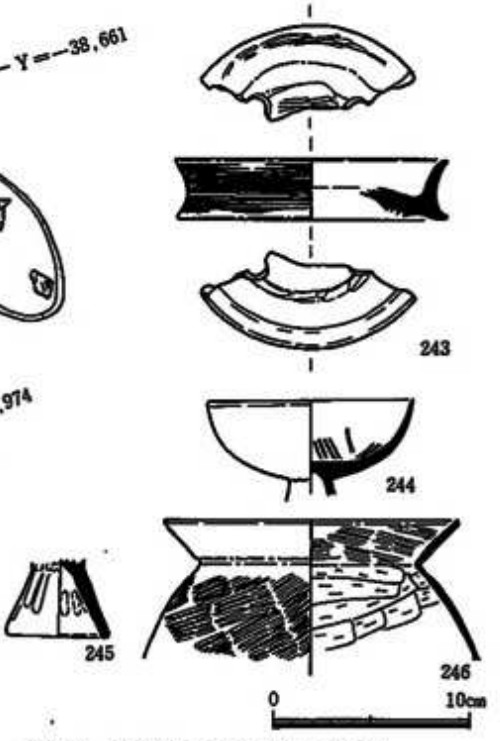
１号墓　B地区北半、X＝－152,965～－152,985で検出された周溝墓である。長方形の平面プランを呈し、長軸をN－20°－Eに置く。周溝外側で、長軸長18m、短軸長９ｍを測る。マウンド部分は、長軸長13m、短軸長６ｍを測る。南東部2/3は、調査区外に当たる。マウンド部分は、北側に向け、やや幅を広げる傾向を示す。従って周溝は、北側では狭く幅1.5～1.8mを測り、南側ではやや広がり、幅2.5～4.0mを測る。周溝の埋土は、平均して上下２層からなり、下層は黒灰色粘質土、上層は暗灰褐色粘質土である。周溝内からの遺物の出土は乏しく、僅かに土器片が散乱して検出されたのみである。

マウンド部分は、淡青灰色粘土を盛土として構築される。残存高約30cmを測る。上部の大半は削平されたものと考えられる。マウンドの上層には第Ⅹ層の最上層に当たる灰黒色砂質土が薄く堆積する。又、南西コーナー部には、マウンドと同様の淡青灰色粘土を用いた上部幅約１ｍ、高さ0.2mを測るブリッジ状の遺構が検出された。ブリッジ部周溝外側及び北西コーナー部では、土器の集積（土器群Ⅲ・Ⅳ）が認められた。北東コーナー部では、周溝を横断する形で長さ約2.3ｍを測る柱状の加工木が出土した他、桃の種核も検出された。

主体部　（第95図）マウンドのほぼ中央部で、長軸方向に対し直交して主軸を置く方形の墓壙が検出された。幅約65cm、検出長80cmを測り、東半は調査区外に当たる。墓壙検出面下約８cmで幅約40cmを測る木棺痕跡が検出された。西に向けやや広がることから、西に頭位を置くもの



第95図　主体部実測図（1/20）



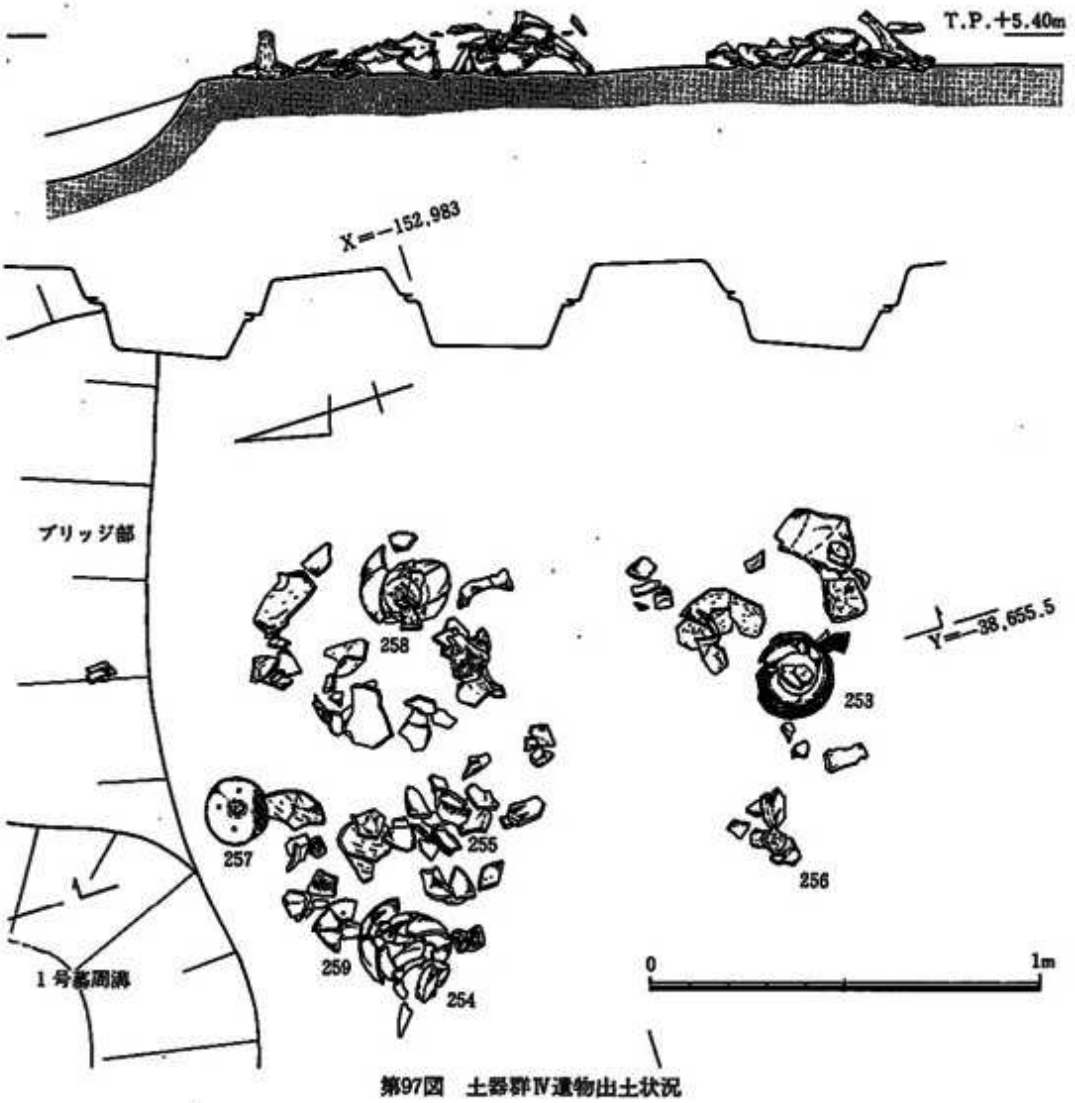
第96図　１号墓マウンド上面出土遺物

と考えられる。木棺は全く残存せず、暗褐色粘土層化した状態で確認された。組み合わせ式木棺と考えられる。木棺頭位部分上部からは、表面に磨かれた痕跡の残る人頭大の偏平な石が、棺内に落ち込むように検出された。二次使用されたものと思われ、墓標的意味をもつ可能性が考えられる。墓壙南側には、径約30cmを測る浅いピットがあり、甕口縁部246が検出された。

マウンド上面出土遺物（第96図）

マウンド上面精査時に数点の土器が検出された。243は、器台と思われる土器で白褐色の胎土を持つ。シャープに立ち上がる口縁部外面に、櫛描き沈線を巡らす。復元口径約14cmを測る。水平部分には4方に孔を穿ち、上下双方に伸びる北陸系の器台と考えられる。244は、高杯杯部である。245は、器種は不明であるが、小型の土器の脚台部で、下端部径5.6cmを測る。

土器群Ⅳ（第97図）　南西コーナー部ブリッジ状遺構外側で検出された土器集積である。高杯4個体、甕4個体、鉢2個体を中心に、甕などの破片が多数検出された。高杯はほぼ原位置を保っ

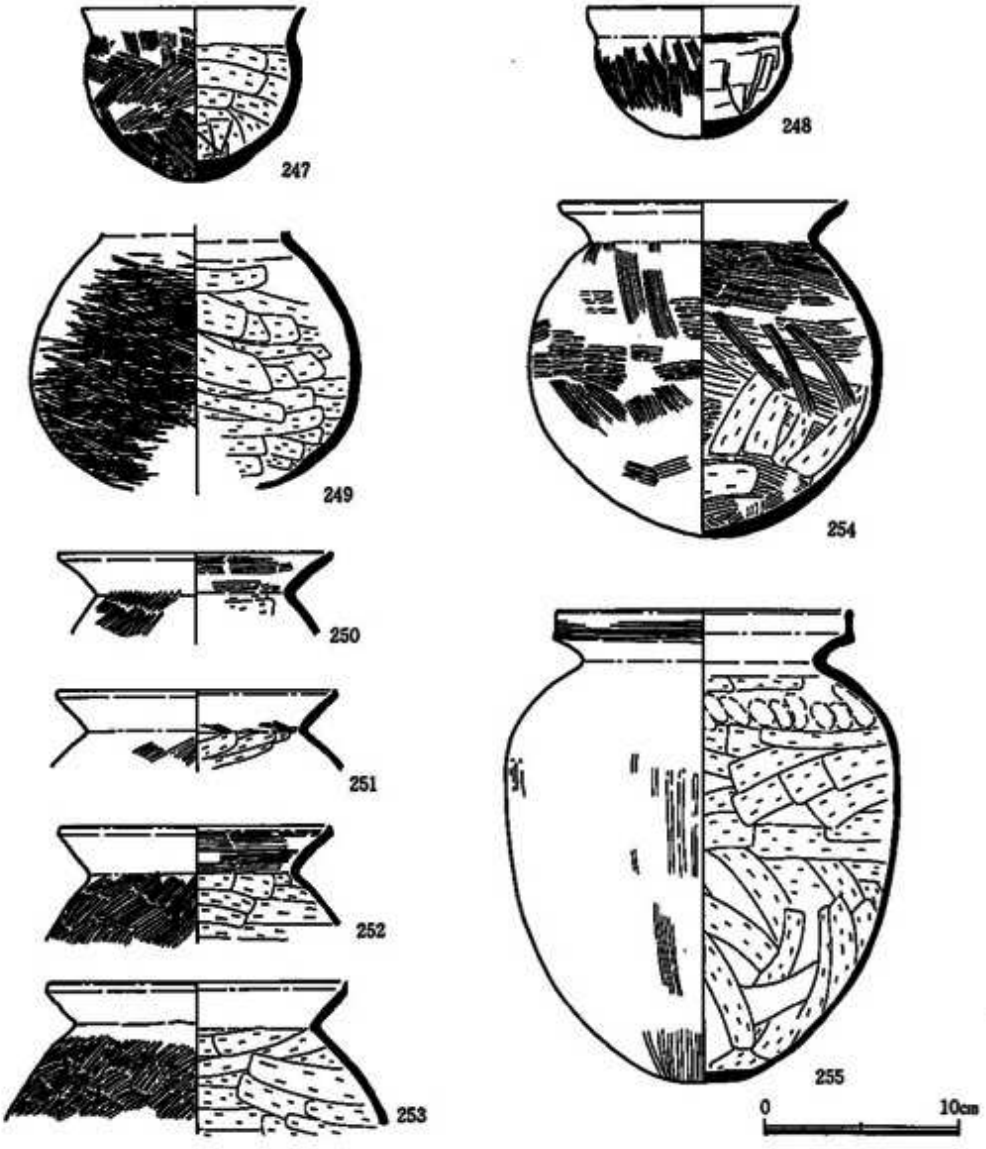


第97図　土器群Ⅳ遺物出土状況

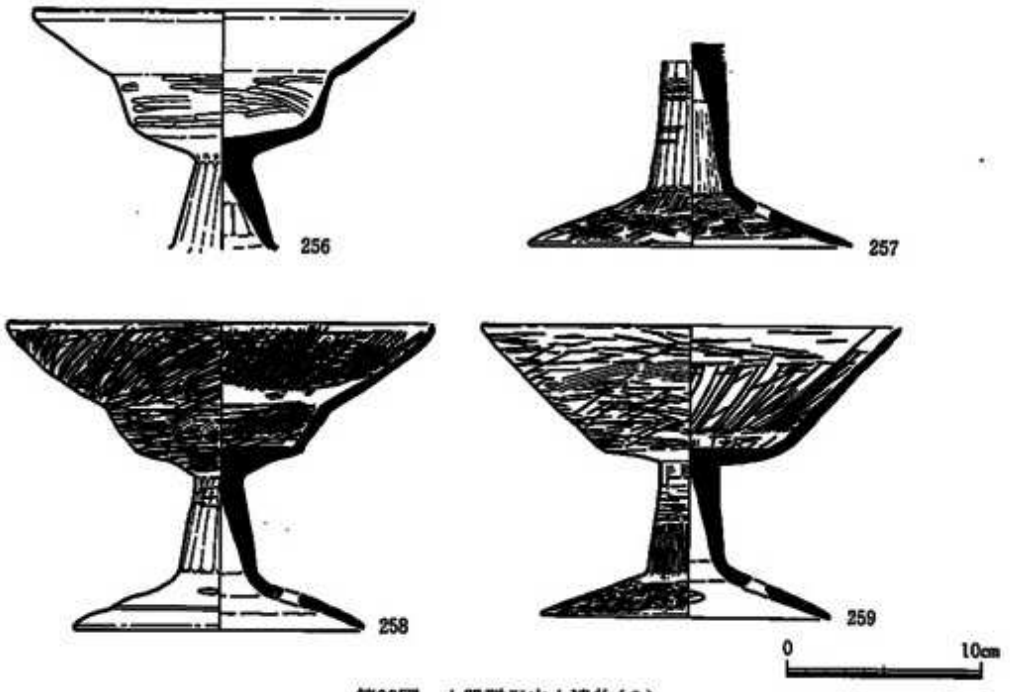
ていると考えられ、ブリッジ部に向かって左前方に257、左手前に259、右前方に258、やや離れて手前に256が位置する。257は、脚部が直立した状態、259は、甕254を杯部に載せたまま横転した状態、258は、横転し杯部が外れた状態で検出されており、設置された状況を良好に遺存している。又、遺物の散乱状況から、259と254同様、257と吉備系の甕255、258と甕252、256と甕253といったセット関係が考えられる。土器群Ⅳは、周溝墓の周溝南西コーナー部外側に隣接し、ブリッジ部を通して墓域内部を意識して、高杯、甕、鉢をセットとして設置された可能性が強い土器群である。

出土遺物（第98図・第99図・第100図）

247・248は鉢である。247は、外面が粗いタタキ目の後ハケ目、248は縦方向のハケ目が施され

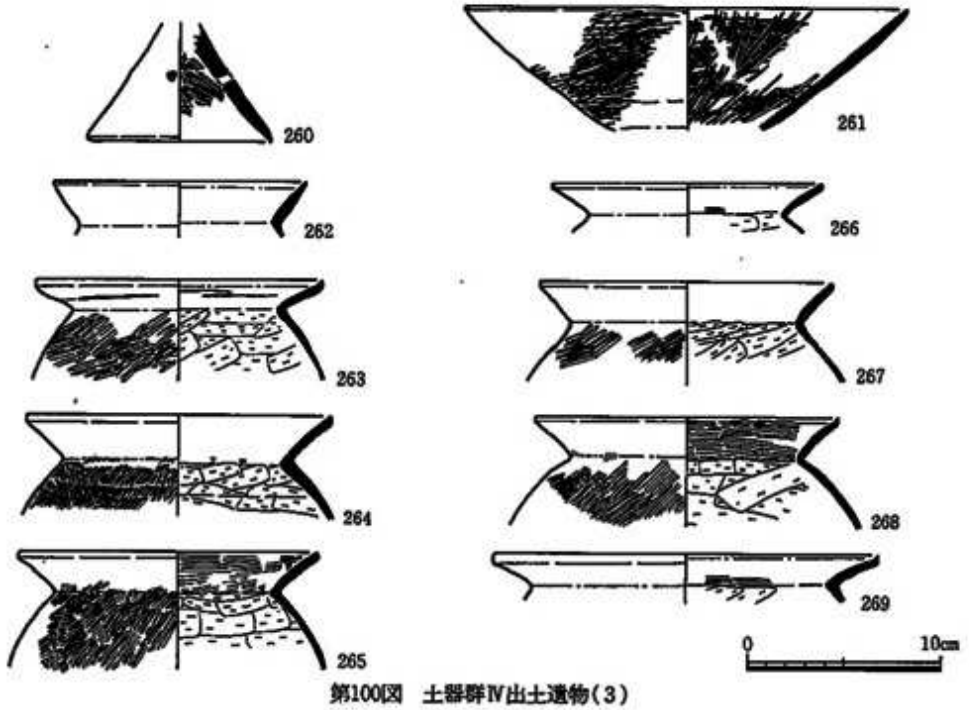


第98図　土器群Ⅳ出土遺物（1）

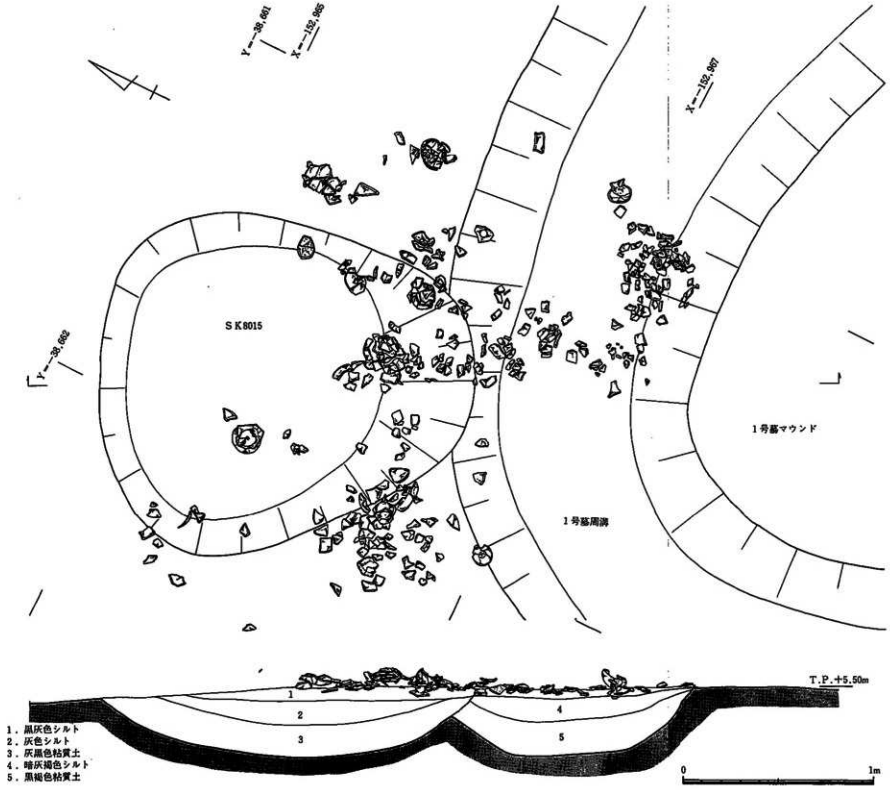


第99図　土器群Ⅳ出土遺物(2)

る。250～255は甕である。254は、内面は主にハケ目を施し外面には粗いタタキ目が残る。器壁がやや厚い。255は、吉備系の器形をもつ甕であるが、褐色を呈し、胎土分析より、生駒山西麓産との結果を得ている。256～259は高杯である。杯部が2段に屈曲するもの256・258と直線的に伸びるもの259がある。260～269はその他の破片である。



第100図　土器群Ⅳ出土遺物(3)



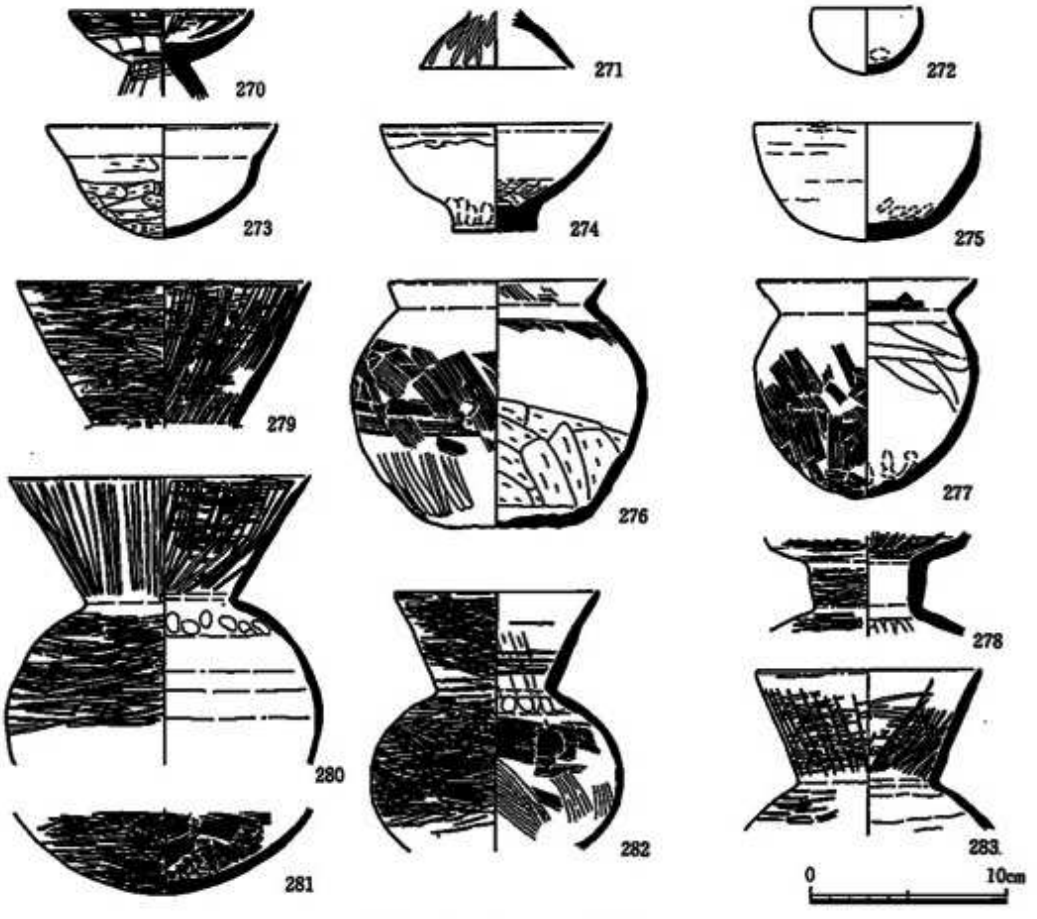
第101図　土器群Ⅲ（SK8015）遺物出土状況

土器群Ⅲ及びＳＫ8015（第102図）　１号墓北西コーナー部で検出された土器集積である。北西コーナー部では、周溝がほぼ埋没した段階でＳＫ8015が形成されており、土器群Ⅲは、その最上部から周溝の最終的凹地にかけてやや散乱した状態で検出された。従って、確実に１号墓に伴う遺物群とは言えないが、その時点ではマウンドが、依然として地表上に存在したことが予想されること、土器群Ⅳと同様に周溝コーナー部外側に当たることから、ここでは土器群Ⅲを、ＳＫ8015を用いた墓域を意識した行為に伴う遺物群と考えておきたい。周溝がほぼ埋没するまでの時間的経過が、土器群Ⅳと土器群Ⅲを構成する遺物に反映されているとも考えられる。

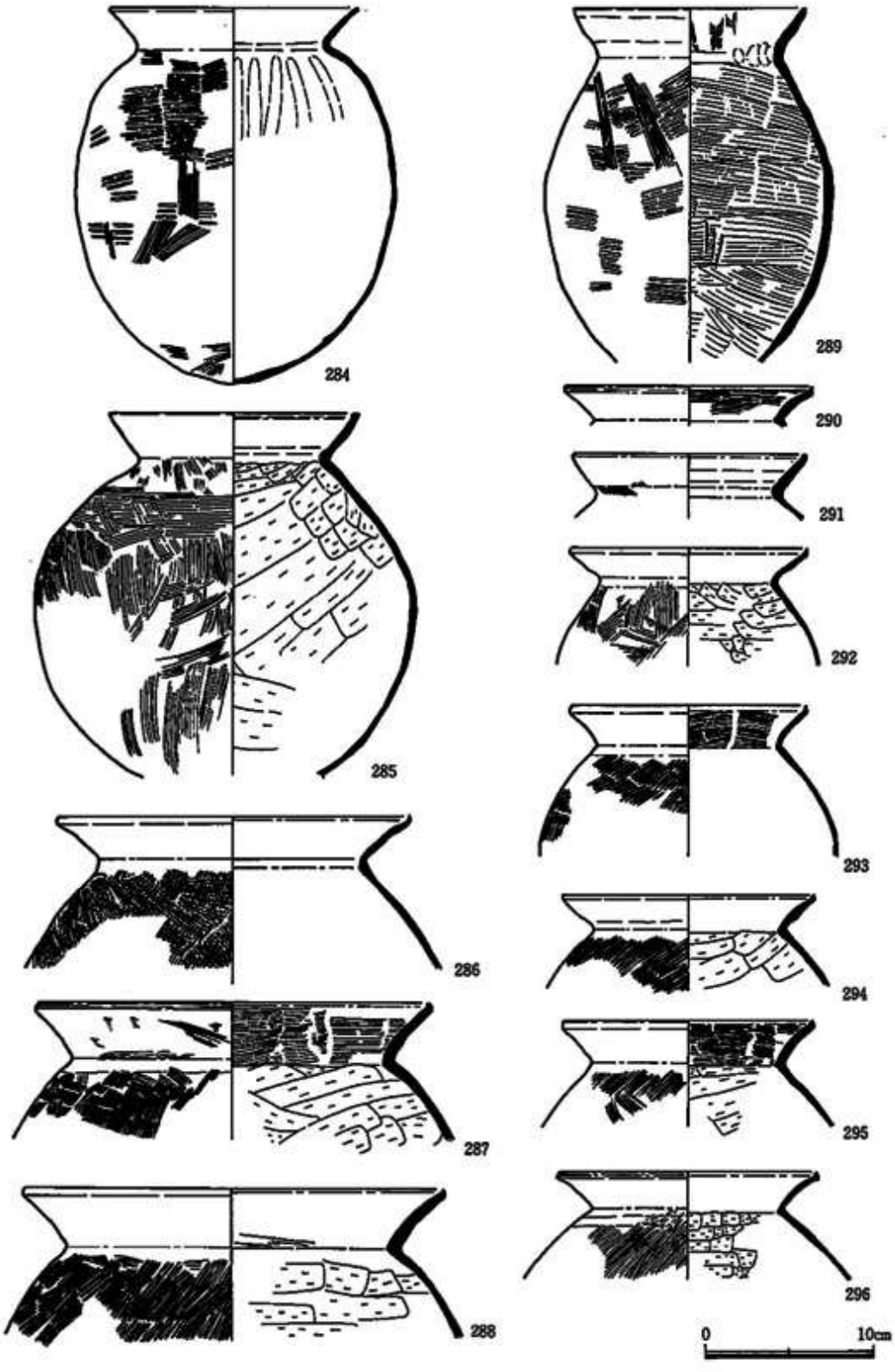
土器群Ⅲの遺物分布状況は、やや散乱した状態にあり、原位置を保つものは少ないが、全体的な傾向として、直口壺・鉢が各１個体と数個体の甕をセットとするグループが、４つ程度存在した可能性が指摘できる。又、高杯が少ない点が、土器群Ⅳの組成との相違点である。

出土遺物（第102図・第103図・第104図）

270は小型器台、271はミニチュアと思われる小型品の脚台部である。272は、ミニチュアの鉢である。273～275は鉢で、３個体とも異なったタイプのもので構成される。276は、平底に扁平な体部と短く屈曲する口縁部を持つものである。外面調整はハケ目を基本とし、内面は、下半に

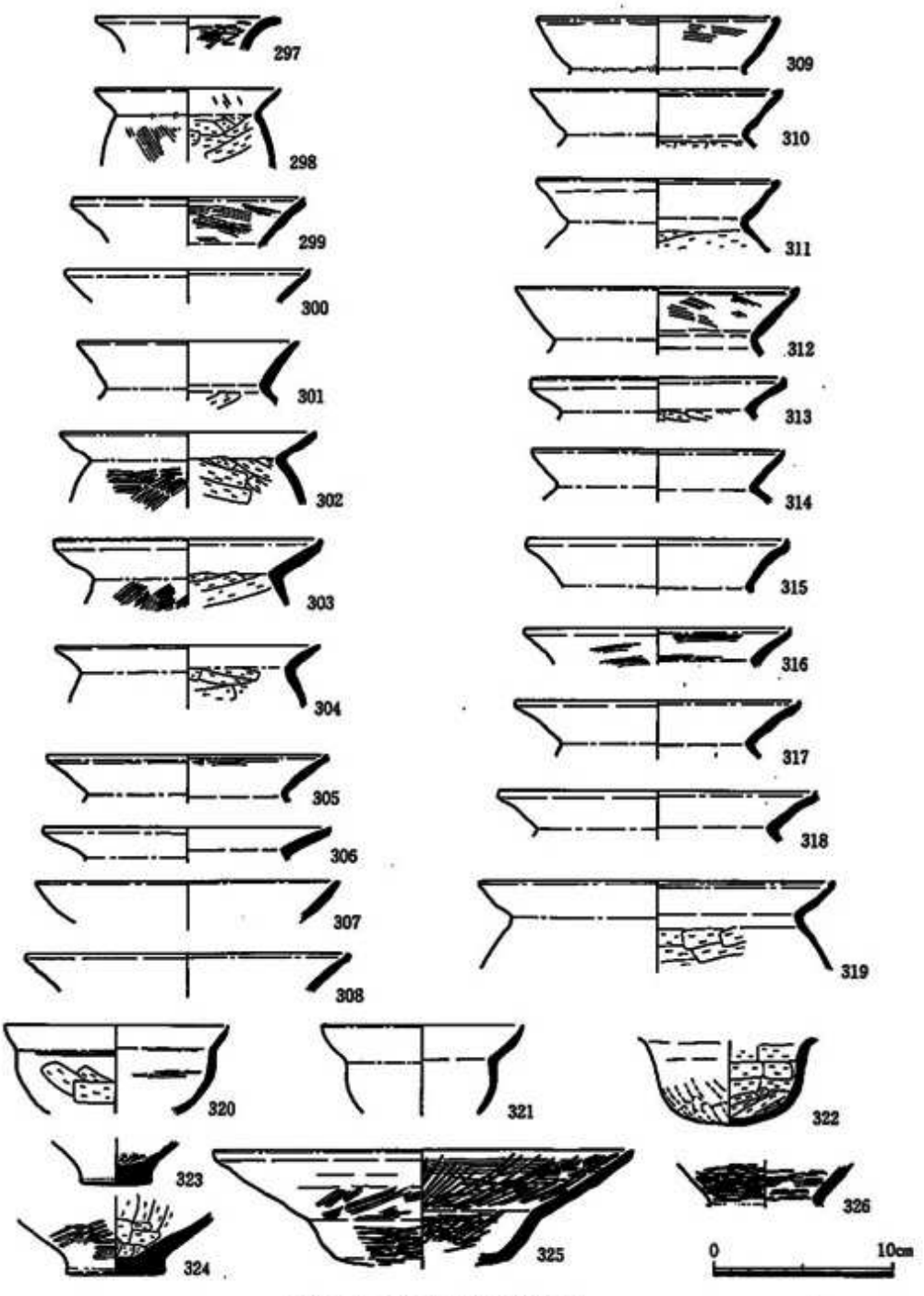


第102図　土器群Ⅲ出土遺物（１）



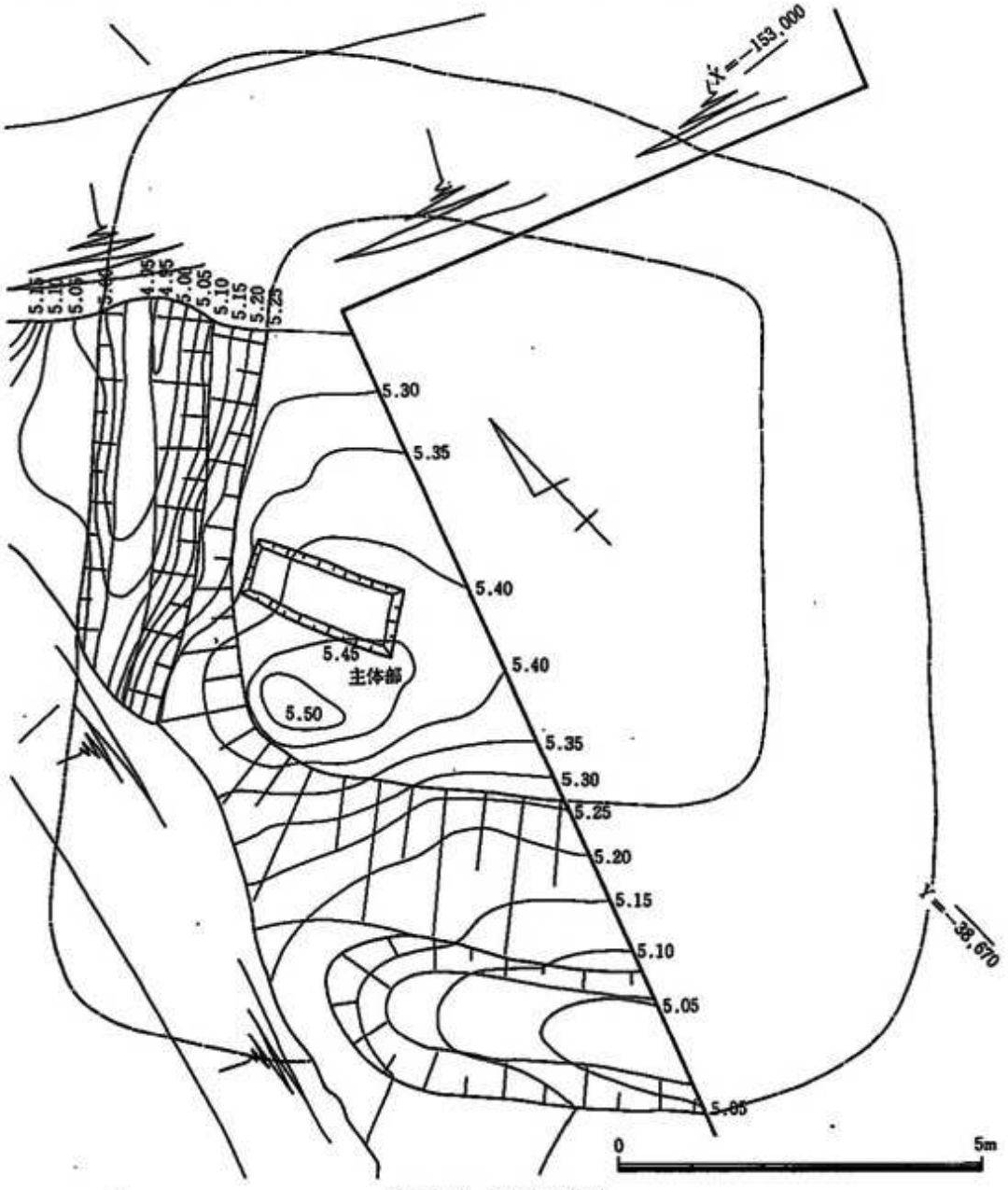
第103図　土器群Ⅲ出土物（2）

ヘラ削りが認められ、他は基本的にナデによる。韓式系土器の可能性が考えられるが胎土分析からは在地産との結果を得ている。279～283は、直口壺で、いずれも丁寧なヘラ磨きが施される。284～319は甕である。内彎し端部の肥厚する口縁と、肩部に横方向のハケ目を持つ285を含む点で、土器群Ⅳの組成と異なる。289は、粗いタタキ目を残す長胴の甕である。



第104図　土器群Ⅲ出土遺物（3）

２号墓（第105図）　Ｂトレンチ中央付近、Ｘ＝－152,995～－153,010で検出された周溝墓である。北端部を古墳時代後期の自然河川で流失し、西コーナー部を現代水路によって欠く。東半は調査区外に当たり、北西、南西両周溝に挟まれた全体の約1/3を検出したのみである。主軸方向をＮ－45°－Ｅに置き、周溝を含めた規模は、推定で一辺約12～13ｍを測る。マウンドの規模で、一辺約10ｍ前後と推定される。マウンドは、１号墓と同様の淡青灰色粘土によって構築される。マウンドの残存高は、最大で約40cmを測り、比較的残存状態は良いが、上層遺構（ＳＫ8013）などで削平されており、本来は、さらに高い盛土をもつものと考えられる。

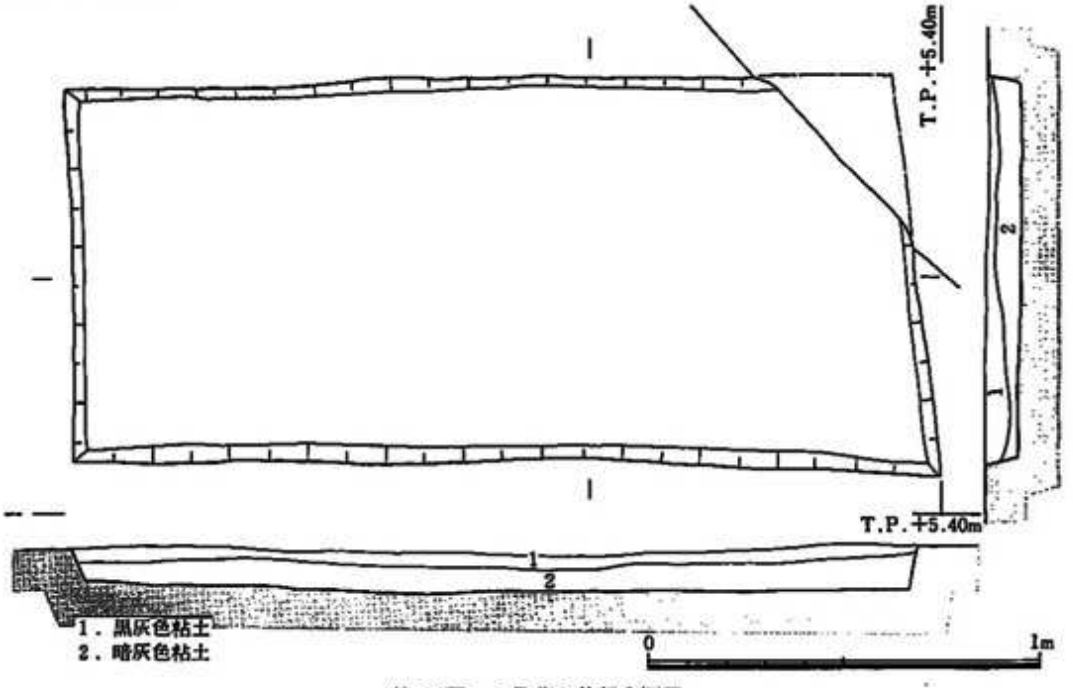


第105図　２号墓全体図

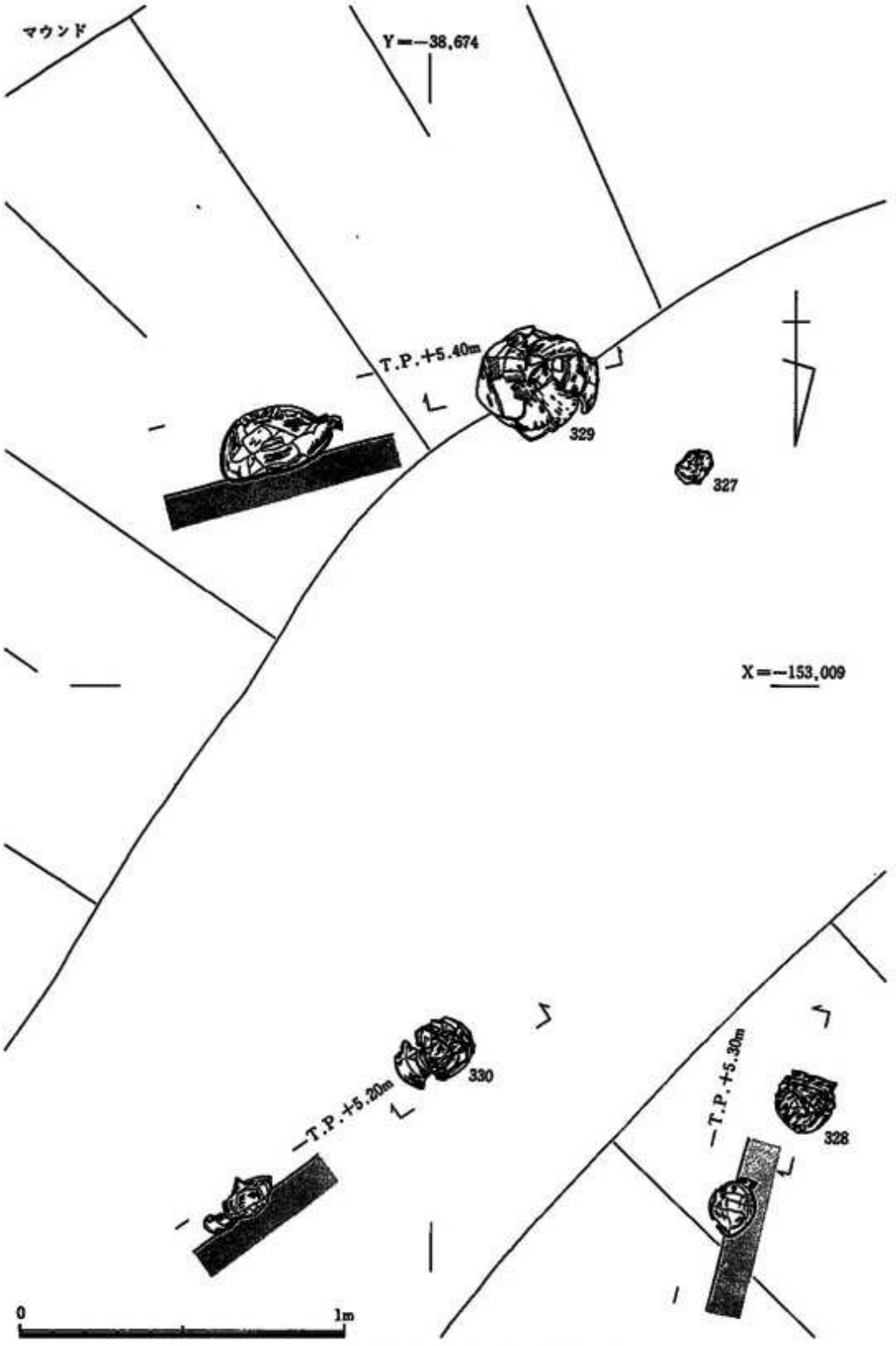
周溝は、北西周溝で幅約1.5m、深さ40cmを測り、南西周溝で幅約２m、深さ約30cmを測る。各周溝の埋土は、下半が灰黒色粘質土で、上半には第Ⅹ層上部に当たる灰黒色系のシルト、砂質土が互層状に落ち込むように堆積する。又、上層と下層の間には、ピート状の黒色粘土が薄く堆積する。北西周溝では、下層上面において、土器４個体がほぼ完形に近い状態で検出された。壺330は、底部が穿孔されており、周溝中央部で横転した状態で検出され、甕328は、330の西約１mの地点でほぼ完形のまま横向きの状態で埋没しており、大型壺329は、マウンド裾部に口縁を斜め上方に向け横転し、やや押しつぶされた状態で検出された。328・330は供献土器と考えられるが、329は大型で、マウンド裾部にあることから、土器棺として使用されたものが転落した可能性も考えられる（第107図）。南西周溝からは、上半を中心に土器の破片が多数検出されたが、原位置を保つものとは考えられず、二次的に堆積したものと思われる。

西コーナー部は、大半を現代水路によって欠損するが、マウンドのコーナー部が裾広く傾斜しており、南西周溝の底部がコーナー部手前で急激に上昇することから、ブリッジ状に周溝が途切れる、或いは浅くなると推測される。

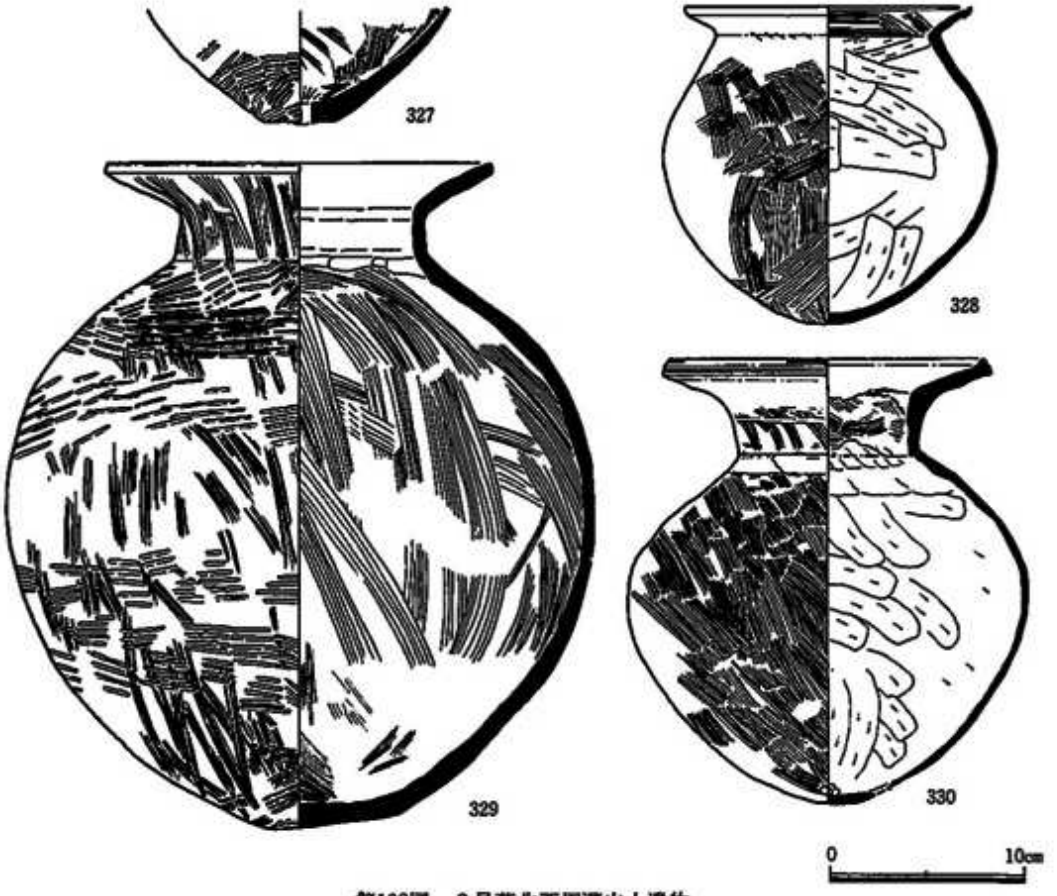
主体部　マウンド西端部において、方形の墓壙一基を検出した。上部を大半削平、或いは流出しており、深さ約10cmを測るのみである。N－30°－Wに主軸を置き、長さ2.2m、幅約１mを測る。下層は暗灰色粘土、上層は黒灰色粘土である。上層の黒灰色粘土は、層厚約５cmを測り、これ自体、組み合わせ式木棺底板の痕跡を示すものかもしれない。西周溝側より南東に向け若干幅を増す傾向を示すことから、南東側に頭位を置くものと思われる。本主体部は、２号墓の中央部の推測地点からは大きくはずれ、マウンドの端部に当たることから、２号墓の中心的埋葬施設とは考えられない。



第106図　２号墓主体部実測図



第107図　2号墓北西周溝遺物出土状況



第108図　２号墓北西周溝出土遺物

出土遺物（第108図）

327は、鉢型の器形を持つ甑底部の破片である。外面は、粗いタタキ目を残す。底部には、焼成前に径約８mmの孔があけられる。328は、生駒山西麓産の胎土を持つ中型の甕である。体部外面は、タタキ目の後、縦方向を基本とするハケ目を全体に施す。内面は、ヘラ削りにより器壁を薄く仕上げ、頸部内面にシャープな稜をもつ。329は大型の壺で、平底ぎみの底部に球形に近い体部を持ち、短く立ち上がる頸部より口縁部が開く。体部外面は、３段階を基本とするタタキ目の後に縦方向のハケ目、内面は粗いハケ目を施す。330は、淡緑褐色を呈する壺で、尖り気味の底部に肩の張る体部を持ち、器壁は内面ヘラ削りによって薄く仕上げられ、外面はハケ目による。底部付近に内面からの穿孔が認められる。短い頸部より斜上方に直線的に口縁が伸びる。端部はやや内面に肥厚して平坦部を持ち、横描き沈線４条を巡らす。　（服部）

（Ｃ地区）

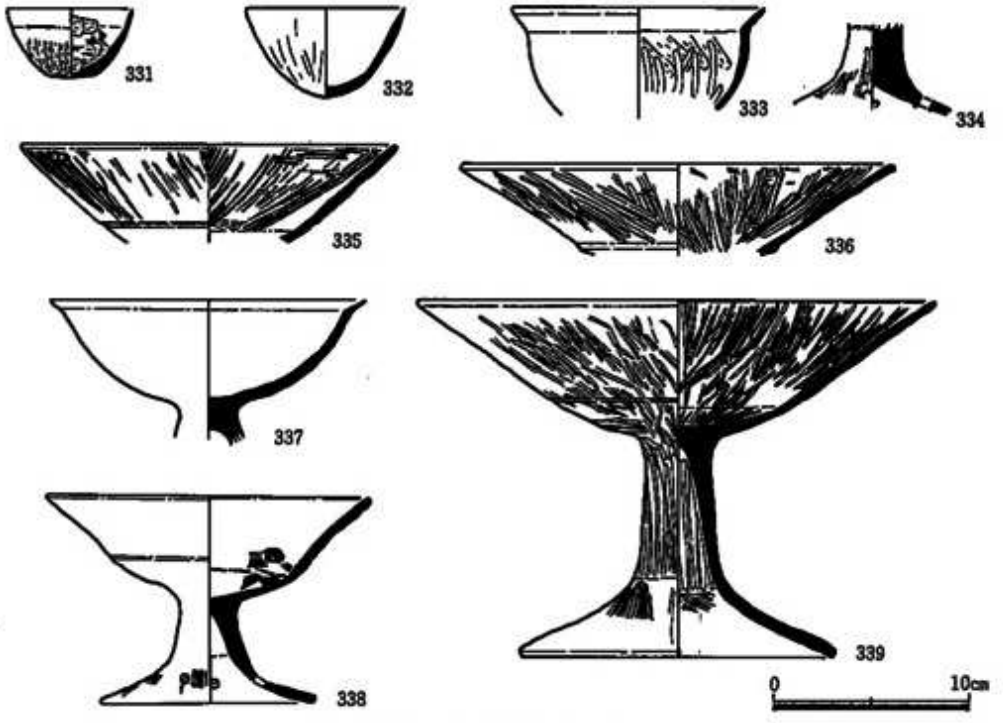
３号墓（第110図　図版三二・三三・三四）　Ｂ地区の南端からＣ地区の北端にかけて検出した。第２号墓より南側へ約24ｍ離れて位置し、第４号墓に近接している。本遺構は現代水路によって壊されていることや、大半が調査区外の為に疑問な点も残るが、以下の点より墓と考えた。先ず、第１・２号墓と同様に、盛土を有することである。第１・２号墓に比して若干低いようで

あるが、土を盛り上げている。問題点は、下層遺構、第８ｆ遺構面に長方形の土坑が存在する事と、マウンドに多量の土器を検出した事、又、南側の周溝が２回掘削されている点にある。またＢ地区の南端の溝は同一の埋土層である。

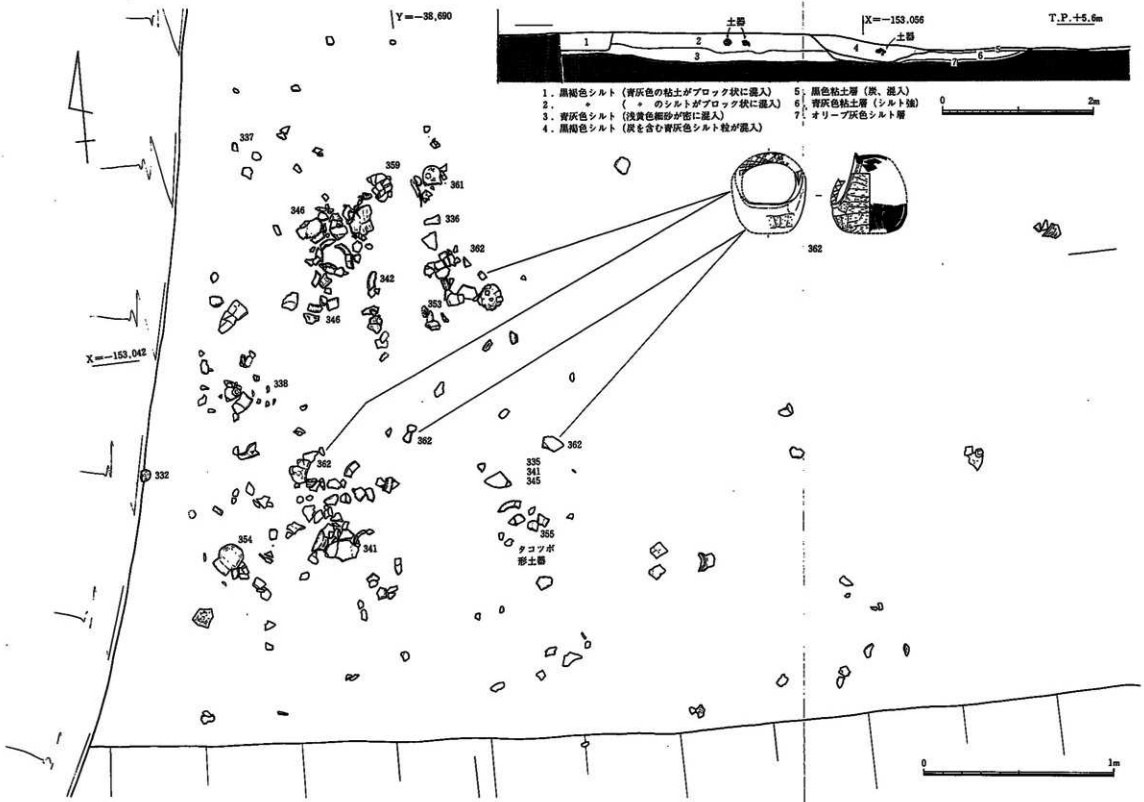
３号墓は、ほぼ方形を呈すると思われ、溝によって区画している。大きさは、17.7m×10m、高さ（溝底から）50cmを測る。主軸は長軸を北北西ー南南東方向におく。盛土は、大きく２層に分かれ、下層より①青灰色シルト層、②黒褐色シルト層である。精査した結果、主体部は見出せなかったが、墳丘上面に於いて多量の土器を検出した。土器は、壺、甕、高杯、鉢、蛸壺、手焙形土器で構成されている。墓の中央部で確認した手焙形土器は、これら土器群の中心に位置する。また、蛸壺もこの付近より出土した。

溝は、北側周溝幅が1.4～２m以上、深さ50cm測る。埋土は黒褐色粘土（炭を含む）で、小量の土器を検出している。南側周溝は２回掘削されており、２回目の溝（新、南側周溝１）は、幅が1.6～３m、深さ20cmを測る。１回目の溝（古、南側周溝２）は、幅が2.85～4.3m、深さ約15cmを測る。２回目の溝の埋土は黒褐色シルト（炭を多く含み、細い青灰色シルトが密に混入）である。１回目は底に灰色シルトが溜まり、その上に青灰色粘土が堆積する。南側周溝１・２より土器が多く出土している。南側周溝１では、壺、甕、高杯、器台が出土し、南側周溝２では大型器台、小型器台、壺、甕が出土している。

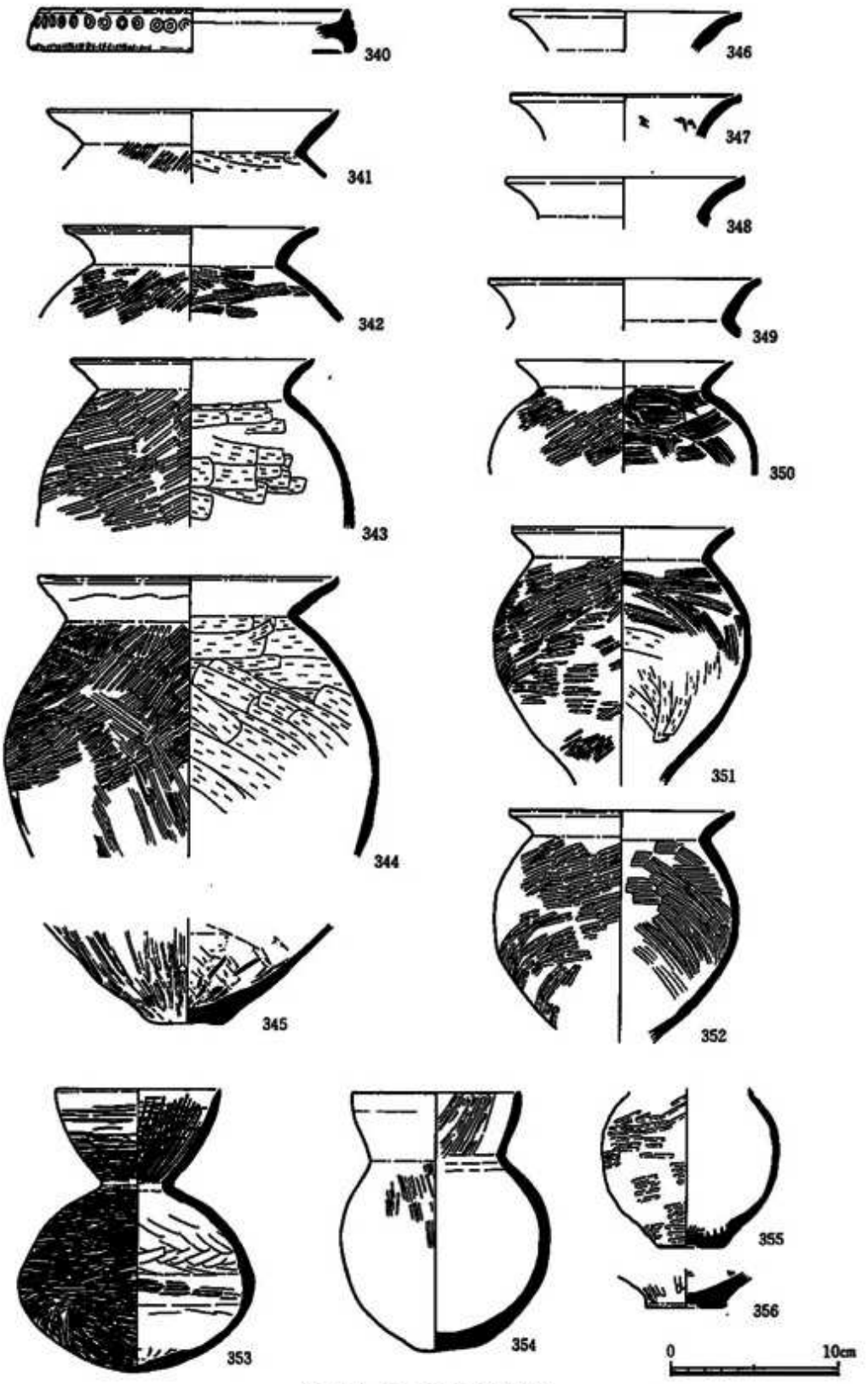
盛土出土遺物（第109・111図　図版七二・七三・七四）　盛土を２層に分け下層を①、上層を②として遺物を取り上げた。①では壺、高杯、甕、鉢を、②では壺、高杯、鉢、小型鉢、甕、手



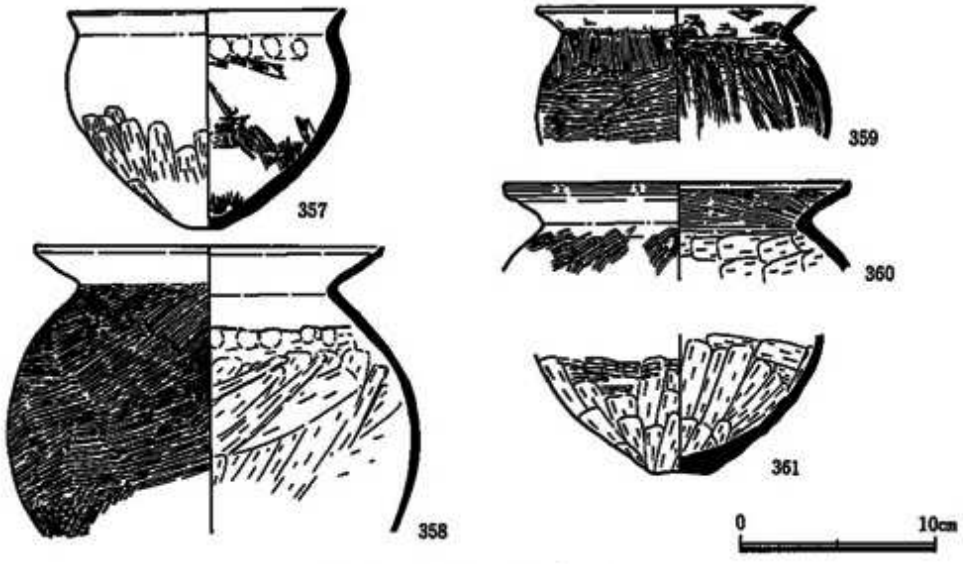
第109図　３号墓出土遺物（１）



第110図　3号墓上面遺物出土状況



第111図　3号墓出土遺物(2)

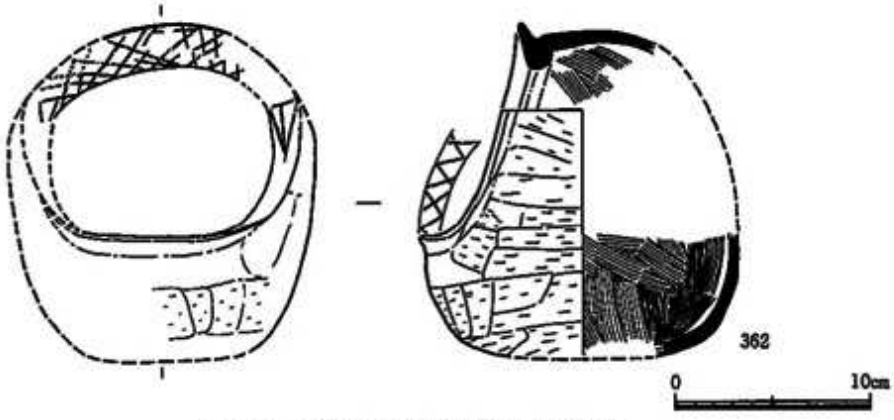


第112図　3号墓出土遺物(3)

焙形土器が出土している。

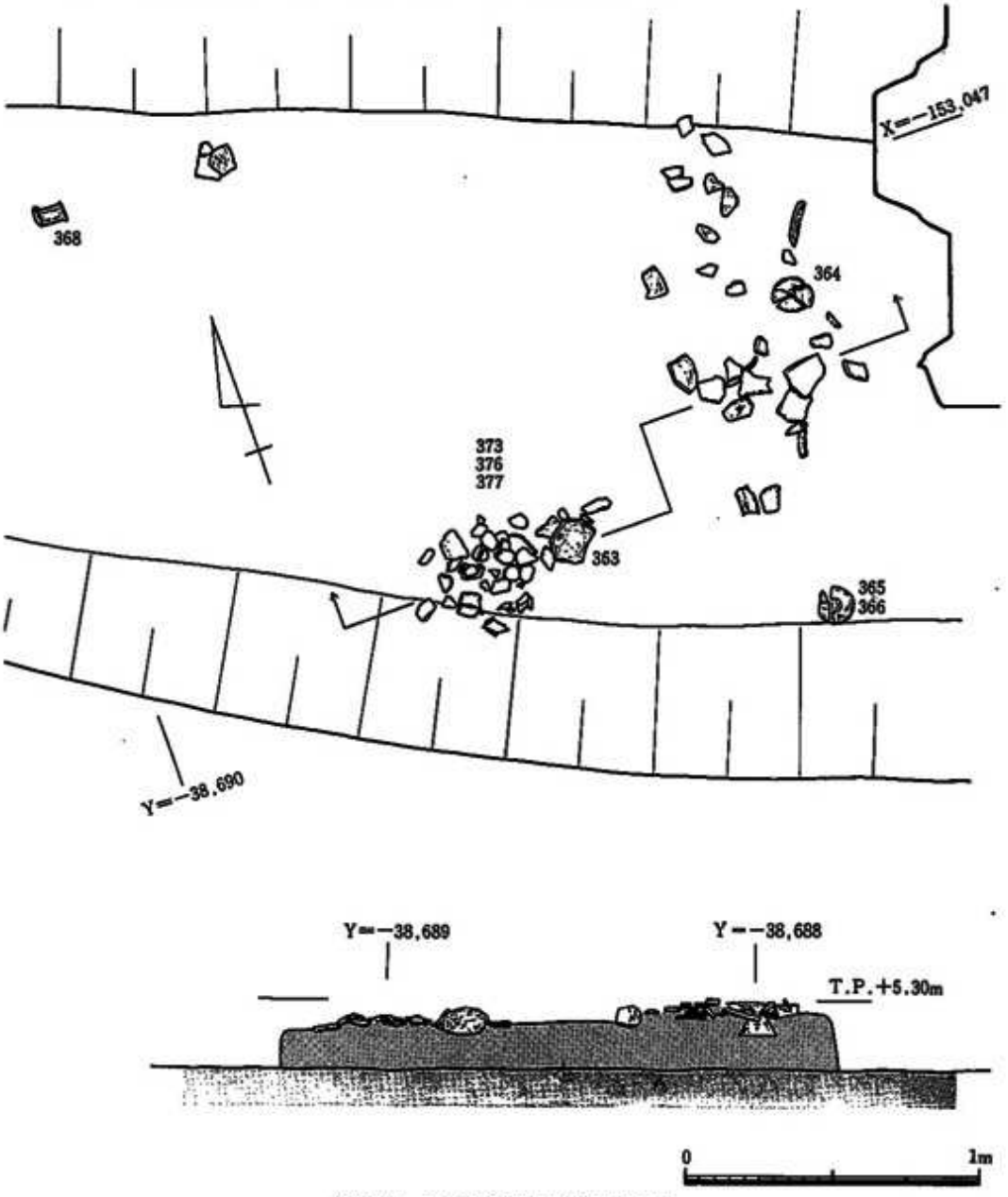
①　壺353の外面はヘラ磨きを、底部に斜めのヘラ磨きを行う。口縁部内にヘラ磨きを施す。346～349は口縁部のみが残存し346～348はその端部をつまみ上げる。甕343・344・350はいずれも体部外面にタタキ目を、344はタタキ目とハケ目を行う。何れも内面はヘラ削りを行う。鉢は、小型鉢333と、手捏風の331・332がある。333は外面ヘラ磨きを施す。331・332は体部内外面ヘラ削りを施す。高杯334は外面にヘラ磨きを施す。336は内外面ともにヘラ磨きを、口縁部内面にハケ目を残す。337は脚柱部上位に3ヶ所の孔を有する。杯部外面はヘラ磨きを行う。

②　壺354は内外面にハケ目を、内面に横ナデを施す。他地域産である。340は口縁部端面に竹管文を、上端と下端に刻目を施す。345は、外面にヘラ磨きを、内面にハケ目を行う。尚、底部に0.5cmの孔を穿つ。甕341・346・358・360は斜めのタタキ目、内面にヘラ削りを行う。360は口縁端面に沈線を入れる。口縁部内面にハケ目調整を施す。358は体部下半にハケ目調整を行う。342・351・352・359は基本的に外面に左下がりのタタキ目を、内面にハケ目調整を行う。351は

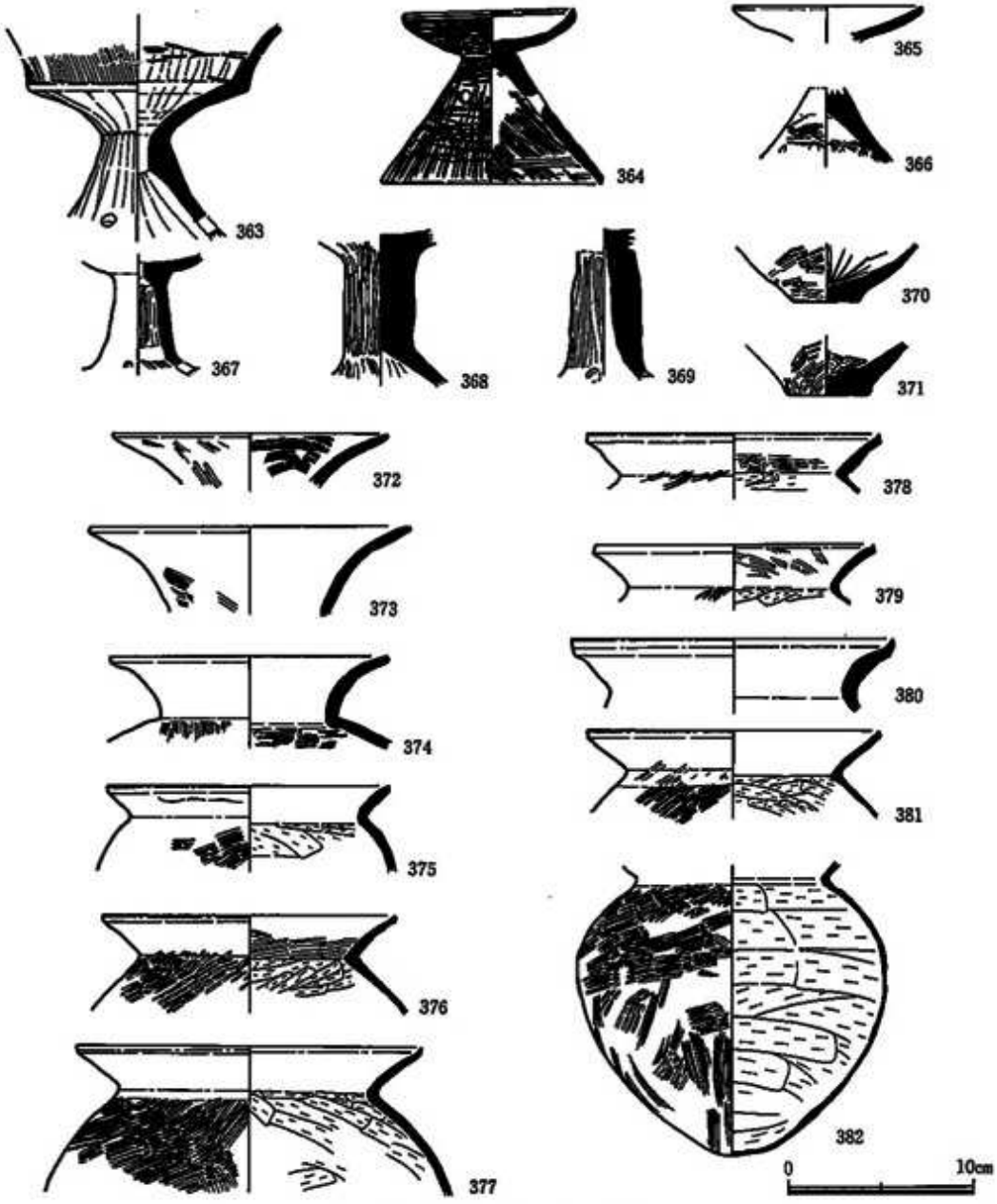


第113図　3号墓出土遺物(4)　手焙形土器

体部上位にタタキ目を行う。内面は上位に横方向のハケ目、下半にヘラ削りを行う。359は体部にタタキ目を施した後、ハケ目を行う。内面は、口縁部にハケ目の後に横ナデを、体部上位はハケ目を行う。355は輪台状の底部を付ける。外面は体部に斜めのタタキ目を、体部内面にナデ調整を行う。361は底部で若干丸く突出させ、浅い凹みを有する。体部内面にタタキ目を、底部にヘラ削りを行う。体部外面はヘラ削りを行う。鉢357は内外面にナデ調整を行っている。332は小型の鉢の手捏風で、全体的にナデている。高杯338は小型で、339は大型である。いずれも、外面底部と口縁部の境に沈線を入れる。338は外面全体にヘラ磨きを全体に内面はハケ目を行う。339はヘラ磨きを施す。内面は一部ハケ目の後にナデを行っている。



第114図　3号墓南周溝遺物出土状況



第115図　3号墓出土遺物(5) 南周溝

これら遺物の中で、古い様相を示す遺物がある。①は343・350・354・356で、②は345・351・352・355・359・361である。

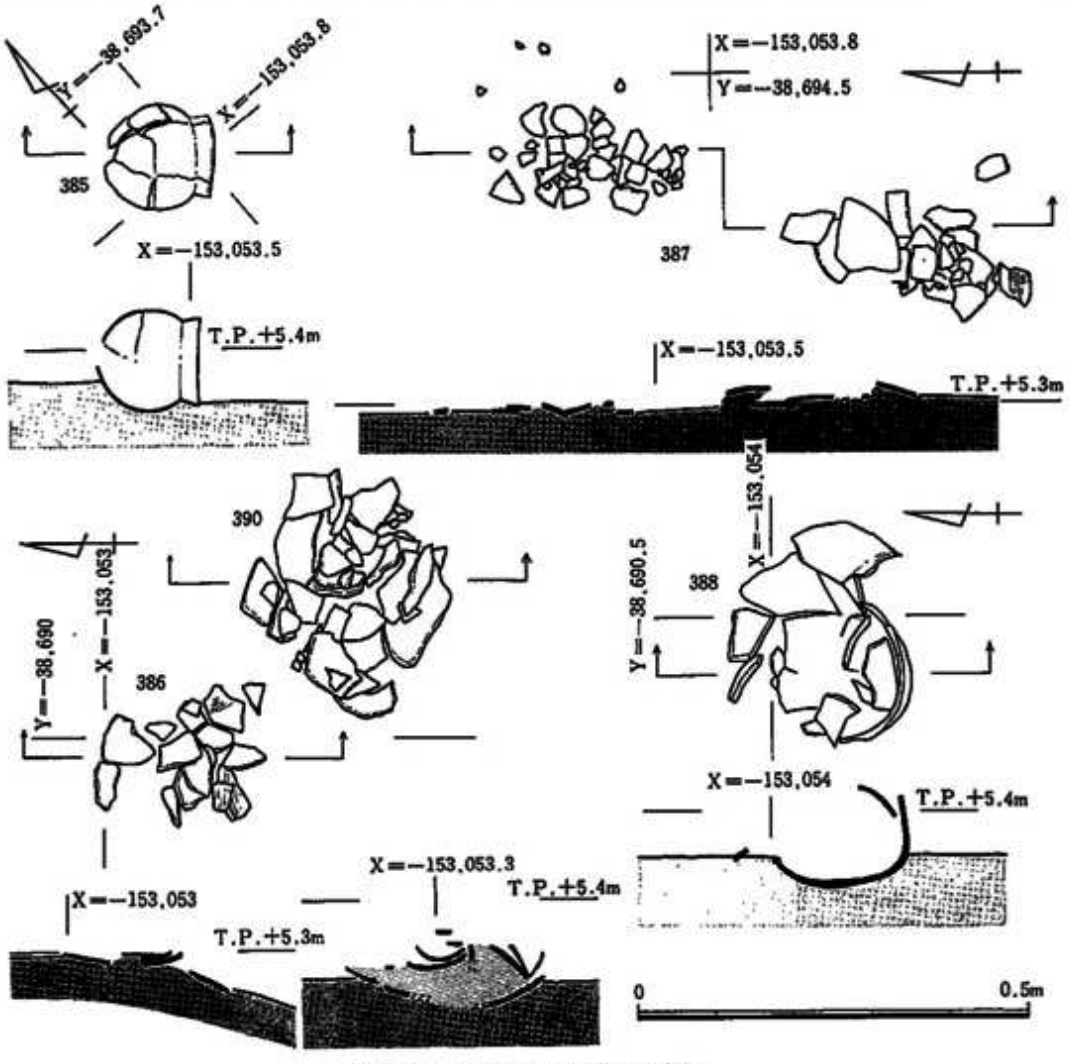
手焙形土器362は、胎土が暗褐色を帯びている。開口部端面に斜格子文とヘラ記号文を施す。本遺物は覆部と鉢部の一体整形を行っている為、その境が明瞭ではない。外面はヘラ削りを、内面にはハケ目を行う。

南側周溝1内より高杯脚柱部、器台脚部、壺、甕を検出し、南側周溝2内では大型器台、小型器台、甕を検出した。

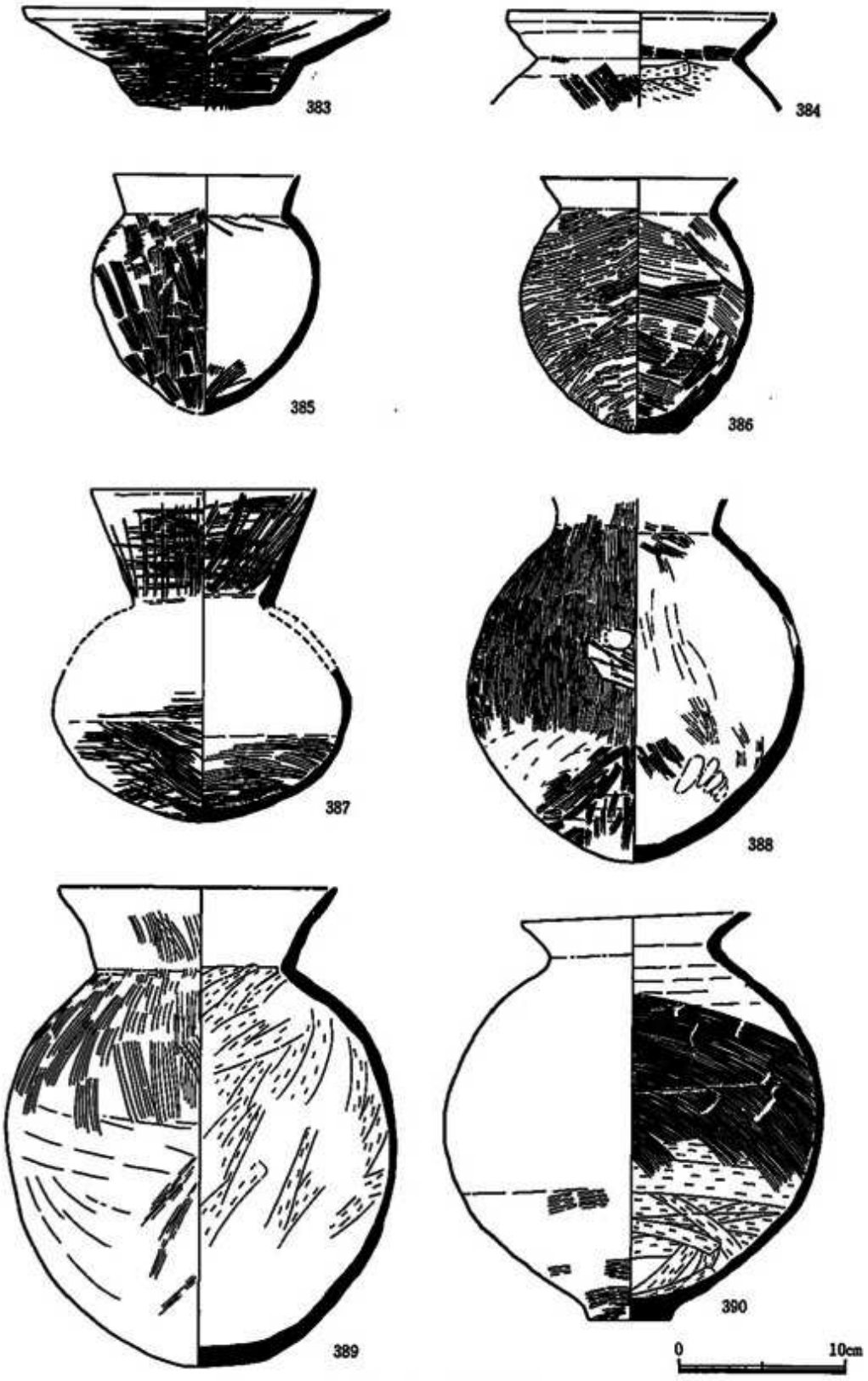
南側周溝１　367・368・369は外面にヘラ磨きを施す。372は外面にヘラ磨きを、内面にハケ目を、374は体部内外面ともにハケ目を施す。380は口縁部が直立する。375・378・379・381・385は基本的に体部外面に細いタタキ目、内面にヘラ削りを施し、385の内面はナデを施す。382の体部は、ハケ目の後にタタキ目を消している。

南側周溝２　363、口縁部にヘラ磨きを施す。364、外面全体にヘラ磨きを施す。杯部は縦方向のヘラ磨き。365は器台杯部である。370・371は甕底部である。373は壺の口縁部である。376・377は体部にタタキ目、内面にヘラ削りを行う。

第４号墓（第116図　図版三二・三四）　第３号墓の南側に近接している。調査当初、墳丘が３号墓よりも低いので、疑問な点もあったが、溝を巡らすことを確認したので、墓と考えた。長辺９ｍ、短辺５ｍ以上で、高さ20cmを測る。幅約2.5ｍ、深さ４cmの溝を有する。主軸は東西方向におく。主体部は検出出来なかった。北側周溝内に於いて、遺物を確認した。壺、甕、高杯を中心としている。コーナー部で直口壺・甕、１ｍ離れて壺、更に東へ３ｍ離れてＳＫ8019の南



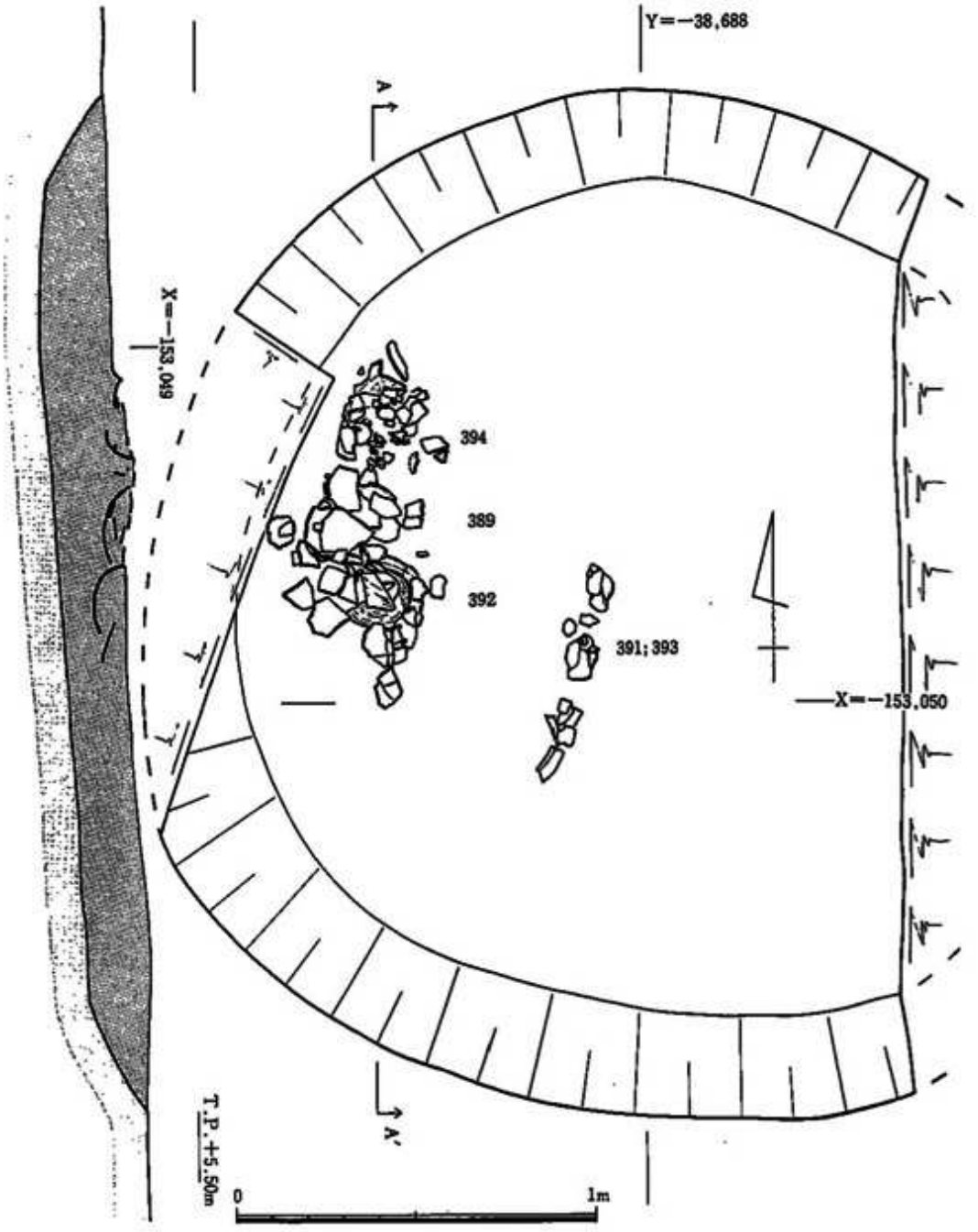
第116図　４号墓北周溝遺物出土状況



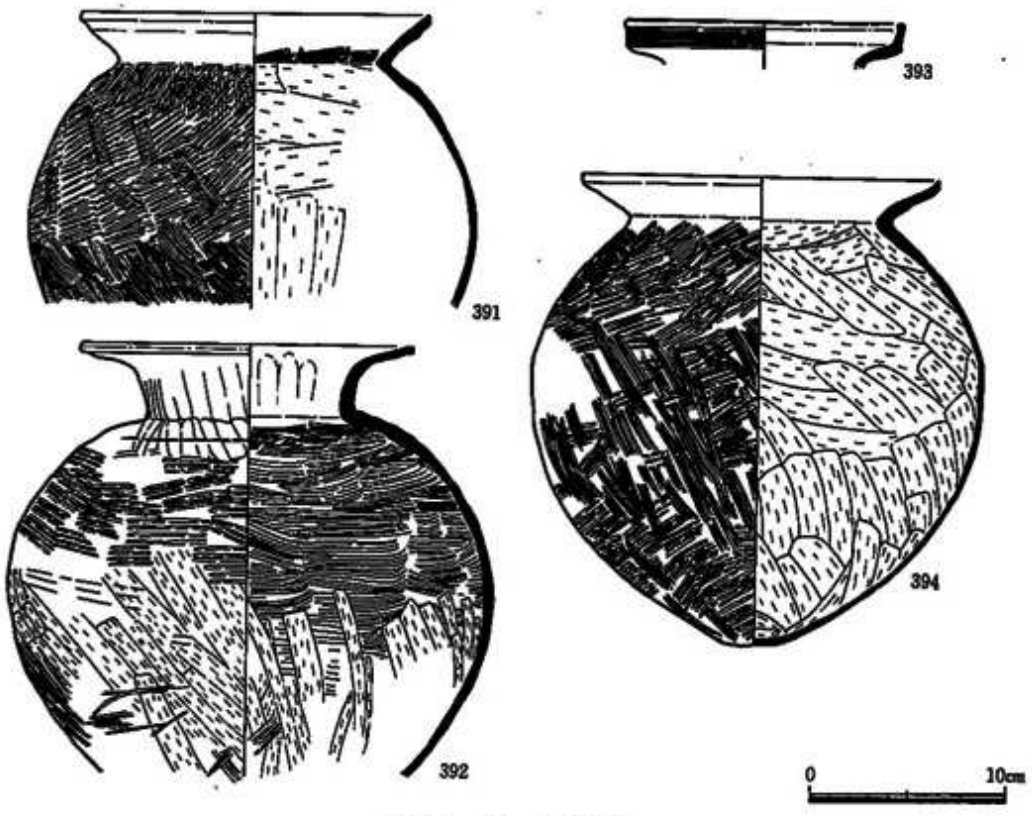
第117図　4号墓出土遺物

側に甕・壺が位置している。

出土遺物（第117図　図版七五）　壺：389は外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。黒斑あり。390は、底部外面にタタキ目を、内面体部にハケ目を、底部はヘラ削りを行う。387外面はヘラ磨きを行う。口縁部内面にはハケ目の後、ヘラ磨きを施し、底部内面にハケ目を施す。388は体部を穿孔する。体部内外面にハケ目調整。385外面はタタキ目調整。甕：386は古い様相を示す。384は体部にタタキ目、内面にヘラ削りを行う。383は杯底部内面中心が刺突され、凹む。



第118図　ＳＫ8019遺物出土状況



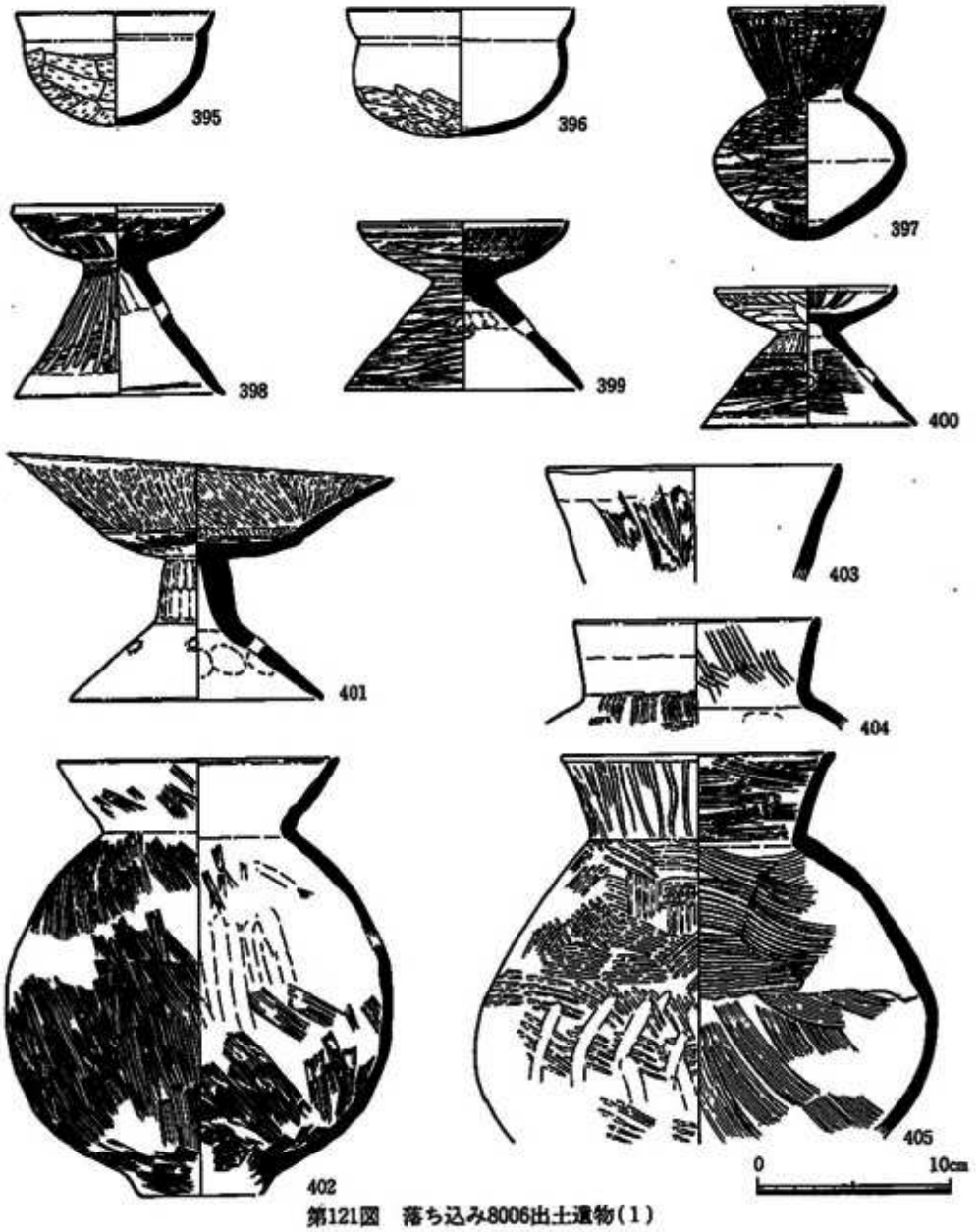
第119図　ＳＫ8019出土遺物

ＳＫ8019（第118図　図版三四）　Ｃ地区で検出。径2.7m、深さ20cmを測る。埋土は黒灰色シルトである。遺物は、壺、甕等が出土している（第119図　図版七四）。甕391・394は体部外面にタタキ目、下半部をハケ目で消す。内面はヘラ削り。393は口縁端面が退化凹線で吉備系。口縁端部に沈線を施す。外面タタキ目とヘラ削りを施す。内面はハケ目を施す。　（小野）

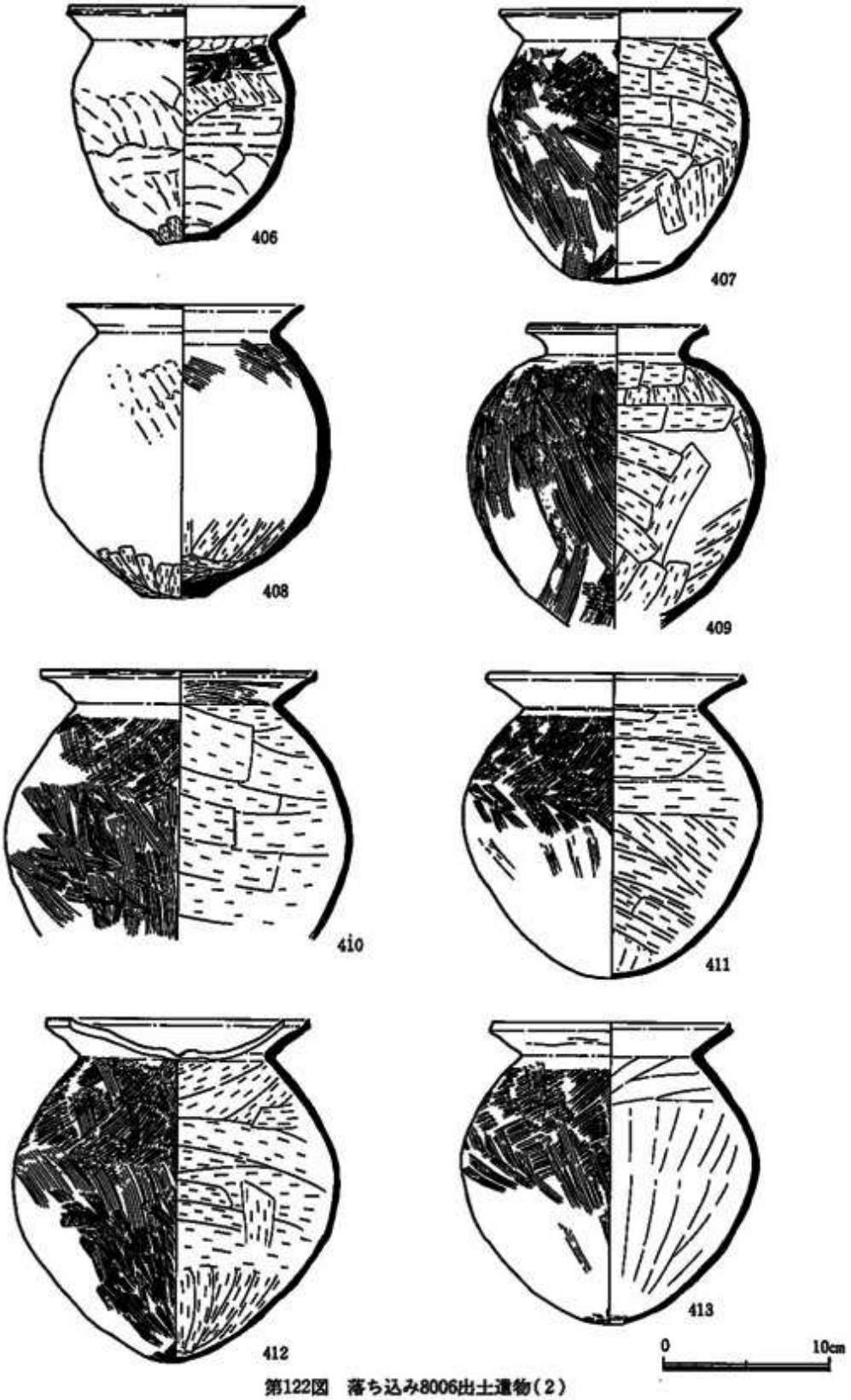
落ち込み8006（第120図）　４Ｃトレンチで検出された落ち込み状の遺構である。４Ｃトレンチでは、第Ｘ層下半に当たる暗灰色粘土は部分的にしか存在せず、南端部分約２ｍを肩として北に向けて第Ｘ層上半が落ち込むように堆積する。Ｘ＝－153,083付近では、暗灰色粘土が、東から西へ伸びる舌状の微高地として残存し、全体として４Ｃトレンチ内においてコの字状の落ち込みを形成している。落ち込みの南縁部は、比較的直線的で、Ｎ－55°－Ｗの方向を示す。舌状微高地は、落ち込み南縁部と平行する方向に主軸方向を置き、幅約2.5m、検出長約６ｍを測る。西端部は隅円方形状に終わる。落ち込み8006を舌状微高地を境として、南半と北半に分ける。南縁肩部より落ち込み全体を覆うように、ピート状の黒色粘土が薄く堆積しており、南半を中心にこのピート層上面より多量の土器が検出された。北半は、舌状微高地北側で急激に下降した後、深さ約20cmでほぼ水平となり、調査区内では再び上昇する傾向は示さない。南半は、南縁部と舌状微高地の間が、幅約2.5m、深さ約20cmを測る溝状を呈し、完形品を多く含む多量の土器が検出された。

北半の遺物の分布状況は、舌状微高地北西端部付近で、壺、甕の２個体404・416が検出されたのみである。ともに口縁部を下にして伏せられた状態で検出されている。

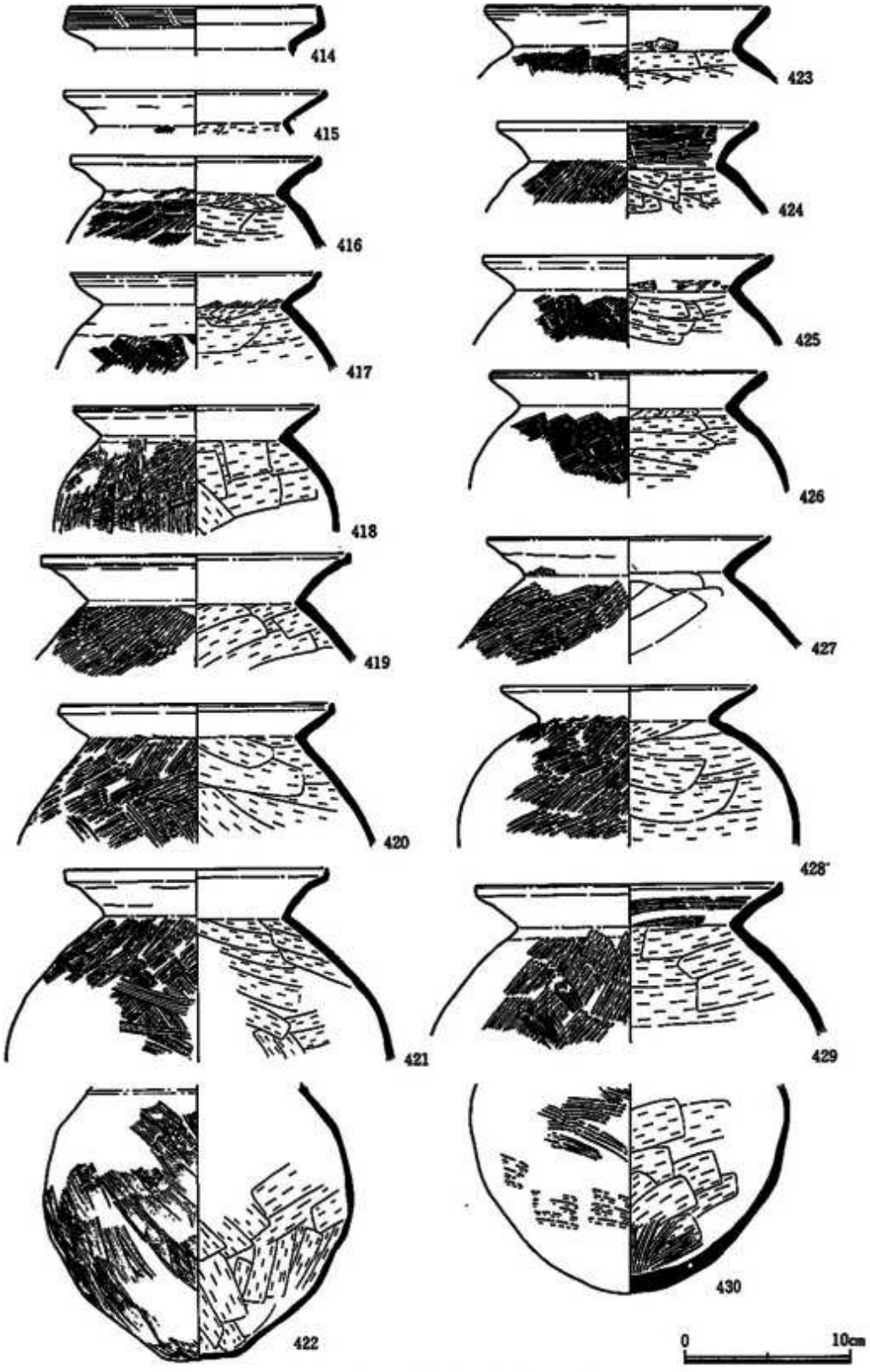
南半の主要な遺物の分布状況は、第125図に示す通りである。大きく分けて４つのグループを形成する。北西部のグループでは、底部穿孔のあるものや、口縁が打ち欠かれたものなど甕５個体、鉢２個体、小型器台２個体、小型壺１個体、高杯１個体などが列状に検出された。中央部では、南北に横断するように列状をなして土器が検出され、それらが南北２つのグループを形成する。北側のグループは、甕の口縁部を中心とした破片が集中し、約10個体分を数える。南側のグループも、甕を中心とした破片で構成される。南東肩部付近のグループは、他地域産の可能性が



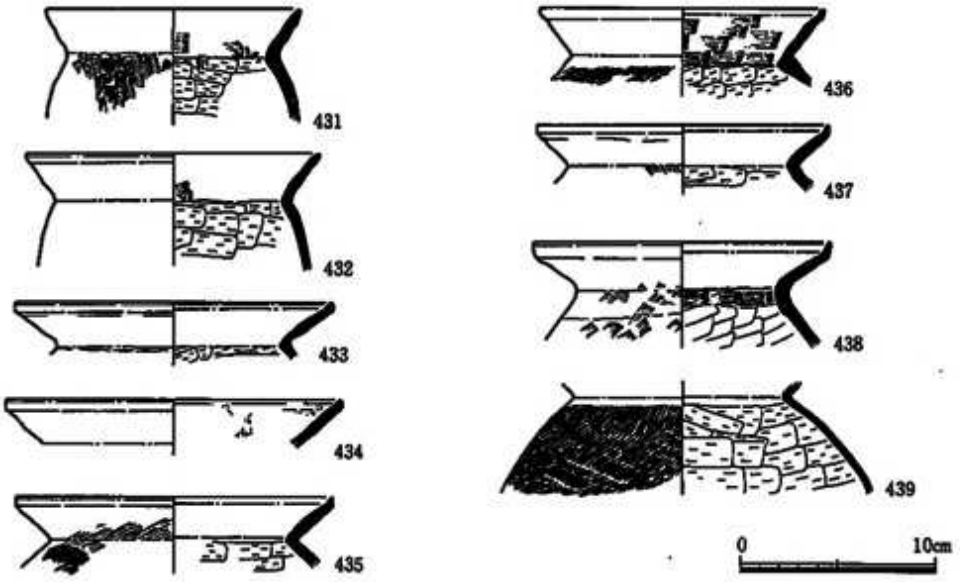
第121図　落ち込み8006出土遺物（１）



第122図　落ち込み8006出土遺物(2)



第123図　落ち込み8006出土遺物（3）



第124図　落ち込み8006出土遺物(4)

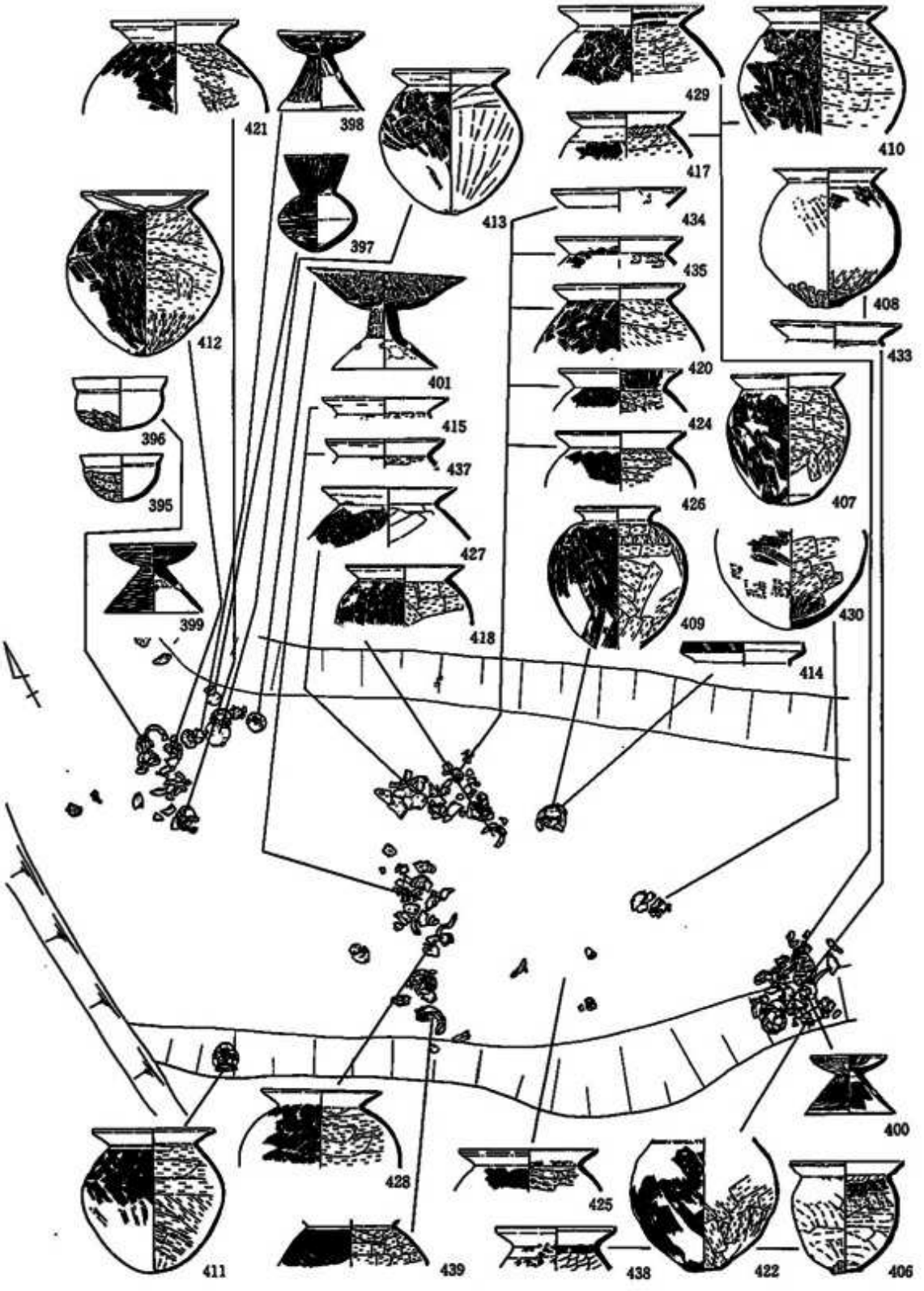
考えられるもの数個体を含め、甕10個体前後と、小型器台などで構成される。これら各グループの間においても底部下半を欠き、その内部より吉備系甕口縁部が検出された壺、甕の底部や口縁部などが検出された他、南西肩部において横向きの状態で甕1個体が検出されている。

落ち込み8006で検出された遺物群は、他地域産の可能性が考えられるものを含むことや、底部穿孔や打ち欠き口縁が認められ、単純な生活面上における廃棄、埋没とはやや異なった様相を示すものと思われる。又、落ち込み8006の性格を考える上で、遺物の出土状況や組成とともに、舌状微高地の機能が重要な意味をもつ可能性が高いが、その東半が調査区外に当たり、全体の形状など不明な点が多くのこされている。

出土遺物（第121図・第122図・第123図・第124図）

落ち込み8006より出土した土器は、コンテナ総数約10箱を数える。検出された土器は、個体数を判別するため完形品と、口縁部又は底部を含む破片を抽出し、実測し得るもの全てを図化した。

395・396は鉢である。397はミニチュアに近い小型長頸壺である。尖りぎみの底部にそろばん玉状の扁平な体部を持つ。398～400は小型器台である。401は高杯で、やや裾部の高い脚部に傾斜した杯部がつく。402～405は壺である。402は下ぶくれの体部に甕風の口縁をもつものである。口縁部は、内彎ぎみで端部がやや肥厚した面をもつ。403・404は短頸壺である。405は下ぶくれの体部に斜外方に外反ぎみに伸びる口縁をもつ。体部外面は、4段階のタタキ目が残る。406～439は甕である。口縁端部をややつまみ上げる河内産のものが大半を占めるが、他地域産と思われるもの数個体を含む。414は吉備系の甕。406・408はともに淡黄褐色を呈し、器形も他とやや異なり、胎土分析結果においても異質な胎土組成が指摘されている。412は打ち欠き口縁、413には焼成後の底部穿孔が認められる。



第125図　落ち込み8006主要遺物出土位置図

ＳＤ8021（第126図）　３Ｃトレンチ北端で検出された溝である。東側を現代水路で欠き、西側は調査区外へさらに伸びる。幅約２ｍ、検出長7.5ｍを測る。主軸方位は、Ｎ－65°－Ｗに置く。深さ約35cmを測り、埋土は上下２層からなり、下層は暗灰色粘質土、上層は黒灰色シルトである。上層を中心として多数の遺物が検出された。主軸方位において、前述の落ち込み8006と近似した方向性を示し、位置関係からも連続する一つの遺構を形成していた可能性が認められるが、トレンチ部を攪乱によって欠くため、この点については明確にし得ない。

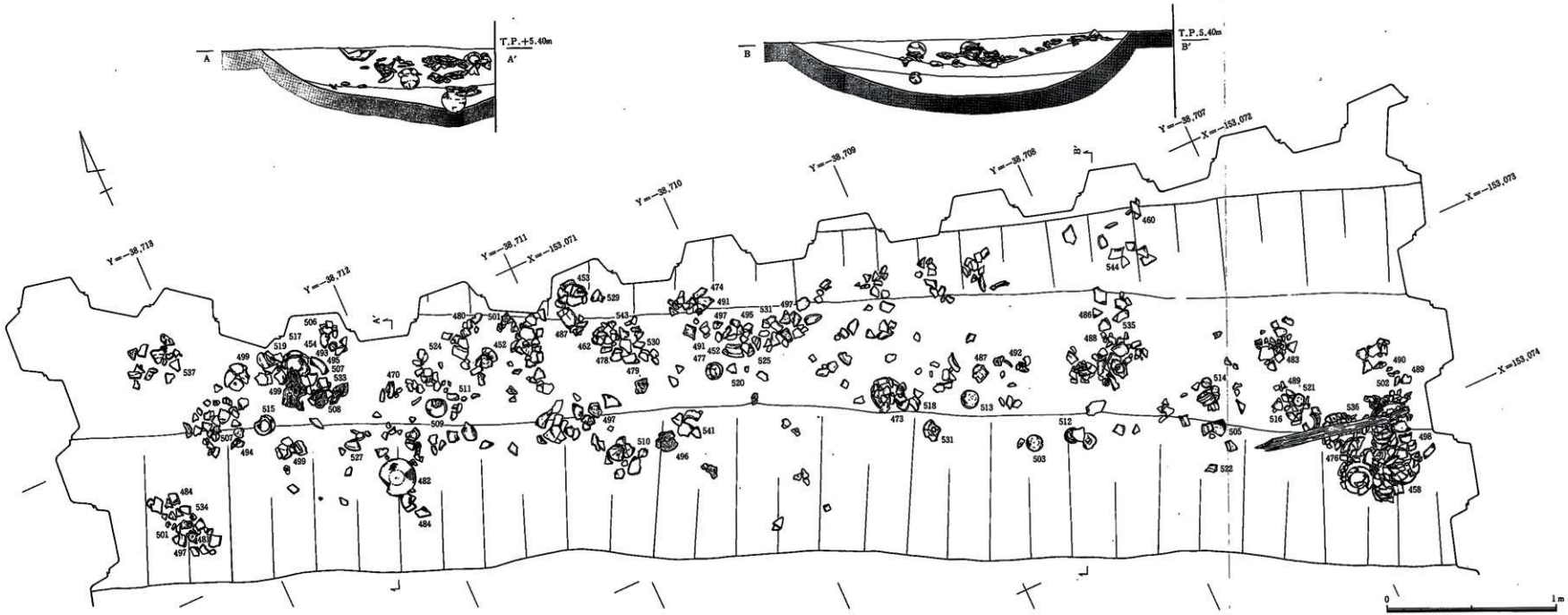
主要な遺物の分布状況は、第127図に示す通りである。検出部分の全面に亘って遺物が検出された。ＳＤ8021からは、丸底で球形に近い体部をもつ鉢の完形品が多数出土しており、本遺構における土器組成を特徴づけている。これらの鉢は、あまり明確ではないが溝内で２ｍ前後の間隔を置いて２個体ずつ分布する傾向を示す。小型器台もまた、同様の分布傾向を示しており、２個体ずつによるセット関係が存在した可能性が指摘できる。高杯は、杯部或いは脚部のみの破片が多く、完形に復元されるものは検出されていない。これに対し低脚高杯４個体は、内３個体がほぼ完形復元され、西端、東端で各１個体、中央部で２個体分が検出された。壺は、総て破片である。甕は、溝全体に破片が散乱し、個体数も多数を数える。又、下層では、東端付近で甕多数が口縁部を上にして押しつぶされた状態で検出された他、トレンチ西端より２ｍ地点で454が口縁部を上にして完形で検出された。低脚高杯498は、この東端部下層の甕集中地点最下層より検出されたものである。全体的に、下層では個体数も少なく分布範囲も限定されるが、甕を中心とし、上層では多様な器種構成を示している。

ＳＤ8021は、周囲の遺構密度の希薄さに比べ、特に豊富な機種構成と遺物量を持つと言える。落ち込み8006とともに、生活面上における単純な廃棄・埋没といった過程のみを表すのではなく、多量の土器を一時期に、或いは徐々に用いた特殊な行為によって形成された遺構と考えられる。

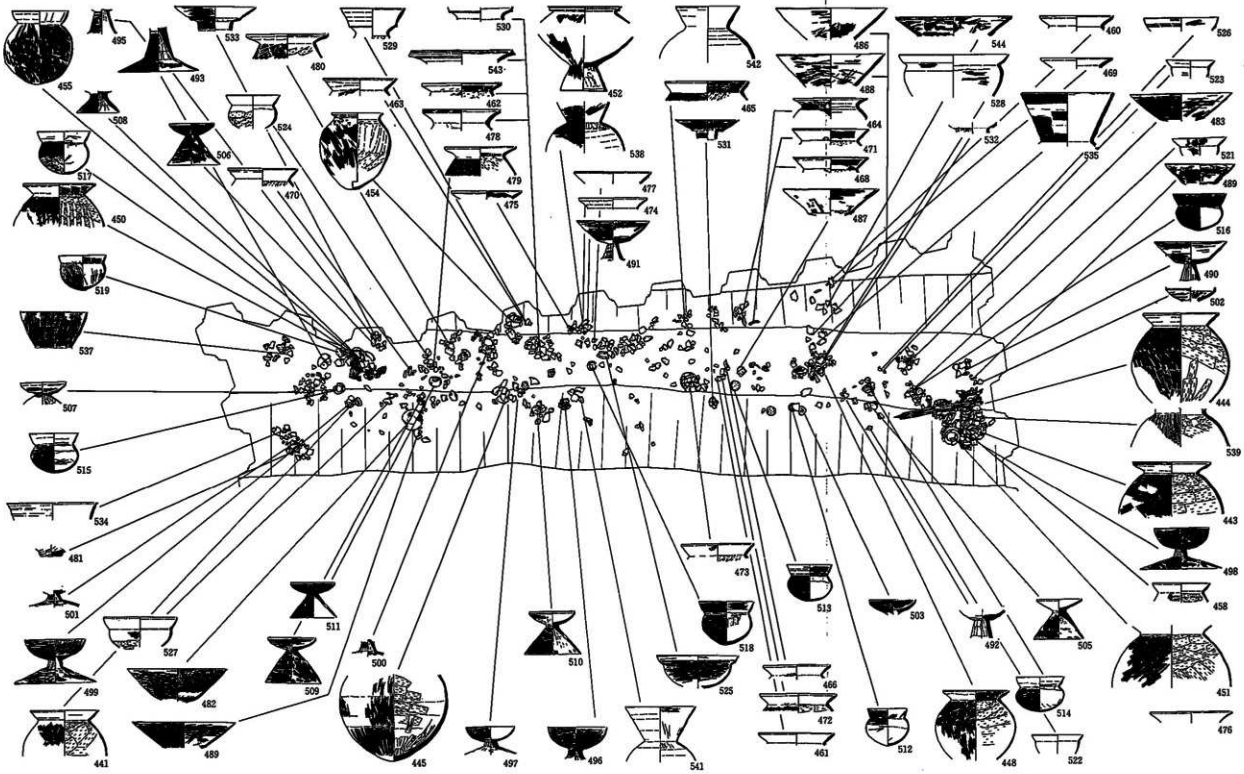
出土遺物（第128図・第129図・第130図・第132図・第133図）

ＳＤ8021より出土した遺物は、コンテナ総数約15箱を数える。検出された土器は、個体数を判別するため、完形品と口縁部及び底部を含む破片を抽出し、実測可能なものを総て図化した。

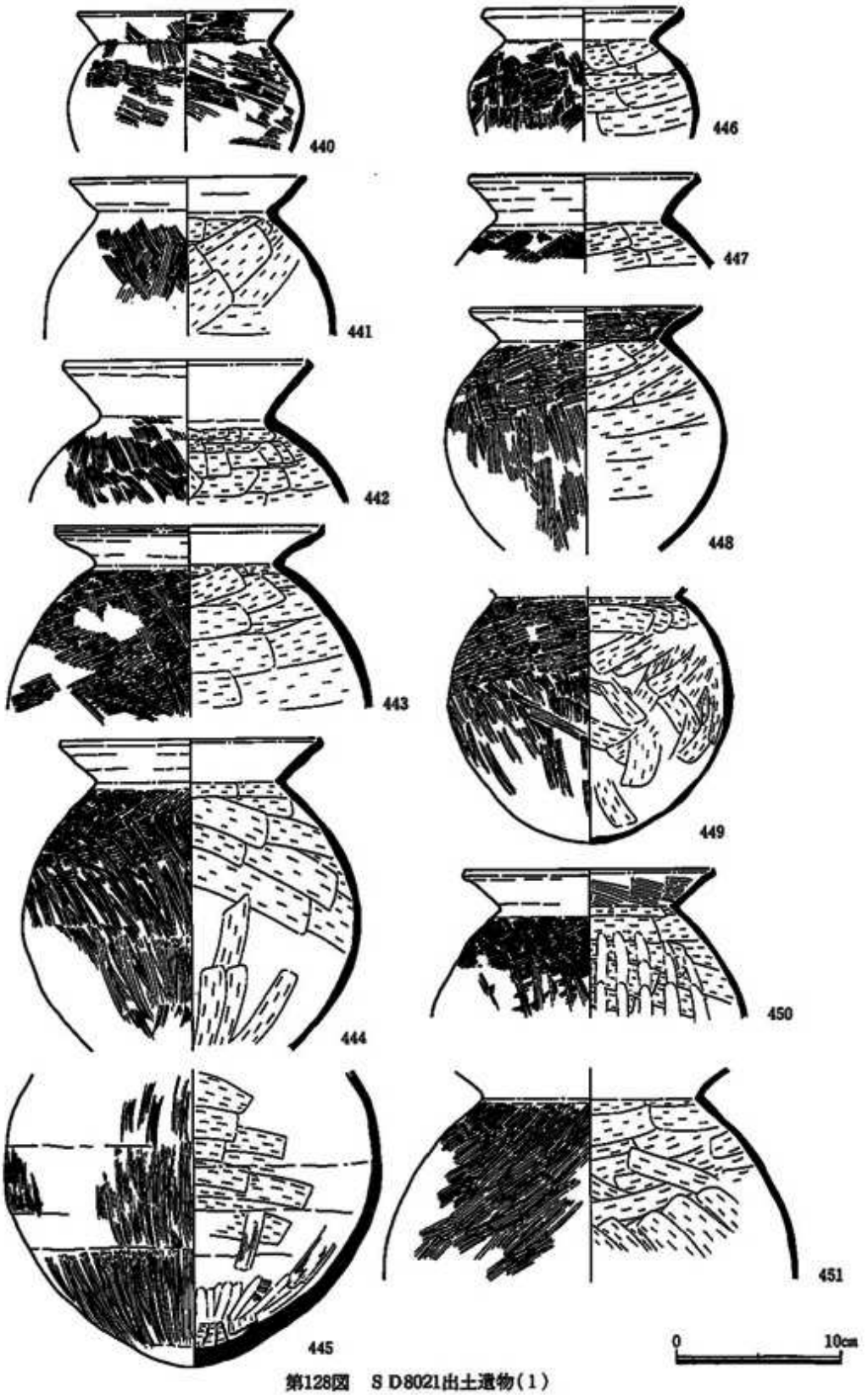
440～481は甕である。口縁部が、外反ぎみで端部がつまみあげられるものと、内彎ぎみのもの、外来系など、器形を異にするものが混在する。454は、丸底で球形に近い体部をもち、内面ヘラ削り、外面ハケ目によるものである。452は淡灰白色を呈し、Ｓ字状口縁と脚台部を持つ東海系の甕である。溝中央付近で散乱して検出されたが、同一の個体と思われる。455は、淡黄褐色の胎土をもつ吉備系の甕口縁部である。453は、赤褐色を呈し、短く外反する口縁部と尖りぎみな底部の異質な器形をもつもので、胎土分析結果からは、生駒山西麓より平野部側の土器とされた。482～501は高杯である。大型のもの482～488・473と、小型のもの490～492・494・495、低脚のもの496～501の三種がある。低脚のもの以外は、完形品は含まれない。502～511は小型器台である。512～528は鉢である。小型で球形の体部に丸底のもの512～524が多数存在する点で、土器組成上、本遺跡における他の遺物群と様相を異にする。525は、口縁が２段に屈曲するもの、528は



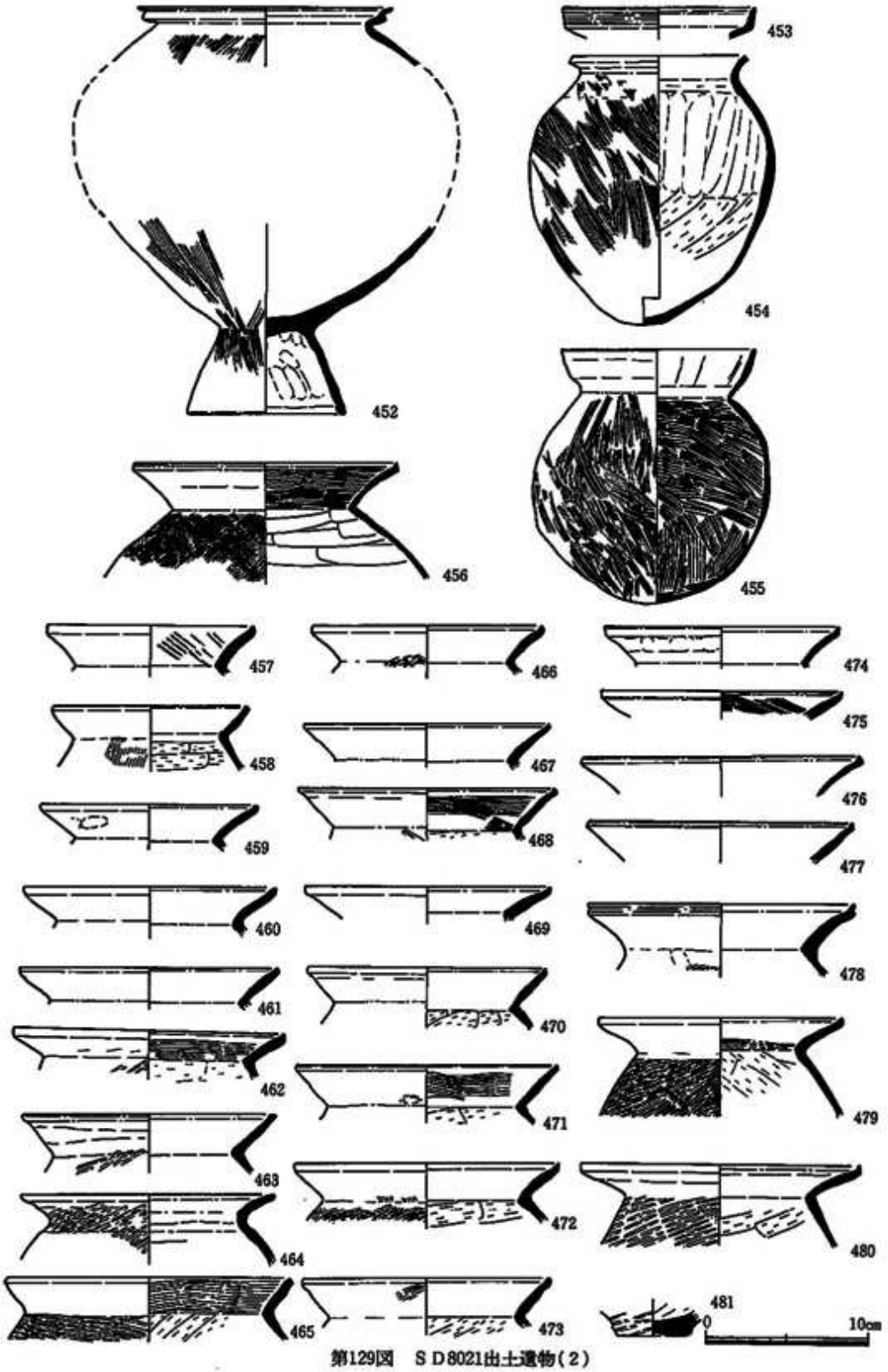
第126図　ＳＤ8021遺物出土状況



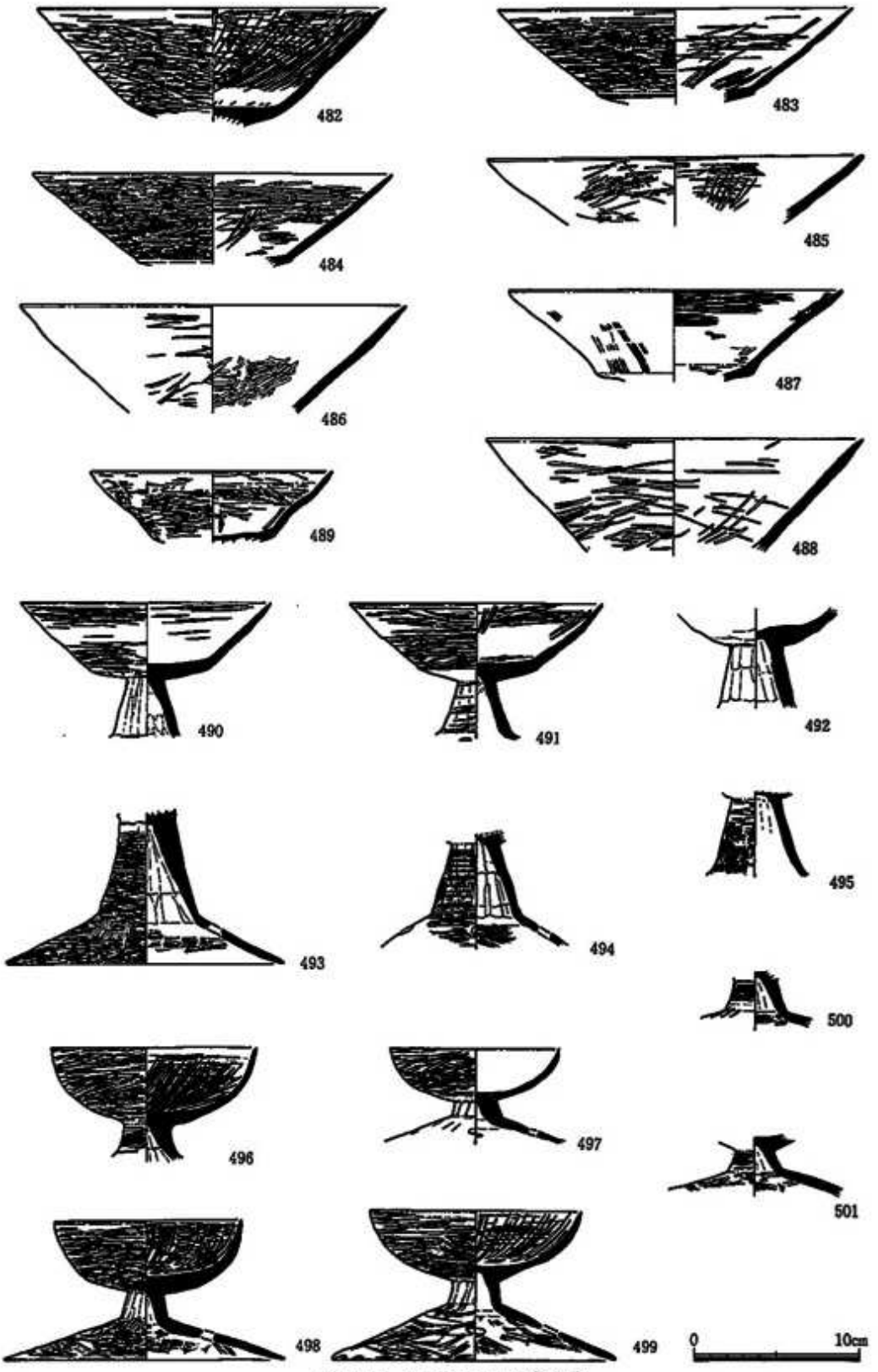
第127図　ＳＤ8021主要遺物出土位置図



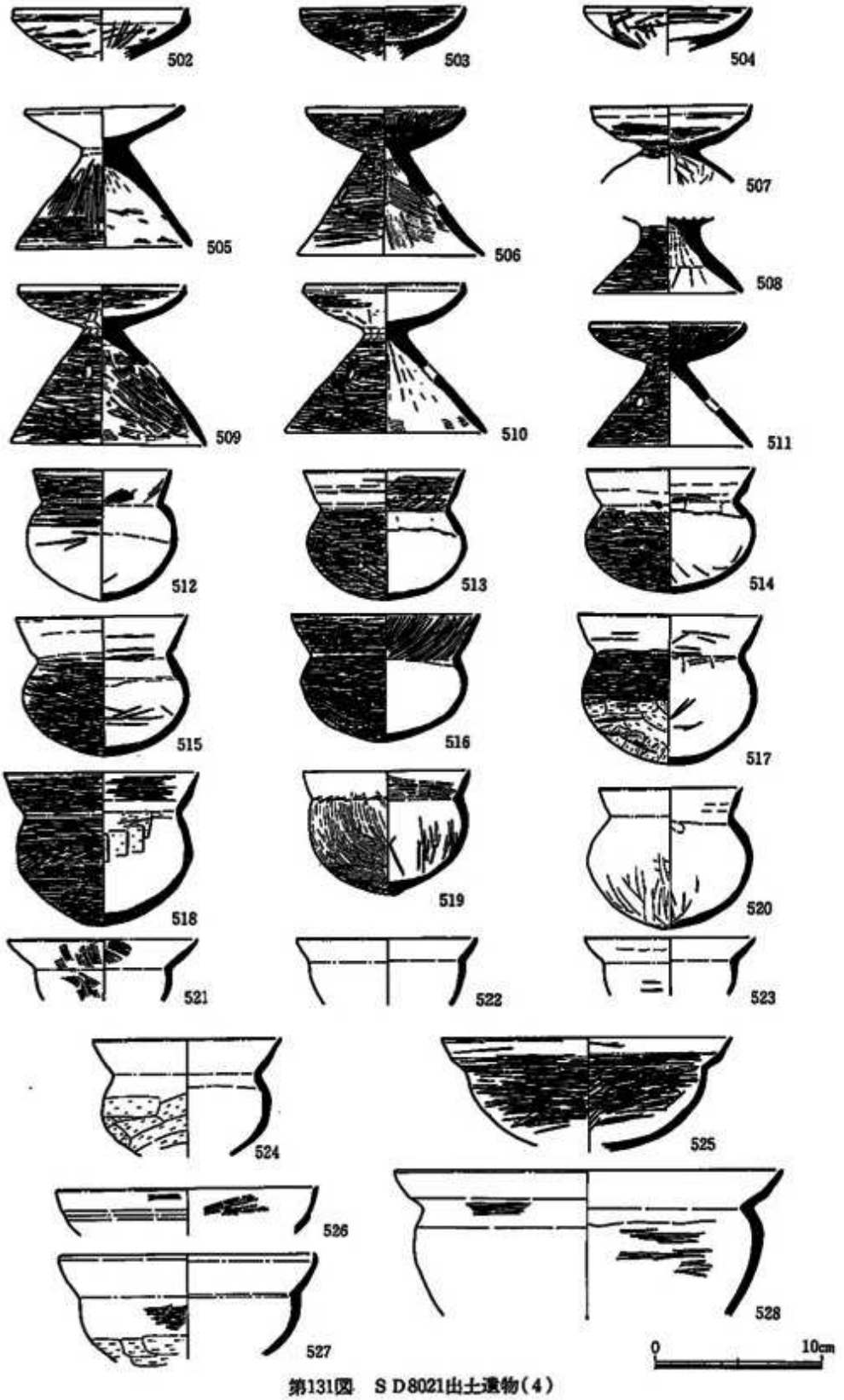
第128図　ＳＤ8021出土遺物（１）



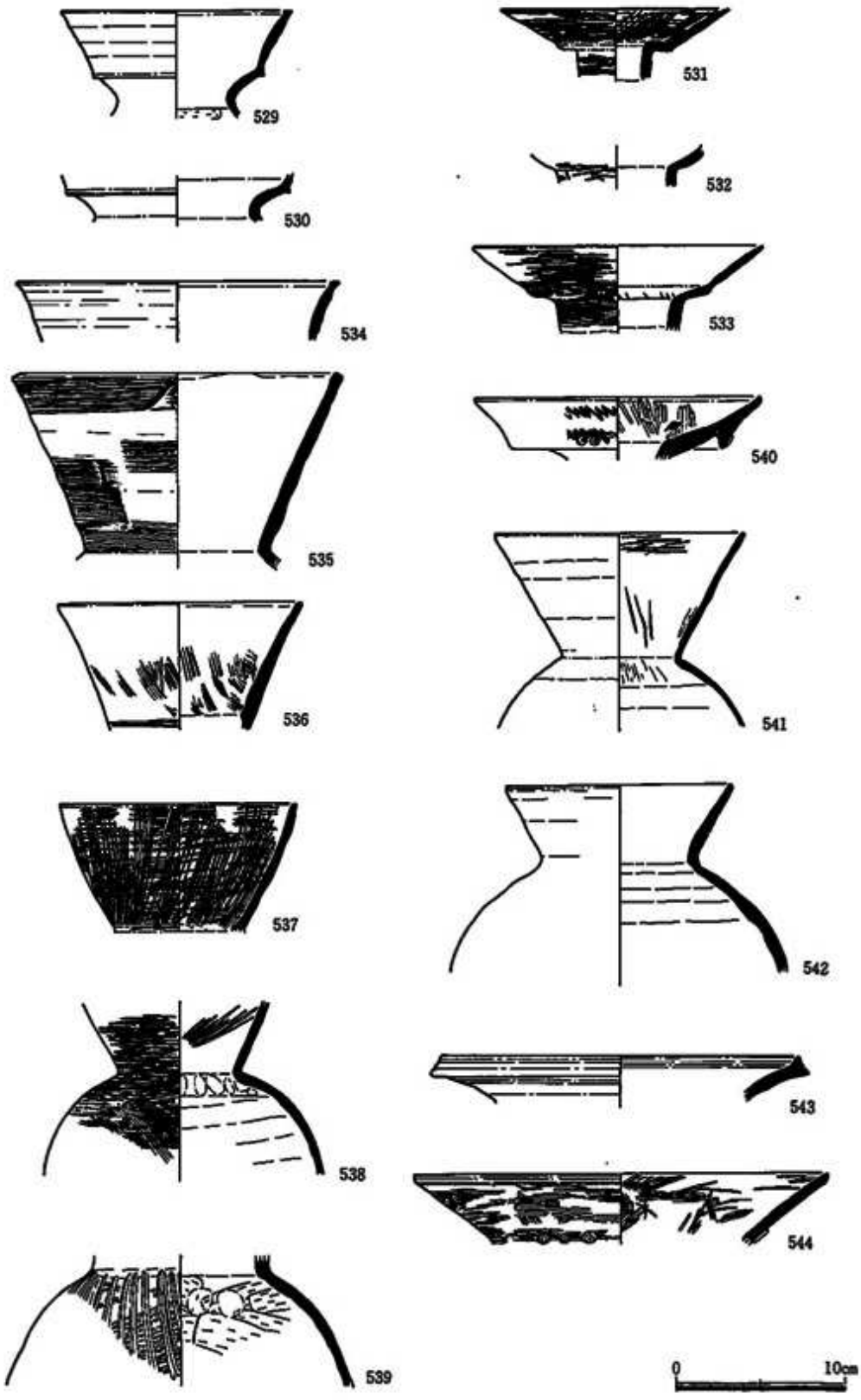
第129図　ＳＤ8021出土遺物（２）



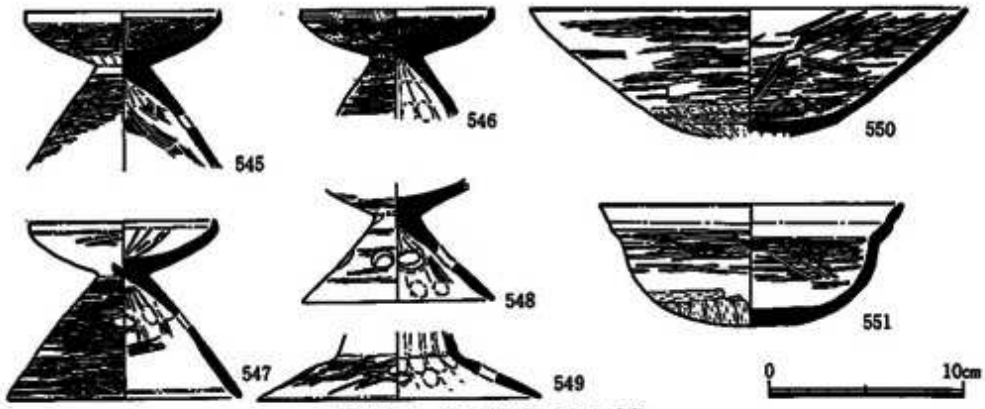
第130図　ＳＤ8021出土遺物（３）



第131図　ＳＤ8021出土遺物（４）



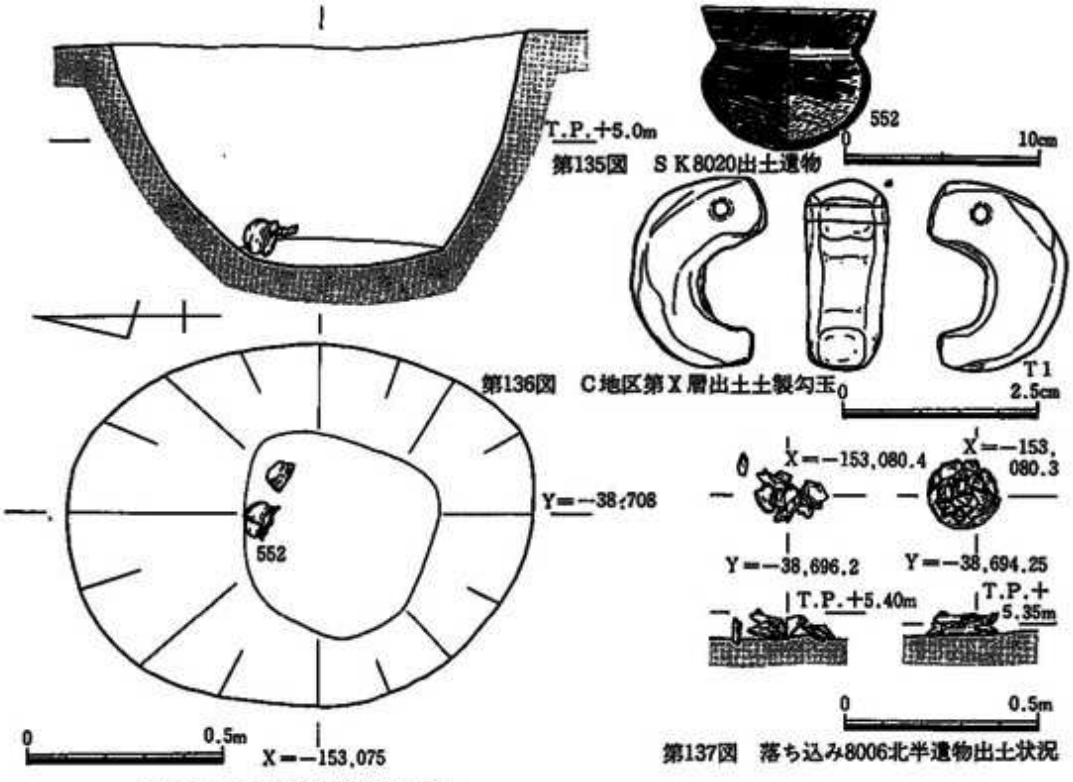
第132図　ＳＤ8021出土遺物(５)



第133図　ＳＤ8021付近出土遺物

やや大型のものの破片である。529～544は、壺である。全て破片で完形品は出土していない。529～533は二重口縁のもの、534～539・541・542は直口のもので、535は大型品、537は内彎傾向を示す東海系のパレススタイルのものである。540･544は、唯一装飾性をもつ壺で、540は波状文と円形浮文、544は円形浮文による。545～551は、本遺構上に当たる側溝より出土したもので、本来ＳＤ8021に伴うと思われるものである。　（服部）

ＳＫ8020（第134図　図版三六）　３Ｃ地区、SD8021の南側約0.6m離れて隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、底部では不整の方形を呈する。断面は擂鉢状を成す。大きさは1.2m×0.94m、深さ55cmを測る。主軸を南北におく。埋土は大きく3層に分かれ、下層より①暗灰色シルト（炭

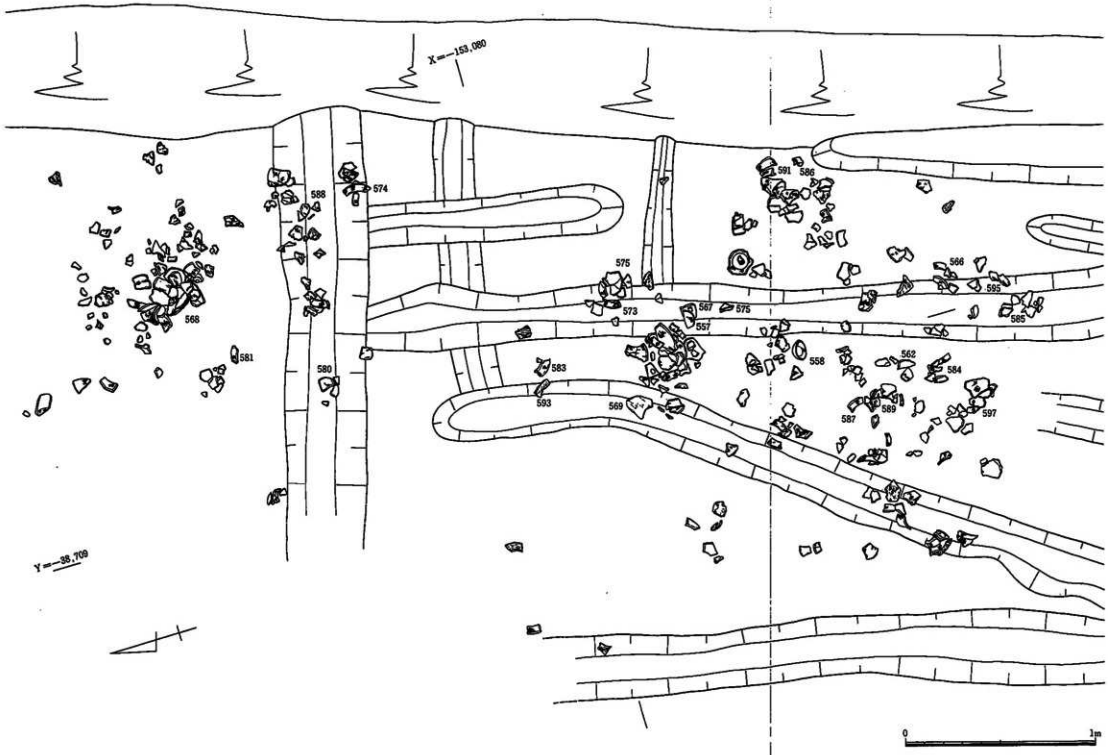


第135図　ＳＫ8020出土遺物

第136図　Ｃ地区第Ｘ層出土土製勾玉

第137図　落ち込み8006北半遺物出土状況

第134図　ＳＫ8020遺物出土状況



第138図　土器群Ⅴ遺物出土状況

化物を含む)、②暗青灰色シルト（灰色シルト・黄色微砂混入、炭を含む)、③黒灰色シルト（炭を含む）である。①の層より植物遺体や骨等を検出しており、骨は焼けているものもある。他にも土器を検出しており、小型丸底鉢や有段口縁の鉢が出土している。

出土遺物（第135図　図版八七)

小型丸底鉢552は口縁部径と体部径が同じである。短い口縁部を「く」の字状に外方へ開き、真直ぐのびる。端部外面に沈線を入れる。底部は丸底である。調整は、口縁部外面に細い横方向のヘラ磨きを施す。体部上位外面に横方向のヘラ磨きを、底部は横方向のヘラ磨きの後に、斜め方向のヘラ磨きを行う。内面には、口縁部が横方向のヘラ磨きの後に放射状のヘラ磨きを、体部上位にハケ目調整を行い、底部にハケ目調整の後、ヘラ削りを施している。　(小野)

土製勾玉（第136図)　３Ｃトレンチ第８ｃ・ｄ遺構面精査時に検出された土製の勾玉である。断面長方形を呈した粘土紐の短辺を側面として彎曲させて成形しており、尾部をやや細く作る。紐穴は、径約２mmを測る。上下2.5cm、幅1.1cmを測り、淡黄褐色を呈する。　(服部)

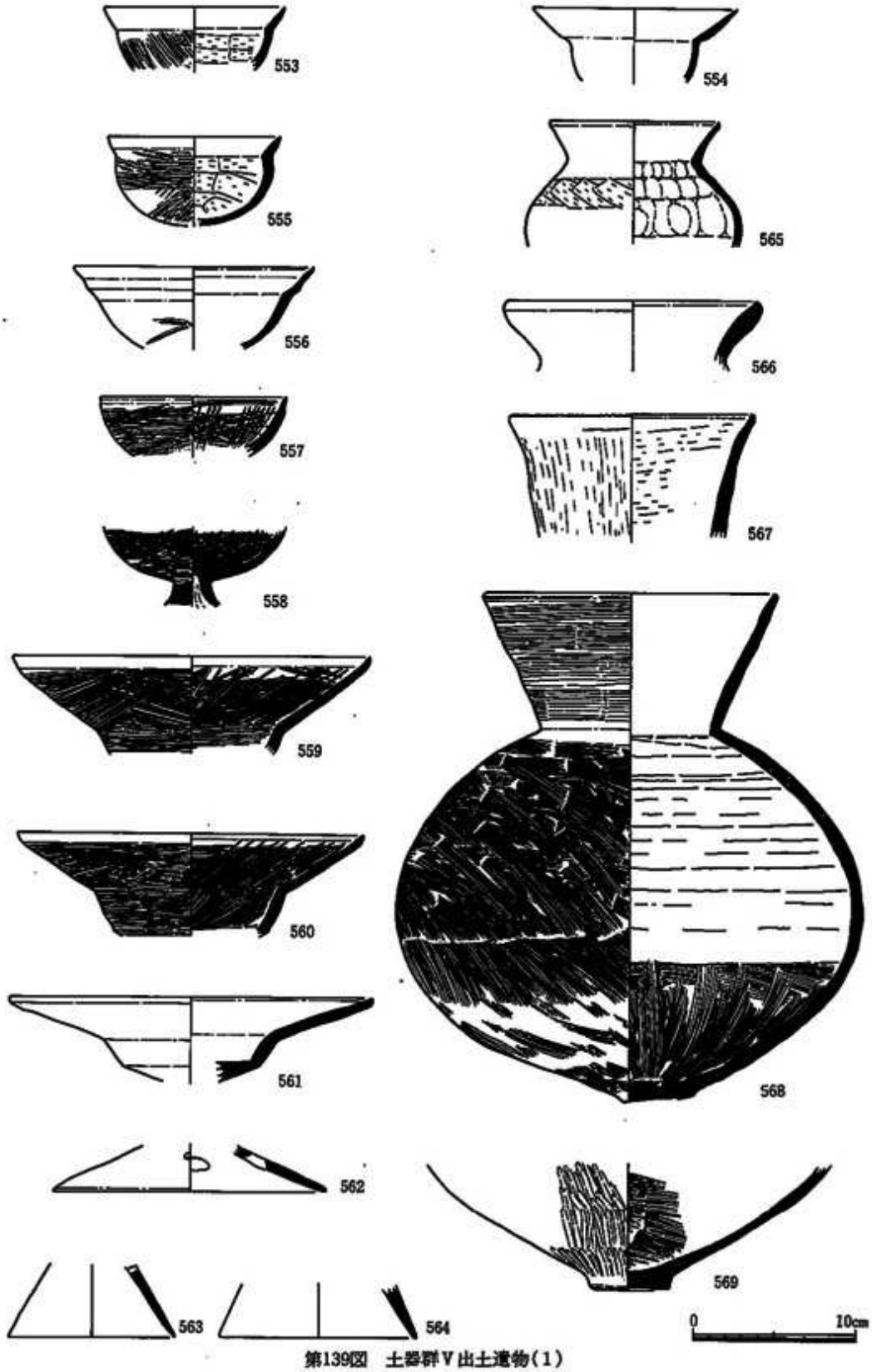
土器群Ⅴ（第138図　図版三五)　３Ｃ地区の南端に位置し、Ａ地区の土器群Ⅰ・Ⅱの様に遺構は伴わずに土器が集積する。包含層を除去した段階で確認した。土器群の広がりは15㎡である。土器の器種構成は、壺、甕、高杯、小型鉢である。

出土遺物（第138・140・141　図版八七)

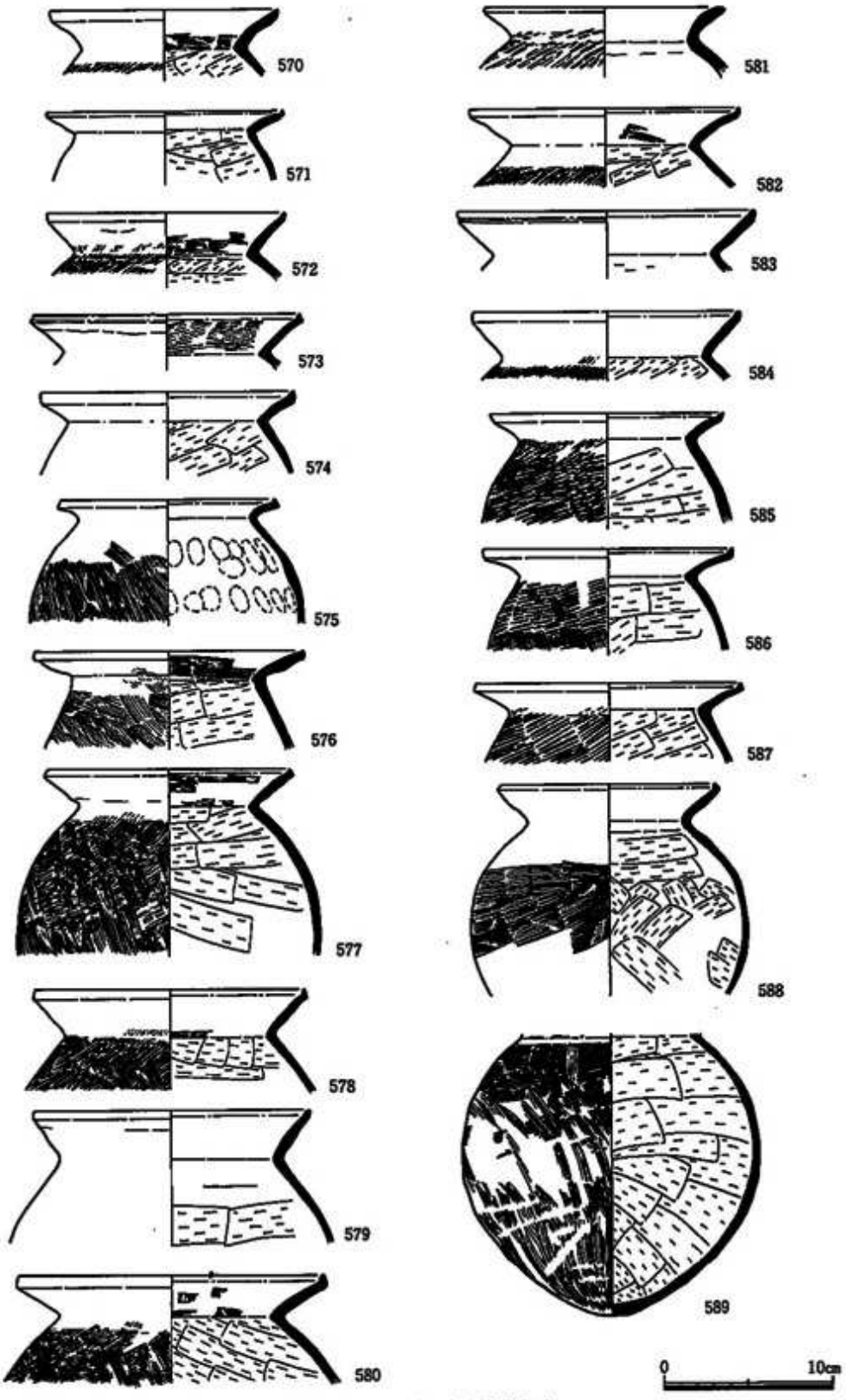
壺　565・566は広口壺で、いずれも口縁端部を若干つまみ上げる。565は体部上位外面にヘラ削りを残し、内面は指頭押圧の後に横ナデを行う。566は内外面ともに横ナデを施す。567・568は直口壺である。567は口縁部のみである。端部を内側へ折り曲げ、内面に沈線が入る。外面は縦方向のハケ目調整を、内面に横方向のハケ目調整を施す。568は完形である。最大径を胴部下半におくバレススタイルで、底部面を若干凹ませている。口縁端部の内側に浅い凹線状のものが入る。口縁部は横方向のハケ目調整、体部上半を横方向のハケ目調整の後、右下がりのハケ目調整を施す。底部は右下がりのハケ目調整を施す。内面は、底部に横方向の後、縦方向のハケ目調整を施す。口縁部から体部中位にかけて横ナデとナデの調整を行う。また粘土紐の痕跡を残す。569は底部のみで、外面は縦方向のヘラ磨きで、内面は横方向のハケ目調整を行っている。

甕　口縁27点を抽出し、口縁端部の形態により６種に分類出来る。ａ：端部は真直に伸びる(570・579・591・592・596)、ｂ：口縁端部をややつまみ上げる。端面に沈線が入るものがある(572・583・584・585・594・596)、ｃ：器壁は厚い。端部をつまみ上げ内面に強い線が入る。(574・580・598)、ｄ：器壁はやや薄く、端部をつまみ上げ、直立させる（571・582・578・590)、ｅ：端部は断面形を三角形状に呈し、やや内傾する。内面に明瞭な強い線が入る（573・577・587・588・593・597)、575は口縁部が水平になるのでｅ－Ⅰ類としておく。ｆ：端部を折り曲げ、明瞭な強い線が入る（595)。589は体部外面に左下がりのタタキ目と、下半部は縦方向にハケ目調整を施す。内面はヘラ削りを行う。

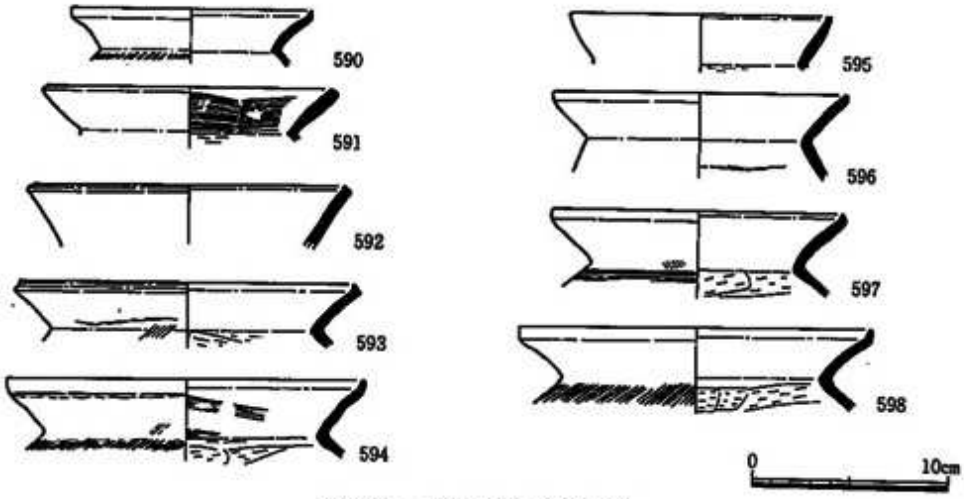
高杯557・558は脚部を欠くが、低い脚部を有すると思われる。杯底部が丸く、外面に横方向の



第139図　土器群Ⅴ出土遺物(1)



第140図　土器群Ⅴ出土遺物(2)

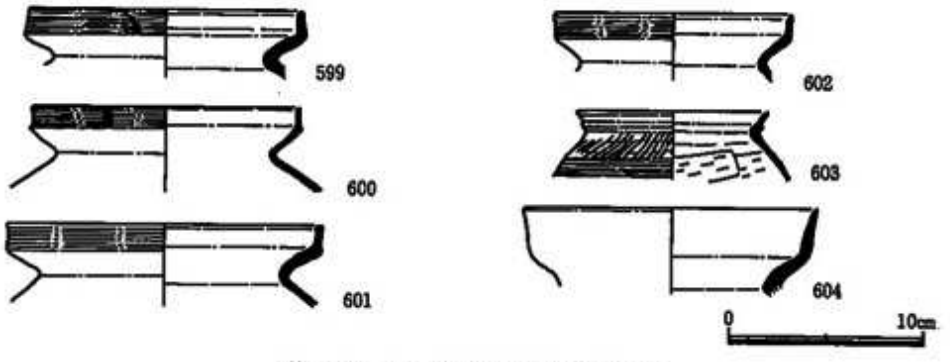


第141図　土器群Ⅴ出土遺物(3)

ヘラ磨きを、内面には縦方向のヘラ磨きを施している。559・560・561は杯底部から口縁部にかけて外へ大きく開く。561は杯底部が平坦な面を成す。外面はハケ目調整の後に、斜め方向のヘラ磨きを施す。562・563・564は脚部である。

小型鉢553・554・555は底部を丸くし、外面はヘラ磨きを行う。内面はヘラ削りを施す。554は外へ大きく開き、555は口縁部を短く付くものである。556は有段の鉢で、口縁端部を内側へ若干折り曲げる。　(小野)

３Ｃトレンチ第Ｘ層出土外来系土器（第142図）　３Ｃトレンチにおいて第Ｘ層上半を掘削した際、包含層より出土した遺物内に外来系と思われる土器６点が認められた。599～602は、吉備系甕の口縁部である。いずれも上方に立ち上がる口縁部外面に４～６条の櫛描沈線を巡らす。口縁端部内面がやや肥厚するもの601と、丸くおさめるものがある。小型甕603は、淡灰白色を呈し、Ｓ字状口縁をもつ。肩部に斜め方向の強いハケ目が施されるなど、胎土とともに近江系の要素がある。604は、斜外方にのびる口縁部よりさらに上方に丸味をもって屈曲して立ち上がるもので、異質な口縁形状をもつものである。包含層の遺物ではあるが、他に比べ３Ｃトレンチでは外来系土器の出土がやや多いと言える。　(服部)



第142図　３Ｃトレンチ出土外来系土器

5．古墳時代前期Ⅴ

第Ⅸ層の遺物包含層を除去し段階で検出し、第８ｂ遺構面とする。遺構は全体的に稀薄であり、第８ｃ遺構面の２号墓が存続し、他の遺構としては、土坑、ピット、落ち込み、溝が存在する。遺構は２号墓周辺に見られる。Ｂ地区のＳＤ8007の北側に於て若干の遺構が認められるが、ＳＤ8012･8013の以南、Ｃ地区に至っては遺構が全く見られない。以下遺構の特徴を述べると、土坑はＡ地区東半部、１Ｂ地区に在る。溝は、北西－南東方向に流れる。ピットはＳＤ8007周辺と、ＳＫ8010以南に在る。落ち込みは、上層の土が溜る浅い遺構である。

（1）　Ａ地区

地区北半部に於て、溝（ＳＤ8006）と、土坑５基（ＳＫ8001～ＳＫ8005）、ピット２基（ＳＰ8049・ＳＰ8068）を検出した。これらの遺構には、淡灰色粘土を埋土とし、出土遺物が全体的に少ない事を特徴とする。地形は２Ａ地区から１Ａ地区にかけて傾斜し、序々に低くなっていく。

ＳＫ8001　２Ａ地区の東端に位置し、ＳＫ8002の東側約１ｍ離れている。平面形は丸みを有する方形である。大きさは1.8ｍ×1.6ｍ、深さ約10cmを測り、主軸を北東－南西方向におく。

ＳＫ8002　ＳＫ8001の西側に位置する。ＳＫ8001の西側に位置する。ＳＫ8003やＳＫ8005とほぼ同規模である。平面形は不整な方形を呈する。大きさは70ｃｍ×70ｃｍ、深さ約10cmを測る。土器片が少量出土している。

ＳＫ8003　２Ａ地区に位置し、ＳＫ8002と約５ｍ離れている。平面形はＳＫ8002同様に、不整な方形を呈する。土器が少量出土している。

ＳＫ8004　ＳＫ8003と約３ｍ南南西に離れて位置する。平面形は、不整な楕円形を呈する。主軸をやや南北方向におく。大きさは70cm×50cm、深さ10cm測る。

ＳＫ8005　Ｃ地区中央部に位置し、ＳＫ8004とは約5.5ｍ離れている。平面形は不整な方形を呈する。大きさは90cm×70cmを測り、深さ約10cmを測る。

ＳＤ8006　１Ａ地区の西端に位置する。溝は主軸を南北方向から逆「く」字形に北東－南西方向に向ける。溝の幅は0.4～１ｍ、深さ10～15cmを測る。土器は少量ながら出土している。

ＳＰ8049・8068　２Ａ地区に位置し、ＳＫ8001を挟むようにして、一直線上に並ぶ。ＳＫ8001とは約1.5～1.1ｍ離れ、ＳＰ8049とＳＰ8068を結んだ線は北北東－南南西方向に向ける。大きさは40×30cm、深さ約10cmを測り、いずれも不整な円形を呈する。　（小野）

（2）　Ｂ地区

Ｂ地区北半では、１Ｂトレンチにおいて溝１条と、土坑６基とピット、２Ｂトレンチで平行する溝３条と土坑１基が検出された。又、１号墓は、この段階で溝がほぼ埋没するが、マウンドは若干、地表上に残存したものと見られ、先述のＳＫ8015、土器群Ⅲが形成される。

Ｂ地区南半では、２号墓が形状を留めており、残存するマウンド上で土坑が形成される他、土坑や落ち込みが存在する。南端では、東西に溝数条が平行して走行する。

ＳＤ8008～ＳＤ8010　２Ｂトレンチ南半でＮ－55°－Ｗの方向を示す平行した３条の溝が検出

された。検出長3.5mを測り、東側調査区外へ伸びる。幅0.8～1.2mを測る。深さは、約5cmと浅く、淡灰色粘土を埋土とする。南端のＳＤ8010は、西端で約90度屈曲し、南側調査区外へさらに延びる。

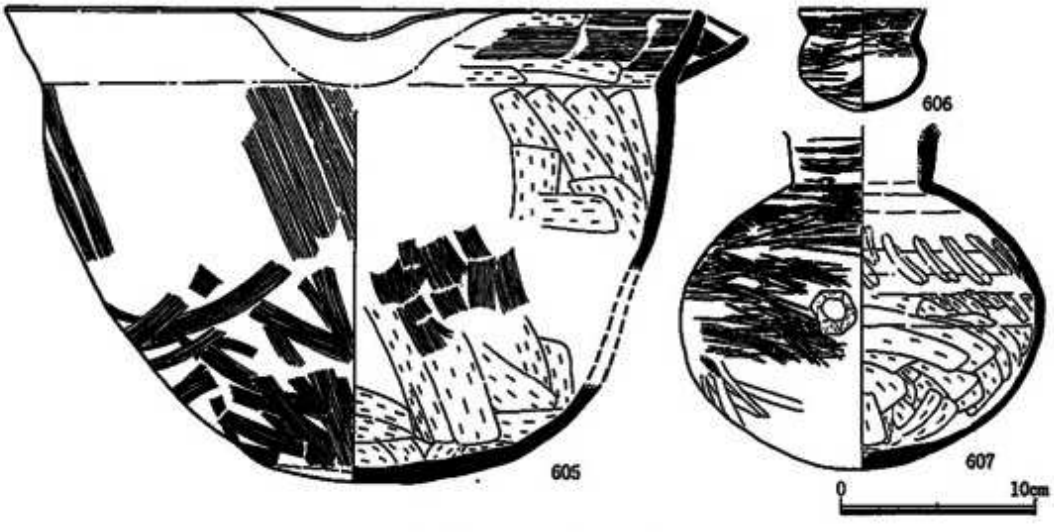
ＳＫ8012　２Ｂトレンチ南半西側で検出された浅い楕円形土坑である。長軸長約５ｍを測る。

ＳＫ8013（第144図）Ｘ＝－153,004～－153,009で検出された浅い不定形土坑である。古墳時代前期Ｖの段階で、２号墓は、周溝がほぼ埋まった状態となるがマウンドは依然として地表上に残存する。従って、２号墓は、墓地としての領域を保ち、意識されていたと考えられる。ＳＫ8013は、そうした状況にある２号墓のマウンド南端部を、一部削平している。

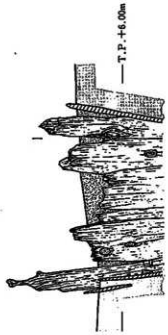
南北約４ｍを測る。東端は一部調査区外に及ぶが、調査区東端で底部が上昇する傾向を示す。従って東西も４ｍ前後を測るものと思われる。平面プランは、南側の２号墓南西周溝上層に当る東西部分より、北側へマウンドを削除する部分が拡張するように突出して延び、全体で隅丸のＬ字状を呈している。深さ約15cmを測る。埋土は、部分的に炭化物粒を含む黒灰色粘土である。

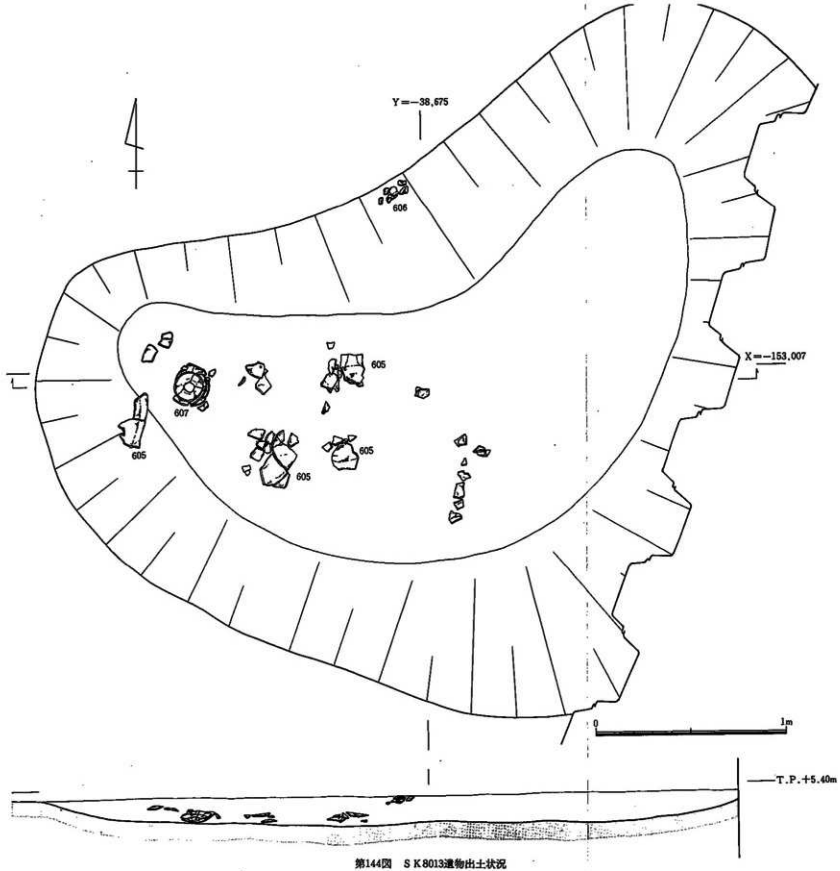
出土遺物は、南半の東西部分西部と突出部の付根付近の肩部より土器３個体が検出されている。３個体の土器は、大型の片口鉢、二重口縁壺、小型の鉢である。大型の片口鉢605は、南半部にやや散乱する形で出土した。二重口縁壺607は、西端より約0.8mの地点の土坑底部に設置された状態で検出されている。壺は３つに分割された状態で検出された。壺の分割方法は、口縁部を総て打ち欠き、体部中央付近に打撃を加え、土器成形時の接合部に沿って、肩より上部、体部上半、体部下半の３つの部分に水平にスライスしたように分割している。設置方法は、底部をまず設置し、その内側にドーナツ状の体部上半を逆さ向けに内面を上にする状態で置き、さらにその内側に肩より上部を同様に逆さ向けに内面を上にする状態ではめ込むといった複雑な方法をとっている。小型の鉢606は唯一、突出部付根付近の肩部でつぶれた状態で検出された。

出土遺物（第143図）



第143図　ＳＫ8013出土遺物





第144図　ＳＫ8013遺物出土状況

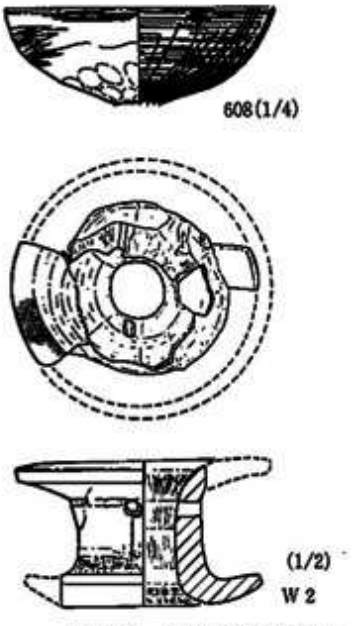
605は大型の片口鉢である。口径約36cm、器高約24.5cmを測る。606はミニチュア的な小型の鉢である。口径約6.5cmを測る。607は二重口縁壺で口縁部を欠く。体部は球形に近いが上下にやや扁平で、頸部は若干斜め外方に開くように立ち上り、中央部がややふくらむ傾向をもつ。外面はヘラ削りとナデにより、底部中央に凹状に工具の当った痕跡が残る。　（服部）

ＳＫ8014（第147図　図版二二）　２号墓とＳＫ8013と約１ｍ離れて近接している。大半が現代の水路によって壊されている為に、大きさ等の全容は不明であるが、推定約60cm以上の円形を呈すると考えられ、深さは約60cmを測る。埋土は下層に暗灰色のシルト（黒色を帯びる）が、上層は淡灰色の粘土である。漆と赤色顔料が塗布された有孔の用途不明木製品とともに高杯の杯部が出土している。

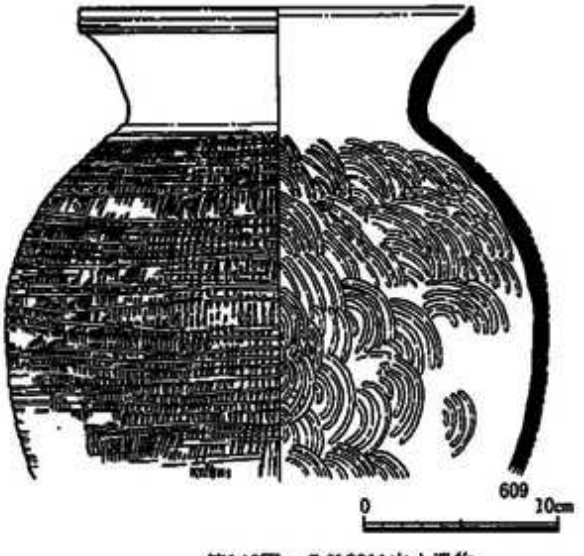
出土遺物（第145図　図版八八）

木製品　Ｗ２は平面形が円形を呈する。側面形は「工」字形を呈する。高さ3.25cm、最大径6.5cmを測る。材はトチノキを利用し、縦木取りである。先ず円柱状に加工し、両側面を抉り、上下両端を笠状に削り出す。更に中心を上下２方から孔を穿ち、貫通させる。一見、現在の糸巻を思わせる遺物である。柱状部から上部にかけて、外反ぎみに削り出し、上面がやや水平になる様に張り出す。下部は上部より径は小さいが、斜め上方に削り出す。側面を２方から方形の小孔を穿っている。一方の孔の下に垂直に沈線を刻む。上部外面と内面に漆が残り、更に上面では赤色の顔料が塗布されている。柱状部に上面と同心円状の細かい線状痕が残てっいる。これらはロクロを挽いた痕跡と思われる。

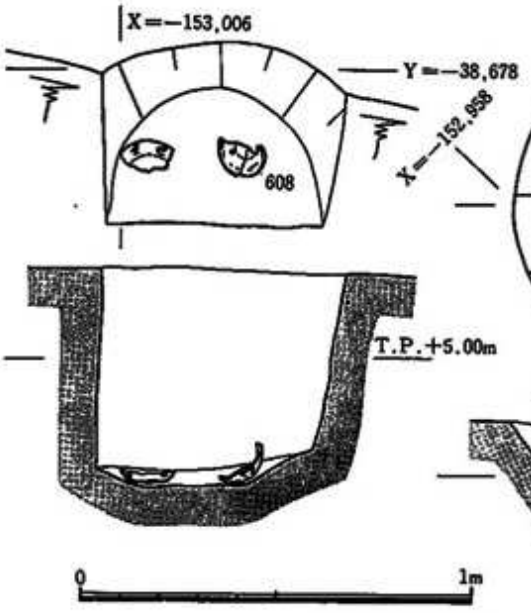
土器608は脚部を欠く。外面は横方向のヘラ磨きを施し、内面は放射状のヘラ磨きの後、横方向のヘラ磨きを行なっている。



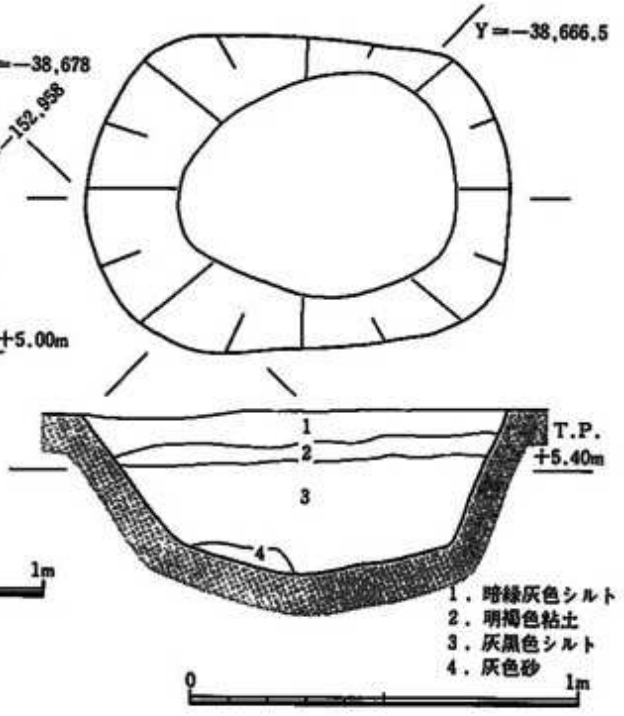
第145図　ＳＫ8014出土遺物



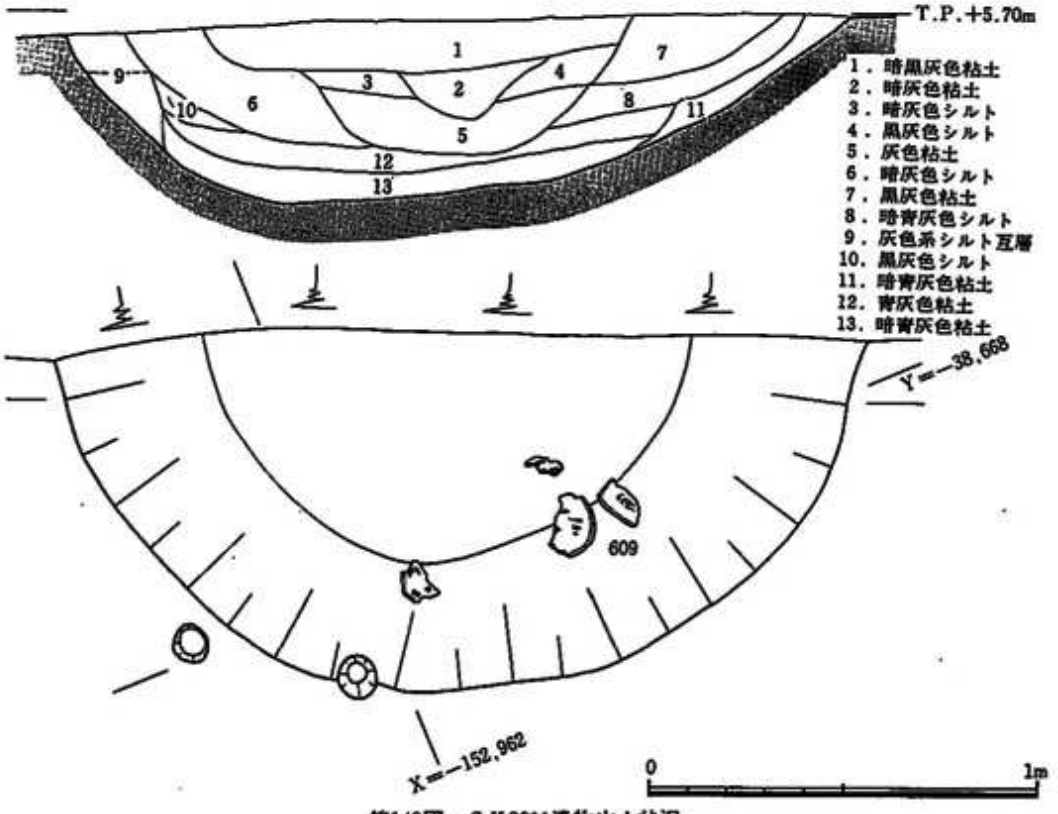
第146図　ＳＫ8011出土遺物



第147図　ＳＫ8014遺物出土状況



第148図　ＳＫ8007実測図



第149図　ＳＫ8011遺物出土状況

ＳＫ8006　Ｂ地区ＳＤ8007の南側、ＳＫ8007・ＳＰ8061と隣接して位置する。土坑は現代水路によって壊されているが、長円形を呈すると思われる。大きさは1.2m×0.8m以上を測り、深さは約30cmを測る。主軸を南北方向におく。

ＳＫ8007　ＳＤ8007と隣接し、ＳＫ8006と0.3mを離れて近接する。平面形は長円形を呈し、主軸を北東－南西方向におく。大きさは1.2×0.7m、深さ約40cmを測る。小量ながら土器が出土している。

ＳＫ8011　ＳＫ8006の南西約2.5m離れて位置する。現代水路によって約二分の一が壊されており全容は不明であるが、平面形は円形を呈するものと考えられる。断面形は擂鉢状を成す。大きさは径2.1m以上を測り、深さ45cmを測る。埋土は大きく４層に分けられる。下層より①（暗）青灰色粘土、②暗（青）灰色シルトもしくは黒灰色粘土、③灰色粘土もしくは黒灰色シルト、④暗黒灰色粘土である。出土遺物として須恵器甕609がある。

出土遺物（第146図　図版）　609は須恵器の甕である。口縁部は外反させ、端部を直立させる。端面に２条の凹線を施す。頸部に段を有する。最大径は体部上位におき、球形を呈すると思われる。体部外面には平行タタキ目の後にカキ目を施す。内面は同心円状のタタキ目を施す。

ＳＰ8050～ＳＰ8061　ＳＫ8006，8007の周辺に多く、何らかの建造物と考えられる。　（小野）

ＳＤ8011　Ｂトレンチ X＝－153,010付近で検出された浅い溝状遺構で、灰色粘土を埋土とする。

落ち込み8003　Ｂトレンチ X＝－153,015付近で検出され、深さ約５cmを測る浅い落ち込みである。灰色粘土を埋土とする。遺物の出土は皆無に等しい。

ＳＰ8067　落込み8003内の西側に接して検出された径約50cmを測るピットである。深さ約25cmを測る。柱の痕跡は認められず、遺物の出土も皆無に等しい。

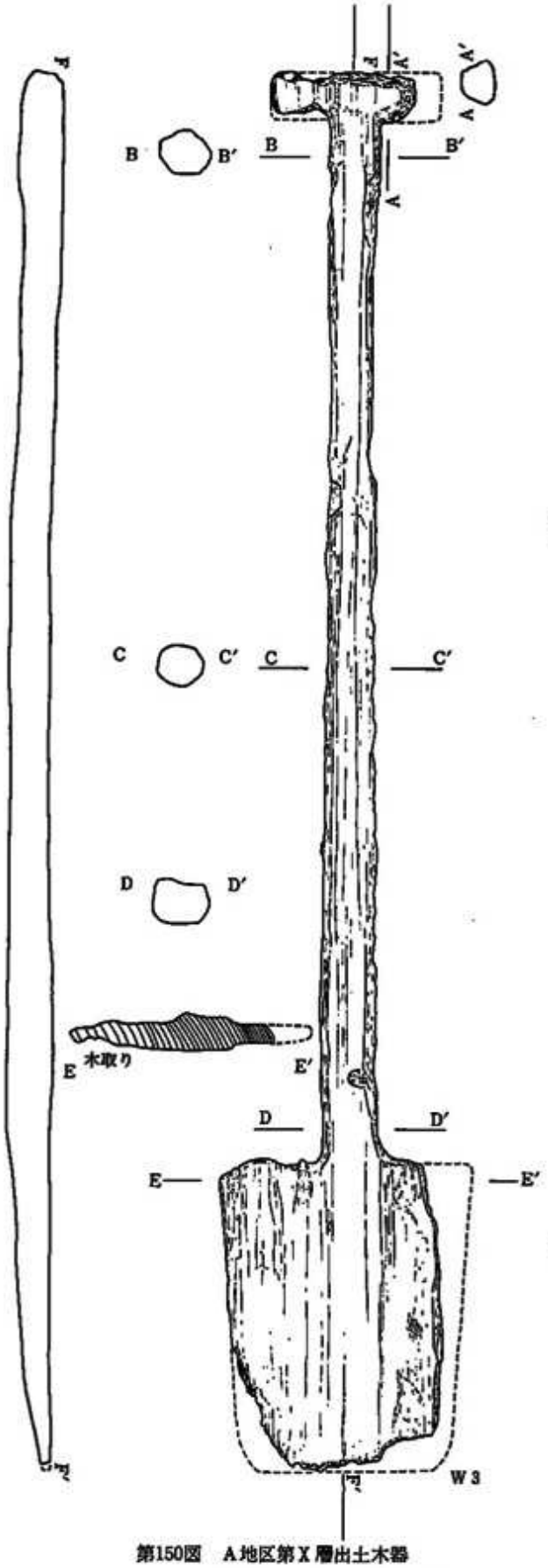
ＳＤ8012　試掘ピットNo.５南側で検出された幅約2.5m、深さ約30cmを測る溝である。主軸をＮ－50°－Ｗの方向に置く。

ＳＤ8013・ＳＤ8014　５Ｂトレンチ及びＳＤ8012の南側で検出された幅80cmを測る溝である。

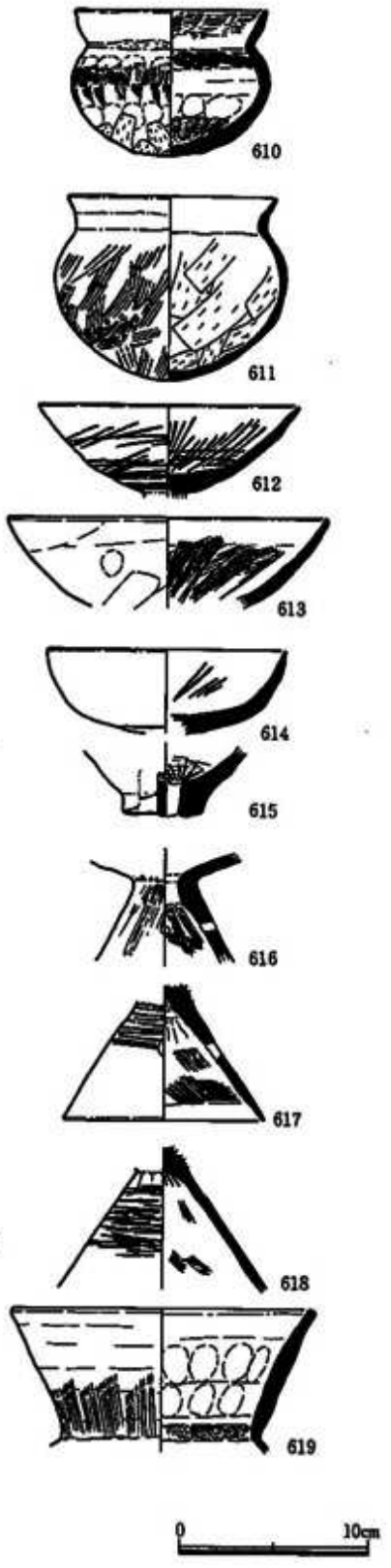
ＳＤ8015・ＳＤ8016　X＝－153,030付近で検出された溝である。遺物はともに検出されない。ＳＤ8013以南の溝は、同一の方向性を示し、なんらかの区画に基づく一連の溝と考えられる。

６．第Ⅹ層中出土遺物

第Ⅹ層中で検出される古墳時代前期Ⅰ～Ⅴの各遺構面の間においても、土器を中心として多数の遺物が検出された。そうした遺物は、帰属すべき遺構が存在せず包含層的出土状況を示している。又、検出された各遺構面には、複数の遺構面が重複した状態にあるものや、さらに細分された状態で検出された部分もあり、それら各遺構面間の層位も一定しない。従って、ここではそうした第Ⅹ層中で検出された、帰属する遺構を持たない遺物を、総て「第Ⅹ層出土遺物」として一括して取り扱うこととする。　（服部）



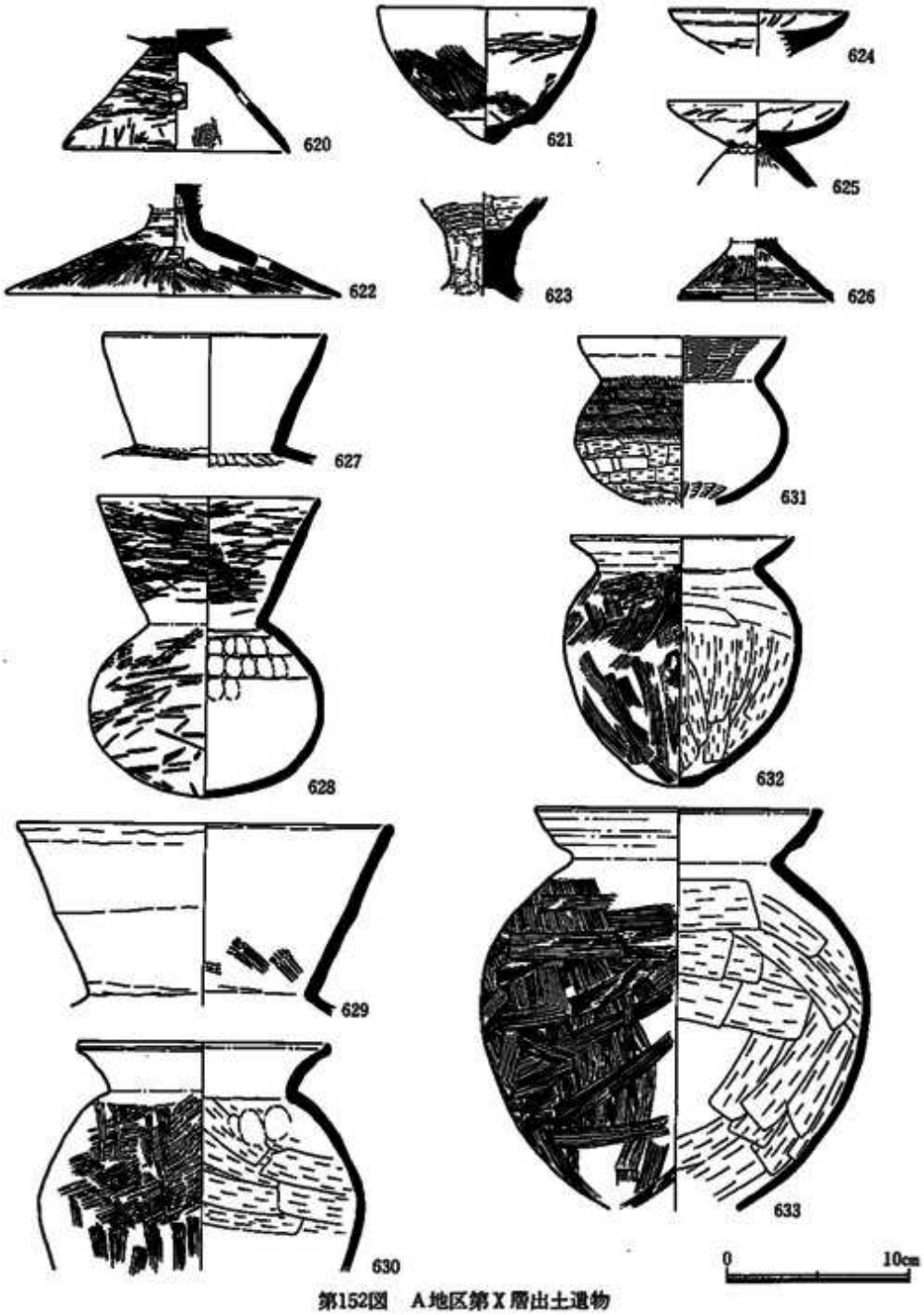
第150図　A地区第X層出土木器



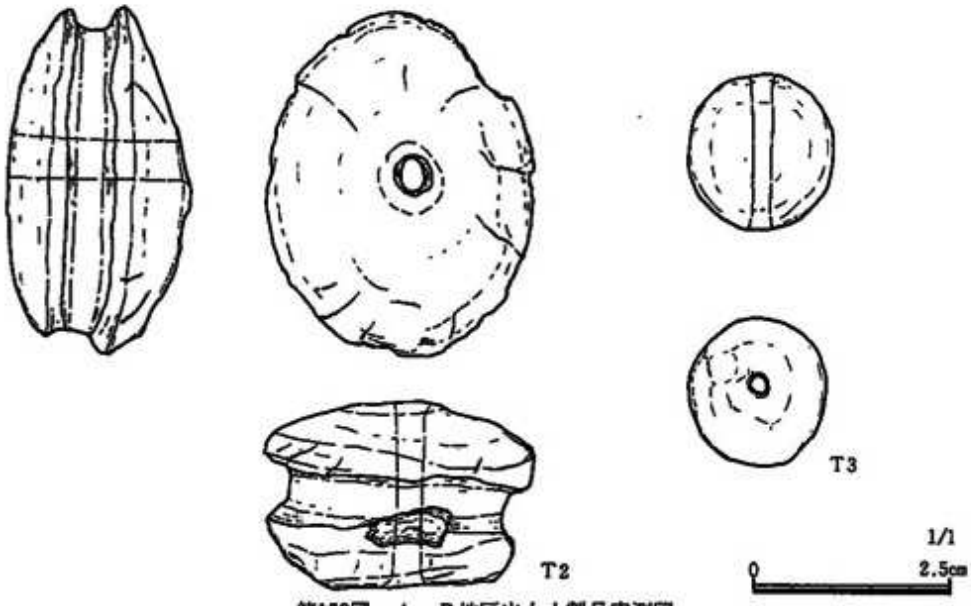
第151図　A地区第X層出土遺物

第150図は、A地区5号住居上層で検出された木製鋤である（第158図）。本遺物は身と柄が一木作りで、ヒノキの材を使用している。木取りは縦木取りの柾目材である。柄は一端にT字形の把手を削り出す。全長81cm、身の長さ18cm、身の幅12cmを測る。焼痕有り。　（小野）

第151図、第153図は、A地区で検出されたものである。623は、脚台式製塩土器の脚柱部である。621には脚部を欠損した痕跡があり、台付鉢或は深い杯部をもつ高杯と思われる。632は完形

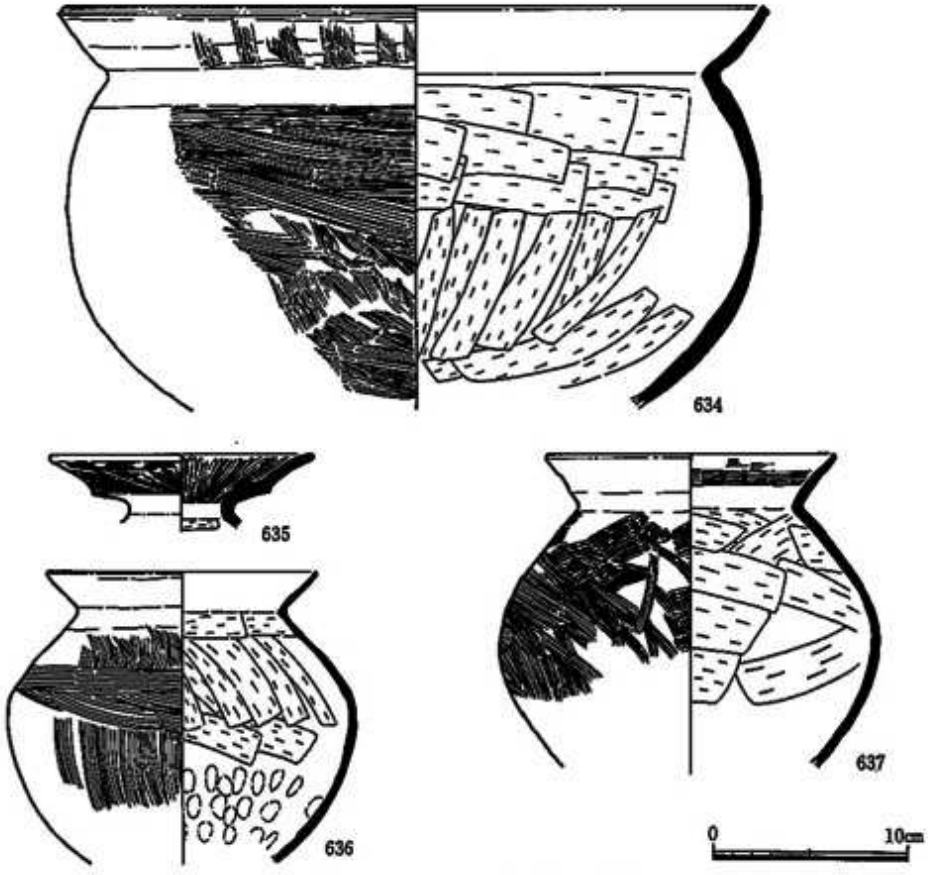


第152図　A地区第X層出土遺物

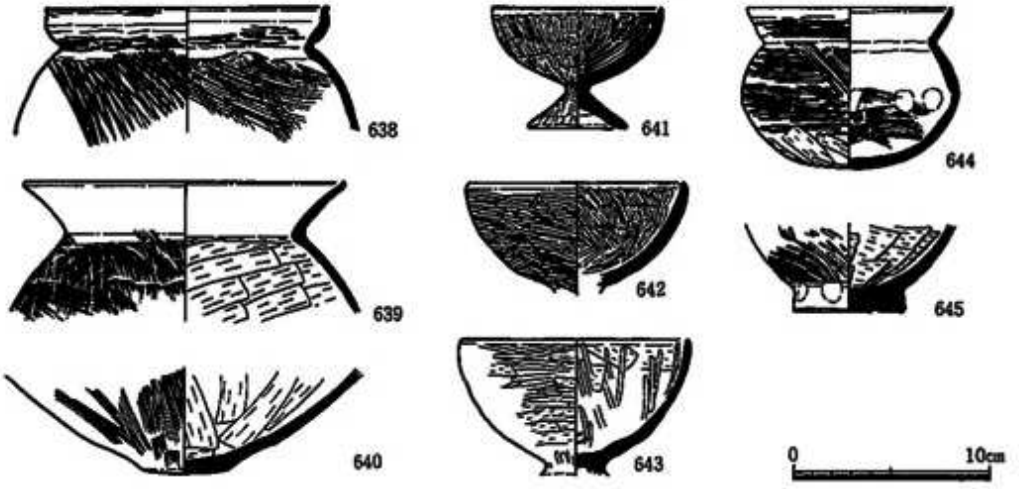


第153図　A・B地区出土土製品実測図

で検出された小型の甕である（第159図）。633は、内彎する口縁に球形の体部を持ち、肩部に横方向のハケ目が施される甕である。

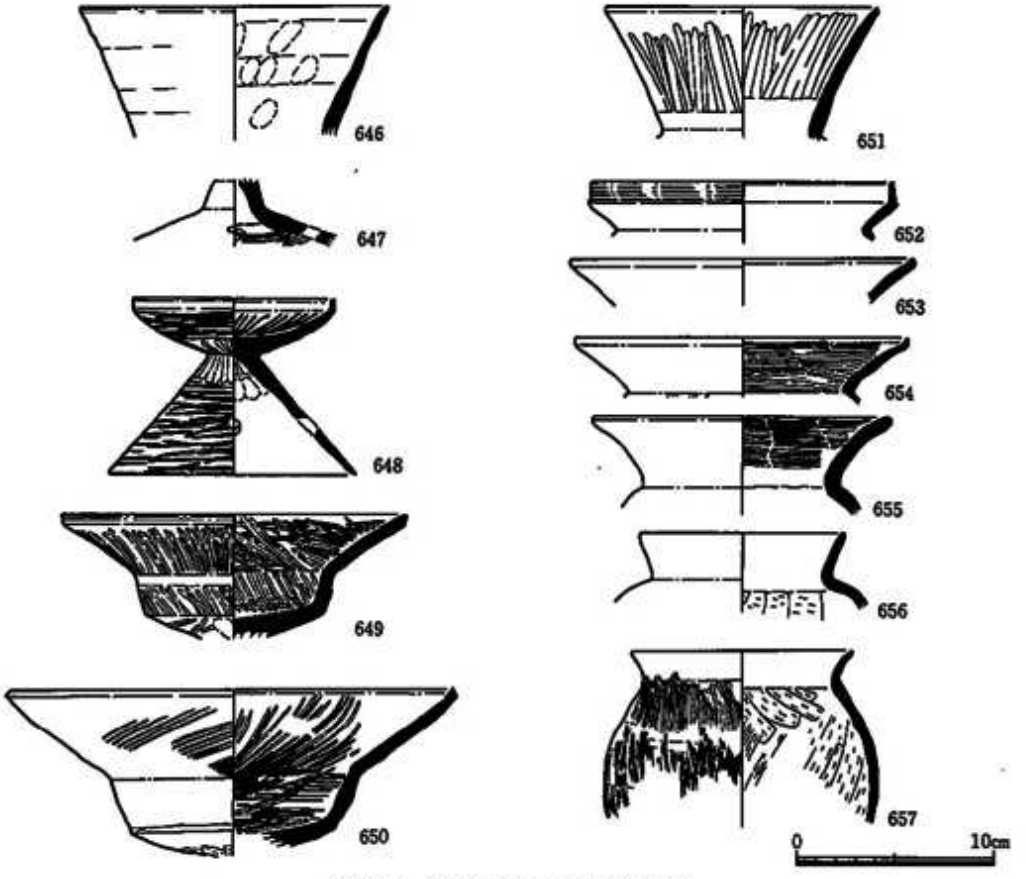


第154図　1Bトレンチ第X層出土遺物



第155図　B地区第Ⅹ層出土遺物

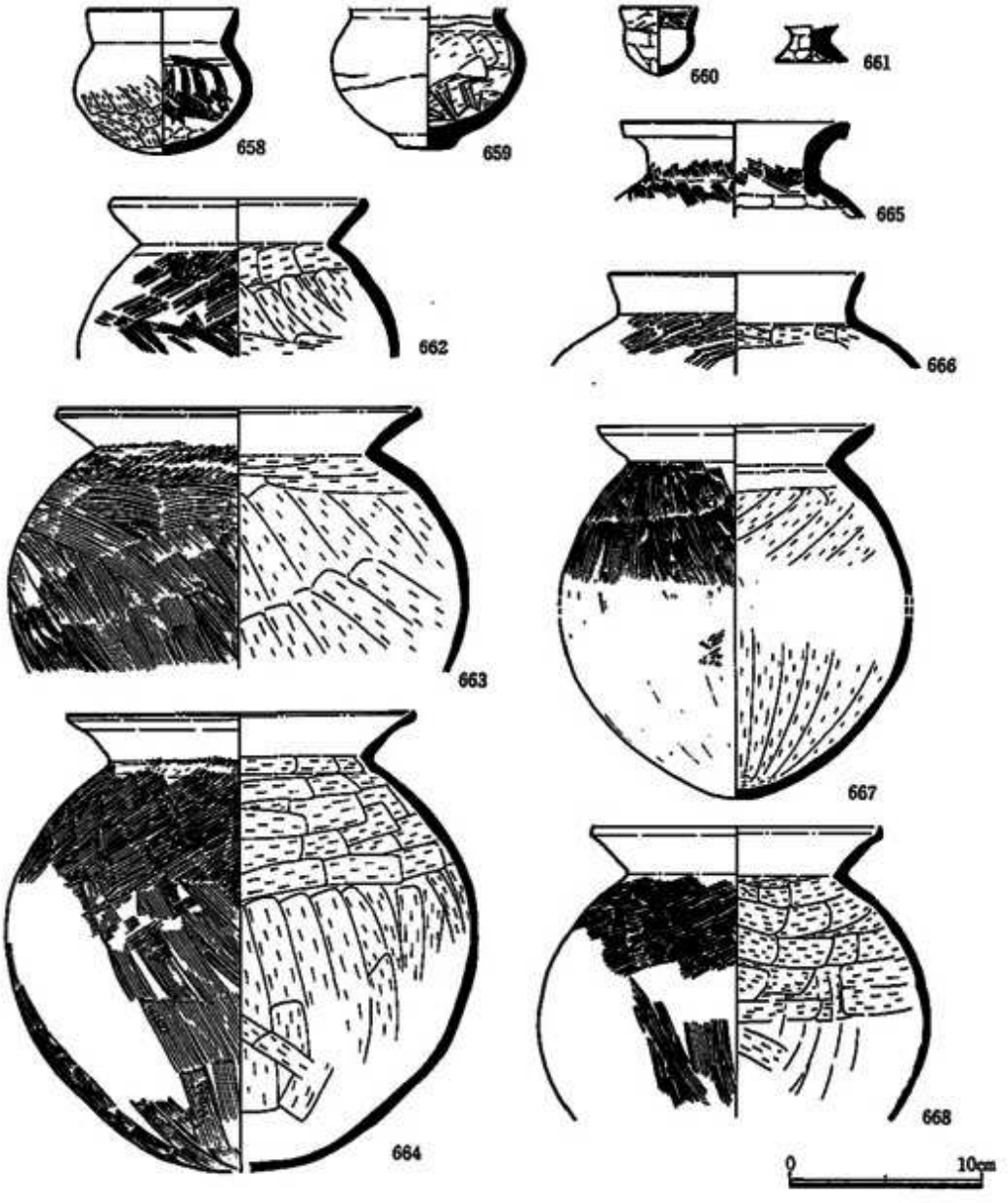
T２は、１Bトレンチで検出された土錘である。楕円形の円盤状を呈し中央に紐穴をあける。周囲にも紐掛け用の凹帯を巡らせる。第154図は、１Bトレンチで検出された土器である。第154図は、B地区で検出された土器である。638は、赤褐色を呈し、上方に立ち上る口縁部を持つ。外面に強いハケ目が施される近江系の甕である。641～643は小型台付鉢である。



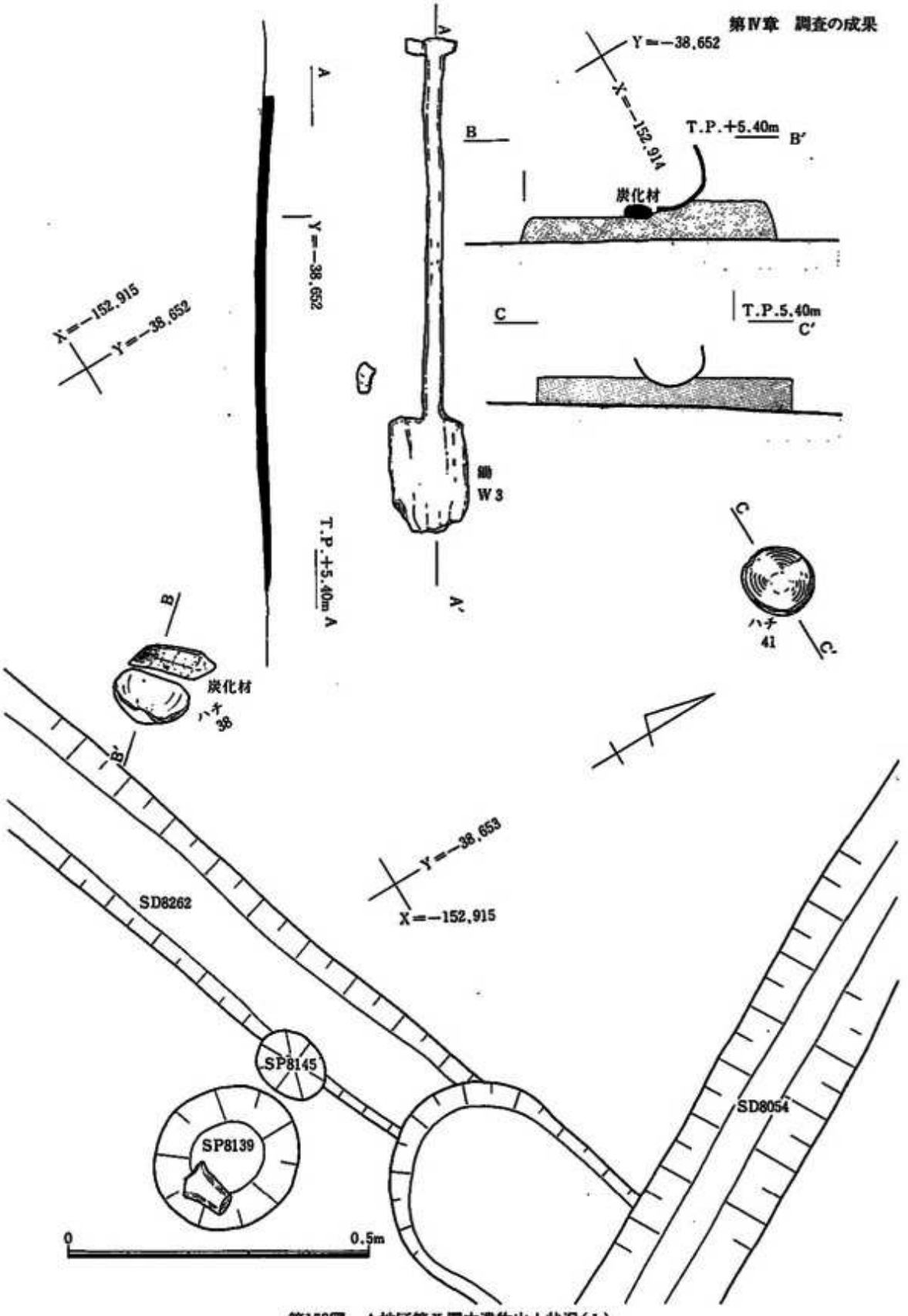
第156図　C地区第Ⅹ層出土遺物(1)

第156図は、C地区池状攪乱の底部より検出された古墳時代前期の土器である。吉備系の甕の口縁部652が認められる。濃黄褐色を呈する。第157図は、C地区より検出された土器である。659は球形の体部を示すが、突出した底部をもつものである。660・661は、ミニチュアの土器である。共に、4Cトレンチ南側溝より検出されており、SD 8456に伴う可能性が高い。663・664・667は、1Cトレンチから検出されたものである。それぞれ1個体ごとにまとまって出土している。663・664は、球形に近い体部をもち、タタキ目の後体部上半付近までハケ目が施される。

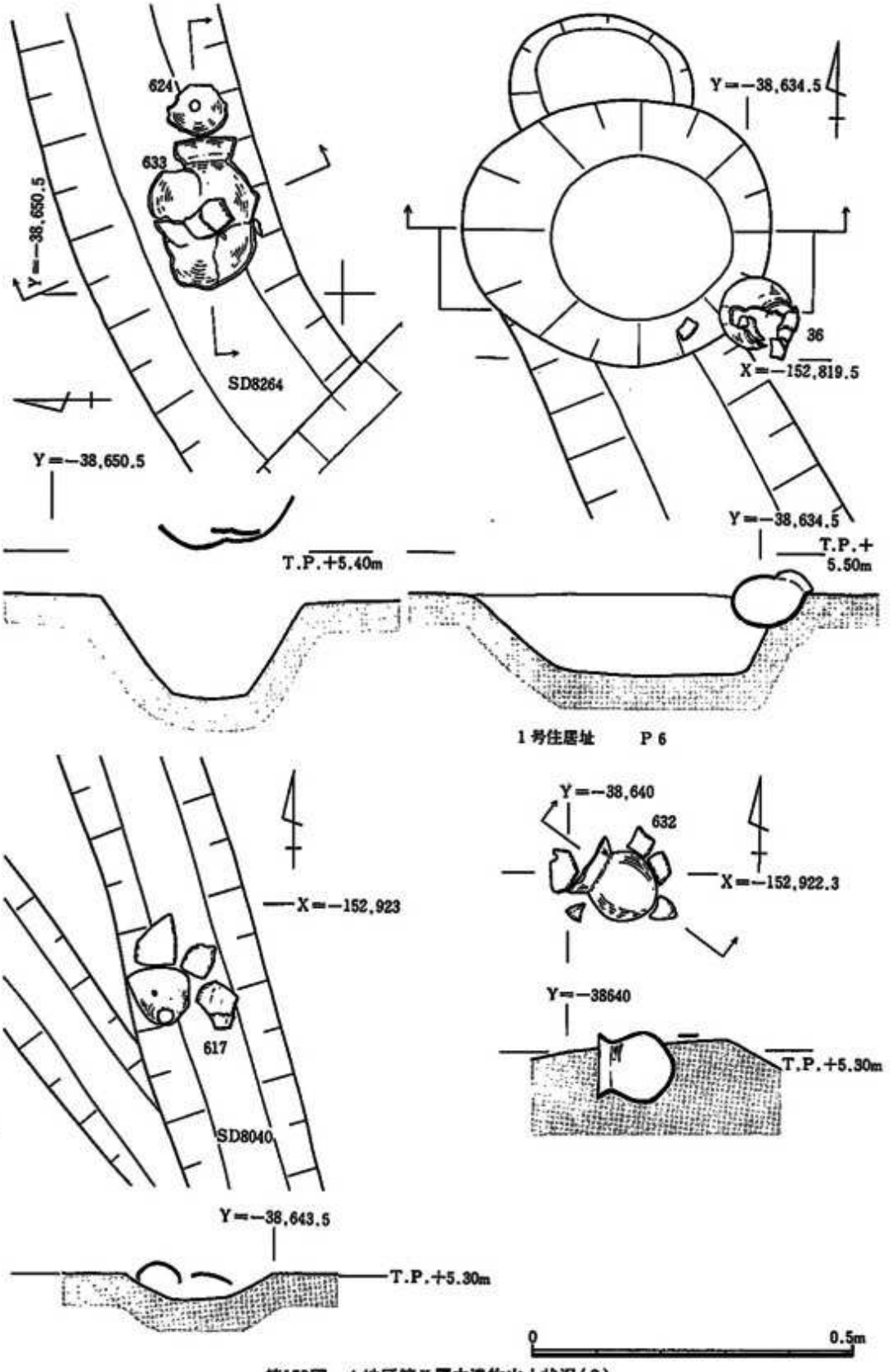
第X層出土遺物の取り扱いについては、さらに詳細な検討が必要であろう。　(服部)



第157図　C地区第X層出土遺物(2)



第158図　A地区第Ⅹ層中遺物出土状況(1)



第159図　A地区第X層中遺物出土状況(2)

7．古墳時代前期Ⅵ

古墳時代前期Ⅵ遺構面は、Ｂ地区にのみ存在する第Ⅸ層上面に当る。北半、南半で大きく様相が異なる。北半では、第Ⅹ層直上に淡灰色粘土層（第Ⅸ－３層）が層厚５～10cmで堆積しており、その上面に当る。部分的に足跡が認められた。南半では、Ｂトレンチ南端に自然堤防状の微高地が存在し、その上面にピット群が存在する。又、微高地北側を中心に溝４条も検出された。

足跡　Ｂトレンチ北端、２Ｂトレンチで足跡遺構が検出された。Ｘ＝－152,970付近をその南限とする。基本的に、密集度の高い幾つかのグループを形成して分布する。全体として、ヒトの足跡と判別できるものが大半を占めるが、多数が重複し個々が判別できないものや、遺存状態が悪く明瞭でないものも含まれる。２Ｂトレンチ北半では、やや遺存状態が悪い。１Ｂトレンチでは、部分的に淡灰色粘土層が残存するが、極めて層厚が薄く、足跡が検出されなかった。足跡の方向性、左右の判別が可能なものも多く認められたが、全体的に遺存状態が良好とは言えず、歩行形態を復元するには至っていない。足跡の埋土は、第Ⅸ層上半の灰色砂である。

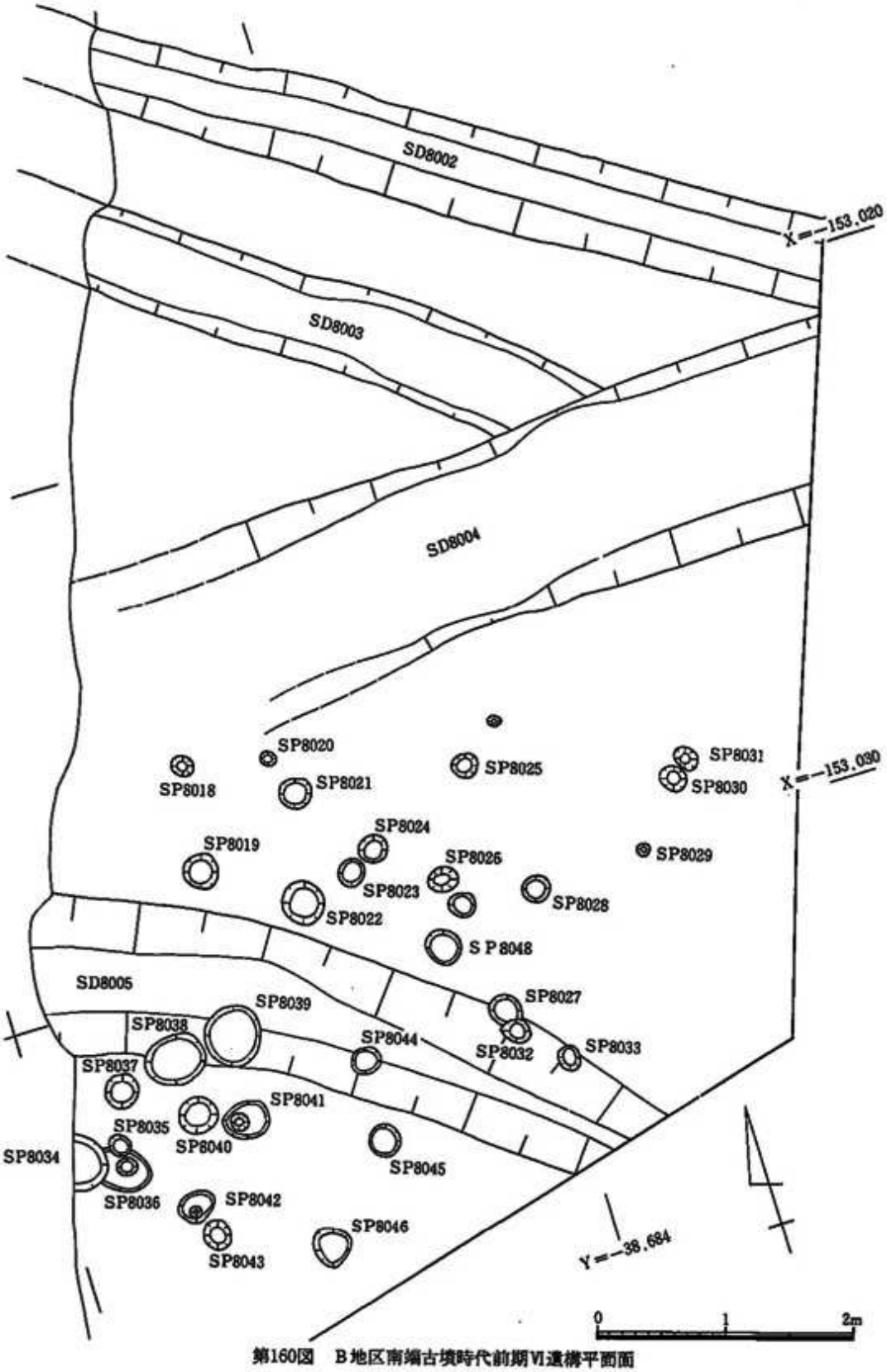
ＳＰ8001～ＳＰ8006　いずれも平面形は円形を呈し、大きさは30～70cm、深さ約40cmを測る。ＳＰ8001～ＳＰ8004は直角に並び、何等かの建造物であったと思われる。

ピット群（第160図・第161図・第162図・第165図・第166図）

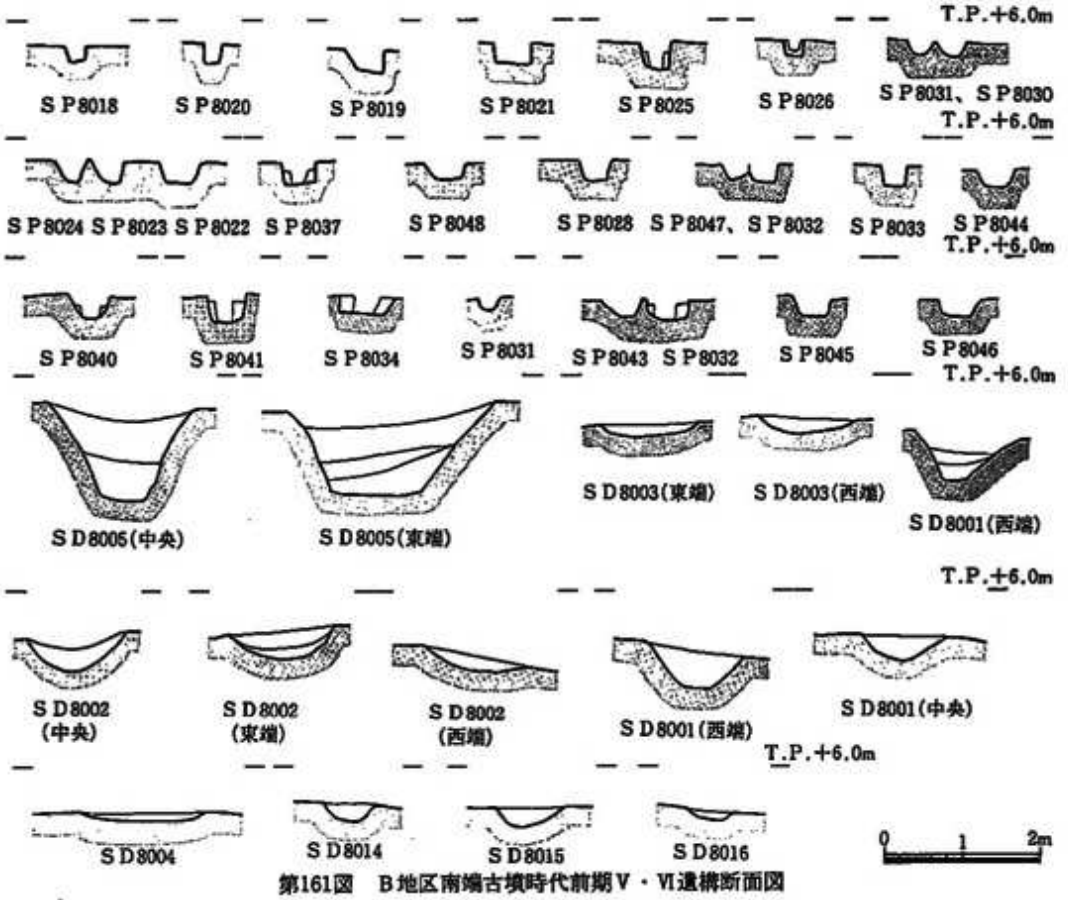
５Ｂトレンチ南半からＢトレンチ南端にかけて、ピット43ケ所が集中して検出された。ＳＰ8007～ＳＰ8048等で構成される。Ｂ地区南端部は、下層の自然河川３による隆起砂層によって自然堤防状地形を呈している。ピット群を形成する古墳時代前期Ⅵ遺構面は、自然堤防状地形上部に堆積する茶褐色砂礫土をベースとする。ピット群は、北西から南東に向け帯状に分布するが、個々のピットの関連は抽出し得ていない。各ピットは、径約15cmのもの（ＳＰ8030）から径約35cmのもの（ＳＰ8038）まであり、一定しない。深さ20cm前後を測る。埋土は、主として暗灰色粘質土或いは暗灰褐色砂質土である。柱痕跡が検出されたもの（ＳＰ8007～ＳＰ8009・ＳＰ8012～ＳＰ8017・ＳＰ8036・ＳＰ8041・ＳＰ8042）もある。柱根部分は、やや黒色を帯びた暗褐灰色粘土である。遺物の出土は全体に希薄であるが、ＳＰ8034・SP8040において埋土内より杯部を欠く高杯脚部が各１点づつ検出された（第162図）。ＳＰ8034では正常に、ＳＰ8040では逆転状態で検出されている。いづれのピットにおいても柱根は検出されておらず、柱穴であるか、なんらかの行為に伴って埋納する目的を持つものかは判別できない。又、ピットの分布状態からは、柵列、建物などの上部構造物は抽出されておらず、その性格については不明な点が多い。

落ち込み8001　５Ｂトレンチ・６Ｂトレンチ北半で検出され、北へ向って落ち込む遺構である。位置関係より一連の自然地形と考えられる。前述の自然堤防状地形の北縁部と考えられる。

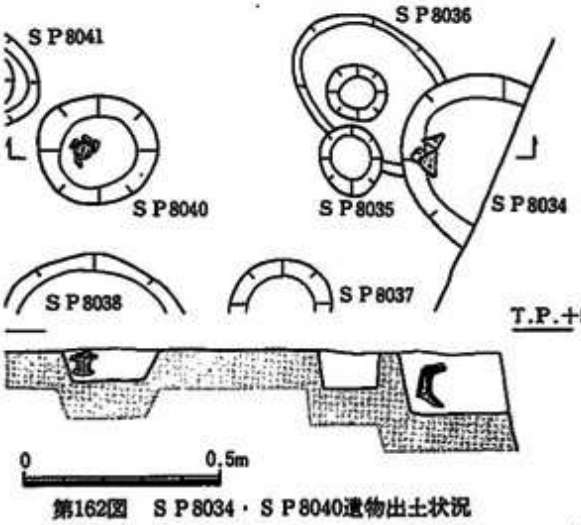
ＳＤ8001　Ｂトレンチ Ｘ＝－153,027付近で、ピット群北側で検出された東西方向の溝である。西端部を現代攪乱で欠き、東側は調査区外に及ぶ。幅約1.5m、深さ約10cm、検出長約５ｍを測る。底部は西に向けてゆるやかな傾斜をもつ。埋土は、暗灰褐色土である。埋土上層より、土師



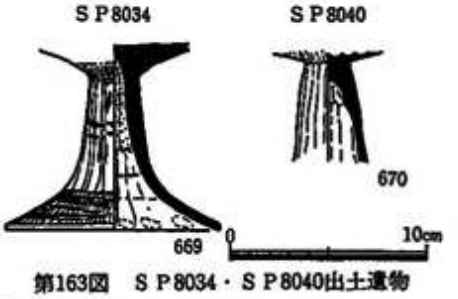
第160図　B地区南端古墳時代前期Ⅵ遺構平面面



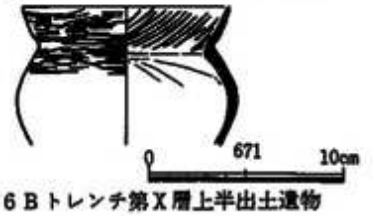
第161図　B地区南端古墳時代前期Ⅴ・Ⅵ遺構断面図



第162図　SP8034・SP8040遺物出土状況



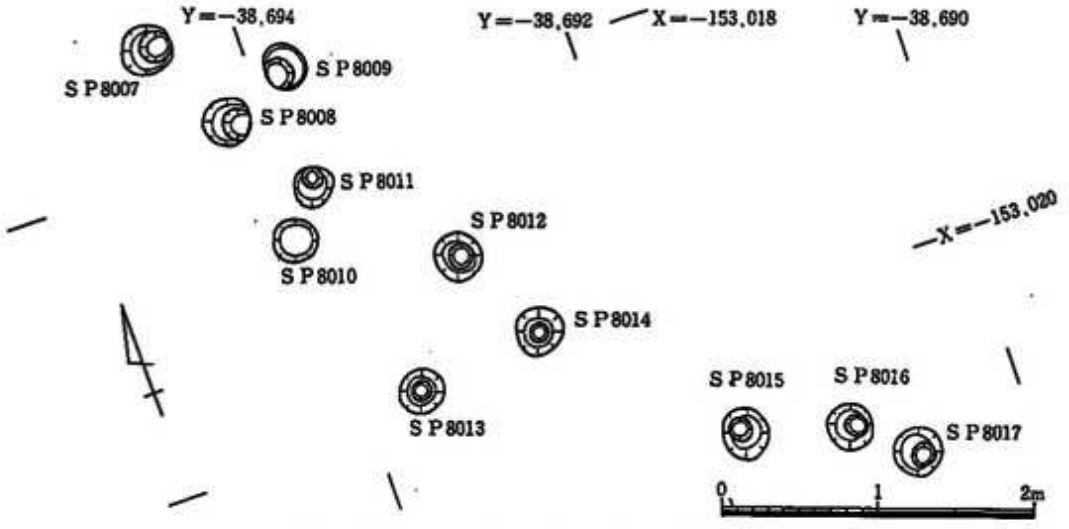
第163図　SP8034・SP8040出土遺物



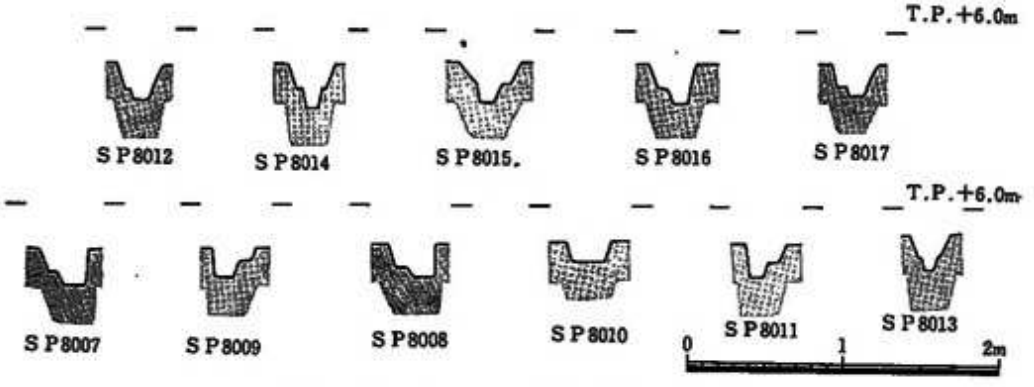
第164図　6Bトレンチ第Ⅹ層上半出土遺物

器小片が若干検出された。

SD8002・SD8003　SD8004の北側で検出された平行する2条の溝である。主軸はほぼN－60°－Wの方位に置く。幅約70～80cmを測る。深さ5～10cmを測る。埋土は共に黒灰色粘質土である。SD8004に先行する溝である。



第165図　5Bトレンチ古墳時代前期Ⅵピット群実測図



第166図　5Bトレンチ古墳時代前期Ⅵピット群断面図

ＳＤ8005　Ｂトレンチ南端Ｘ＝−153,030付近でピット群と重複し、それに先行する溝が検出された。幅0.9～1.1mを測り、ゆるやかな彎曲を示し、南東から北西に走行する。西に向けやや幅を増し、底部も西へゆるかに下降を示す。深さ約0.6mを測る。埋土は、２～３層からなり、上層は暗灰色褐色砂質土で、下層ほど粘質度を増す傾向を示す。　(服部)

8．亀井北遺跡（その1）古墳時代前期出土土器の検討

本調査区では、6面にもおよぶ古墳時代前期の遺構面が検出され、それに伴って多量の土器が検出された。それらの古墳時代前期の土器は、復元作業後の状態で、総数およそ200箱を数える。この内、ＳＫ8059・ＳＤ8455・ＳＤ8456・土器群Ⅰ～Ⅶ・落ち込み8006・ＳＤ8021などは、一括性が極めて良好な資料であり、これら一括性の高い資料については、完形品と口縁部及び底部を含む破片を抽出し、実測可能なものをほぼ総て図化した。（服部）

亀井北遺跡（その1）出土の古墳時代前期の土器には、庄内式土器と布留式土器が出土しているが、ここではＣ地区を中心にそれらを一括して器種分類した。以下、器種毎に述べていく。

〈壺〉

主に、口縁部の形態により分類した。

Ａ．二重口縁壺

口縁部の形態によりさらに細分した。

Ａ1　短い筒状の頸部に外反し屈曲してさらに斜外方向に伸びる口縁部をもつ。

口縁部が大きく開き口縁端部が尖りぎみにおわる無紋の177・181・531等、外端面をもち無紋の(220)、やや大型で外端面をもち口縁部外面に円形浮紋上竹管紋３個１組を施す544、立ち上がりぎみに開く口縁部の端部内面が肥厚し上端面をもつ無紋の529がある。

Ａ2　内彎ぎみに斜外方向に伸びる口縁部に粘土紐を継ぎ足し垂下させるもの。

口縁端部は尖りぎみにおわり口縁部外面に波状紋２帯・円形浮紋上竹管紋２個１組を施す540がある。

口頸部の調整は、181・531・540・544が細いヘラミガキを丁寧に施しているのに対し、177はハケメ後ヘラミガキ、220はハケメ、529はナデで体部内面ヘラケズリである。

Ｂ．広　口　壺

口縁部の形態によりさらに細分した。

Ｂ1　口縁端部に面をもつもの

短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が拡張せずに面をもつ122・329・392、口縁端部がわずかにつまみ上げられ面をもち口縁部外面に強いヨコナデを施す330・543、口縁端部を上下に拡張し面をもち口縁部外面に刻目・円形浮紋上竹管紋・刻目を施す340の三種類がある。330は、肩の張る体部に尖り底ぎみのもので、329は、球形の体部に平底である。

体部の調整は、330が外面ハケメ内面ヘラケズリ、122が外面ハケメ後ヘラミガキ内面ヘラケズリ状ナデ、329が外面叩目後ハケメ内面ハケメ、392が外面叩目後ヘラケズリ内面ハケメ後ヘラケズリである。なお、122は粘土紐の継目を顕著に残している。

Ｂ2　口縁端部が丸味をもつもの

短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸味をもち、やや胴長の体部に平底ぎみのもの123・389である。体部の調整は、123が外面叩目後ナデ内面ナデ、389が外面ハケメ及びナデ内

面へラケズリを施している。

C．短　頸　壺

斜外方向に伸びる口頸部をもつ壺で、器高25cm前後の中型のものC1と、器高30cm以上の大型のC2がある。

C1　口縁端部が丸味をもつ121・404・542、上端面をもつ390・405があり、390は球形の体部に突出した平底をもつ。402は、内彎ぎみに伸びる口縁部の端部内面が肥厚し上端面をもち、下ぶくれの体部に突出した平底をもつものである。

体部の調整は、542が内外面ナデ、121が外面ハケメ内面へラケズリ状ナデ、404が外面叩目後へラミガキ内面ナデ、405が外面叩目後ナデ内面ハケメ、390が外面叩目後ナデ内面ハケメおよびへラケズリ、402が外面ハケメ内面ハケメおよびナデである。

C2　口縁端部が尖りぎみにおわり端部に刻目を施す567、丸味をもつ118、内面肥厚する117・119・120・568、内面が肥厚し上端面をもつ534・535がある。568は、やや横長な体部に突出した平底をもつ。

体部の調整は、118・120が外面ハケメ内面へラケズリを施し、外面ハケメ内面ナデおよびハケメを施す568がある。

117・118・119・120・535・568は、生駒西麓産の土器である。

D．直　口　壺

器高20cm前後のもので、口頸部の形態によりさらに細分した。

D1　斜外方向に直線的に伸びる口縁部の端部は尖りぎみにおわり、球形の体部に丸底をもつもの112～115・279～283・387・536・541。397は、やや小型のものである。

D2　内彎ぎみに斜外方向に伸びる口縁部の端部は尖りぎみにおわり、下ぶくれの体部に丸底をもつもの353・397・537等である。

調整は、口頸部内外面を細いへラミガキで丁寧に仕上げ、体部外面も同様細いへラミガキを施すものが多い。114は、体部外面叩目後ハケメおよびへラケズリ状ナデ、115は、ハケメおよびへラケズリ状ナデを施し、内面はいずれもへラケズリ状ナデである。

そ　の　他　の　壺

やや小型で、内彎ぎみに伸びる口縁部の端部は丸味をもち、太い頸部に球形の体部で丸底の354と、器高10cm以下のミニチュアで、短く直立する口縁部に球形の体部で丸底の78がある。

〈甕〉

形態・調整技法等で細分する。

A．短く外反する口縁部にくの字状に屈曲する頸部、球形の体部に突出した平底をもつ。体部外面に粗い叩目を施す。弥生第Ⅴ様式から引き継ぐ形態のもの。

口縁端部が丸味をもつ289・342・343・351・352と、面をもつ386・464・572がある。体部内面の調整は、ハケメのもの289・342・352・386とへラケズリのもの343・572がある。386

は、わずかに突出する平底で、底部外面にも叩目を残している。

406は、口縁端部が面をもち、肩の張る体部にわずかに突出する平底で、408は口縁端部が丸味をもち、下ぶくれの体部にわずかに突出する平底の中央部がわずかに凹む。

体部の調整は両者ともに、外面ナデ内面ヘラケズリ状ナデおよびハケメを施し、いずれも底部外面に木葉痕を残している。

B．短く外反する口縁部の端部は上または斜内方向につまみ上げられ、外端面をもち、くの字状に屈曲する頸部内面に明瞭な稜を有し、肩の張る体部に尖りぎみの底部をもつ。体部の調整は、外面細かい叩目内面ヘラケズリを施す。河内地方の特色を示す生駒西麓産の庄内式甕で、出土している甕の大半を占める。

口縁部の形態により細分する。

B1　口縁部が外反するもの56・102・139・209・407・411～413・664等

B2　口縁部が外反し、外面中央が肥厚するもの328・394・443・444等

B3　口縁部がわずかに内彎するもの394・448・475・667・677

B1～B3には、口縁端部をつまみ上げないもの56・254・391・423・677等もある。

以上の甕Bは、口縁部の形態により若干の差異があるものの以下のような共通点がある。

口縁部は、端部のつまみ上げが丸味をもち、外端面は明瞭な稜が通らず丸味をおびる。外端面に強いヨコナデを施すもの88・96・128・136・155・159・209等もある。

頸部は内面の稜も不明瞭で丸味をもつもの254・344・358・391・394等が多くほとんどのものが頸部外面にヨコナデが施される。

体部は、肩の張るもの139・382・411～413と球形のもの102・209・254・328・394・440等があり、外面叩目を施した後に頸部直下からハケメを多用し、内面のヘラケズリも、頸部からやや下ったところから施すものも130・154・209・288・358等があり、器壁を薄くするための成形技法としてよりは調整技法の弱いヘラケズリに変化して器壁があまり薄くならないもの102・139・154・155・209・413等もある。

94・154・284等は、生駒西麓産の甕Bを真似て作った淡黄褐色の土器で、やや粗い叩目が施される。

C．内彎ぎみに斜外方に伸びる口縁部にくの字状に屈曲する頸部をもち、球形の体部に丸底のもの。体部外面の調整は、ハケメを施す。口縁端部が丸みをもつ133・187・441・455等と端部内面が肥厚するもの291・588、端部内面が肥厚し上端面をもつもの285・309～312・458がある。体部内面の調整は、ハケメを施すものとヘラケズリを施すもの133・187・285・441・458・588がある。

D．短く外反し屈曲して立ち上がる口縁部に、くの字状の頸部をもち、肩の張る縦長の体部に丸底の吉備系の甕。口縁部外面にハケメを施す。口縁上端部が丸味をもつもの255・414・453と内面肥厚し上端面をもつ393がある。

体部の調整は、外面縦方向の粗いヘラミガキ、内面ヘラケズリである。

E．短く外反し屈曲して大きく立ち上がる口縁部をもち、くの字状に屈曲する頸部をもつ山陰系の甕。口縁端部の外面が肥厚し上端面をもつ83がある。

F．短く外反し屈曲してさらに外反するS字状の口縁部をもち、口縁端部は尖りぎみにおわり、くの字状に屈曲する頸部をもち、球形の体部に、裾広がりの脚台をもつ。脚台端部は折り返しをもつ。東海系の甕。体部の調整は、外面粗いハケメの後肩部に横方向のハケメを施す。452は淡灰白色の近江産のものと思われる。

その他の甕

形態的には壺Bの範疇であるが、煤の付着状況からここでは甕に分類した。短い筒状の頸部に外反する口縁端部が面をもち、球形の体部の71・74と、やや下ぶくれの体部をもち、尖りぎみの底部をもつ131がある。体部の調整は、131が外面叩目内面ナデ、74が外面叩目後上半ナデおよびハケメ、下端ヘラケズリ内面ハケメ、71が外面叩目後ハケメ内面ヘラケズリを施している。

409・454は、短く外反する口縁部の端部が上方にわずかにつまみ上げられ面をもち、球形の体部に尖りぎみの底部をもつ。体部の調整は、両者とも外面ハケメ内面ヘラケズリを施す。

385は、口頸部が斜外方に伸び、肩の張る体部に尖りぎみの底部をもつ。体部の調整は、外面叩目後ハケメ内面ナデを施す。

204は、やや外方に伸びる口縁部の端部が丸味をもち、球形の体部に丸底のもの。体部の調整は、外面叩目後ナデ、内面ヘラケズリ及びハケメを施す。

276は、短く斜外方に伸びる口縁部の端部が丸味をもち、くの字状に屈曲する頸部の内面に稜をもち、球形の体部に平底のもの。体部の調整は、外面ハケメおよびヘラミガキ、内面ハケメおよびヘラケズリを施す。漢式系の甕と思われる。

以上多種多様な甕が出土している。

〈鉢〉

主に、口縁部の形態により細分する。

A．直口の口縁をもつもの

体部および底部の形態によりさらに細分される。

A1　斜外方に伸びる口縁端部が尖りぎみにおわり、半球形の体部に突出する平底をもつもの38・274がある。体部の調整は、外面ナデ内面ナデおよびハケメを施す。内彎ぎみに伸びる口縁部をもつ41もある。195は底部中央を穿孔している。

A2　直立する口縁部の端部は尖りぎみにおわり、半球状の体部に丸底のもの272・275・331・332があり、272・332は小型のものである。体部の調整は、内外面ともナデを施す。331は、内外面ともヘラケズリである。

A3　44は斜外方へ伸びる口縁部の端部内面が上方につまみ上げられ、上端面をもち、扁平な皿状の体部に丸底のもの。体部の調整は、外面ヘラケズリ、内面ハケメ後粗いヘラミガキ

を施す。

A4　50は斜外方に伸びる口縁部の端部は尖りぎみにおわり、口縁部から直線的に伸びる体部に平底のもの。体部の調整は、内外面ともにハケメを施す50。

B．内彎ぎみに斜外方へ伸びる口縁をもつもの

体部および底部の形態からさらに細分される。

B1　内彎ぎみに斜外方へ伸びる口縁部に、扁平な半球状の体部をもち丸底のもの。口縁端部が尖りぎみのもの103・273・395・396等と、丸味をもつもの75・104等がある。体部の調整は、内外面ともにヘラケズリを施す75・103、外面ヘラケズリ内面ナデ104・273・395・396、外面ハケメ内面ヘラケズリ553・555、外面ハケメ内面ナデ248などがある。

B2　内彎ぎみに斜外方へ短く伸びる口縁部の端部は尖りぎみにおわり、肩の張る体部に尖りぎみの底部をもつ512・518～520等と、丸底のもの513～515・517等がある。体部の調整は、外面細いヘラミガキを施すものが多く、外面ハケメ内面ヘラケズリの247、ヘラケズリの43・524、ナデの520、叩目を施す188などがある。

B3　66は、短く外反する口縁部の端部は丸味をもち、裾すぼまりの体部に丸底をもつもの。体部の調整は、外面ハケメおよびヘラケズリ、内面ナデを施している。

B4　357は、短く外反する口縁部の端部は丸味をもち、肩の張る体部に尖りぎみの底部をもつもの。体部の調整は、外面ナデおよびヘラケズリ、内面ナデおよびハケメを施す。

B5　605・634は、内彎ぎみに斜外方へ伸びる口縁部の上端が面をもち、半球状の体部に丸底の大型のもの。605は片口鉢である。体部の調整は、外面ハケメ、内面ハケメおよびヘラケズリを施している。

C．二重口縁をもつもの

短く外反し屈曲してさらに外反する口縁部の端部は尖りぎみにおわり、扁平な半球状の体部に丸底のもの182・194・525・551等がある。調整は、内外面に細いヘラミガキを施すものが多く、182・551は底部外面にヘラケズリを施している。528は、やや大型のものである。

〈高杯〉

杯部の形態により細分される。

A．杯底部から屈曲して斜上方に伸びる口縁部をもつもの。

屈曲部に段をもつ81・338・339・401・491等と、無いもの259・490等がある。口縁端部が丸味をもつもの259・338・339等と、尖りぎみにおわるもの81・401・482～488等がある。脚部は、やや裾広がりの中空の脚柱からなだらかに広がる脚台部をもつ338・339と、屈曲して裾広がりに伸びる脚台部をもつ81・259・401がある。杯部内外面および脚部外面は、細いヘラミガキを施している。

B．杯底部から屈曲し斜上方に伸びさらに屈曲して斜外方に伸びる口縁部をもつもの。

口縁端部を上方につまみあげ、外端面をもつもの256・325・383と、尖りぎみにおわり外

端面をもつもの258がある。258は、裾広がりの中空の脚柱に、裾広がりに伸びる脚台部中央に段をもつ。杯部の調整は、高杯Aと同様に、細いヘラミガキを施している。

C．立ち上がる口縁部に半球状の杯部をもつもの。

口縁端部は尖りぎみにおわり、短く裾広がりの脚柱部に、なだらかに裾広がりの脚台部に続く496と、屈曲して脚台部に続く497～499がある。脚台端部は尖りぎみにおわる。調整は、杯部内外面および脚部外面が細いヘラミガキを施し、脚台部内面にハケメを施している。

その他の高杯

184は、杯底部から屈曲し斜上方に伸びる口縁部の端部は丸味をもち、裾広がりの脚台部をもつ小型のもの。

337は、扁平な半球状の杯部から屈曲して短く内彎ぎみに斜外方へ伸びる口縁部をもち、口縁端部は尖りぎみにおわる。

〈器台〉

形態により、細分される。

A．扁平な杯部に口縁部が短く外反する79・239と、短く立ち上がり外端面をもつ80・183・398・400等と、尖りぎみにおわる364・399・506等がある。脚台部は、直線的に裾広がりになるもの399・400・510等と、外反するもの398・506等、内彎するもの505・509がある。脚台部には、3～4個の透孔が穿たれる。505は、扁平な杯部から直線的に伸びる口縁部の端部が面をもち、裾広がりの脚部をもち、透孔が無いものである。杯部内外面および脚台部外面の調整は、細いヘラミガキを施し、脚台部内面は、ハケメもしくはナデを施している。509・510の脚台部内面には、布目圧痕を残している。

B．363は、杯底部から屈曲して外反する口縁部の端部が面をもち、やや裾広がりの脚柱部をもつ。杯部中央が穿孔されたやや大型の器台で、形態的には高杯に似る。

〈手焙り形土器〉

鉢部と覆部を別個に作る49と、連続して作る362がある。前者は、覆部を欠失するが突出する平底をもち外面に斜線紋および沈線紋を施す淡黄白色の近江産のものと思われる。後者は、やや扁平な底部をもつと思われ、口縁部上面と面に斜格子紋を施し、面の両肩部に篦記号紋を施している。調整は前者が外面ハケメ、内面ナデ、後者が外面面取り状のヘラケズリ、内面ハケメを施している。

以上、器種毎に述べた。

次に、ＳＤ8455・ＳＤ8456・ＳＤ8021・落ち込み8006出土の土器について器種構成をみると、第２表の通りである。

ＳＤ8455出土土器では、甕が全体の７割弱を占め、次いで壺が２割弱、鉢・高杯・器台は１割にも満たないものである。

ＳＤ8456出土土器では、甕が７割強を占め、壺・鉢・高杯・器台は１割にも満たないものである。

ＳＤ8021出土土器では、他の遺構と比して甕が少なく４割強を占め、次いで高杯が２割強、鉢が１割強を占め、壺・器台は１割弱である。

落ち込み8006出土土器では、甕が６割強を占め、次いで壺が２割弱、鉢・高杯・器台は１割にも満たないものである。

各遺構によって、若干の器種構成の差異が認められるが、出土土器の大半を占める甕で各遺構を比較してみると、弥生第Ⅴ様式を受け継ぐ甕Ａの出土量はわずかなもので、落ち込み8006出土の406・408の２点については、叩目が施されず、底側部外面をヘラケズリすることにより、丸底化の傾向がみられ、体部内面もヘラケズリを部分的に施し、甕Ｂの影響かと思われる。

河内地方の特色を示す甕Ｂは、ＳＤ8455、ＳＤ8456では甕の９割強を占め、ＳＤ8021・落ち込み8006では７割強を占めている。甕Ｂの細分でみるならば、甕B_1は、ＳＤ8455・ＳＤ8456では７割弱を占め、ＳＤ8021では６割、落ち込み8006では４割を占める。同様に甕B_2は、ＳＤ8455・ＳＤ8456では２割強、ＳＤ8021では２割弱、落ち込み8006では３割弱とあまり大差はない。甕B_3は、ＳＤ8455・ＳＤ8456では１割に満たず、ＳＤ8021では２割、落ち込み8006では３割強を占める。

次に、甕Ｃでみると、ＳＤ8021出土のものにのみ、口縁端部内面が肥厚し上端面をもつ布留式の甕が４点出土している。

他地域からの搬入もしくは影響を受けたと思われる甕Ｄ・Ｅ・Ｆの出土量は、わずかであり、ＳＤ8455では出土していず、ＳＤ8456から甕Ｅが１点、ＳＤ8021から甕Ｄ・甕Ｆが各１点、落ち込み8006から甕Ｄが１点のみである。

その他の器種で、差異が若干あるものとしては、ＳＤ8021出土の壺Ａの529の口縁部内面が肥厚し上端面をもつ布留式傾向のものであり、壺Ｃも534・535同様である。なお、落ち込み8006出土の壺Ｃ402も同様のものである。

また、鉢B_2は、ＳＤ8021からのみ出土している。

高杯・器台については、その差を認めることは困難である。

以上、ＳＤ8455・ＳＤ8456とＳＤ8021・落ち込み8006の間には若干の差異が認められた。これらは層位的に見ても、ＳＤ8455・ＳＤ8456の一層上面に、ＳＤ8021・落ち込み8006が検出されることからも、ＳＤ8455・ＳＤ8456よりＳＤ8021・落ち込み8006出土遺物が新しい傾向をより示していることが確認されることとなった。　（森屋）

第２表　亀井北遺跡（その１）出土古墳時代前期土器分類表

器種 ＼ 遺構		SD8455	SD8456	SD8421	落込8006
壺	A	0	0	5	1
	B	2	0	1	0
	C	6	0	3	4
	D	5	1	3	1
	その他	0	1	0	0
小計		13(19.1%)	2(5.7%)	12(9.8%)	6 (17.1%)
甕	A	1	0	3	2
	B_1	29	16	26	7
	B_2	9	5	8	4
	B_3	4	2	9	6
	C	2	1	6	1
	D	0	0	1	1
	E	0	1	0	0
	F	0	0	1	0
	その他	1	0	2	2
小計		45(66.2%)	25(71.4%)	56(45.9%)	23(65.7%)
鉢	A	0	0	1	0
	B_1	3	1	4	2
	B_2	0	0	10	0
	C	1	2	3	0
小計		4(5.9%)	3(8.6%)	18(14.8%)	2(5.7%)
高杯	A	5	2	18	1
	B	0	1	3	0
	C	0	0	7	0
小計		5(7.3%)	3(8.6%)	26(21.3%)	1(2.9%)
器台	A	1(1.5%)	2(5.7%)	10(8.2%)	3(8.6%)
総　計		68	35	122	35

（口縁部を含む破片もしくは完形品を１点として個体確認）

小　結

古墳時代前期では、6時期に亘る遺構面から多数の遺構や遺物が検出され、亀井北遺跡（その1）調査区における代表的な時代と言える。これら6期の遺構面は、それぞれに個々に重複する遺構群を含み、複雑な展開を示している。それらは基本的には、次の6期である。久宝寺遺跡から広がりを見せる住居址群とやや距離を置いて多量の土器を伴った遺構群が形成される古墳時代前期Ⅰ、複数の方向性の異なった小溝群が最大5時期に亘ってそれぞれに重複して存在する古墳時代前期Ⅱ及びⅢ、土器集積や4基の周溝墓、さらに多量の土器を伴った溝、落込みが形成される古墳時代前期Ⅳ、遺構密度がやや希薄になり周溝墓上面や周辺に土坑などが認められる古墳時代前期Ⅴ、B地区北半が湿地化し、南半の微高地にピット群が形成される古墳時代前期Ⅵの各遺構面である。遺物の面から見ると、古墳時代前期Ⅰ及びⅣ遺構面を中心に、良好な一括資料を多数検出した。

次に、こうした古墳時代前期の遺構の変遷過程を「集落」、「小溝群」、「墓」といった代表的遺構について個々に述べることとする。又、併せて「遺物」の面から見た変遷についても検討してみたい。　（服部）

（1）集　落

古墳時代前期Ⅰ面に於て、住居、井戸、溝以外のピットをA、B地区で多数確認した。住居は総数13棟確認した。いずれも平面形は隅円方形で、竪穴式住居と考えられた。住居は大きさにより4種に分類できる。a：49～56.3m²、b：23～30.3m²、c：15.8～19.7m²、d：7.3m²以上で、a：3・4・12号住居、b：5・11号住居、c：1・2・7・13号住居、d：8・9・10号住居である。また建物の方位によっても分類が可能である。構造的には①4本柱と2本柱が存在し、また②壁溝を有するものと、有しないものが在る。③炉は住居の中央に位置するものと、壁溝側に位置するものが在る。④壁溝内で板の痕跡は見い出せなかったが、壁溝際の小穴の存在は板壁が推測される。⑤出土遺物として、砥石、桃の種核、骨、板材、赤色顔料があり、土器の少なさはその性格を物語っていると考えられる。　（小野）

（2）小溝群

古墳時代前期Ⅱ～Ⅲにおいて、同一の方向性を示して走行する多数の小溝が、複雑な重複関係を持って検出された。検出された小溝群は、古墳時代前期Ⅱ期遺構面としたものが最大3時期、古墳時代前期Ⅲとしたもの最大4～5時期に細分が可能である。今回の調査では、それらの切り合い関係を整理し、個々の小溝群としてとらえることにより、全体の形成過程をある程度明らかにすることができた。個々の小溝群には、小溝からの遺物の出土は少量であり、遺構の密度の濃さに比べ生活面的な様相が薄いと言える。

以上の点から小溝群は、畑地耕作に伴う鋤溝、畝溝としての性格が考えられるが、断片的な部分も多く、ここでは古墳時代前期に集落の縁辺において、畑地耕作が広く行なわれていた可能性を指摘するに留めたい。　（服部）

（3） 墓

墓は古墳時代前期Ⅳに於て４基存在する。いずれも溝を方形に巡らすもので、弥生時代の方形周溝墓と区別がつかない。平面は長方形のものと、方形のものとに分けられる。前者は１号墓、後者は２・３・４号墓である。主軸は２号墓のみが他のものと異なる。主体部は１号墓と２号墓にその痕跡を確認し、組合式木棺が推測される。１号墓に於ては、主体部の小口部に石を置き、墓標或いは結界としていた。１号墓の主体部は中央に一体のみ埋葬されており、２号墓では墳丘のコーナー部に一体埋葬し、恐らくもう一体埋葬されていた可能性がある。墓の群集性では、３号と４号墓が近接しているが、（その２）調査区のＥトレンチ２号～６号墓の様に墓と墓が隣接しておらず、本調査区の１号墓・２号墓に至っては単独で一基ずつ存在する。陸橋部（墓道）は、１号墓、２号墓に於て南西側に造られる。土器の出土状況では、１号墓の陸橋部に甕と高杯が、周溝墓北側のコーナー部で、壺・甕・器台が出土している。２号墓は陸橋部近くで壺・甕・鉢が出土し、３号墓では墳頂部で手焙形土器等の多量の土器が出土している。墓の時期は、２号墓が一番新しく、一番古い墓は３号墓である。４号墓は３号墓よりも若干新しくなる。　（小野）

（4） 遺　物

今回の調査で出土した古墳時代前期の土器は、コンテナ総数およそ200箱に及ぶ。これらの中には、一つの遺構よりまとまって検出されたものが多数あり、豊富な一括資料を提供したと言える。ここでは、遺物の面から見た編年作業を行うには至らなかったが、遺構の前後関係より、主要な一括性の高い遺物群について、その一応の新旧関係を示しておきたい。

古墳時代前期Ⅰ遺構面からは、Ｃ地区において、ＳＫ8057、ＳＫ8059、ＳＤ8455、ＳＤ8456といった遺構よりまとまった遺物が検出された。ＳＫ8057の出土遺物は、Ⅴ様式の傾向を残しており、古墳時代前期における最も古い段階のものと思われる。４Ｃトレンチの遺構については、切り合い関係によりＳＫ8059→ＳＤ8456→ＳＤ8455といった前後関係あり、これがＳＫ8057に後出するものと思われる。

古墳時代前期Ⅳ遺構面では、Ａ地区の土器群Ⅰ、Ⅱ、Ｂ地区の１号墓土器群Ⅲ、Ⅳ、Ｃ地区の３号墓、４号墓、落ち込み8006、ＳＤ8021が一括性の高い遺物群として挙げられる。検出状況や組成からＢ地区では、土器群Ⅳ→土器群Ⅲの前後関係が認められる。３・４号墓の遺物は、やや荒いタタキ目のものを含み、内彎傾向を示す甕が存在しない点で、１・２号墓にやや先行するものと思われる。又、落ち込み8006・ＳＤ8021は、ほぼ同時期に存在するが、ＳＤ8021は丸底の鉢を多く含む点で、より新しい要素を備え持つものと思われる。

従って、これらを総合すると、ＳＫ8057→ＳＫ8059→ＳＤ8456→ＳＤ8455→３号墓・４号墓→土器群Ⅳ→落ち込み8006・ＳＤ8021・（土器群Ⅰ・Ⅱ）→土器群Ⅲという新旧関係が考えられるが、明確な編年作業を行うには、さらに詳細な検討が必要であろう。　（服部）